沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 99集

神山古集落

－普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書－

平成 31（2019）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

巻頭図版１　戦前の神山古集落（宜野湾市提供図を改変）

巻頭図版２　普天間飛行場造成時の神山古集落（国土地理院空中写真使用）

巻頭図版３　神山古集落調査区遠景（北より）

巻頭図版４　Ａ地区空中写真

巻頭図版５　Ａ地区道１（SF001）（西から）

巻頭図版６　Ａ地区ＳＫ 041（南から）

巻頭図版７　Ｂ地区空中写真

巻頭図版８　Ｂ地区建物２（ＳＳ 002 周辺）（西から）

巻頭図版９　Ｂ地区ＳＫ 012（西から）

巻頭図版 10　Ｂ地区井戸ＳＥ 001（南西から）

巻頭図版 11　移築復元した井戸（字神山郷友会）

巻頭図版 12　Ｃ地区空中写真

巻頭図版 13　Ｃ地区ＳＫ 040 遺物出土状況（南から）

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが沖縄防衛局より委託を受けて平成28・29年度に実施した普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う神山古集落の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

この調査は、普天間飛行場の範囲を含む宜野湾市字神山の周辺では大雨の際に冠水する場所が見られており、その対策として普天間飛行場内に雨水排水施設としての調整池整備に伴う記録保存を目的として実施しました。また、調査面積は6,800㎡であり、普天間飛行場内では最初の本格的な記録保存調査となりました。

今回の調査地は、沖縄戦前まであった神山集落の範囲内で、碁盤目状に整備された屋敷が立ち並んでいた場所に当たります。しかし、この神山集落には米軍上陸以前に日本軍が駐屯しており、1945年4月4日に米軍と応戦しました。その後、1945年6月には既に普天間飛行場の整備が始まっており、神山集落の大部分は破壊されてしまいました。

そこで、事前の試掘調査によりグスク時代以前の遺構・遺物が確認された地点と、戦前・戦後の空中写真などで戦前の集落が想定される範囲に調査区を設定しました。調査の結果、グスク時代の耕作地や、戦前の屋敷地の区画、また良好に残っていた石組井戸などを確認することができました。井戸については、字神山郷友会の要請によりその事務所敷地に移築復元することができました。

さらに今回は、日本軍によるタコツボや交通壕といった陣地、また住民もしくは日本軍が利用したと考えられる防空壕などの沖縄戦に関連する遺構・遺物なども発見することができました。日本軍が集落の道路や屋敷を利用しながら米軍と応戦するための陣地を作り上げていたことが良く分かります。

今回の報告書が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後に、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

２０１９（平成３１）年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長　　登川　安政

例　　言

1．本報告書は、沖縄防衛局による普天間飛行場雨水排水施設整備工事に際して、神山古集落遺跡の記録保存発掘調査及び資料整理の成果をまとめたものである。

2．本発掘調査及び資料整理業務は、沖縄防衛局が沖縄県と委託契約を交わし、沖縄県教育委員会の指導のもと、宜野湾市教育委員会、字神山郷友会など関係者の協力を得て沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査期間は、現地調査を平成 29 年 3 月 16 日より平成 29 年 8 月 17 日まで実施し、資料整理作業・発掘調査報告作成を平成 29・30 年度に実施した。

4．本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第ⅩⅥ座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。ちなみに、報告書抄録の緯度経度については世界測地系で算出している。

5．現地調査及び資料整理に際して、下記の諸氏・機関に協力・指導・助言を戴いた（敬称略、順不同）。

6．本書の編集は、瀬戸哲也が行った。執筆分担は、下記以外は瀬戸が行った。

第３章第４節　石器・石製品…大堀皓平、金属製品…具志堅清大、沖縄産陶器…荻堂匠美
ガラス・プラスチック製品…平良和輝、本土産近代陶磁器…太田樹也・瀬戸
第４章第１節　株式会社パリノ・サーヴェイ
第４章第２節　千田寛之（日本植生史会）
第４章第３節　株式会社イビソク

7．土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2010 年版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウエント・ワース法による表記法（文化庁 2010『発掘調査のてびき』）で記録している。

8．本書に掲載した写真は、発掘調査状況を瀬戸哲也・玉城綾・太田樹也・奥平大貴、遺物を領家範夫・知花香織・伊禮若菜（埋蔵文化財資料整理員）が主に撮影した。

9．発掘調査で得られた遺物及び実測図・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目次

巻頭図版
序
例言

第１章　経緯と経過 …… 1
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査体制 …… 2
第３節　調査の経過 …… 3

第２章　位置と環境 …… 7
第１節　地理的環境 …… 7
第２節　歴史的環境 …… 8
第３節　神山古集落と周辺の遺跡の現状 …… 12

第３章　調査の方法と成果 …… 14
第１節　調査の方法 …… 14
第２節　層序 …… 17
第３節　遺構 …… 18
１．Ａ地区…… 20　２．Ｂ地区…… 40　３．Ｃ地区…… 76
第４節　遺物 …… 104
１．グスク時代以前の遺物 …… 104
２．近世～近代の遺物 …… 105
(1) 中国産陶磁器……105　(2) 本土産近世陶磁器……105　(3) 本土産近代陶磁器…… 105
(4) 沖縄産陶器……108　(5) 産地不明陶器……109　(6) ガラス製品……109
(7) 金属製品…… 111　(8) 銭貨…… 112　(9) 石製品……112
(10) プラスチック製品……113　(11) 瓦…… 113　(12) 円盤状製品…… 114
(13) その他の製品……114
３．各調査区の出土遺物 …… 114
(1) Ａ地区……114　(2) Ｂ地区……130　(3) Ｃ地区…… 146

第４章　自然科学分析・保存処理の成果 …… 189
第１節　神山古集落の自然科学分析 …… 189
第２節　神山古集落出土の植物遺体分析 …… 198
第３節　神山古集落出土金属製品保存処理 …… 201

第５章　総括 …… 205
１．沖縄戦関連遺構について …… 205
２．神山古集落の変遷 …… 208
報告書抄録 …… 213

巻頭図版目次

巻頭図版1 戦前の神山古集落
巻頭図版2 普天間飛行場造成時の神山古集落
巻頭図版3 神山古集落調査区遠景
巻頭図版4 Ａ地区空中写真
巻頭図版5 Ａ地区道１
巻頭図版6 Ａ地区ＳＫ041
巻頭図版7 Ｂ地区空中写真
巻頭図版8 Ｂ地区建物２
巻頭図版9 Ｂ地区ＳＫ012
巻頭図版10 Ｂ地区井戸ＳＥ001
巻頭図版11 移築復元した井戸
巻頭図版12 Ｃ地区空中写真
巻頭図版13 Ｃ地区ＳＫ040遺物出土状況

図版目次

図版1 調査状況 …… 4
図版2 井戸移築作業状況 …… 6
図版3 調査区周辺状況（1945年8月） …… 9
図版4 調査区周辺状況（1962年7月） …… 10
図版5 調査区周辺状況（1970年5月） …… 10
図版6 調査区周辺状況（1993年8月） …… 11
図版7 調査区周辺現況（2010年9月） …… 11
図版8 基本層序（Ｃ地区） …… 17
図版9 Ａ地区空中写真 …… 18
図版10 Ａ地区遠景 …… 19
図版11 Ａ地区堆積状況 …… 20
図版12 区画１～３ …… 21
図版13 道１ …… 25
図版14 区画１ＳＫ010 …… 25
図版15 区画１ＳＫ036 …… 27
図版16 区画２ＳＫ041・ＳＫ078 …… 27
図版17 区画３建物１・柱穴 …… 30
図版18 区画３ＳＫ026・ＳＫ027・ＳＫ040 …… 31
図版19 区画３ＳＫ023 …… 32
図版20 区画３ＳＫ024断面 …… 32
図版21 区画３ＳＫ032断面 …… 32
図版22 区画３ＳＰ031石斧出土状 …… 33
図版23 区画３ＳＰ062断面 …… 33
図版24 区画３ＳＫ052 …… 35
図版25 区画３ＳＫ081 …… 35
図版26 区画４・５空中写真 …… 35
図版27 区画４ＳＫ068 …… 36
図版28 区画５ＳＫ066 …… 39
図版29 区画５ＳＫ063 …… 39
図版30 区画４ＳＫ053 …… 39
図版31 区画４ＳＫ080 …… 39
図版32 Ｂ地区北側壁面１ …… 41
図版33 Ｂ地区西側壁面 …… 41
図版34 Ｂ地区北側壁面２ …… 41
図版35 Ｂ地区空中写真 …… 42
図版36 Ｂ地区ＮＲ002下層遺構検出状況 …… 46
図版37 Ｂ地区ＮＲ002中下層堆積状況 …… 47
図版38 Ｂ地区ＮＲ002下層遺構断面 …… 47
図版39 区画６空中写真 …… 49
図版40 区画６ＳＤ001 …… 51
図版41 区画６井戸ＳＥ001 …… 52
図版42 区画６ＳＫ034断面 …… 54
図版43 区画６ＳＫ002 …… 54
図版44 区画６ＳＫ031断面 …… 54
図版45 区画６ＳＫ006 …… 55
図版46 区画６ＳＫ007 …… 55
図版47 区画６ＳＫ011 …… 55
図版48 区画６ＳＫ012・013 …… 56
図版49 区画６ＳＫ012 …… 57
図版50 区画６ＳＫ010断面 …… 59
図版51 区画６ＳＫ020断面 …… 59
図版52 区画６ＳＫ042断面 …… 59
図版53 区画６ＳＫ065 …… 59
図版54 区画７ …… 59
図版55 区画７ＳＫ003 …… 61
図版56 区画７ＳＫ033 …… 61
図版57 道２ …… 65
図版58 区画８建物２周辺 …… 66
図版59 区画８建物２周辺 …… 69
図版60 区画８建物２石柱 …… 69
図版61 区画８建物２石柱 …… 69
図版62 区画８建物２周辺下層断面 …… 69
図版63 区画８埋甕ＳＫ045 …… 70
図版64 区画８井戸ＳＥ002 …… 70
図版65 区画８ＳＳ002下層遺構 …… 72
図版66 区画８ＳＳ002下層遺構断面 …… 72
図版67 区画８壕ＳＫ043 …… 74
図版68 区画８壕ＳＫ051 …… 75
図版69 Ｃ地区遠景 …… 77
図版70 Ｃ地区空中写真 …… 77
図版71 Ｃ地区ＮＲ001 …… 80
図版72 Ｃ地区ＮＲ001トレンチ２下層 …… 80
図版73 Ｃ地区ＮＲ001下層 ＳＰ089断面 …… 80
図版74 Ｃ地区ＮＲ001中層遺構 …… 81
図版75 区画９空中写真 …… 84
図版76 区画９ＳＤ011・010・009 …… 84
図版77 区画９ＳＫ034全景 …… 85
図版78 区画９壕ＳＫ027全景 …… 86
図版79 区画９壕ＳＫ027部分詳細 …… 87
図版80 区画９ＳＫ024 …… 87
図版81 区画９ＳＫ031 …… 87
図版82 区画９ＳＫ030 …… 87
図版83 区画９ＳＫ035断面 …… 87
図版84 区画９ＳＫ035・037 …… 87
図版85 区画10空中写真 …… 89
図版86 区画10ＳＫ028 …… 91
図版87 区画10ＳＤ003 …… 91
図版88 区画10ＳＫ038断面 …… 91
図版89 区画10ＳＫ040 …… 93
図版90 区画10井戸ＳＥ001 …… 94
図版91 区画10ＳＫ026遺物出土状況 …… 94
図版92 区画10ＳＫ020 …… 94
図版93 区画10ＳＫ023 …… 95
図版94 区画10ＳＫ041 …… 95
図版95 区画10ＳＫ050 …… 95
図版96 区画11ＳＫ004遺物出土状況詳細 …… 97
図版97 区画11ＳＫ004 …… 98
図版98 区画11ＳＫ025 …… 100
図版99 区画12ＳＫ001 …… 102
図版100 区画12ＳＤ001・005・006 …… 103

図版目次

図版101　区画12ＳＫ047 …… 103
図版102　区画12ＳＤ002ほか …… 103
図版103　区画12ＳＫ002 …… 103
図版104　刃部に見られる使用痕 …… 104
図版105　ガラス瓶色調分類 …… 109
図版106　Ｂ地区区画６出土遺物（１）…… 132
図版107　Ｂ地区区画６出土遺物（２）…… 133
図版108　Ｂ地区区画６出土遺物（３）…… 134
図版109　Ｂ地区区画６出土遺物（４）…… 134
図版110　Ｂ地区区画６出土遺物（５）…… 134
図版111　Ｂ地区区画８出土遺物（１）…… 136
図版112　Ｂ地区区画８出土遺物（２）…… 137
図版113　Ｂ地区区画８出土遺物（３）…… 138
図版114　Ｂ地区区画８出土遺物（４）…… 138
図版115　Ｂ地区区画８出土遺物（５）…… 140
図版116　Ｂ地区区画８出土遺物（６）…… 142
図版117　Ｂ地区区画８出土遺物（７）…… 143
図版118　Ｂ地区区画８出土遺物（８）…… 144
図版119　Ｂ地区区画７出土遺物 …… 145
図版120　Ｃ地区区画９出土遺物（１）…… 147
図版121　Ｃ地区区画９出土遺物（２）…… 148
図版122　Ｃ地区区画10出土遺物（１）…… 150
図版123　Ｃ地区区画10出土遺物（２）…… 152
図版124　Ｃ地区区画10出土遺物（３）…… 155
図版125　Ｃ地区区画10出土遺物（４）…… 156
図版126　Ｃ地区区画11出土遺物（１）…… 161
図版127　Ｃ地区区画11出土遺物（２）…… 162
図版128　Ｃ地区区画11出土遺物（３）…… 162
図版129　Ｃ地区区画11出土遺物（４）…… 164
図版130　Ｃ地区区画12出土遺物（１）…… 164
図版131　Ｃ地区区画12出土遺物（２）…… 166
図版132　Ｃ地区区画９～12・表採遺物 …… 167
図版133　巻貝 …… 188
図版134　二枚貝 …… 188
図版135　脊椎動物遺体（１）…… 188
図版136　脊椎動物遺体（２）…… 188
図版137　脊椎動物遺体（３）…… 188
図版138　脊椎動物遺体（４）…… 188
図版139　花粉分析・微粒炭分析・大型植物遺体 …… 197
図版140　炭化物の癒着状況 …… 198
図版141　神山古集落ＳＫ004出土の植物遺体 …… 199
図版142　ＳＫ004出土木材 …… 200
図版143　保存処理対象遺物 …… 201
図版144　作業工程 …… 204

挿図目次

第１図　沖縄県と宜野湾市の位置 …… 7
第２図　調査区周辺状況 …… 8
第３図　第62師団補給系統図 …… 9
第４図　沖縄本島中部沖縄戦経過図 …… 9
第５図　普天間飛行場内遺跡地図 …… 13
第６図　神山古集落周辺遺跡 …… 13
第７図　工事範囲と調査区位置図 …… 15
第８図　グリッド配置図 …… 15
第９図　試掘調査位置と調査区 …… 16
第10図　Ａ地区全体平面図 …… 19
第11図　Ａ地区壁面図 …… 20
第12図　Ａ地区近代遺構区画割 …… 21
第13図　区画１・２遺構図 …… 22
第14図　道１ほか断面図 …… 23
第15図　区画１ＳＫ010遺構図 …… 24
第16図　区画１ＳＫ002・011・036、区画２ＳＫ041・078遺構図 …… 26
第17図　区画３遺構図 …… 28
第18図　区画３建物１遺構図 …… 29
第19図　区画３ＳＫ026・027・040遺構図 …… 31
第20図　区画３ＳＫ018ほか断面図 …… 32
第21図　区画３ＳＰ021ほか断面図 …… 33
第22図　区画３・４遺構図 …… 34
第23図　区画４ＳＫ068遺構図 …… 36
第24図　区画４・５遺構図 …… 37
第25図　区画４・５ＳＫ066・080遺構図 …… 38
第26図　Ｂ地区全体平面図 …… 40
第27図　Ｂ地区壁面図 …… 43
第28図　Ｂ地区ＮＲ002下層遺構図 …… 45
第29図　Ｂ地区ＮＲ002下層遺構ＳＰ035ほか断面図 …… 47
第30図　Ｂ地区近代遺構区画割 …… 49
第31図　区画６遺構図 …… 50
第32図　区画６ＳＤ001ほか断面図 …… 51
第33図　区画６井戸ＳＥ001遺構図 …… 52
第34図　区画６ＳＫ002・036・044上面図 …… 53
第35図　区画６ＳＫ002・036・044完掘図 …… 54
第36図　区画６ＳＫ031遺構図 …… 54
第37図　区画６ＳＫ006・007遺構図 …… 55
第38図　区画６ＳＫ011遺構図 …… 55
第39図　区画６ＳＫ012・013遺構図 …… 56
第40図　区画６ＳＫ012断面図 …… 57
第41図　区画６ＳＫ005ほか断面図 …… 58
第42図　区画７遺構図 …… 60
第43図　区画７ＳＫ003ほか断面図 …… 61
第44図　区画７遺構図 …… 63
第45図　区画８建物２遺構図 …… 67
第46図　区画埋甕８ＳＫ045遺構図 …… 70
第47図　区画８井戸ＳＥ002断面図 …… 70
第48図　区画８ＳＳ002下層遺構図 …… 71
第49図　区画８ＳＳ002下層遺構断面図 …… 72
第50図　区画８壕ＳＫ043遺構図 …… 73
第51図　区画８壕ＳＫ051遺構図 …… 75
第52図　Ｃ地区全体図 …… 76
第53図　Ｃ地区壁面図 …… 78
第54図　Ｃ地区ＮＲ001遺構図 …… 79
第55図　Ｃ地区近代遺構区画割 …… 82
第56図　区画９遺構図 …… 83
第57図　区画９ＳＫ034遺構図 …… 85
第58図　区画９壕ＳＫ027遺構図 …… 86
第59図　区画９ＳＫ031ほか遺構図 …… 88
第60図　区画10遺構図 …… 90
第61図　区画10ＳＫ040遺構図 …… 92
第62図　区画10井戸ＳＥ001遺構図 …… 94
第63図　区画10ＳＫ026遺構図 …… 94
第64図　区画10ＳＫ020遺構図 …… 94
第65図　区画10ＳＫ023・041・050遺構図 …… 95
第66図　区画11遺構図 …… 96
第67図　区画11壕ＳＫ004遺構図 …… 97
第68図　区画11ＳＫ025遺構図 …… 99

挿図目次

第69図　区画12遺構図 …… 101
第70図　区画12ＳＫ001遺構図 …… 102
第71図　区画12ＳＫ053断面図 …… 103
第72図　Ａ地区区画１出土遺物（１）…… 115
第73図　Ａ地区区画１出土遺物（２）…… 116
第74図　Ａ地区区画１出土遺物（３）…… 117
第75図　Ａ地区区画１出土遺物（４）…… 118
第76図　Ａ地区区画１出土遺物（５）…… 119
第77図　Ａ地区区画１出土遺物（６）…… 120
第78図　Ａ地区区画２出土遺物（１）…… 121
第79図　Ａ地区区画２出土遺物（２）…… 122
第80図　Ａ地区区画３出土遺物（１）…… 123
第81図　Ａ地区区画３出土遺物（２）…… 124
第82図　Ａ地区区画３出土遺物（３）…… 125
第83図　Ａ地区区画４出土遺物（１）…… 126
第84図　Ａ地区区画４出土遺物（２）…… 127
第85図　Ａ地区区画４出土遺物（３）…… 128
第86図　Ａ地区区画４出土遺物（４）…… 129
第87図　Ａ地区区画５出土遺物（１）…… 130
第88図　Ａ地区区画５出土遺物（２）…… 131
第89図　Ｂ地区区画６出土遺物（１）…… 132
第90図　Ｂ地区区画６出土遺物（２）…… 133
第91図　Ｂ地区区画６出土遺物（３）…… 134
第92図　Ｂ地区区画６出土遺物（４）…… 135
第93図　Ｂ地区区画６出土遺物（５）…… 136
第94図　Ｂ地区区画８出土遺物（１）…… 137
第95図　Ｂ地区区画８出土遺物（２）…… 138
第96図　Ｂ地区区画８出土遺物（３）…… 139
第 97 図　Ｂ地区区画８出土遺物（４）…… 140
第 98 図　Ｂ地区区画８出土遺物（５）…… 141
第 99 図　Ｂ地区区画８出土遺物（６）…… 143
第100図　Ｂ地区区画８出土遺物（７）…… 144
第101図　Ｂ地区区画７出土遺物 …… 145
第102図　Ｃ地区区画９出土遺物（１）…… 147
第103図　Ｃ地区区画９出土遺物（２）…… 148
第104図　Ｃ地区区画９出土遺物（３）…… 149
第105図　Ｃ地区区画10出土遺物（１）…… 150
第106図　Ｃ地区区画10出土遺物（２）…… 151
第107図　Ｃ地区区画10出土遺物（３）…… 152
第108図　Ｃ地区区画10出土遺物（４）…… 153
第109図　Ｃ地区区画10出土遺物（５）…… 154
第110図　Ｃ地区区画10出土遺物（６）…… 156
第111図　Ｃ地区区画11出土遺物（１）…… 158
第112図　Ｃ地区区画11出土遺物（２）…… 159
第113図　Ｃ地区区画11出土遺物（３）…… 160
第114図　Ｃ地区区画11出土遺物（４）…… 163
第115図　Ｃ地区区画11出土遺物（５）…… 165
第116図　Ｃ地区区画12出土遺物（１）…… 166
第117図　Ｃ地区区画12（２）・表採遺物 …… 167
第118図　暦年較正 …… 192
第119図　神山集落周辺交通壕等陣地 …… 206
第120図　愛知県豊橋市天伯町豊受地点陣地跡 …… 207
第121図　『野戦築城教範』における各種掩体・交通壕の形態 …… 207
第122図　神山古集落近代遺構概念図 …… 208

表目次

第 1 表　人口遺物出土点数 …… 104
第 2 表　中国産青磁出土点数 …… 105
第 3 表　中国産白磁出土点数 …… 105
第 4 表　中国産青花出土点数 …… 105
第 5 表　中国産その他の陶磁器出土点数 …… 105
第 6 表　本土産近世陶磁器出土点数 …… 105
第 7 表　本土産近代陶磁器器形別出土点数 …… 106
第 8 表　本土産近代磁器分類別出土点数 …… 106
第 9 表　沖縄産施釉陶器出土点数 …… 108
第10表　沖縄産無釉陶器出土点数 …… 108
第11表　陶質土器出土点数 …… 108
第12表　ガラス製品出土点数 …… 110
第13表　金属製品材質別出土点数 …… 111
第14表　金属製品用途別出土点数 …… 111
第15表　銭貨出土点数 …… 112
第16表　石器・石製品・石造物・石材出土点数 …… 112
第17表　石質別出土点数 …… 112
第18表　プラスチック製品出土点数 …… 113
第19表　瓦出土点数 …… 114
第20表　瓦地区別個体数 …… 114
第21表　円盤状製品出土点数 …… 114
第22表　木製品・木材出土点数 …… 114
第23表　遺物観察表（１）…… 168
第24表　遺物観察表（２）…… 169
第25表　遺物観察表（３）…… 170
第26表　遺物観察表（４）…… 171
第27表　遺物観察表（５）…… 172
第 28 表　遺物観察表（６）…… 173
第 29 表　遺物観察表（７）…… 174
第 30 表　遺物観察表（８）…… 175
第 31 表　遺物観察表（９）…… 176
第 32 表　遺物観察表（10）…… 177
第 33 表　遺物観察表（11）…… 178
第 34 表　遺物観察表（12）…… 179
第 35 表　遺物観察表（13）…… 180
第 36 表　遺物観察表（14）…… 181
第 37 表　遺物観察表（15）…… 182
第 38 表　遺物観察表（16）…… 183
第 39 表　遺物観察表（17）…… 184
第 40 表　遺物観察表（18）…… 185
第 41 表　遺物観察表（19）…… 186
第 42 表　貝類遺体出土点数 …… 186
第 43 表　脊椎動物遺体出土点数 …… 187
第 44 表　放射性炭素年代測定結果 …… 192
第 45 表　花粉分析・微粒炭分析結果 …… 193
第 46 表　微細物分析結果 …… 193
第 47 表　土壌理化学分析結果 …… 194
第 48 表　Ｃ地区ＳＫ004出土植物遺体の集計 …… 199
第 49 表　保存処理対象遺物 …… 201
第 50 表　測定条件 …… 202
第 51 表　脱塩溶液の陰イオン溶出濃度の経過 …… 202
第 52 表　各工程に検出した薬剤と検出条件 …… 203
第 53 表　主要遺構出土遺物組成（１）…… 209
第 54 表　主要遺構出土遺物組成（２）…… 210

第１章　経緯と経過

第１節　調査の経緯

普天間飛行場の範囲を含む宜野湾市字神山の周辺では、大雨の際に冠水する場所が見られた。沖縄防衛局（以下､防衛局）は､その対策として普天間飛行場内に雨水排水施設としての調整池整備を計画しており、平成 25 ～ 26 年にかけて当該地における埋蔵文化財の有無とその保護について､宜野湾市教育委員会（以下、市教委）と調整を行ってきた。その中で、防衛局は本調査が必要な場合は早急に対応するよう求めていたが、市教委は平成 27 年度末に返還が予定されていたキャンプ瑞慶覧西普天間住宅地区の跡地利用に伴う発掘調査等を急ピッチで実施しており、その対応は困難であった。

その中で、平成 26 年 11 月 20 日の日米合同委員会により合意された普天間飛行場内における雨水排水施設の改修が承認されることになり、平成 29 年度中の竣工を予定した工程が計画された。防衛局は、周知の遺跡である神山古集落周辺において、試掘調査を実施するに当り市教委に立会・指導を求めてきた。それによって、試掘調査が平成 27 年６月から平成 28 年３月の間断続的に実施され、工事影響範囲に当たる神山古集落の範囲内で時期不明の遺構が検出され、さらに地表にも井戸等が現存する可能性も指摘された。そこで、市教委は詳細な踏査や範囲確認調査の必要性を防衛局に指導し、その方法・時期についても十分調整するよう求めていた。

平成 28 年度に、沖縄県教育庁文化財課（以下、文化財課）は、防衛局より神山古集落跡における範囲確認調査と本発掘調査を合わせて、民間会社へ直接委託する場合の積算・方法等についての質問を口頭で受けたが、宜野湾市教委も含めた再度の調整が必要である旨を回答した。その後、防衛局は文化財保護法第 94 条に基づく埋蔵文化財発掘通知を平成 28 年６月９日付沖防第 3316 号にて市教委を経由して沖縄県教育委員会に提出し、県教育長は平成 28 年７月 11 日付で教文第 625 号にて防衛局に対して発掘調査をする旨を指示した。

この指示を受けて、文化財課・市教委・防衛局による３者で調整を繰り返して行い、市教委の協力のもとに県が実施する方向性を確認した。その上で、整備予定地の大半は木々･ブッシュで覆われているので、まずは人力による伐採後に地表踏査を行ったうえで、本調査の範囲を決定することになった。踏査は、同年９～10月にわたって､防衛局が発注した工事業者による伐採が終了した範囲を随時､市教委と文化財課、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施することになった。ただ、第２章第２節や第３章第１節で詳述するように、今回の工事掘削が及ぶ範囲全体（約 36,000㎡）に戦前の屋敷地が位置していたが、残存状況は不明であった。そこで、試掘・踏査成果と共に戦前・戦後の空中写真などを検討することにより、戦前の神山集落については遺構が良好に残存していると思われる範囲を調査対象とすることにした。

以上の検討を経て、市教委と文化財課で本調査範囲を決定し、調査区を３つに分けてその面積は 6,800㎡となった。市教委は平成 28 年 10 月 21 日付宜教文第 20 号－ 14 にて、県教育長あてに記録保存調査への協力依頼を行い、県は平成 28 年 11 月９日付教文第 1172 号にて、宜野湾市が将来の文化財保護体制を整備することを前提に、当センターが本調査を実施することになった。ただ、防衛局と県の間で協定･契約、補正予算への計上を行う必要があることから、その実施は早くても平成 29 年１月以降とならざるを得なかった。しかし、防衛局による掘削工事の開始は平成 29 年度中に入らないと、遅れが生じるということで調査期間の決定については難航した。そこで、表土掘削とそれに伴う不発弾探知のための磁気探査については、市教委･当センターの立会のもと、平成 28 年 11･12 月中に実施することになった。また、

それ以降の掘削工事は調査に影響がない範囲から実施し、調査は終了した調査区を順次引渡し、平成29年7月中までには全て終了させることが要求された。このような調整を経て、平成28年12月20日付で沖縄防衛局長と沖縄県教育委員会教育長との間で、記録保存調査を行う旨の協定書を取り交わした。それに基づき、平成29年1月17日付で、「普天間（28）文化財発掘調査業務委託（沖縄県）」として、事業期間を平成30年3月31日までとして契約書を取り交わした。

当センターは、県と防衛局の契約締結前後からすみやかに普天間飛行場内への立ち入り・空撮許可申請、掘削・実測等の発掘調査支援委託の発注などの調査準備を行っていた。しかしながら、防衛局と米軍への調査説明が行うことができたのは2月中旬以降であったことや、駐車場や現場事務所の設置などに際して防衛局発注工事業者との調整も必要となったため、現地における調査準備は3月上旬までずれこんだ。このような事前準備が終わり、支援業者の作業員を貼り付けることができた平成29年3月17日をもって、調査開始日とした。また、同日付埋文第749号にて、県教育長あてに文化財保護法第99条第1項の規定による発掘調査の着手を報告した。終了時には、平成29年8月21日付埋文第328号にて文化財課長あてに報告した。

発掘調査はA地区から開始し、調査が終了した順で防衛局に引渡しすることになり、続々と工事が並行して行われ、何台もの大型トラック・ショベルカーなどの重機が行きかう現場となり、安全面への配慮に気を配った。また、6月には天候不良で2週間近く作業が出来なかったこともあり若干遅れが生じたが、防衛局・工事関係者との調整を行い、現地調査は8月17日まで及ぶことになった。なお、出土遺物は遺物収納コンテナ150箱に及び、平成29年8月21日付埋文第327号にて、文化財課長を経由して、平成29年8月25日付教文第756号で宜野湾警察署へ通知した。

調査中は、適宜市教委に現場説明を行うと共に、防衛局を通して基地接収以前の住民らで構成される字神山郷友会により住民らへの現地見学と、検出された井戸を移築復元することが要求された。文化財課、防衛局、市教委との調整により、両者については当センターが現地での対応を行うことになった。現地見学は平成29年6月8日に、字神山郷友会ほか関係者20名前後が参加され、調査で検出された屋敷地の関係者もおられた。

移築する井戸については、調査終了日の8月17日に記録を進めながら解体し、その部材については移築先の字神山郷友会事務所の敷地に仮置きすることになった。その後、設計業者に移築復元設計について委託し、また字神山郷友会に対しては市教委と共に、復元後の姿や説明板の内容などについて打ち合わせを数度行った。それと共に、施行業者により9月には復元用の部材の調達を行い、10月に2週間程度の移築工事、12月に説明板の製作にも入り、平成30年1月15日に移築復元作業を終了させた。

また、調査終了後にすみやかに資料整理を行い、報告書の刊行を目指した。しかし、平成29年度中の刊行は困難であったことから防衛局と協定書と契約書を変更し、平成31年3月15日までに事業期間を変更した。

第2節　調査体制

神山古集落遺跡の発掘調査は、当センターが県教委の指導の下に平成28・29年度に現地調査、平成29・30年度に資料整理・報告書作成を実施した。実施体制は以下のとおりである。

事業主体　沖縄県教育委員会　平敷昭人（教育長）

事業主管　沖縄県教育庁文化財課　萩尾俊章（課長、28･29年度）、濱口寿夫（同、30年度）、上地博（記念物班長、28・29年度）、仲座久宜（同30年度）、知念隆博（主任専門員）

調査所管　沖縄県立埋蔵文化財センター　金城亀信（所長、28・29年度）、登川安政（所長、30年度）

調査総括　濱口寿夫（副参事、28･29 年度）、仲座久宜（調査班長、28･29 年度）、中山晋（同、30 年度）
調査担当　瀬戸哲也（主任専門員）、玉城綾（専門員）
調査補助　奥平大貴・太田樹也（史跡・埋蔵文化財調査員）
整理担当　瀬戸哲也（主任専門員）、大堀皓平・具志堅清大（主任）、荻堂匠美（専門員）
整理補助　上原園子・小渡直子・嘉数渚・狩俣由利・工藤孝美・城間彩香・嶺井多津美・宮城綾子・宮城かの子・領家範夫・伊禮若菜・大城友里華・大村由美子・島千賀子・照屋元子・當真香・當山由貴・仲村綾乃・根岸敦子・比嘉美智子・玉那覇美野・松田仁美
整理協力　平良和輝・太田樹也（史跡・埋蔵文化財調査員）、赤嶺雅子・伊藤恵美利・池宮城聡子・崎原美智子・島仲美香・下地勝恵・玉那覇美野・手島永子・當間郁子・比嘉なおみ・松田栄子・松田仁美・宮里美也子（埋蔵文化財資料整理員）
発掘調査支援業務委託（28・29 年度）　株式会社イビソク
自然科学分析業務委託（29 年度）　株式会社パリノ・サーヴェイ
井戸移築整備設計業務委託（29 年度）　株式会社真南風
井戸移整備築施工業務委託（29 年度）　沖縄県石材事業協同組合
脆弱遺物保存処理業務委託（30 年度）　株式会社イビソク
調査指導　坂井秀弥（奈良大学）、伊藤厚史（名古屋市教育委員会）、上原静・吉浜忍（沖縄国際大学）、小畑弘己（熊本大学）、千田寛之（日本植生史学会）

第３節　調査の経過

試掘調査から本調査、報告書作成に至る経過については以下のとおりである。

試掘調査

沖縄防衛局の依頼により、宜野湾市教育委員会の現地立会・指導の元に、現地作業は株式会社イビソクが実施した。調査期間は平成 27 年 6 月 24 日～9 月 24 日、11 月 17 日～ 12 月 8 日、平成 28 年 2 月 22 日～ 3 月 4 日の間である。調査方法は原野部分については人力により 2 × 2 m、それ以外については重機を使用し 4 × 4 mの試掘坑を掘削し、合計 52 ヶ所の試掘調査が行われた（第 7 図）。これにより、本工事範囲において時期不明の 4 ヶ所の遺構を確認することになった。また、調査時において、井戸等の地上構築物が幾つか確認され、本調査範囲は、工事範囲を伐採後に、現地踏査を実施することにより、調整することになった。

現地踏査

現地踏査は、防衛局発注工事業者が人力で一定の範囲を伐採した都度に、文化財課、市教委、当センターの職員で立会を行うことにした。その結果、井戸 5 基、くぼみなどを確認した。また、工事範囲南東側にはおそらく戦後、米軍によるコンクリート基礎の設置や大規模な削平などがなされていた。今回の工事範囲では、普天間飛行場内で現存している赤道渡呂寒原屋取古集落などのように、屋敷の石積みや土塁などは確認できなかった（図版 1 － 1）。

そして、防衛局及びそれ以前の市教委が平成 14 年度に行った試掘調査の成果、井戸の位置、戦前の米軍による空中写真などから、集落の区画などが把握できるように 3 つの調査区（A ～ C 区）を設定することにした（第 9 図）。調査区の設定については第 3 章第 1 節で詳述する。

防衛局工事に伴う立会

防衛局の要望で調整池を一刻も早く竣工するために、調査区以外の工事は進捗させることになり、そのために掘削が必要な範囲について市教委及び当センター職員による立会を行ったが、地表で確認された井

１．現地踏査

２．重機による表土掘

３．不発弾磁気探査

４．重機による大型遺構の掘削

５．人力による遺構掘削

６．写真測量

７．ドローンによる空中写真撮影

８．神山郷友会等関係者の現地視察

図版１　調査状況

戸以外の遺構は確認できなかった。また、少しでも早く調査を進めるために防衛局発注工事業者による調査区内の表土掘削も行うことになり、市教委及び当センター職員の立会のもと 11 月 22 日～ 12 月８日の間で、井戸等の遺構に配慮しながら行った（図版１－２）。あくまでも工事業者による表土掘削であることを考慮し、できるだけ掘りすぎないように注意したが、Ａ・Ｃ地区では表土が浅く地山面が露出し既に遺構が検出された場所もあった。この表土掘削では、屋敷の石積みや土塁があることを想定して注意深く見ていたが、確認することはできなかった。だが、やはり時間的に迫った中での表土掘削であったことは否めず、今後は関係者との十分な事前調整を行った上で調査に入る必要があろう。

本発掘調査

本発掘調査における現地作業は、平成29年３月16日より平成29年８月17日まで実施した。なお、掘削・実測等現地作業は発掘調査支援業務として当センターの監理のもと、株式会社イビソクが実施した。以下、調査の進捗について調査日誌をもとにして記す（図版１－３～８）。

３月 16 日　本日よりＡ地区から重機による表土剥ぎと、人力による遺構検出を開始することになった。
３月 29 日　柱穴、石積み囲い土坑など本県の近世・近代集落で確認される遺構が続々と検出された。
４月 10 日　大型な土坑の大半は、近代・戦後と判断。今後時間短縮の為、小型重機による埋土の掘削を行う。
４月 12 日　集落内の道と考えられるＳＦ 001 内の側溝を沖縄戦時の交通壕ではないかと推定。
４月 19 日　Ｂ地区において重機による表土掘削を開始。
４月 24 日　ドローンによるＡ地区の空中写真撮影。
４月 25 日　Ａ地区のＳＫ 041・078 の壁面に足掛りのための窪みを検出し、沖縄戦時のタコツボと想定。
５月 ２日　Ｂ地区では調査前から井戸枠が残存していた井戸ＳＥ 001 を検出。
５月 ８日　Ｂ地区のＳＤ 001 がコ字状に巡り、屋敷地を区画しているものと想定。
５月 15 日　Ａ地区は実測等の記録作業を終了し、防衛局に現場引き渡し。
５月 23 日　Ｂ地区のＮＲ 002 の 13 層上面で植栽痕と思われる小ピット群を検出。
６月 １日　Ｂ地区の沖縄戦時の防空壕と思われるＳＫ 043 を重機で掘削し、２つの入口を検出。
６月 ７日　Ｂ地区のＳＫ 045 は埋甕で獣骨が一括で出土。Ｃ地区の重機による表土等掘削開始。
６月 ８日　神山郷友会の現地視察。
６月 13 日　雨天でＢ地区の空中写真撮影は中止。以降、６月 20 日までほとんど作業できず。
６月 27 日　Ｂ地区の空中写真撮影。Ｃ地区の人力による遺構検出開始。
６月 28 日　Ｂ地区では防空壕ＳＫ 051 の天井部撤去、レンガ囲いＳＫ 012 の半裁、ＳＳ 002 下層遺構の掘削。
７月 13 日　Ｃ地区のＮＲ 001 下層で植栽痕と思われる小ピット群を検出。
７月 18 日　Ｂ地区は移設対象となる井戸ＳＥ 001 以外の記録作業を終了し、防衛局に現場引き渡し。
７月 19 日　Ｃ地区の防空壕と思われるＳＫ 004 で大量の炭化種子が出土。
７月 27 日　Ｃ地区の空中写真撮影。
８月 １日　Ｃ地区の防空壕と思われるＳＫ 040 は天井部を重機で掘削し、多くの沖縄産陶器甕が出土。
８月 ４日　Ｃ地区の作業は終了し、現場引き渡し。
８月 17 日　Ｂ地区の井戸 001 の解体。この時点で現場調査を終了として、防衛局に報告する。

井戸移築整備作業

平成 28 年５月 12 日に字神山郷友会の要望により、Ｂ地区で検出された井戸ＳＥ 001 の井戸枠及び一部の石積みを郷友会事務所敷地に移築整備することになった。その作業過程は以下のとおり（図版２）。

６月 29 日　移築整備設計業務発注（株式会社真南風）
７月５日　神山郷友会との井戸移築に関する調整（第１回）…設計内容説明
８月８日　移築整備施工業務発注（沖縄県石材事業協同組合）
８月 14 日　神山郷友会との井戸移築に関する調整（第２回）…施工内容・工程説明

8月16日　井戸遺構の現場での解体
8月17日　井戸遺構の部材を神山郷友会敷地へ搬入
9月　施工業者工房にて石材等材料準備、加工
10月2日　神山郷友会との井戸移築に関する調整（第3回）…施工詳細・説明板内容調整
10月11日　井戸施工現場作業開始
10月30日　井戸本体整備終了
11月11日　神山郷友会との井戸移築に関する調整（第4回）…移築現状・説明板内容確認
12月　説明パネルと滑車の製作
1月12日　説明板・滑車取り付け作業終了
1月15日　終了確認

資料整理作業

発掘作業で出土した遺物は、現地調査中の雨天時に遺物洗浄作業を行うことで終了させた。遺構図面・写真の整理については、調査終了後速やかに実施するよう努めた。

遺物・記録類資料整理作業は、平成29年度に遺物のナンバリング、平成30年度からは遺物の実測・写真撮影・デジタルトレースに入ったが、当初の予想より出土遺物量が多くその遂行には非常に時間が掛かった。整理作業を経て作成した遺構・遺物実測図は当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてデジタルトレース及びレイアウトを行った。その後、編集ソフト（インデザイン）を用いてＤＰＴ印刷用の編集を行いＰＤＦファイルとして作成し、印刷製本業者へ入稿した。

図版２　井戸移築作業状況

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

神山古集落は、宜野湾市字神山 322 番地ほか、普天間飛行場内に所在する（第１・５～７図）。

宜野湾市は、沖縄本島中部の西海岸にあって、総面積 19.80k㎡、人口 98,495 人である（2018 年 10 月末現在、宜野湾市 HP）。全体の地形としては、海岸沿いには低地が南北に伸びるが、東に向かって４つの石灰岩段丘があり、その際には洞穴と湧水が点在する。なお、段丘の第２・３面に米軍基地が位置しており、市域北西にキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場が占有し、その面積は市域全体の 29.6％である。

現在の字神山は、宜野湾市小学校より西側の国道 330 号線から普天間飛行場のフェンスとの間の地域である。旧神山集落はほぼすべて普天間飛行場内に接収されたため、住民は戦前畑地であった東半側と字愛知の一部に居住している。飛行場外側の神山地番は、現在ほぼ住宅地となっている。旧住民は神山郷友会を設立し、合祀所を有した郷友会事務所を住宅地の一角に設けている。

神山古集落が所在する普天間飛行場は、1945 年４月以降に米軍占領と同時に接収され、本土決戦に備えて米陸軍工兵隊が滑走路を建設したことに始まる。1950 ～ 1960 年代には飛行場内での拡張工事、大規模造成がたびたび行われた。現在では、長さ 2,800 m、幅 46 mの滑走路を有し、在日米軍基地の中でも岩国基地と並ぶ有数のヘリコプター部隊の拠点となっている。その面積は 480.6ha で市域の約 25％の広さを占める。

本遺跡の立地は、段丘第３面に当り、標高は 90 ～ 80 m付近で西側に下る緩斜面に位置する。その南にはシリガーラ、北にはシキローという小川が流れており、周辺には神山クシヌカー古湧水や、神山テラガマ洞穴遺跡など、湧水や洞穴が点在している。

白地図テクノコ「沖縄本島」を使用し加筆

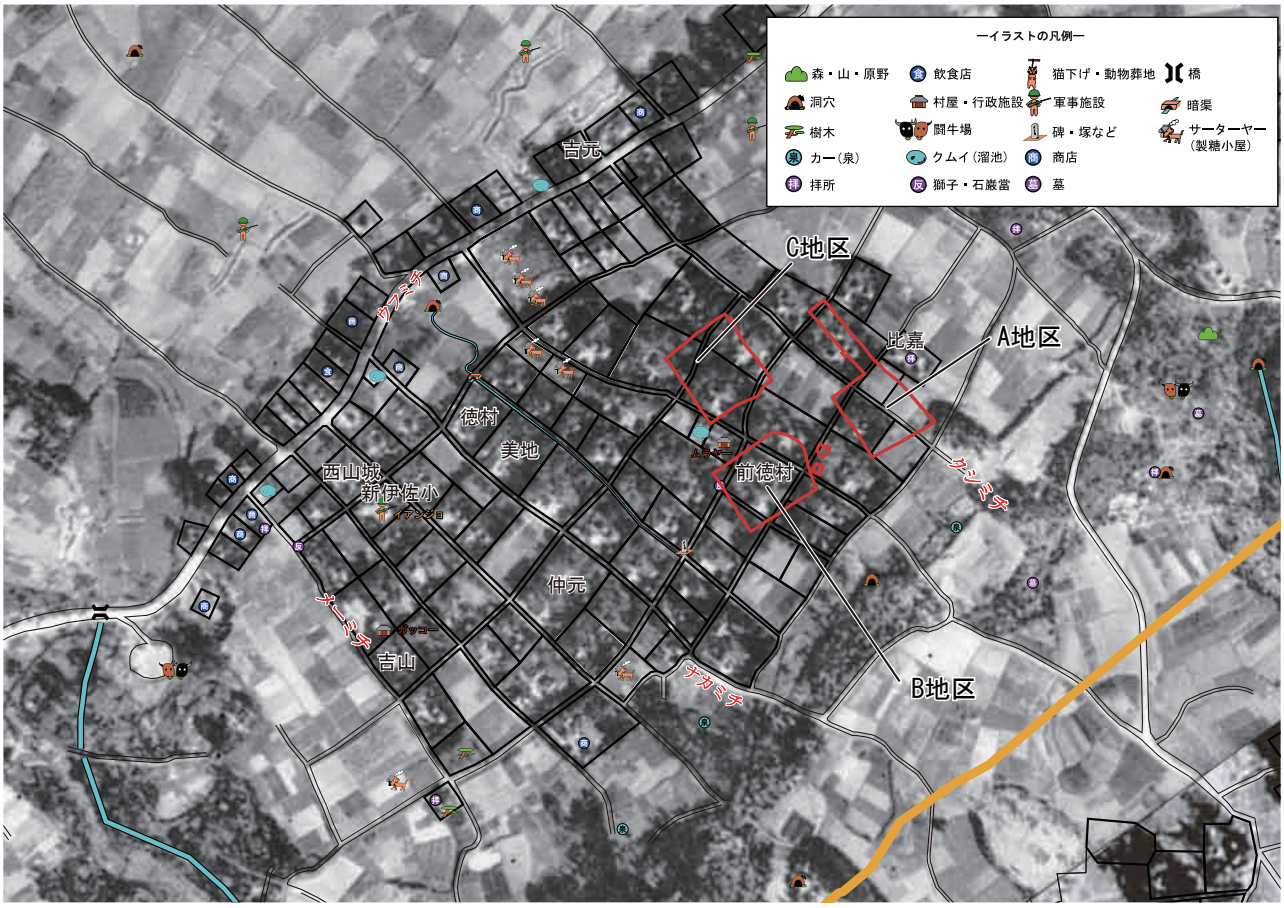
第１図　沖縄県と宜野湾市の位置

第２節　歴史的環境

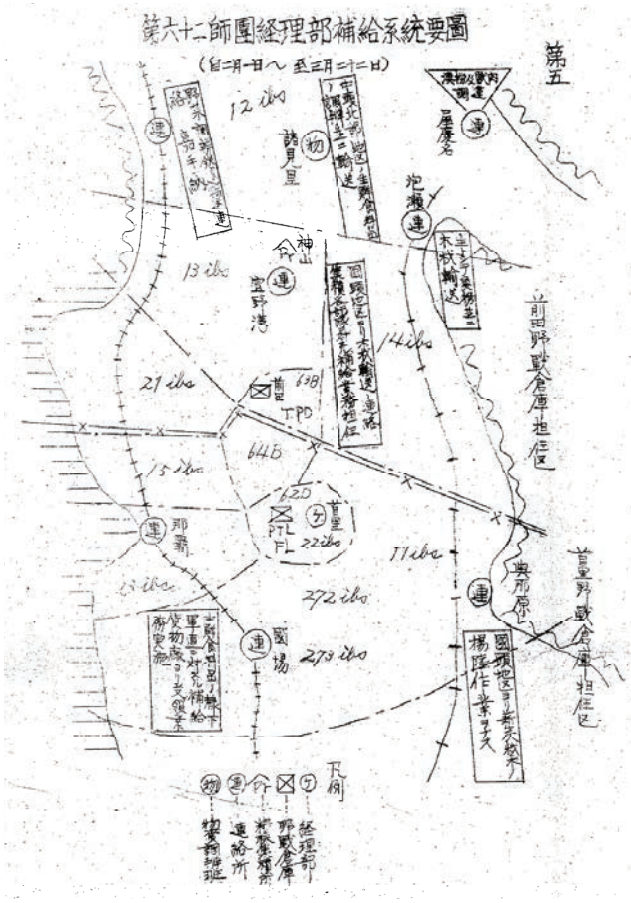
神山集落について資料的に遡ることができるのは、「絵図郷村張（1646 年）」の浦添間切のうちに記される「かミ山村」であり、「琉球国由来記」等では 1671 年の宜野湾間切新設時には「神山村」となっている。集落は宜野湾街道沿いに展開しており、すぐ南には宜野湾村が見られる。1880 年に戸数 100・441 人、1903 年に士族の戸数 36・229 人、平民の戸数 74・289 人であった。1896 年には中頭郡に所属、1908 年には宜野湾村に編入された（平凡社 2002）。1944 年ごろの神山の戸数 84・467 人であった（宜野湾市 1998）。

戦前の生活としては、多くは農家を営みサトウキビ栽培が盛んで自家製糖も見られた。昭和以前には水田もあったが、沖縄戦の直前にはほとんど畑であったとされる。集落はメーミチ・ナカミチ・クシミチと称される道路によって、碁盤目状の区画となっており７つの行政班に分けられていた。また、集落の北端を走る宜野湾街道はウフミチと呼ばれ、商店などが見られた。今回の調査区は、ウシミチとナカミチに挟まれた集落の北東側に当たり、比較的大きな屋敷地が分布する範囲である。Ａ地区は、神山発祥の家、根屋（ニーヤー）である屋号比嘉の屋敷地に近接しており、綱引きなどの行事に最初に拝む場所であった（第２図、宜野湾市 2008・2012）。

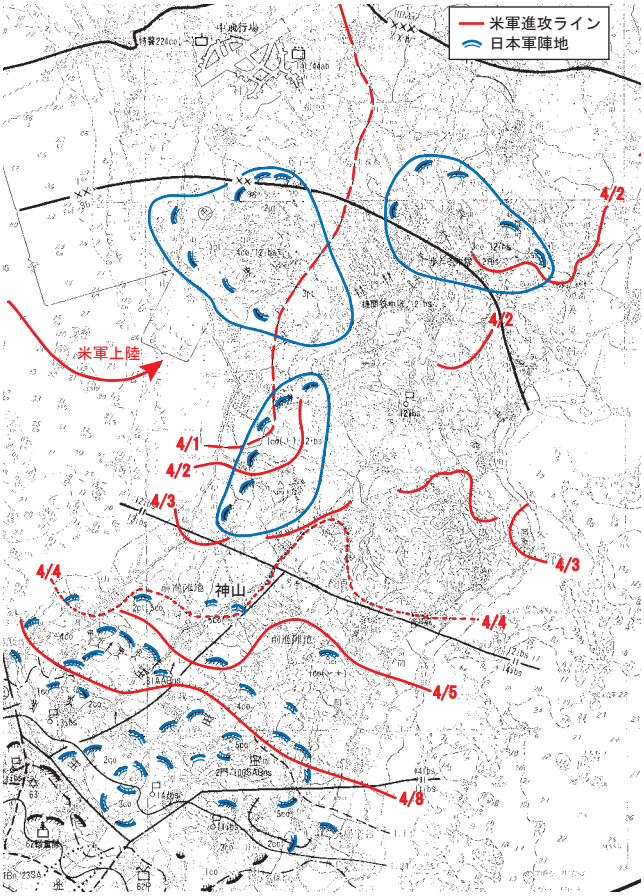
1944 年６月以降に、第 62 師団（石部隊）、32 軍直属部隊（球部隊）が吉山（ユシヤマ）、吉元（ユシムトゥ）、前徳村（メートゥクムラ）、美地（ミーヂ）、徳村（トゥクムラ）、仲元（ナカムトゥ）、西山城（イリヤマグシク）、新伊佐小（ミーイサグワァー）の民家に駐屯するようになった。なお、空家を慰安所にしていたとされる。また、住民は飛行場建設や陣地構築などの徴用で毎日 10 人程度が動員され、日本軍の食料調達のため芋・野菜などを頻繁に供出することになった。神山集落では県外への学童疎開はなく、本島北部への疎開者も少なく、1945 年３月下旬には大多数の住民は自然壕の５ヶ所へ避難することになった（宜



第２図　調査区周辺状況（1945 年１月）宜野湾市 2012 所収図を一部改変

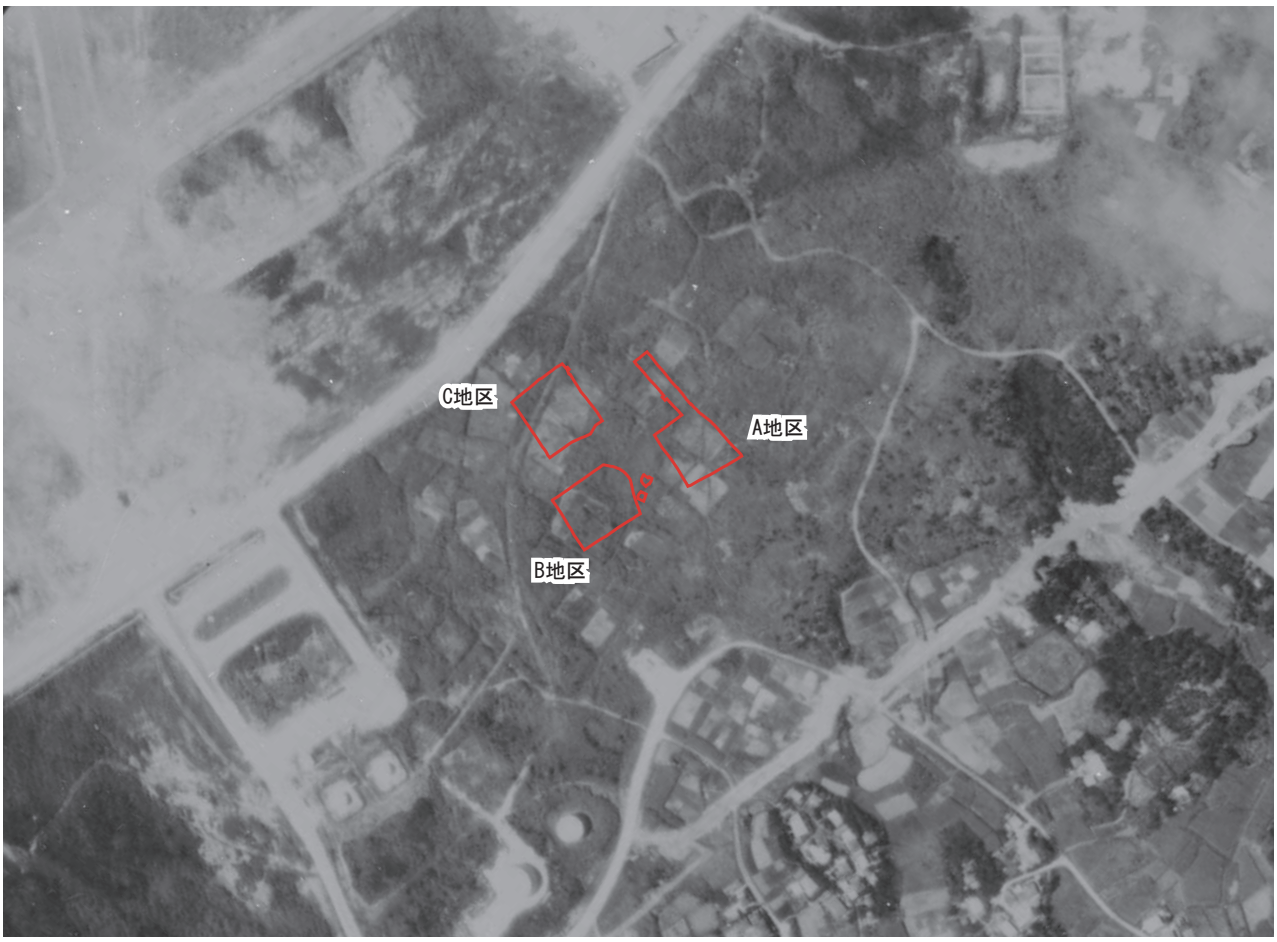


第３図　第 62 師団補給系統図
（アジア歴史資料センター Ref. C11110333700）



第４図　沖縄本島中部沖縄戦経過図
（防衛庁 1968 より一部加筆）

図版３　調査区周辺状況（1945 年８月）（国土地理院空中写真使用）



図版４　調査区周辺状況（1962 年７月）（国土地理院空中写真使用）

図版５　調査区周辺状況（1970 年５月）（国土地理院空中写真使用）

図版６　調査区周辺状況（1993 年８月）（国土地理院空中写真使用）

図版７　調査区周辺現況（2010 年９月）（国土地理院空中写真使用）

野湾市 1998)。

日本軍の神山周辺における動向を軍資料によりもう少し詳細に見ておく。第 62 師団は、その参謀部が 1944 年 8 月 19 日に那覇港へ上陸したのを皮切りに各隊が配備されると共に、浦添市（当時は浦添村）仲間に戦闘指令所を開設するなど、その近辺に幾つかの部署が設けられた。その内の経理部は 8 月 25 日、浦添村當山に開設されたもので、その管轄下である糧秣（食糧・燃料）を補給するための野戦倉庫の一つを神山に開設された。第 9 師団が台湾へ転出した 12 月中旬には、第 62 師団の戦闘指令所が首里へ移動するに際して神山野戦倉庫も首里へ移転することになり、神山には国頭地区から搬送された木材等を保管する集積所が置かれた（第 3 図)。そして､米軍が嘉手納･読谷一帯の海岸に上陸した 4 月 1 日の夜間には、神山集積所の米等の糧秣を移送し、一部は焼却処分したとされる。 4 月 4 日には、駐屯していた独立歩兵第 13 大隊第 5 中隊が神山集落北側に 2 カ所の陣地を配備して米軍と応戦した。その戦闘は、米軍より戦車約 10 両、歩兵約 300 名の攻撃を受け、戦車は集落北側の陣地内に侵入し苦戦し、 4 日夜に當山（浦添市）に撤退したとされる（第 4 図、防衛庁 1968、第 32 軍 1947)。

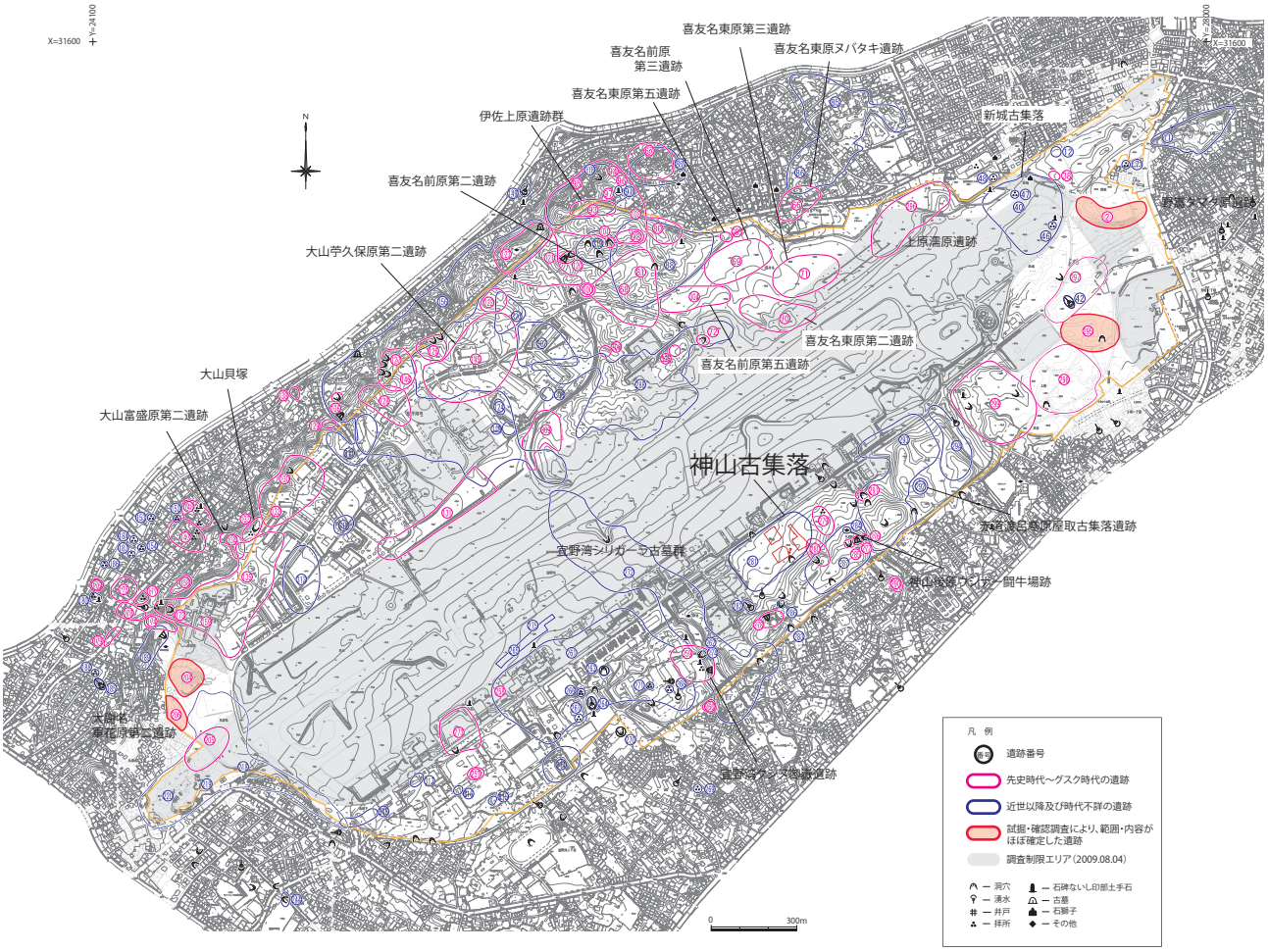
沖縄戦中の 6 月には既に神山一帯は米軍によって普天間飛行場としての整備工事が始まっており、 8 月には旧集落西半側の大部分の民家が破壊されており、長大な滑走路や付帯施設が整備されつつあった（図版 3)。一方、神山集落において自然壕などに避難していた人々は米軍の民間収容所へ入れられ、1947 年 11 月の帰還時には既に集落の大部分は接収されており、元の屋敷には戻ることができなかった。1948 年 2 月に、わずかに残された旧集落東側の耕地を造成し、それと合わせて隣接する字愛知の一部に居住することになった（宜野湾市 2012)。

その後は、元住民の方々によると、普天間飛行場内に接収された土地で許可された範囲では耕作を行うことができたとのことである（黙認耕作地)。1962 年の空中写真では、滑走路や付帯施設以外では畑の区画と思われる状況が広がっている（図版 4)。ただ、1970 年の空中写真によると、その範囲も含めて旧集落の範囲全体が裸地になっているように見られる（図版 5)。1993 年の空中写真では、木々も回復してほぼ原野のようになっており（図版 6)、今回の工事着工前とほぼ同様な状況であった（図版 7)。

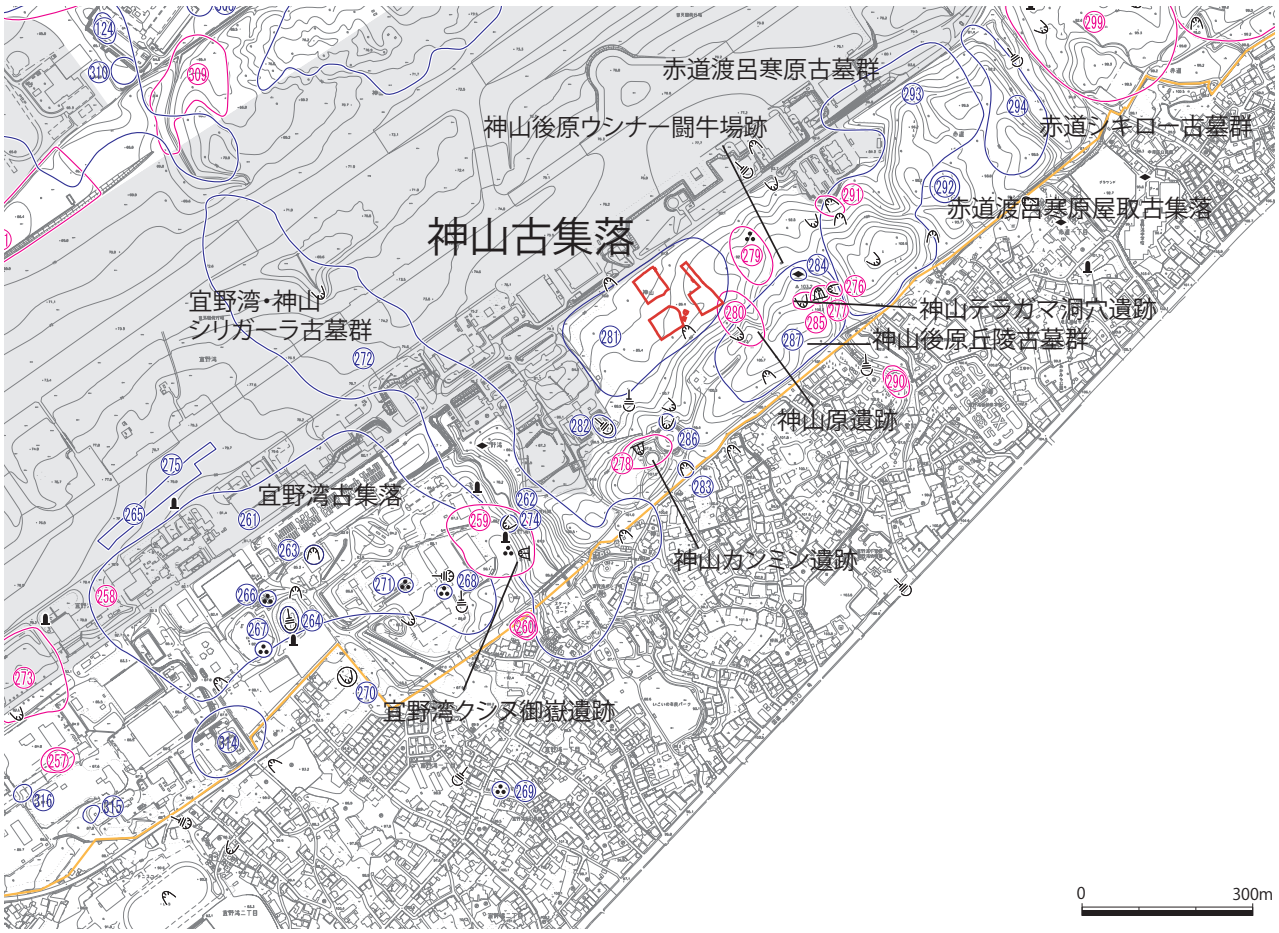
第 3 節　神山古集落と周辺の遺跡の現状

前節で述べたように、神山旧集落は沖縄戦を経て普天間飛行場に接収されており、その後も米軍による造成等が行われたと見られるが、場外に比べると開発の波は少なく、調査前は原野であった。神山旧集落が遺跡として認識されたのは 1990 年 1 月で、市教委による踏査で縄文時代の土器、井戸などが確認された。2002 年度に宜野湾市教育委員会が普天間飛行場内の試掘調査を開始し、この神山古集落一帯に試掘調査を行ったところ、グスク時代以前の耕作地・遺物包含層、時代不明の溝が検出された（宜野湾市 2005)。そして、前章で述べたように、このたびの雨水排水施設計画に伴い、防衛局発注による試掘調査、県・市教委による事前踏査を行うことにより、近代以前と思われる井戸や壕などを確認した。それらの成果をもとに、本調査の範囲を決定することになった（第 7 ・ 9 図)。

神山古集落の周辺では、縄文時代の土器などが洞穴内で確認された神山カンミン遺跡、時代不明の線刻石版が発見された神山テラガマ洞穴遺跡、グスク時代から継続し近代の窯が検出された神山原遺跡、当時の土手が残存する神山後原ウシナー闘牛場跡、戦前の屋敷跡が良好に残存する赤道渡呂寒原屋取古集落、宜野湾・神山シリガーラ・赤道シキロー・神山後原丘陵などの古墓群などで踏査・確認調査が行われている（第 5 ・ 6 図、 宜野湾市 1989・2007・2008・2017)。



第５図　普天間飛行場内遺跡地図（沖縄県・宜野湾市 2010 より一部改変）



第６図　神山古集落周辺遺跡（沖縄県・宜野湾市 2010 より一部改変）

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

今回の調査は、沖縄防衛局が実施する普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う神山古集落の記録保存調査であり、その調査面積はＡ地区2,770㎡、Ｂ地区2,240㎡、Ｃ地区1,790㎡で合計6,800㎡となった（第７図）。なお、この計画では調整池設置が大きなウェートを占めており、その掘削範囲は約36,000㎡でその範囲全体が戦前の神山集落に含まれていた。

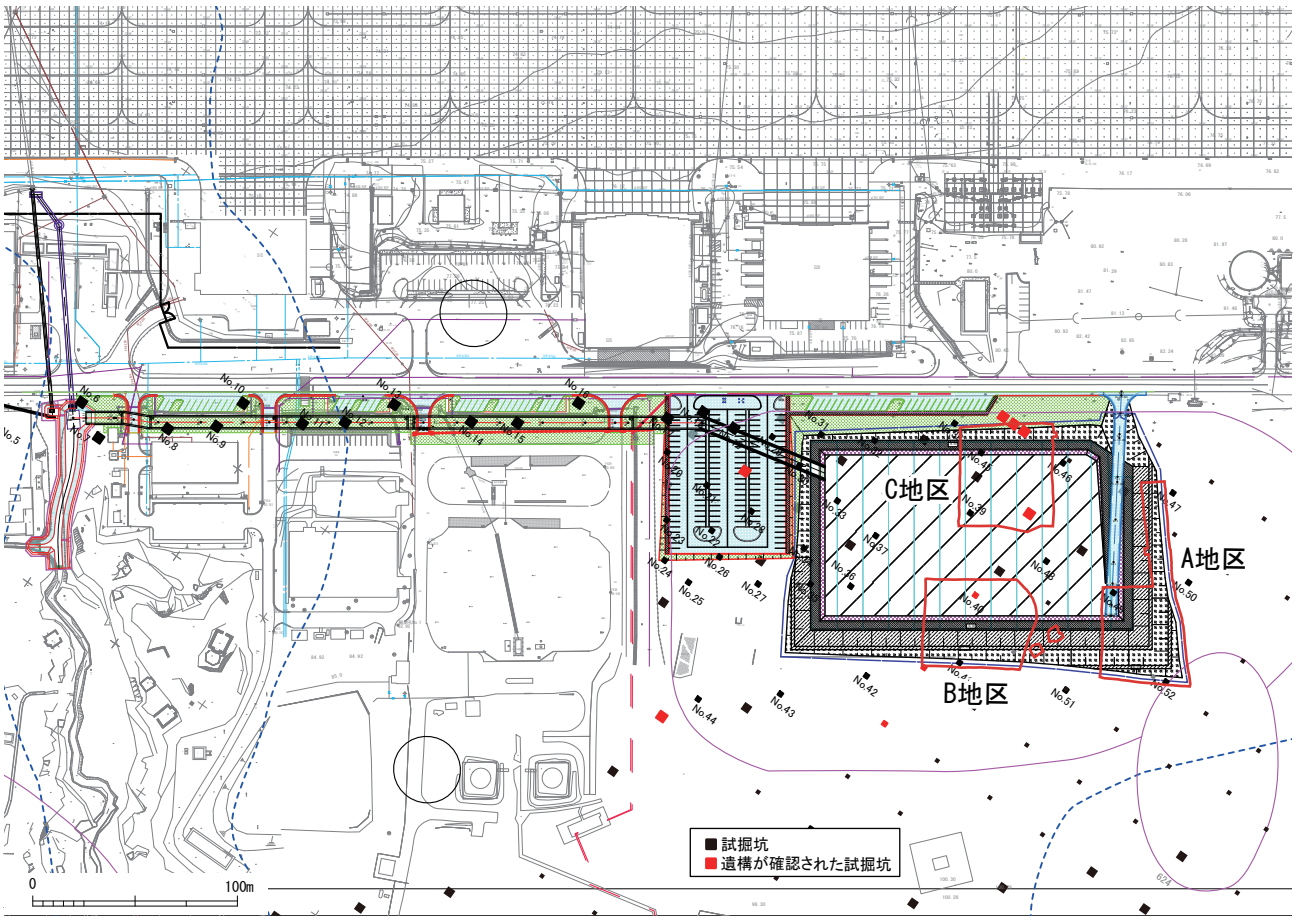
普天間飛行場内においては、2001年度より市教委と当センターで共通して、国土座標軸第ＸＶ座標系に基づき、日本測地系による座標軸Ｘ＝31000、Ｙ＝26500を基準として、第Ⅰ区分を300ｍ、第Ⅱ区分を30ｍ、第Ⅲ区分を６ｍごととしてグリッドを設定している。この区分により「フテ○－○－○」などと表記している。今回の調査でも遺物取り上げに際しては、このグリッドに基づいた（第８図）。

調査区は、第１章でも述べたように既往及び今回の計画に伴う試掘調査、施工予定範囲全域の伐採後の表面踏査により設定することになった（第９図）。2002年度の試掘調査では、工事で掘削が必要な調整池範囲の中央よりにグスク時代以前のピット群（フテ43－Ｈ１－オ・Ｈ２－ア・イ）、時代不明の溝（フテ43－Ｉ１－ア）が確認されていた（宜野湾市2005）。防衛局発注の試掘調査では、それらよりやや南側のNo.40で時代不明の土坑が検出された。表面踏査では井戸５基のほか、窪みや道路や畦などと考えられる段が確認された。しかし、第１章第１節でも述べたように、これらの成果だけでは戦前の神山集落については十分な調査が行えるかどうかについて不安が残った。

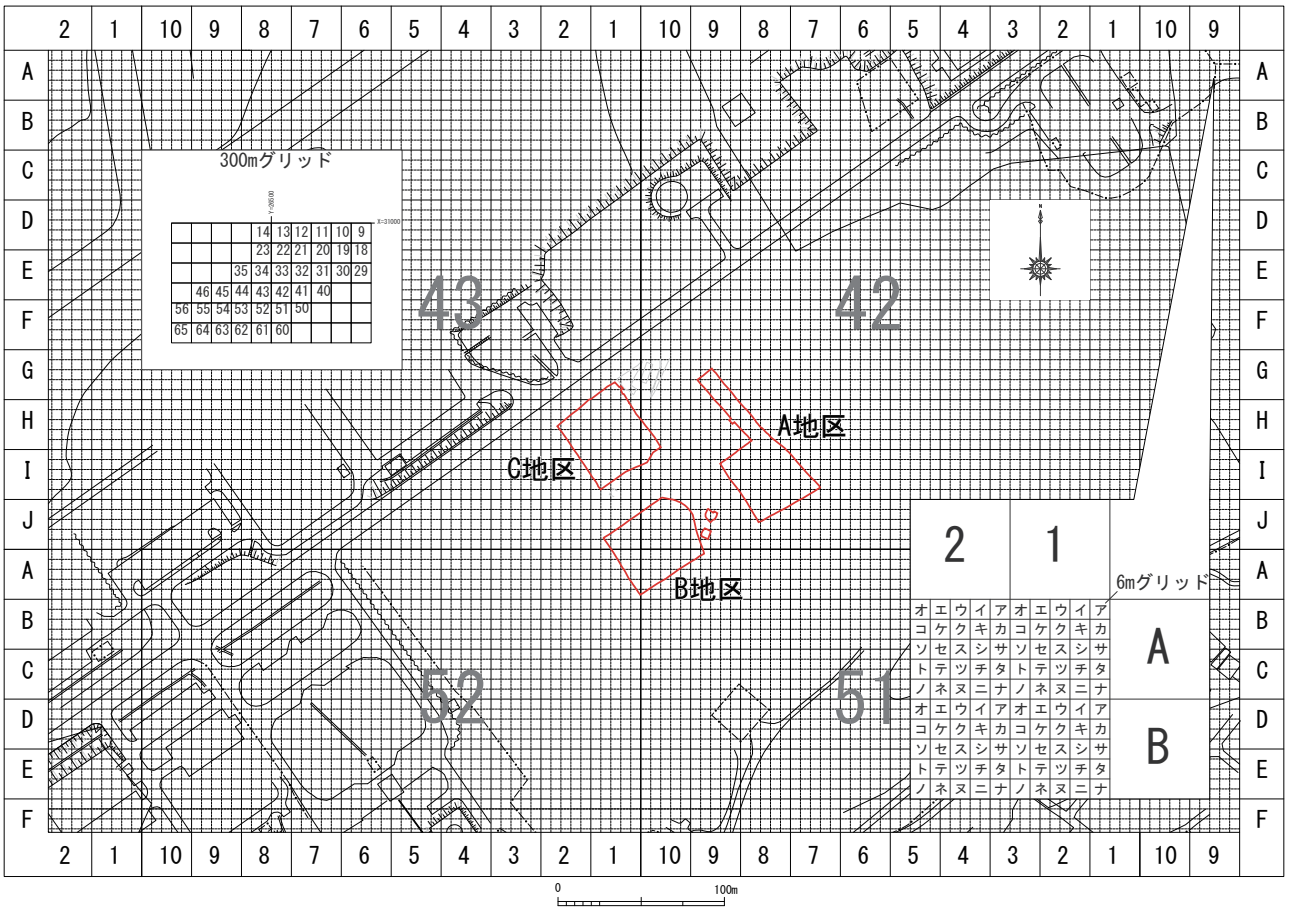
そこで、戦前・戦後の空中写真などにより、戦前以前の屋敷が残存している可能性を検討した。その結果、Ａ地区は神山発祥の伝承があることと最も標高が高い場所で遺構が残存している可能性が高いこと、Ｂ地区は前徳村という屋号の屋敷地で戦後の削平も及んでおらず井戸枠が現存していたこと（井戸ＳＥ001）、Ｃ地区は戦後に削平されているが試掘ではグスク時代以前の遺構が確認されていること、以上の理由から３つの調査区を設定したのである。

調査区設定後には、第１章第３節で述べたように、調査を少しでも進捗させるために工事業者の重機による表土掘削が市教委と当センターの立会のもとに行われ、同時に不発弾等除去のための磁気探査も実施された。この表土掘削では、部分的に地山まで検出した部分はあるが、基本的には50cm以内を目処に掘削を留めたので、全ての表土を除去させることはなかった。また、重機は当方らの立会のもとにしか動くことはなく、屋敷地の石積みや土塁などは確認できなかったが、やはり工事の一環としての表土掘削であり精度的には不十分な点があったことは否めない。今回の調査においての大きな反省点であり、やはり関係者と十分な調整期間は確保すべきであった。

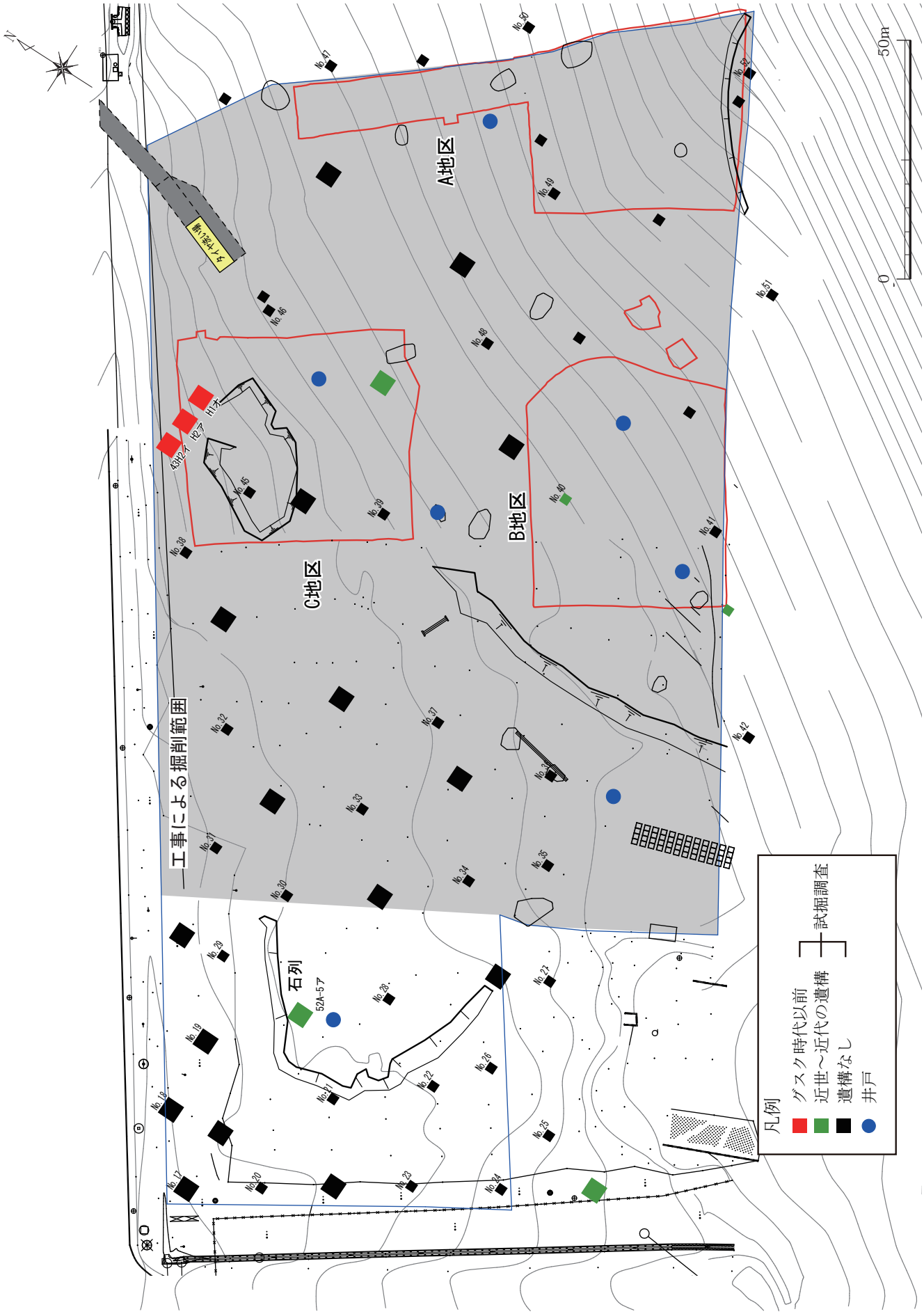
その後、調査準備が整った後に、当センターと支援業者によるＡ地区において重機掘削と、人力による遺構検出を開始した。重機掘削では表土（Ⅰ層）と共に、第２節で後述するが近世・近代の遺物を主体としながら戦後の遺物が混じる旧表土・耕作土（Ⅱ層）も部分的に剥ぐことにより概ね地山を検出する形で進めた。今回の神山古集落では、戦前・近代の遺構が主体となることが予想されたため、本来的には別に剥いでいく必要がある。しかしながら、時間的な制約が大きいことから、Ｂ・Ｃ地区で見られた谷部や、地山に掘り込まれた遺構以外は重機で一様に掘削していくことになった。さらに、検出された遺構についてもこのⅡ層が堆積する大型の土坑などについては、可能な場合は当センター職員の常時の指導により小型重機で掘削していった。また、壕などの天井部を有する遺構については、安全面を考慮し作業員を中に入れずに、重機で地上から開削して調査を進めた。



第７図　工事範囲と調査区位置図



第８図　グリッド配置図



第９図　試掘調査位置と調査区

現地での写真は、35mm のフィルムカメラ、または適宜６×７サイズの中判フィルムカメラを用いて白黒とリバーサルフィルムで撮影・現像した。なお、デジタルカメラ（ニコンＤ 70 ｓ）でも撮影を行い、報告書時の写真はＤＴＰ印刷に対応するために、デジタル画像を使用することとした。

実測については、主に支援業者である株式会社イビソクの調査員、補助員がトータルステーション、オルソ画像、手作業により行い、当センター職員が現地で指示、確認などの監理を行った。

遺物のナンバリングは、「神山○区（遺構・層名）」と注記しているが、遺構番号は０を省いて、ＳＫ２などとして適宜短縮している。

第２節　層序

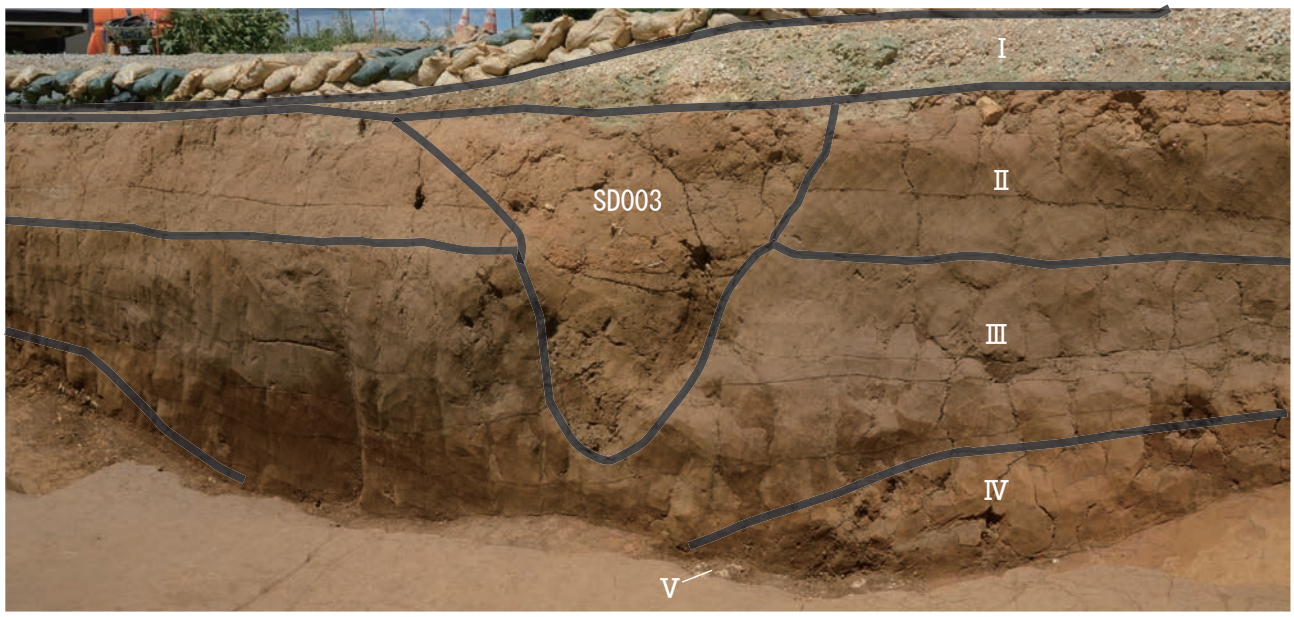
今回の調査では、時代的にはグスク時代以前と近世～戦前・戦後という大きく２時期の遺構・遺物が見られる。一方、層序としては次のように大きく４層を分けることができる（図版８）。なお、普天間飛行場内の調査では、宜野湾市教育委員会による時代ごとではなく堆積状況を基本とした層序があるが（宜野湾市 2005、2013）、ここでは調査区内の状況で判断した。

Ⅰ層　表土

調査開始前には、調査区の大部分は草木が生い茂った状況であり、その腐葉土が堆積していた。しかし、第１章で述べたように工事業者による表土掘削が先行して行われたため、当センターの調査前には表土が除去されている範囲が大半であった。

Ⅱ層　旧表土

表土直下の堆積層であり、色調は褐色～黄褐色（10 ＹＲ）を主体であり、今回の調査における多くの遺構の埋土でもある。Ⅲ層と比べると、遺物や礫、ブロック土の混入が多く、しまりが弱いのが特徴である。出土遺物は、近世以前の遺物も見られるが、大半は近代期である。また、戦後の遺物も見られるので、基地接収後もこの一帯では、黙認耕作地として活用されていたからと考えられる。しかし、埋土の観察から分類を試みたが、明確に近世・戦前・戦後などと明確に分けることは出来なかった。ただ、柱穴と思われるピットについては、掘り形や埋土の堆積状況より推定し、Ａ地区に特に集中した。また、迫地の堆積土であるＢ地区ＮＲ 002 上層やＣ地区ＮＲ 001 上層はその切り合いからⅡ層の中でも下層であるので、これと類する埋土をもつ遺構についても、近代の中でも比較的古い可能性が指摘できる。



図版８　基本層序（Ｃ地区）

Ⅲ層　グスク時代以前の堆積層

Ｂ地区のＮＲ 002 下層、Ｃ地区ＮＲ 001 下層の堆積層であり、色調は褐色～暗褐色（10 ＹＲ）を主体とする。Ⅲ層と比べると遺物が少なく、しまりが強くⅣ層に近い。遺構としては植栽痕と考えられるピットがある。出土遺物がほとんどみられないが、市教委の平成 14 年度の試掘調査（宜野湾市 2005）周辺の調査、年代測定（第５章第１節）により概ねグスク時代と考えられる。

図版９　Ａ地区空中写真

Ⅳ層　琉球石灰岩の風化土、島尻マージ

調査区全体の地山層で、色調は明褐色（7.5 ＹＲ）、いわゆるマージ層である。

Ⅴ層　琉球石灰岩

調査区内では部分的に露出している。今回の工事範囲では地表下２～３ｍ前後のマージ層の直下に全て岩盤が確認されていた。

第３節　遺構

本調査で検出された遺構は、グスク時代以前と考えられる迫地とピット群、近世・近代の建物、井戸、壕のほか多数の土坑・ピットなどが確認されたが、後者が主体である。

これらのうち主要な遺構について地区ごとに説明していくが、その中でグスク時代以前の遺構がある場合は先に記述する。主体である近世・近代の遺構は、検出された溝などにより区画されて分布しており、それは概ね戦前の空中写真などで確認できる屋敷地の区画と合致している。

そこで、近世・近代の遺構については設定できた 12 の区画順に説明していく。また、遺構については調査時ではＳＰ（ピット）、ＳＫ（土坑）、ＳＤ（溝）、ＳＥ（井戸）、ＳＳ（石敷き）、ＳＦ（道）という記号を付しており、報告書でも原則的には踏襲する。ただ、報告時に理解しやすいように、建物や壕などを別称したものも見られる。

図版 10　Ａ地区遠景（南より）

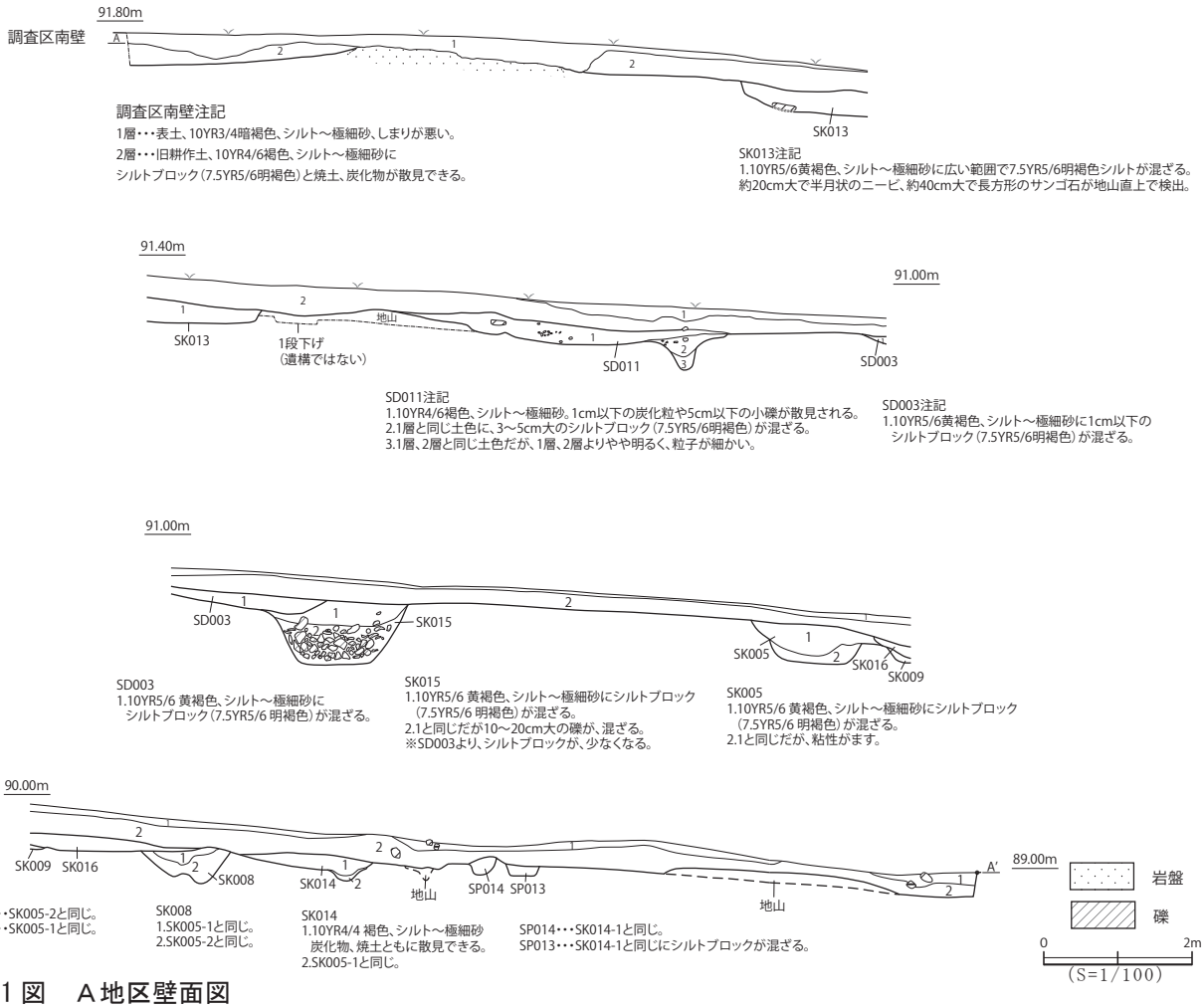
第 10 図　Ａ地区全体平面図

1．Ａ地区

概要　道と区画５つが確認されており、その内部には建物、井戸、壕などが確認でき、これらは概ね近代である（第 10・12 図、図版９）。ただ、後述するように柱穴が集中する区画３などは近世以前の陶磁器も若干見られている。

層序　Ⅰ層は厚さ 10 ｃｍ以内の表土で、その下部にはⅡ層が堆積している。Ⅱ層は 10 ～ 20cm

図版 11　Ａ地区堆積状況（上…ＳＤ 015　下…ＳＫ 052）

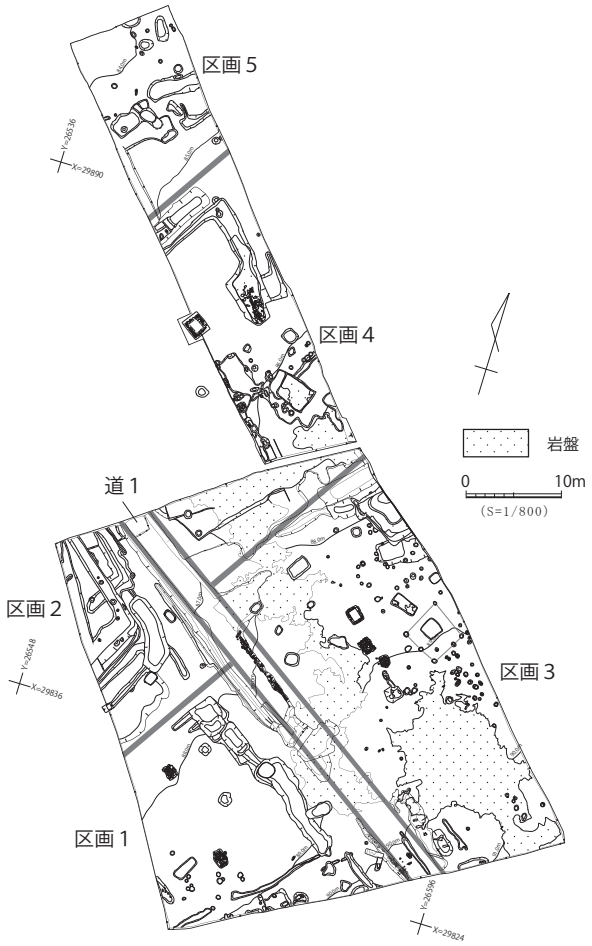


第 11 図　Ａ地区壁面図

と薄く南東側ではすぐに地山となるが、標高が低い北西側につれて 50cm に及ぶところもある。Ⅱ層除去後に遺構が検出されるが、Ａ地区ではその埋土や出土遺物はⅡ層と大きく変わらない（第 11 図、図版 11）。

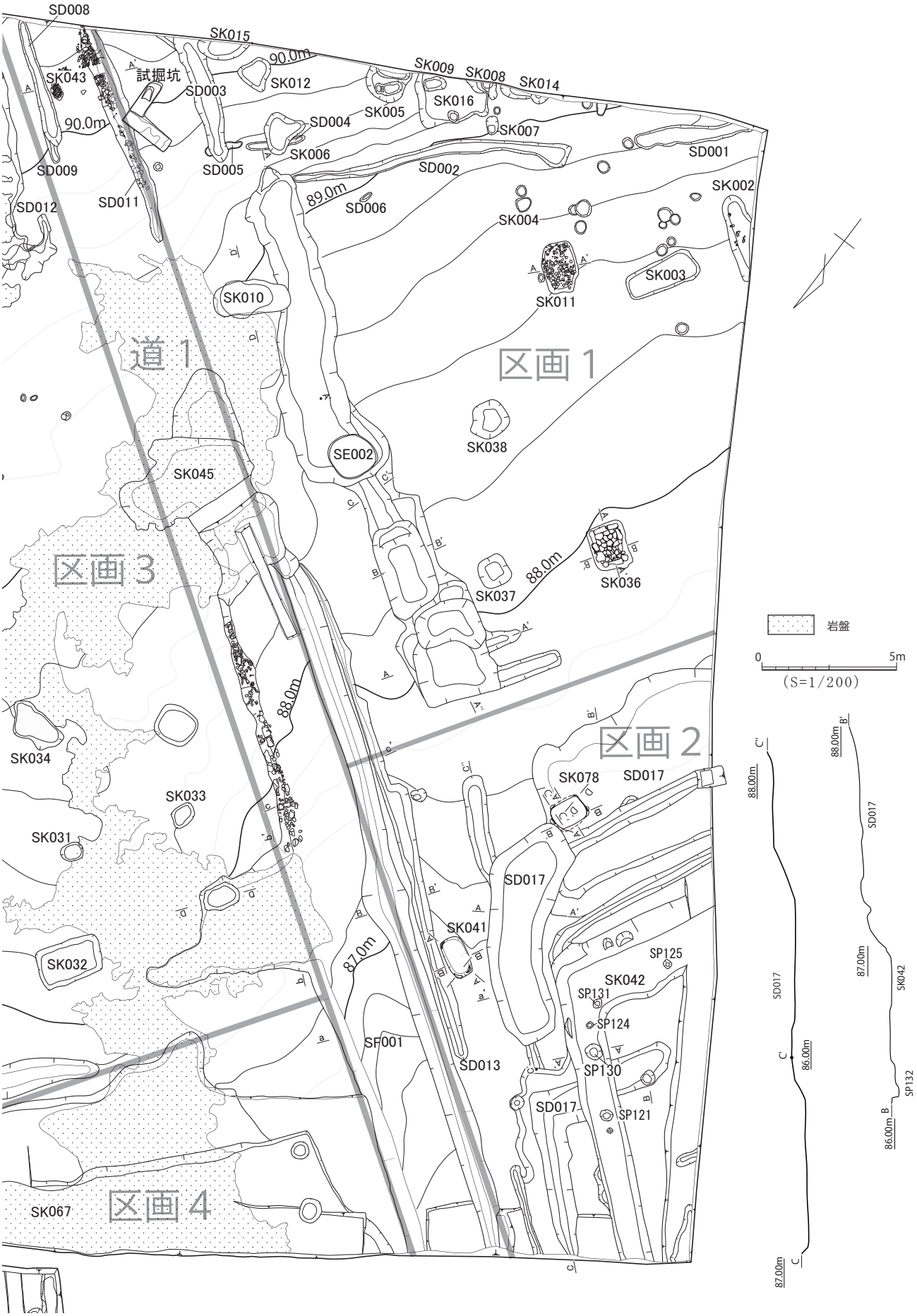
道１　調査時から道としたＳＦ 001 は、Ａ地区の南西に北より西 50°の方向で延びる幅３～４ｍ、長さ 24 ｍ以上で調査区外にも続くものと思われ、戦前の空中写真の区画と合致している。路面には明確な地業は見られないが平坦で区画１・３付近では両端が 20 ～ 30cm 掘り下げられており、北端には部分的に拳大の礫を貼石状に配されていることから、道と考えてよいと思われる。

この道の南端では幅 50 ～ 60cm、最深 60cm の側溝が見られ、その東端には側溝から下るようにＳＫ 045 は長さ８ｍ、幅４ｍ、最深１ｍの北に張り出しをもつ長方形の土坑が見られる。第５章で検討するように、これと同様な溝がＢ地区のＳＤ 006、Ｃ地区ＳＤ 003 で見られ、また部分的に幅が広くなったり、微妙に蛇行したりに、底面に段差が見られる特徴があり、沖縄戦時の日本軍による交通壕ではないかと考えられる（第 13・14 図、図版 12・13）。

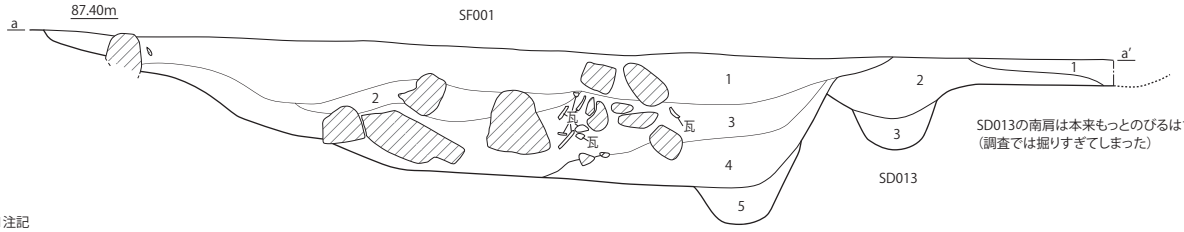


第 12 図　Ａ地区近代遺構区画割

図版 12　区画１～３（東より）

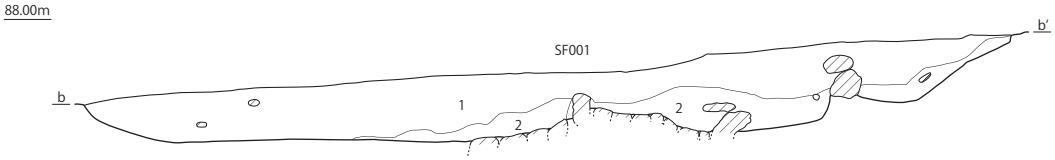


第 13 図　区画１・２遺構図

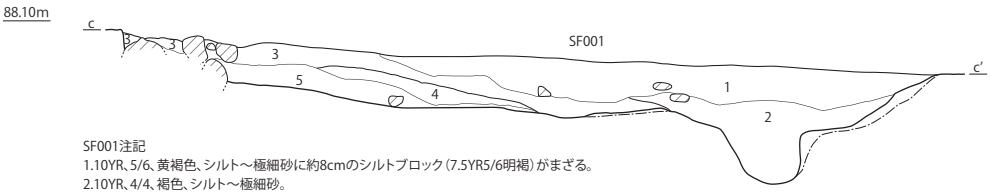


SF001注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に3～5cmのシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が点在する
2.10YR5/6 黄褐色、シルトに約5cm大のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。粘性ややあり。
3.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂。瓦片か石灰岩が多く入る。
4.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂。2層より暗い。
5.10YR 4/6褐色、シルト～極細砂に、2～3cmのシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が少量混ざる。
粘性ややあり、1層より暗い。

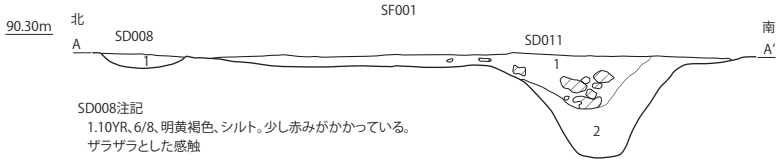
SD013注記
1.10YR5/8 黄褐色に3～5cmにシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）がまざる。
2.10YR5/6 黄褐色に1～2mmのシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）がわずかに見られる。
3.SD013の1層と同じ土色だが1層に比べやや明るい。3～5mmのシルトブロック（1層に同じ）がまざる。



SF001注記
1.10YR、4/4、褐色、シルト～極細砂。SF001の2層より明るい土色。
2.10YR、5/8、黄褐色、シルト～極細砂に、約3～5cmのシルトブロック（7.5YR5/6明褐）がまざる。

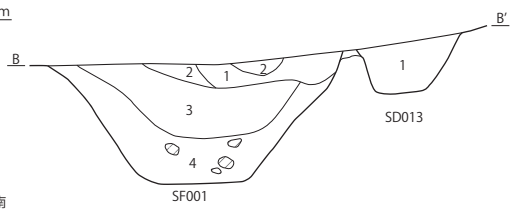


SF001注記
1.10YR、5/6、黄褐色、シルト～極細砂に約8cmのシルトブロック（7.5YR5/6明褐）がまざる。
2.10YR、4/4、褐色、シルト～極細砂。
3.10YR、4/4、褐色、シルト～極細砂。2層より明るい土色。
4.10YR、5/8、黄褐色、シルト～極細砂に、約3～5cmのシルトブロック（7.5YR5/6明褐）がまざる。
5.10YR、4/6、褐色、シルト～極細砂。
（粘性はすべての層になし）



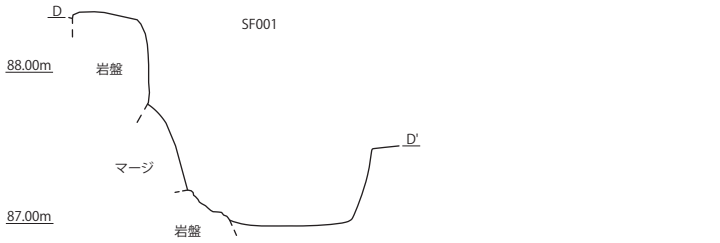
SD008注記
1.10YR、6/8、明黄褐色、シルト。少し赤みがかかっている。
ザラザラとした感触

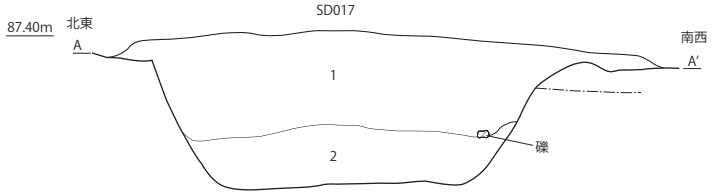
SD011注記
1.10YR、4/4、褐色、シルト～極細砂、5cm～10cm台の礫が入る。
2.10YR、4/6、褐色、シルト～極細砂にシルトブロック(7.5YR5/6、明褐色)が混ざる。



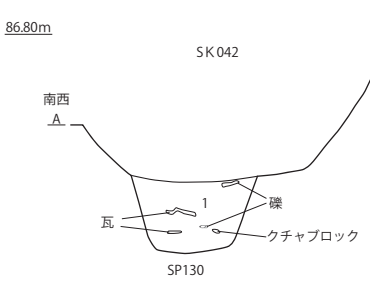
SF001注記
1.SD017-1と同じ。
2.7.5YR5/6 明褐色、シルト。
3.1と同じに焼土、炭化物が散見される。
4.SD017-2と同じ。

SD013注記
1.SP130と同じ。

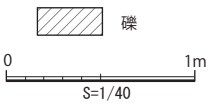




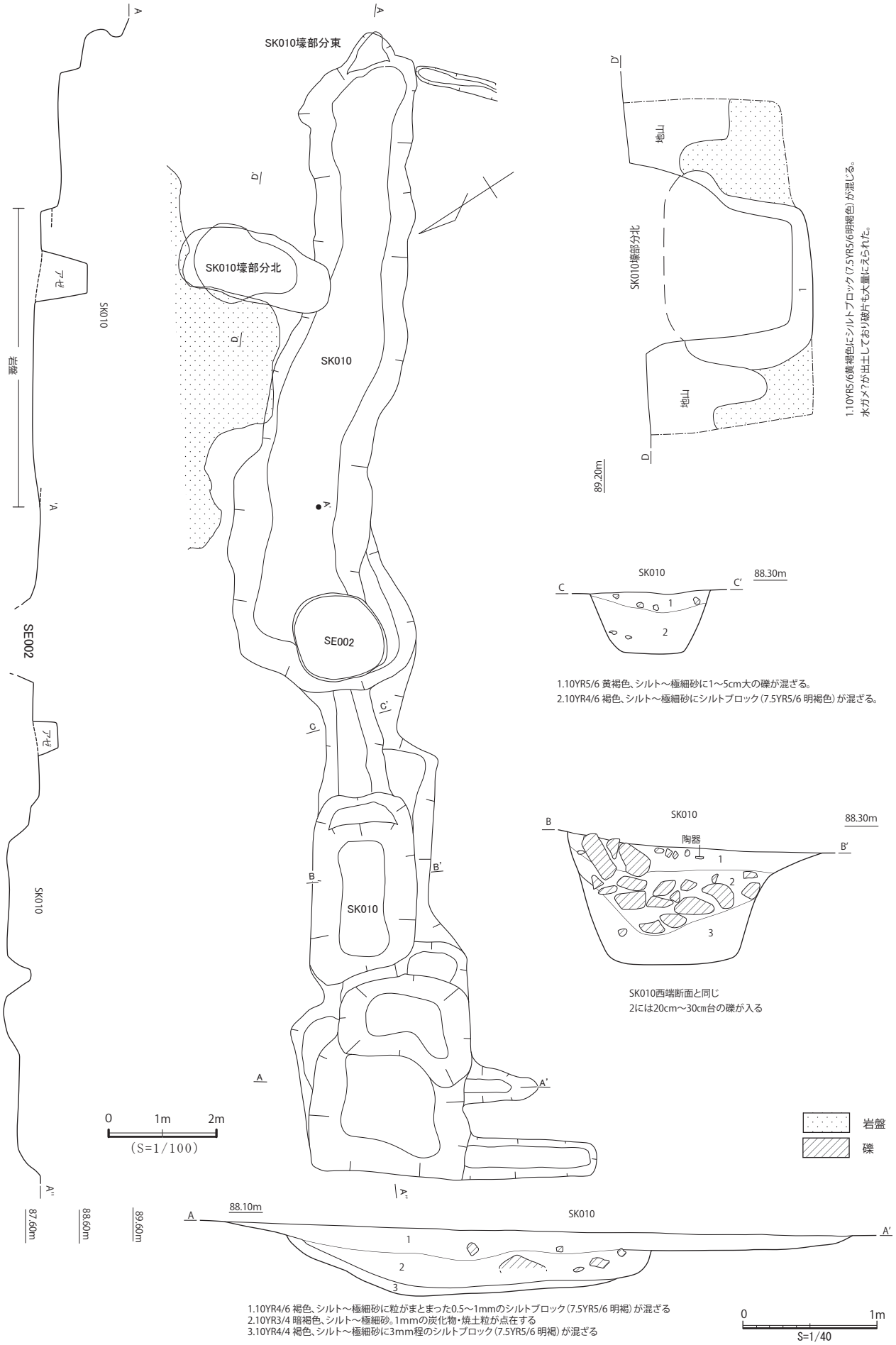
SD017注記
1.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂。2mm以下の焼土粒・炭化粒が散見される。
2.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂。
（どちらも粘性はなし）



1.Hue10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂に3～5cm大の
シルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）がまざる



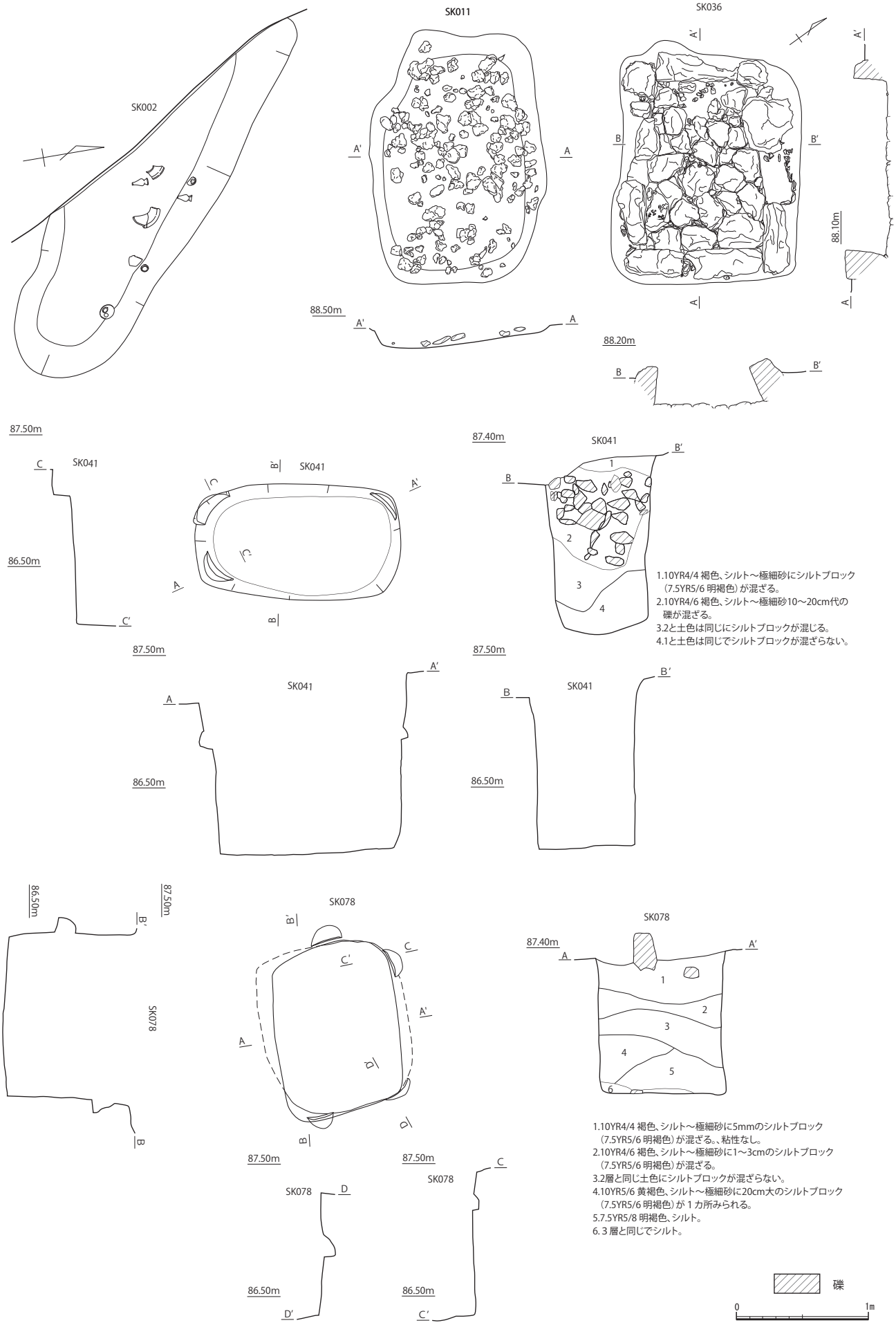
第 14 図　道 1 （ＳＦ 001）ほか断面図



第 15 図　区画１ＳＫ 010 遺構図

図版 13　道１（上…西より　下左…断面　下右…側溝部）

図版 14　区画１ＳＫ 010（左…東より　上右…壕部分断面　下右…切石出土状況）



第 16 図　区画１ＳＫ 002・011・036、区画２ＳＫ 041・078 遺構図

このように考えると、SK045 付近は岩盤が露出しているが、その東方には南端がＳＤ011、北端にはＳＤ008 という同様の溝が見られ、これらも道の側溝または交通壕の可能性がある。

区画１　北はＳＫ010、西はＳＤ017、東はやや浅いがＳＤ001 で区画されており、内部にはＳＫ002・011・036 などの土坑が点在している一方、明確な柱穴と言えるピットは少なかった。

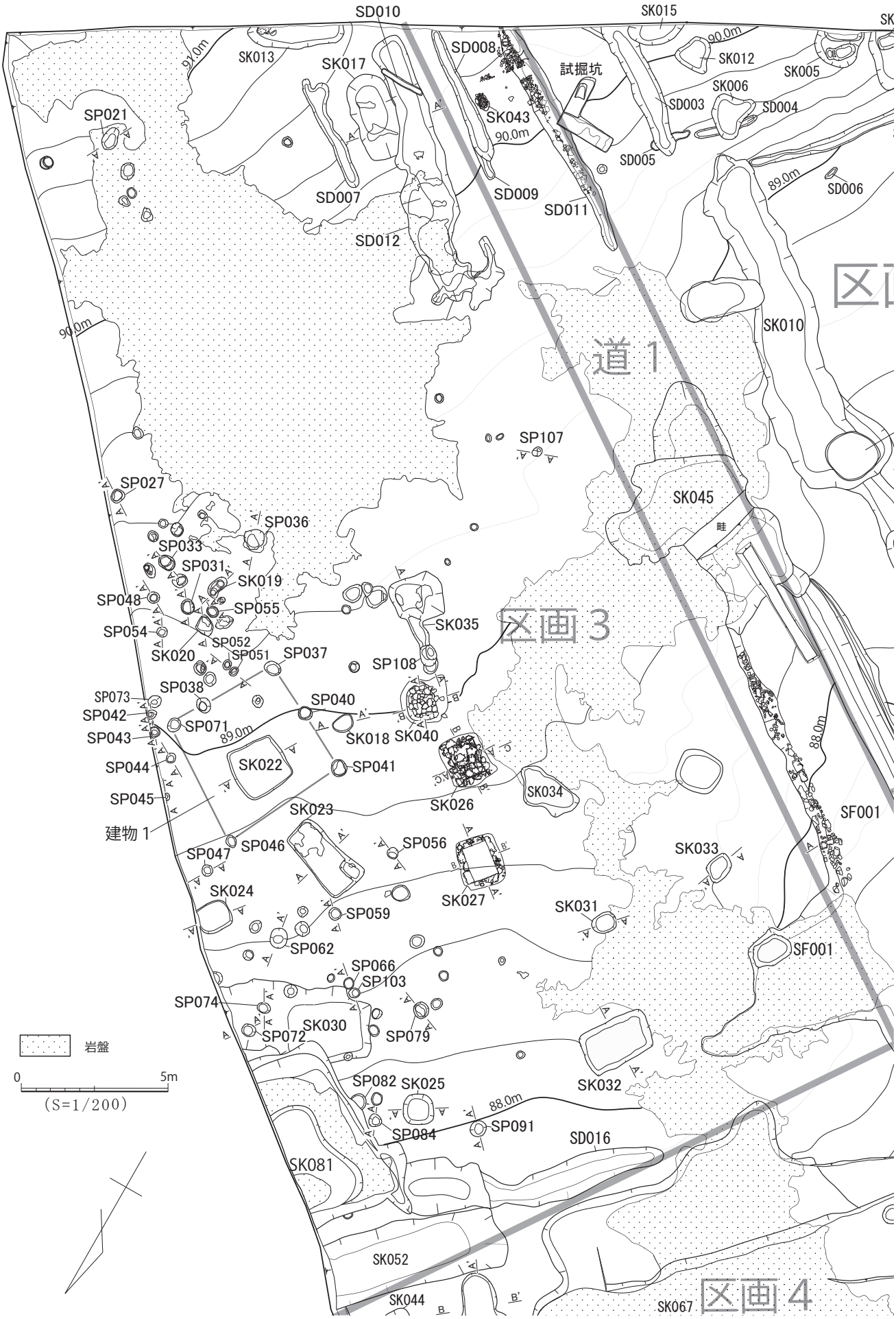
ＳＫ010 は検出当初は西端側の土坑として認識していたがその埋土の範囲が広がり、最終的には幅４～５ｍ、長さ 40 ｍの溝と捉えられた。ただ、西側には底面に幾つかの段があること、中央部には深さ３ｍ以上落ち込むので調査を中断した後に井戸と判断したＳＥ002、東側と北側には幅・高さ１ｍほどと思われる壕状になった部分があるなど、沖縄戦時まで幾つかの改変があったことが想定される。出土遺物には沖縄産陶器壺やガラス瓶などが見られるが、埋土の違いが判断できず、SK010 として一括で取り上げてしまっている。また、フール（豚便所）の便槽部などの切石も見られた。なお、ＳＥ002 は重機により３ｍ前後まで掘ったが底面には達せず、石積みなども確認できなかった（第 15 図、図版 14）。

他に、ＳＫ002 は沖縄産陶器の瓶類が口縁を欠いた状況で出土、ＳＫ011 は 1.2 × 1.8 ｍの長方形で拳大の礫が集中、ＳＫ036 は内法 1.2 × 0.8 ｍの石囲いを設け床面の石敷きには印部石破片を転用した土坑などが検出された（第 16 図、図版 15）。

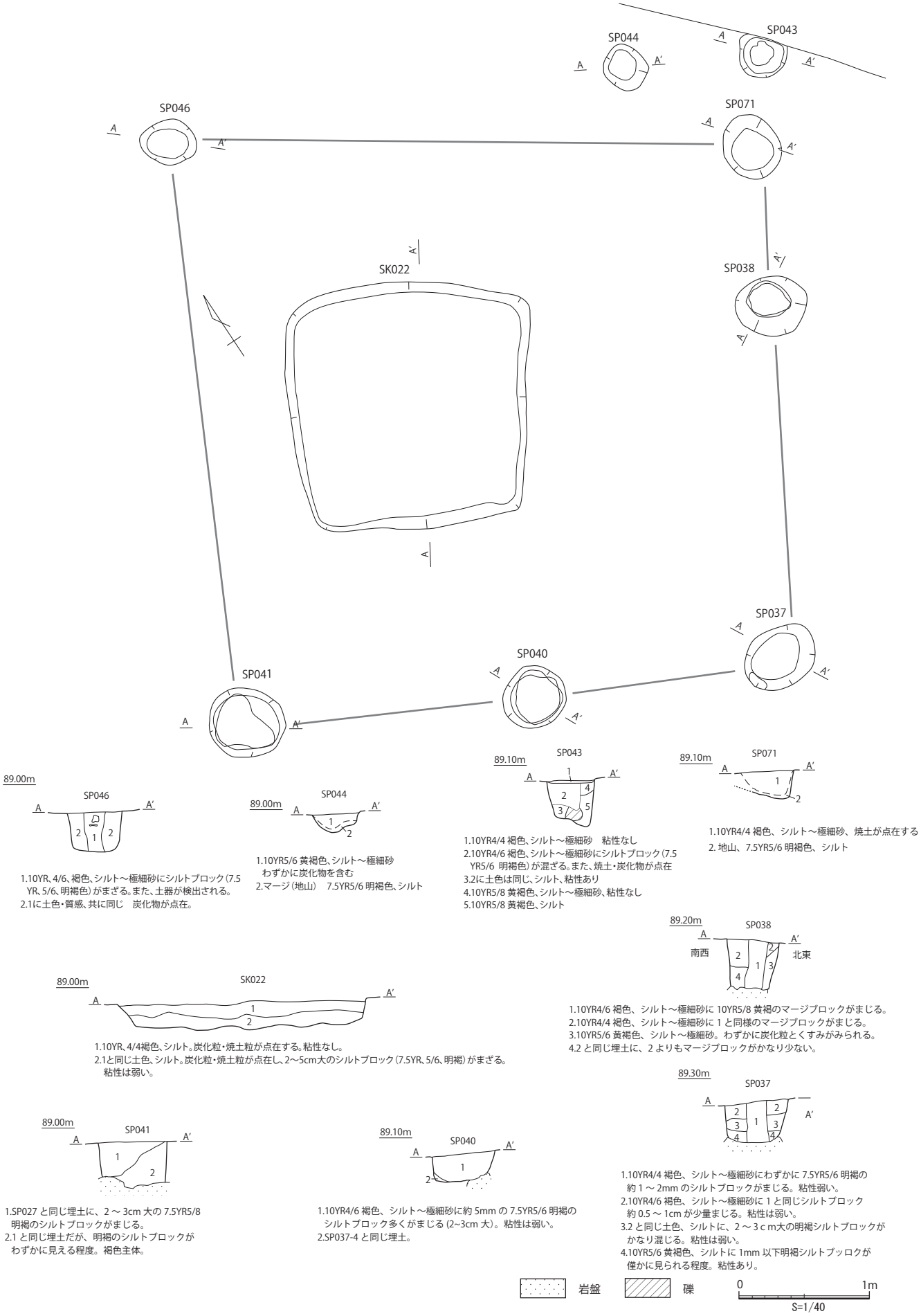
区画２　北は道１、東は区画２に接し、ＳＤ017・ＳＫ042 が区画溝と考えられる。区画内の状況は調査外のため不明であるが、区画東隅に位置するＳＫ041・078 は 1.2 × 0.8 ｍで楕円もしくは方形のプラ

図版 15　区画１ＳＫ036（左…北より　右…印部石転用状況）

図版 16　区画２ＳＫ041（左）**・ＳＫ078**（右）


SD010
SK015
SK013
SK017
SD008
試掘坑
SK012
SK005
SK006
SD003
SD004
SK043
SD005
SD006
SD007
SD009
SD011
SD012
SK010
道1
区画3
区画4
SP107
SP027
SK045
SP036
SP033
SP031
SK019
SP048
SP055
SP054
SK035
SP052
SK020
SP051
SP037
SP108
SP038
SP073
SP040
SP042
SP071
SP043
SK018
SK040
SP044
SK022
SP041
SP045
SK034
SK026
SK023
建物1
SP047
SP046
SP056
SK033
SF001
SK024
SK027
SP059
SK031
SP062
SP066
SP103
SP074
SK030
SP072
SP079
SK032
SP082
SK025
SP084
SP091
SD016
SK081
SK052
SK044
SK067
岩盤
0
5m
(S=1/200)

第 17 図　区画３遺構図



第 18 図　区画３建物１遺構図

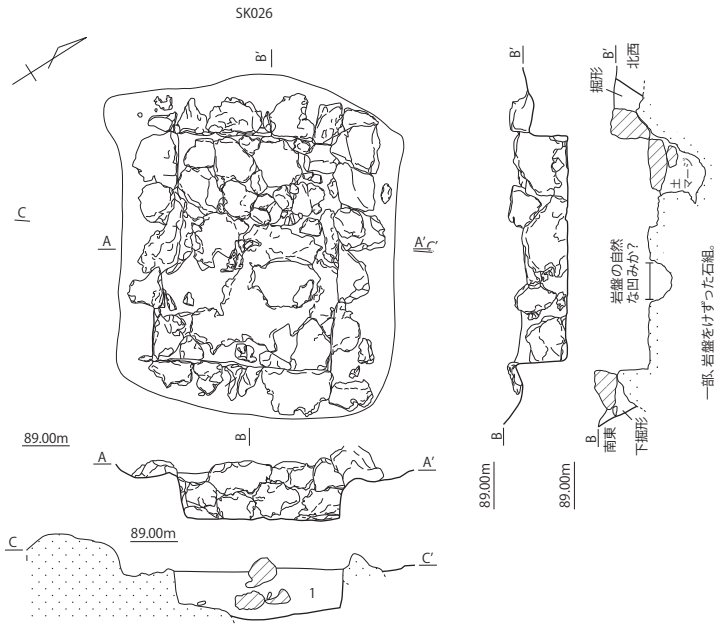
ンで、深さ 1.0 ～ 1.2 mの土坑である。これらには壁面の中上位に３・４ヶ所の幅 0.2、高 0.1 m、奥行き 0.05 mの窪みが見られ、第５章で検討するように日本軍によるいわゆるタコツボの足掛かりと考えられる（第 16 図、図版 16）。

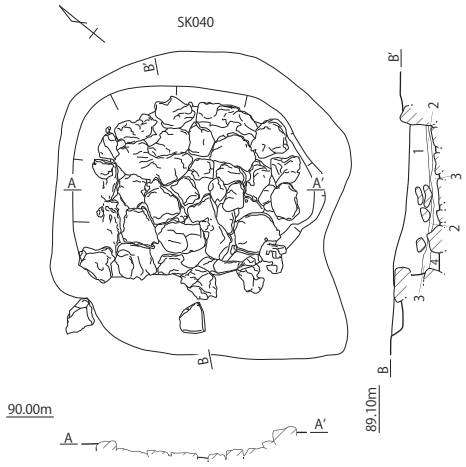
区画３　南は道１、西はＳＫ 067 が段なり区画４に接し、東は戦前の空中写真では岩盤が露出した範囲あたりと考えられ、北は不明であるが長さ 20 ～ 30 mの区画と推定される。この内部には建物プランも含む柱穴と考えられるピット群と長さ１～２mの土坑が多く確認されている（第 17 図）。

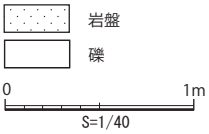
建物１は、区画３内でピットが集中した範囲で確認されている。検討の余地はあるが、長さ 4.2 m方形プランの掘立柱建物と考えられる。このプラン内には長さ 1.6 ～ 1.8 mの方形、深さ 20cm の土坑であるＳＫ 022 が見られるが、位置的には何らかの関連があると見られるが、断定はできない。この建物１周辺には、同様の柱穴と考えられるピットが集中し、遺物としては近世陶磁器も比較的多く見られる（第 53 表）。また、南側には石囲いを有する土坑が集中するが、ＳＫ 040 が内法 0.8 m四方で石も小ぶり、ＳＫ 026・027 は内法 0.8 × 1.2 mと共通している（第 19 図、図版 18）。

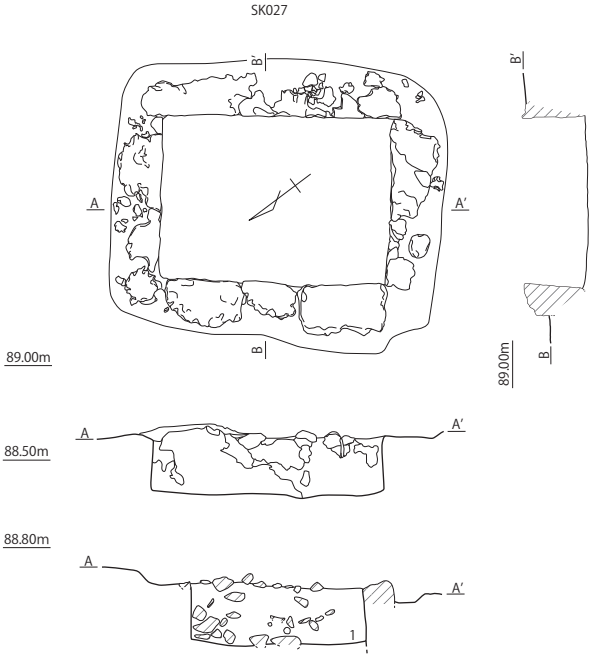
他に特徴的な土坑を挙げる。その一つとして約１×２mで長方形のタイプがあり、ＳＫ 023 は礫が集

図版 17　区画３建物１（上）**・柱穴**（下左よりＳＰ 038・041・043・046）



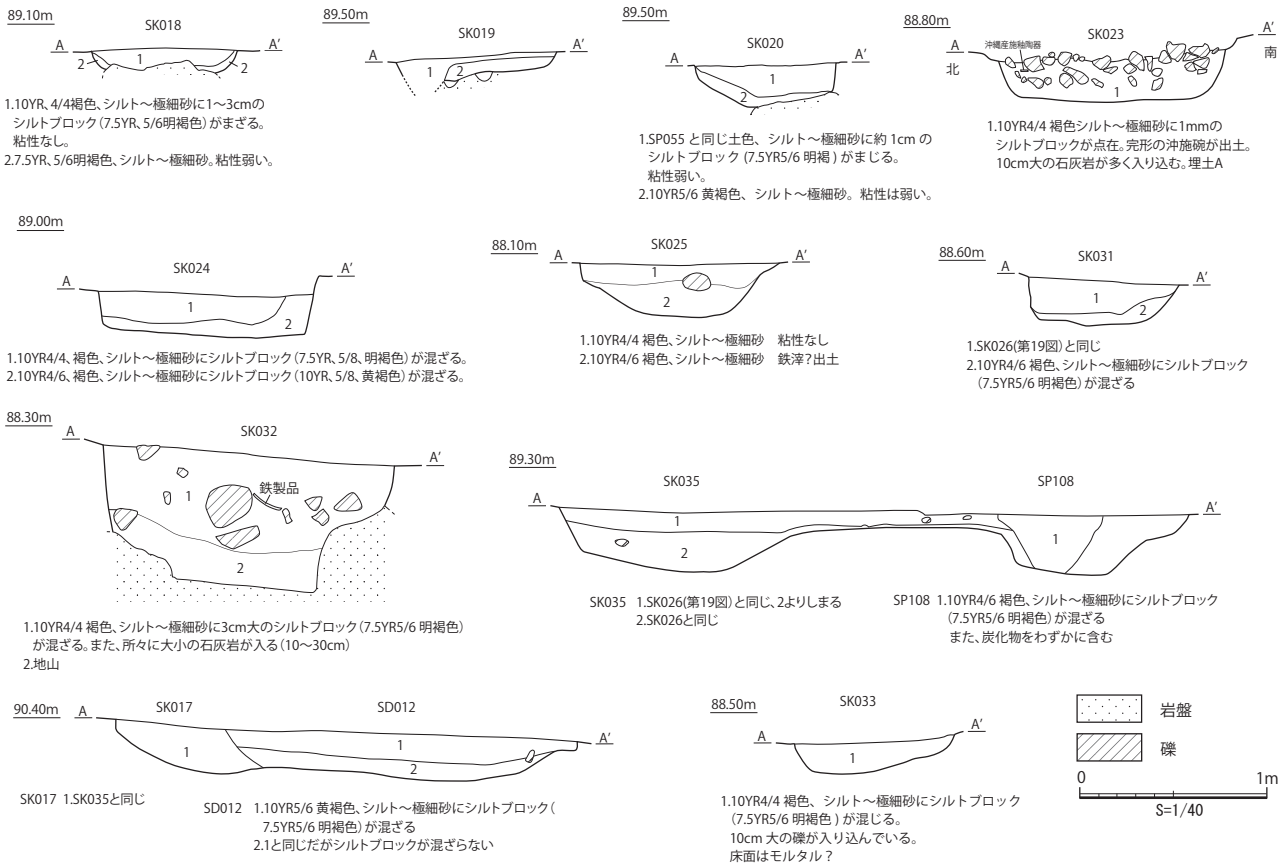






第 19 図　区画３ＳＫ 026・027・040 遺構図

図版 18　区画３ＳＫ 026（左上）・ＳＫ 027（右下）・ＳＫ 040（右上）



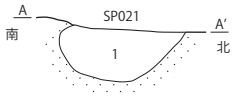
第 20 図　区画３ＳＫ 018 ほか断面図

図版 19　区画３ＳＫ 023（左…礫検出状況　中…ガラス瓶出土状況　下…沖縄産陶器出土状況）

図版 20　区画３ＳＫ 024 断面（東より）

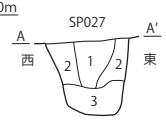
図版 21　区画３ＳＫ 032 断面（北より）

91.00m



1.10YR、4/6、褐色、シルト～極細砂。粘性なし。

89.60m

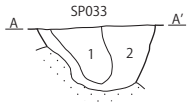


1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に 7.5YR5/8 明褐のシルトブロックがまじる。
2.10YR5/8 黄褐色、シルト～極細砂に 1 がわずかにまじる。
3.10YR4/3 にぶい黄褐色、シルトに 7.5YR5/8 明褐のシルトブロックがまじる。

89.50m

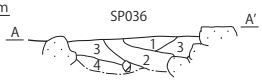
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（10YR5/8 黄褐色）が混ざる
2.1に土色・質感ともに同じだが、シルトブロックが入らない

89.50m



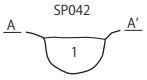
1.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に 10YR5/6 明褐のシルトブロックがまじる (2~3cm) しまり、粘性ともに弱い。
2.10YR5/6 黄褐色、シルト。1 と比べ、しまり、粘性ともにあり。

89.50m



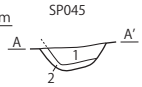
1.10YR、5/6、黄褐色、シルト～極細砂、粘性なし。
2.SK018の1と同じに、焼土片を含む。
3.10YR、4/4、褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR、明褐色）がまざる。
4.10YR、4/4、褐色、シルト～極細砂1cm大の礫がまざる。

89.10m



1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（10YR5/8 黄褐色）が混じる

89.00m

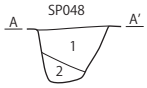


1.10YR4/6 褐色にシルトブロック（10YR5/8 黄褐色）が混ざる
2.地山

88.90m

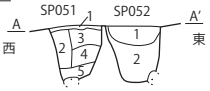
1.10YR4/4 黄褐色、極細砂。1 ～ 3mm 大の 7.5YR5/6 明褐のマージブロックがまじる。
2.1 と同じ埋土に、1 と同じ色の 1 ～ 2cm 大のマージブロックが 30%の割合でまじる。

89.50m



1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂、焼土が点在
2.10YR5/8 黄褐色、シルト～極細砂、粘性あり

89.30m



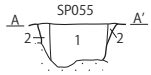
SP051 1.SP072-1と同じ
2.10YR4/6 褐色シルト～極細砂　粘性あり
3.土色は2と同じ。炭化物がわずかに混ざる
4.SP074-3と同じ
5.SP074-3と土色は同じだがシルト

SP052 1.10YR 4/6褐色、シルト～極細砂、焼土が点在
2.10YR 4/6褐色、シルト～極細砂　粘性あり

89.50m

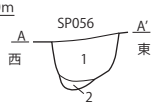
1.SP055 と同じ土色。シルト～極細砂に約 5mm のシルトブロック (7.5YR5/6 明褐) がまじる。粘性は弱い。
2.10YR5/6 黄褐色、シルトに 2 ～ 3cm 大のシルトブロック (1 と同じ色) がまじる。粘性あり。

89.50m



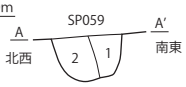
1.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に 1 ～ 2mm のシルトブロック (7.5YR5/6 明褐) がまじる。粘性弱い。
2.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に 1 ～ 2mm のシルトブロック (1 と同じ) がわずかにまじる。粘性弱い。

88.80m



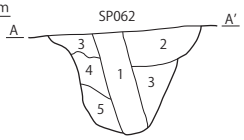
1.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂　粘性なし
2.7.5YR5/6 明褐色、シルト（地山）

88.70m



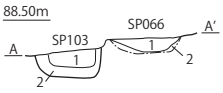
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混じる
2.10YR4/6 褐色、シルトから極細砂　粘性あり

88.70m



1.SP021-1 と同じ埋土。2 ～ 3mm 大の 7.5YR 明褐のシルトブロックが点在する。
2.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に 2 ～ 3cm 大の 1 と同じシルトブロックが多くまじる。
3.7.5YR5/6 明褐色、シルト～極細砂に 10YR4/6 褐色のシルトブロックがまじる。明褐色が主体。
4.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂。わずかに 7.5YR 明褐のシルトブロックがまじる。
5.10YR4/6 褐色、シルト。わずかに 4 の土がまじる。

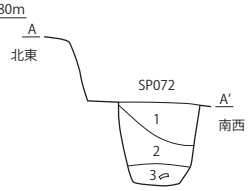
88.50m



SP103
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂、焼土と炭化物を含む
2.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる

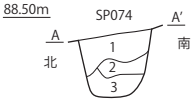
SP066
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる
2. 地山、7.5YR5/8 明褐色、シルト

88.80m



1.10YR4/4 褐色シルトから極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）と焼土・炭化物が点在
2.10YR4/6 褐色シルトから極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混じる
3.土色は2と同じ、沖縄産無釉陶器？が確認される

88.50m

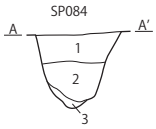


1.SP072-1と同じ
2.SP072-2と同じ
3.SP072-3と同じだが、遺物の確認なし

88.40m

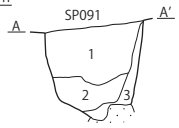
1.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる
2.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂　粘性なし

88.10m



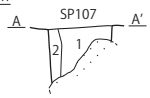
1.SK025-1と同じ
2.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる
3.地山、10YR5/8 黄褐色、シルト

88.10m

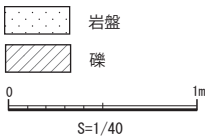


1.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂、沖縄産無釉陶器？出土
2.10YR5/8 黄褐色、シルト～極細砂、粘性あり
3.7.5YR5/6 明褐色、シルト～極細砂、粘性なし

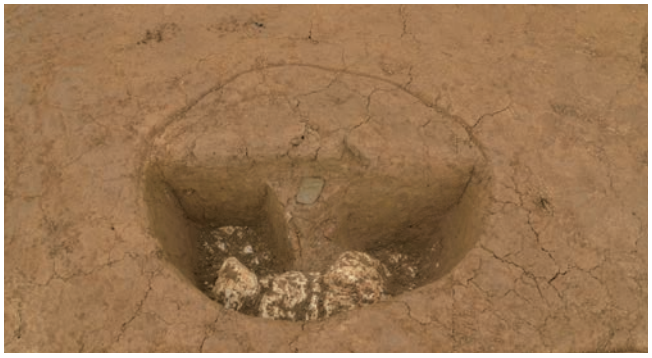
89.30m



1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる
2.10YR5/8 黄褐色、シルト～極細砂、粘性あり

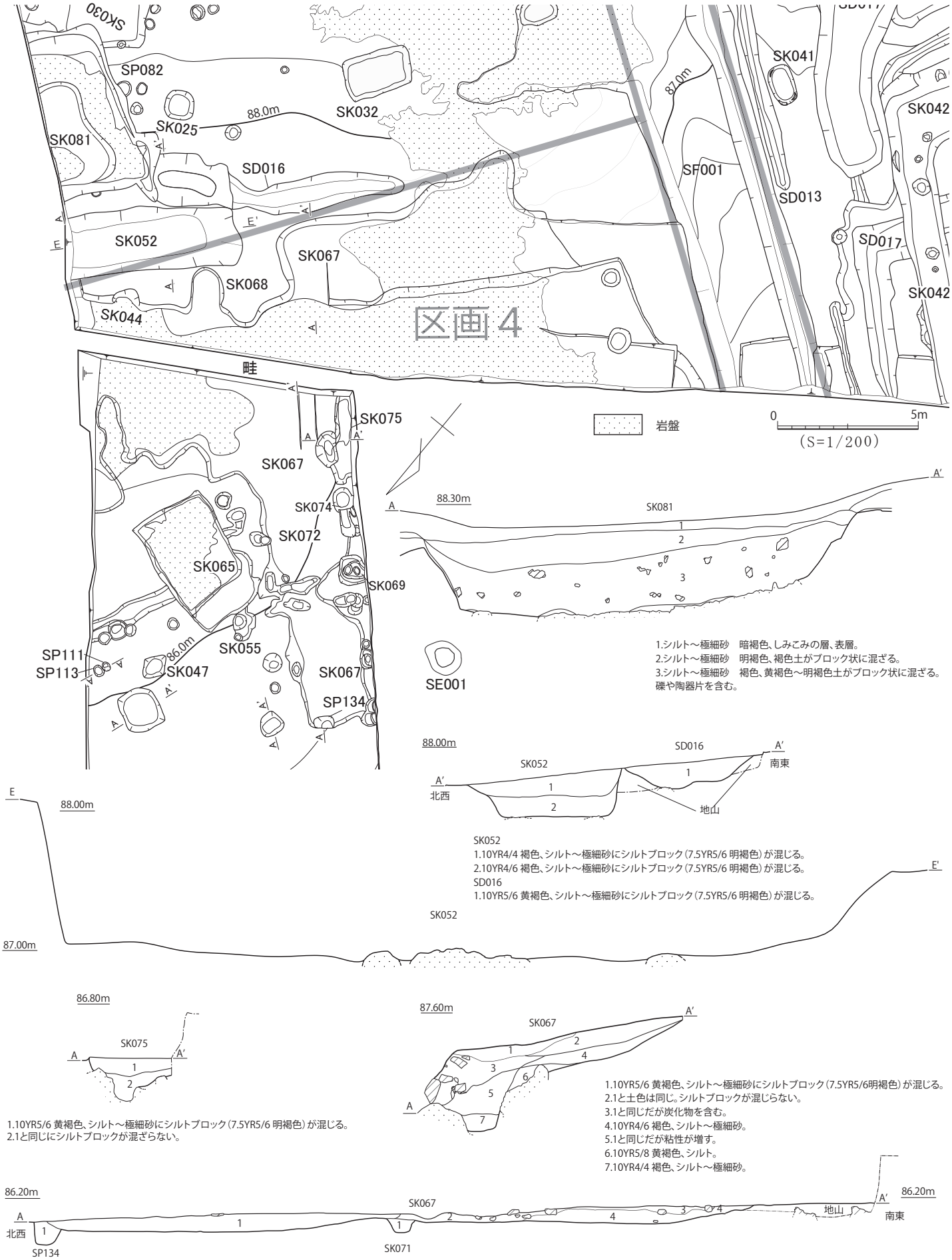


第 21 図　区画３　ＳＰ 021 ほか断面図



図版 22　区画３ＳＰ 031 石斧出土状況

図版 23　区画３ＳＰ 062 断面



第 22 図　区画３・４遺構図

図版 26　区画４・５空中写真

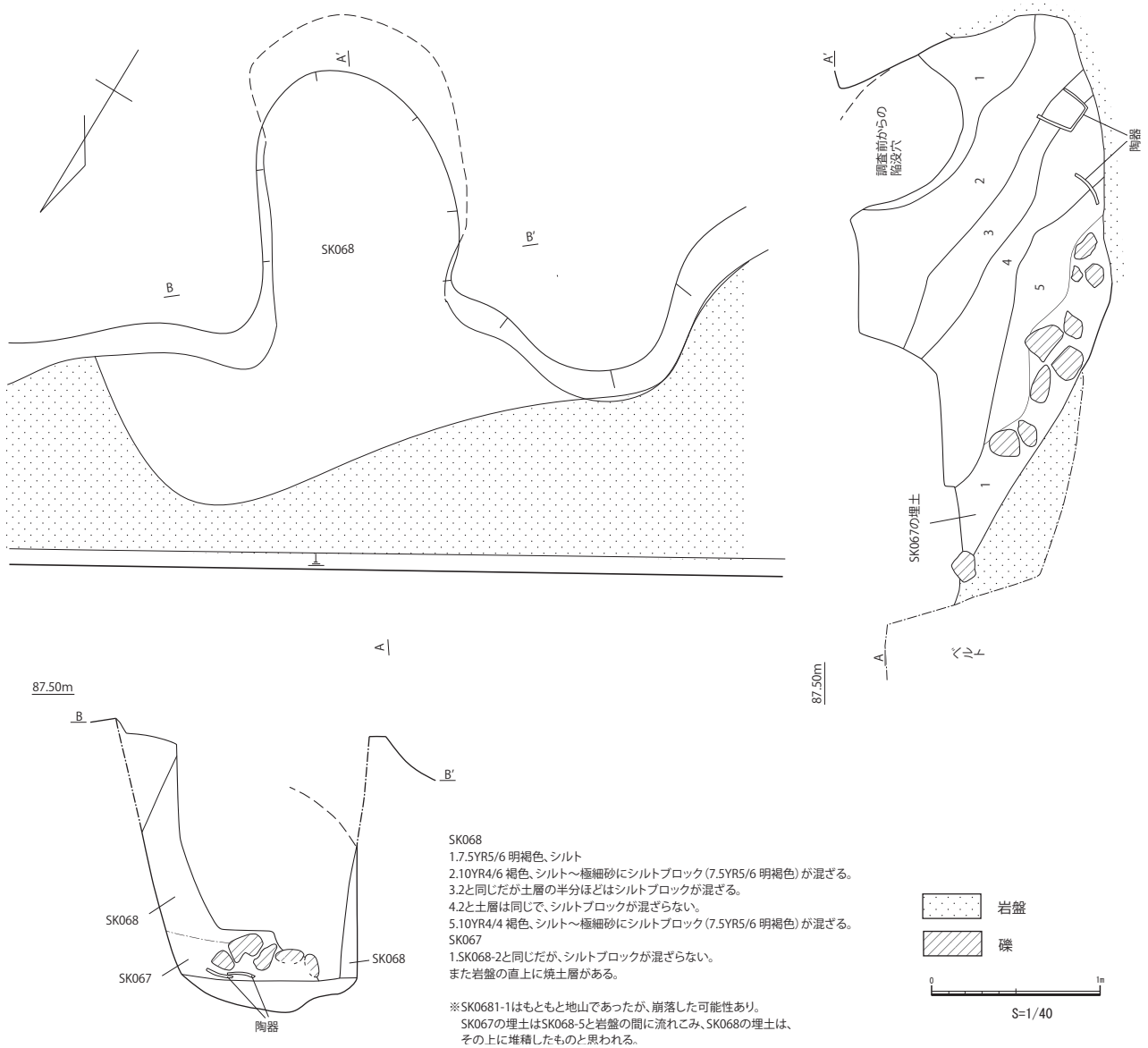
図版 24　区画３ＳＫ 052（南より）

図版 25　区画３ＳＫ 081（南より）

中し、ＳＫ 032 は 60cm と深めのものなどがある。それより長さが６ｍ以上、深さが 60cm 以上のものとしてＳＫ 052・081 があり、第５章で述べるようにその規模から日本軍による陣地に関連する可能性がある（第 20 ～ 22 図、図版 19 ～ 25）。

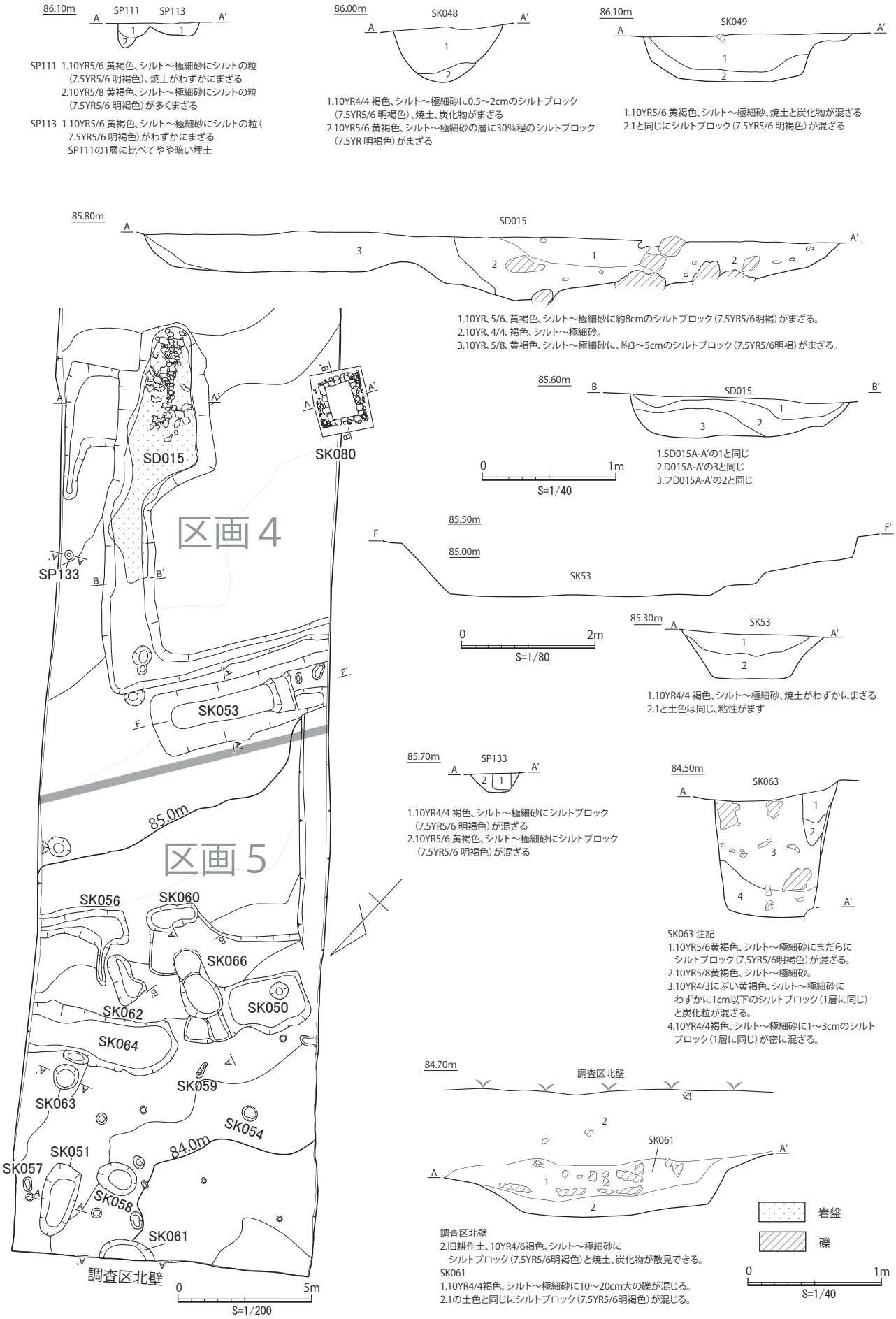
区画４　東は区画３、南は道１、西は幾つか候補があるがＳＫ 053 により区画５と接し、長さは約 30 ｍと推定される。ＳＤ 015 が北側の区画溝の可能性もあるが、調査区の都合上確定できない。

ＳＫ 053 は長さ６ｍ以上で、先述の区画３のＳＫ 052・081 と同様な形態・規模である。区画３との境界にＳＫ 068 が位置し、奥がオーバーハングしており高さ・幅 1.2 ｍ、奥行き 2.0 ｍ、西に開口する壕と考えられ、沖縄産陶器壺が出土している。区画内の遺構は南壁近くにピット群が集中する他、ＳＫ 080 は内法 1.0 × 1.2 ｍで壁面はモルタルを塗った石囲い土坑、調査区外だが石積みの井戸 SE001 がある（第 22 ～ 25 図、

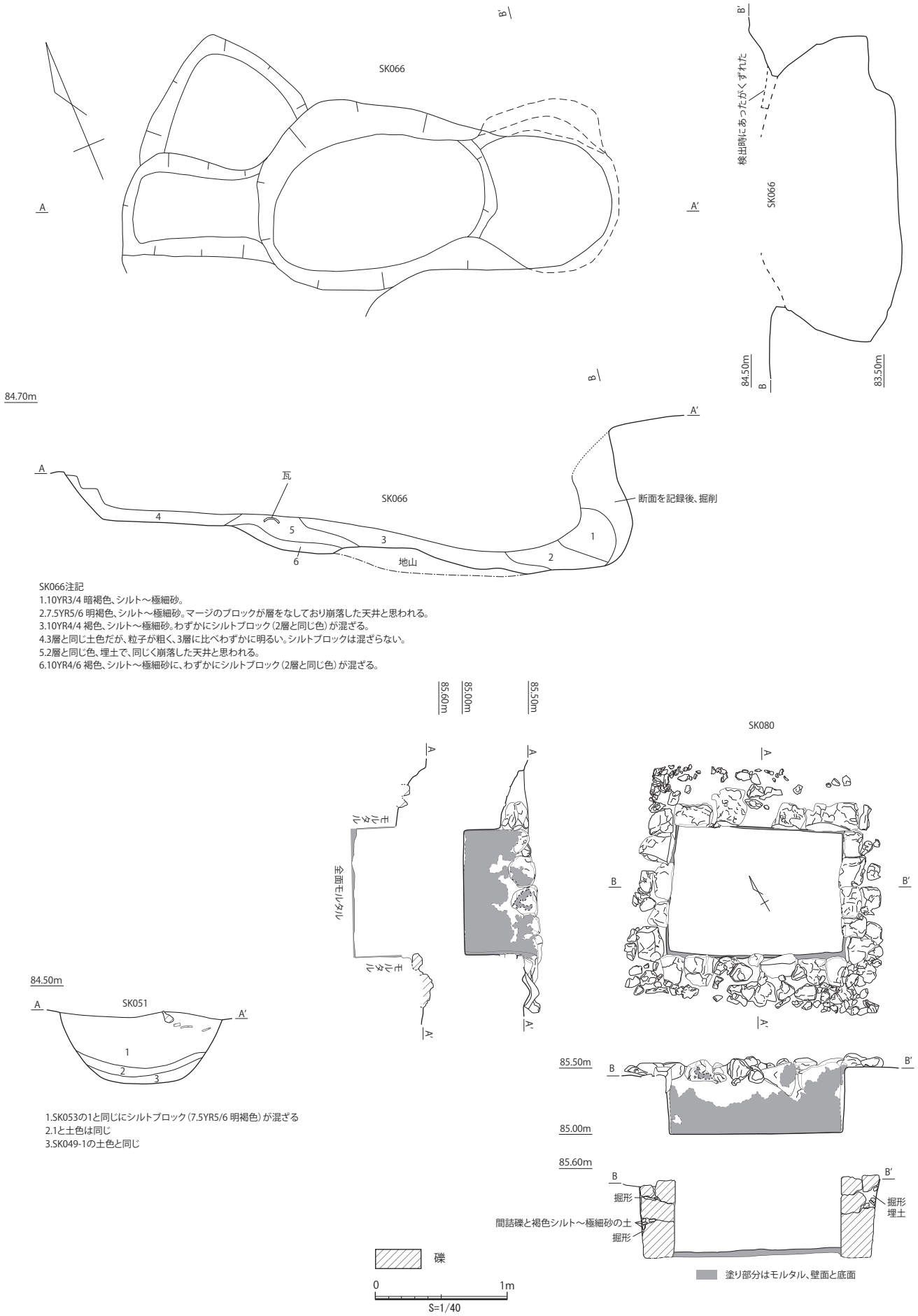


第 23 図　区画４ＳＫ 068 遺構図

図版 27　区画４ＳＫ 068（左…断面　右…遺物出土状況　共に西より）



第 24 図　区画４・５遺構図



1.SK053の1と同じにシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる
2.1と土色は同じ
3.SK049-1の土色と同じ

第 25 図　区画４・５　ＳＫ 066･080 遺構図

図版 26・27・30・31）。

区画５　東が区画４に接するが、その境界はＳＫ 053 のほかＳＫ 050・064 の可能性もある。大部分は調査区外となるが、西側にピットや土坑が集中していく傾向が窺える。

境界部にＳＫ 066 が位置し、本来は東側に天井を有した幅 1.2 m、高さ 1.0 mの部屋がある壕で、入口部もあわせると全長 4.0 mを測り、沖縄産陶器壺などが出土していた。

その他、ＳＫ 063 は径 0.8 mの円形、深さ 1.0 m を測るものでいわゆるタコツボの可能性があるものなどがある（第 24・25 図、図版 28・29）。

図版 28　区画５ＳＫ 066（西より）

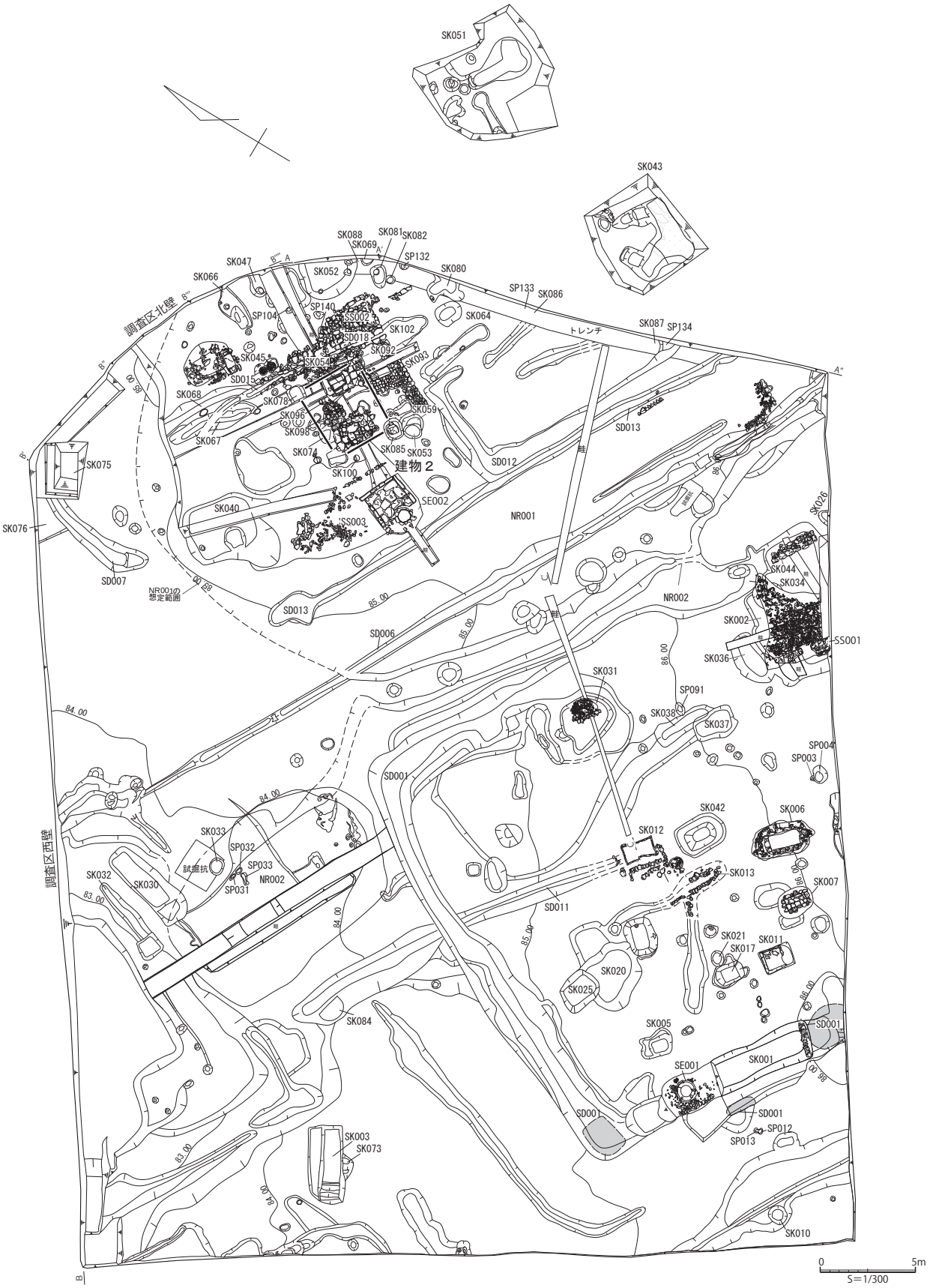
図版 29　区画５ＳＫ 063（北より）

図版 30　区画４ＳＫ 053（北より）

図版 31　区画４ＳＫ 080（左…北より　右…断ち割り状況）

２．Ｂ地区

概要　グスク時代以前に遡りいわゆる植栽痕の可能性があるＮＲ 002 と、近世・近代の遺構としては区画３つが確認できた。後者にはＡ地区と同様に井戸や石囲い土坑、壕の他、石敷きや石柱を用いた建物や、また瓦が多く出土した土坑などが見られる（第 26 図、図版 35）。



第 26 図　Ｂ地区全体平面図

層序　Ⅰ層はＡ地区と同様と 10cm 以下と薄く、立会による表土剥ぎで多くは除去した。Ⅱ層は東側では 20cm 前後と薄く、西側に向かって全体的に厚く 1.5 mに及んだところもある。北東側と南西側に迫地が２ヶ所あり、戦後も含んだ近世～近代の遺物が多く出土し、その前者をＮＲ 001（図版 32）、後者をＮＲ 002（図版 33）とした。ＮＲ 001 の範囲は後述する区画８に当り、Ⅱ層を除去すると石敷など多くの近世～近代の遺構が見られ、部分的に下層遺構も検出できたが、遺物での明確な時期差は確認できなかった（図版 34）。一方のＮＲ 002 の堆積土は東側にも部分的に見られその切り合いから古く、区画成立以前と考えられる。Ⅲ層はＮＲ 002 下層が相当するが、遺物は出土しなかった（第 27 図）。

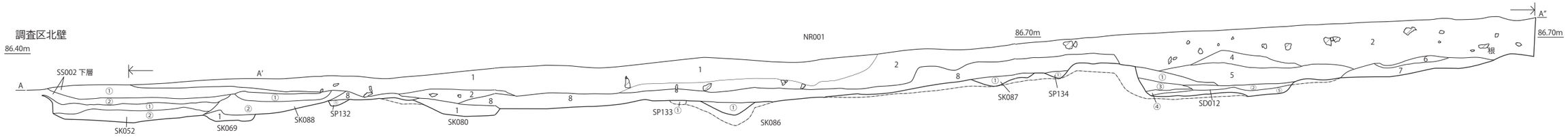
図版 32　Ｂ地区北側壁面１（ＮＲ 001 埋土）

図版 33　Ｂ地区西側壁面（ＮＲ 002 上層）

図版 34　Ｂ地区北側壁面２（ＳＳ 002 下層）

図版 35　Ｂ地区空中写真

調査区北壁



調査区北壁注記
NR001
1.10YR4/6褐色シルト～極細砂に5cm以下のシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が混ざる。
約20～3ｃｍ代の石灰岩礫も少量混ざる。
2.10YR4/4褐色シルト～極細砂に30cm～5cm代の石灰岩礫が1層と比べ多く入る。
シルトブロックは混ざらない。瓦・ガラス片もみられる。
4.10YR4/6褐色シルト～極細砂に3cm以下のシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が混ざる。一層に比べやや明るい。
5.10YR3/4暗褐色シルト～極細砂に1cm以下のシルト粒(7.5YR5/6明褐色)が少量混ざる。
6.10YR3/3暗褐色シルト～極細砂にしまりが悪く、かなりホロホロとしている。
7.5と同じ土色に5～10cm大の石灰岩礫が層全体に密に入る。
8.10YR5/6 黄褐色シルト～極細砂に 1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) が比較的多く混ざる。
（SS002 下層に相当)

SS002 下層注記
①.10YR4/4 褐色シルト～極細砂に 2cm 代のシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色) と焼土粒が入り、
1cm 代の炭化物が散見できる。
②.10YR4/6 褐色シルト～極細砂に 5cm ～ 2cm 程のシルトブロックが混ざる。

SK052 注記
①.10YR3/3 暗褐色シルト～極細砂に 1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) が散見できる。
②.10YR4/4 褐色シルト～極細砂に 1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) が多く入る。

SK069 注記
1.10YR4/6 褐色シルト～極細砂に 5cm 以下のシルトブロック
(7.5YR5/6 明褐色) が密に入り、わずかにマンガンが点在する。

SK088 注記
①.7.5YR5/6 明褐色シルト。10YR4/6 褐色、シルトが少量まだらに入る (7.5YR)
②.10YR3/3 暗褐色シルト～極細砂に 1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) が散見できる。

SP132 注記
①.10YR4/6 褐色シルト～極細砂に 2cm 以下のシルトブロック
(7.5YR5/6 明褐色) が少量混り、2cm 代のマンガンがわずかに入る。

SK080 注記
1.10YR4/6 褐色シルト～極細砂に 1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) が多量に入り明るみを帯びる。

SP133 注記
1.10YR3/4 暗褐色シルト～極細砂に 0.5cm 代のシルト粒
(7.5YR5/6 明褐色) が多く混ざる。

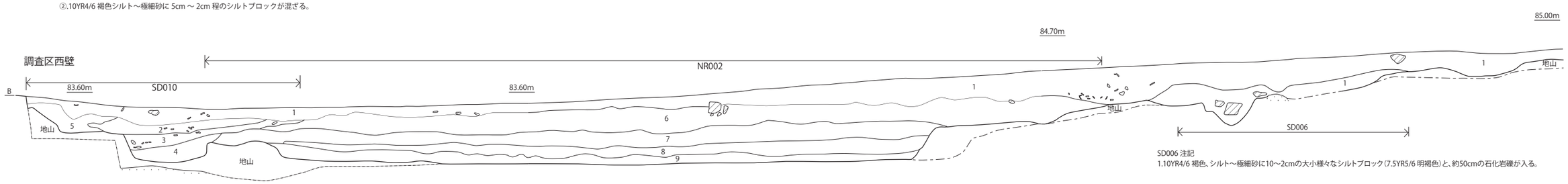
SK086 注記
1.NR01-8 と同じ。

SK087 注記
1.10YR3/4 暗褐色シルト～極細砂。

SP134 注記
1.10YR4/6 褐色シルト～極細砂

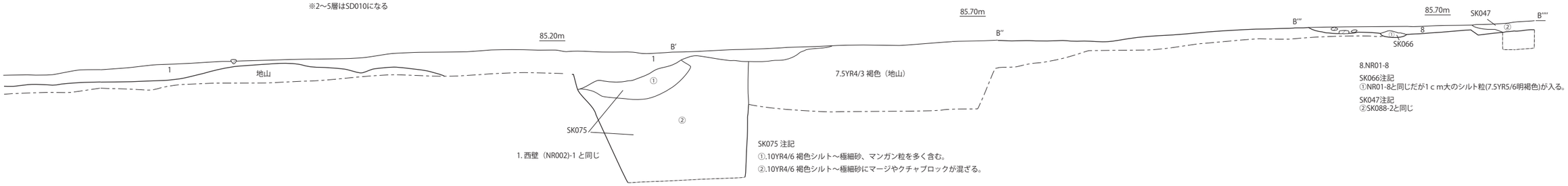
SD012 注記
1.10YR4/6 褐色シルト～極細砂に 2cm 以下のシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色) が多量に入る。
2.NR01-5 と同じ。
3.1 と同じ土色だがやや明るい。シルト～極細砂に 1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) が多量に入る。
4.10YR3/3 暗褐色シルト～極細砂に 2cm 以下のシルトブロックが多量に入る。
5.3 と同じ土色に 3cm 以下のシルトブロックが密に混ざる。

調査区西壁



SD006 注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に10～2cmの大小様々なシルトブロック(7.5YR5/6 明褐色)と、約50cmの石化岩礫が入る。

調査区西壁（NR002）注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に5cm大の石灰岩礫や瓦片を多く含み、5mmのシルトの粒
（7.5YR5/6 明褐色）を少量含む。
2.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に瓦片や、2～3cmのシルトブロックが混ざる。
3.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂にシルトブロックが混ざらない。
4.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂、瓦を含むが、シルトブロックが混ざらない。
5.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に多量のシルトブロック(7.5YR5/6 明褐色) が入る。
6.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂。明褐色のシルトブロックは入らないので5層と分けた。
7.10YR5/4 にぶい黄褐色、シルト～極細砂に5mm程のシルトの粒 (7.5YR5/6 明褐色) が混ざる。
8.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に1～3cmにシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色) が混ざる。
粘性が強く、シルトブロックの大きさで7層と分けられる。
9.10YR4/6 褐色、シルト
※2～5層はSD010になる

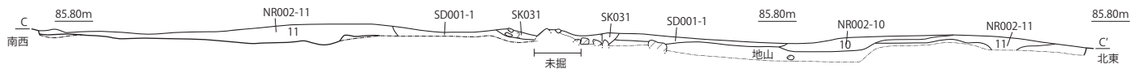


8.NR01-8
SK066注記
①NR01-8と同じだが1ｃｍ大のシルト粒(7.5YR5/6明褐色)が入る。
SK047注記
②SK088-2と同じ

1. 西壁（NR002)-1 と同じ

SK075 注記
①.10YR4/6 褐色シルト～極細砂、マンガン粒を多く含む。
②.10YR4/6 褐色シルト～極細砂にマージやクチャブロックが混ざる。

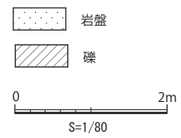
※全てⅡ層に相当



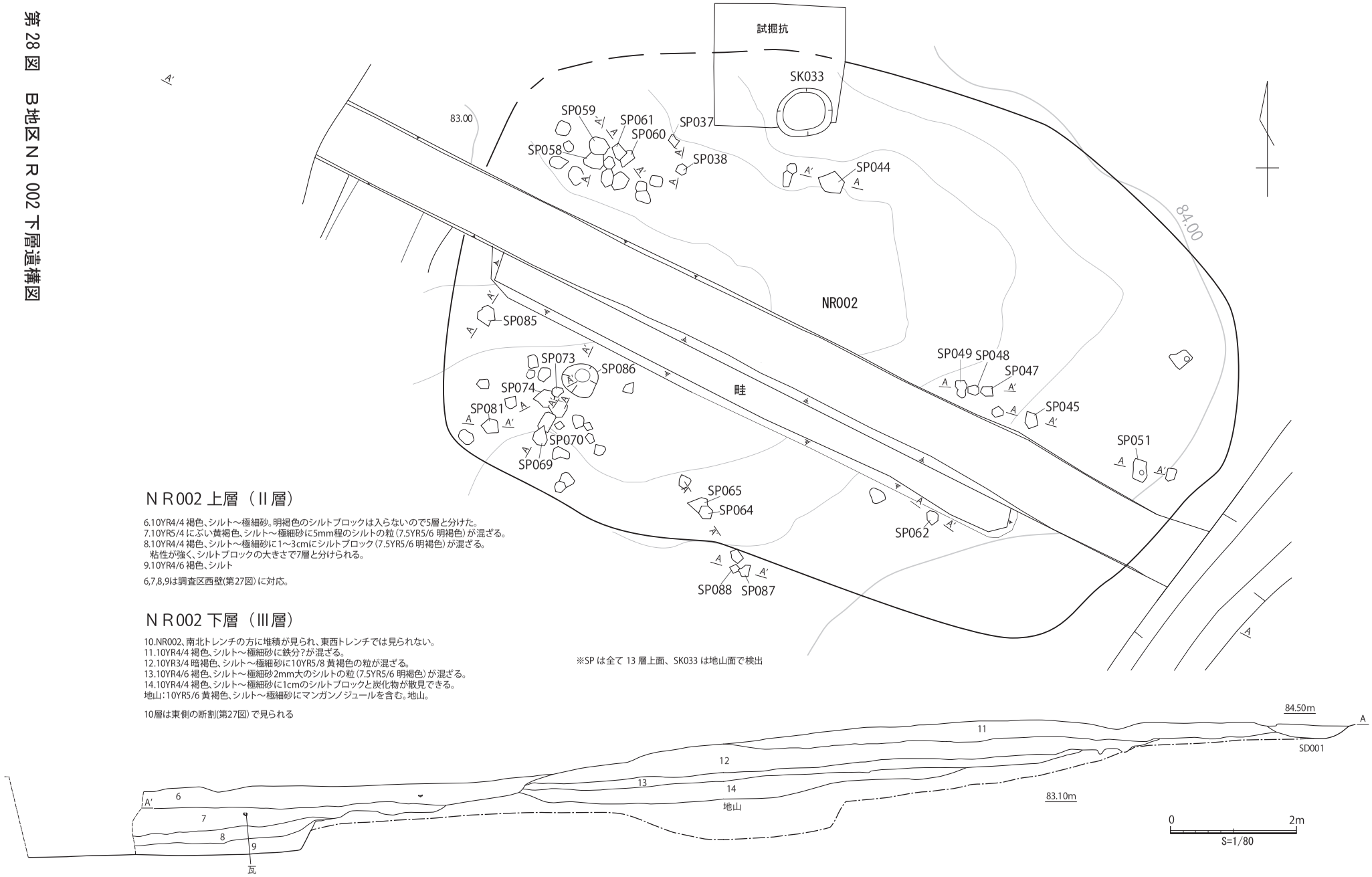
SK031注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に10～15cm大の礫が混ざる。
2.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が多量に混ざる。
※2の土は、礫を押さえるための土止めか？

SD001注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に2mmのシルトブロック
（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。

NR002注記
10.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロックが混ざらない。
11.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に鉄分？を含む。



第 27 図　Ｂ地区壁面図



ＮＲ002 上層（Ⅱ層）

6.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂。明褐色のシルトブロックは入らないので5層と分けた。
7.10YR5/4 にぶい黄褐色、シルト～極細砂に5mm程のシルトの粒（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。
8.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に1～3cmにシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。
粘性が強く、シルトブロックの大きさで7層と分けられる。
9.10YR4/6 褐色、シルト

6,7,8,9は調査区西壁(第27図）に対応。

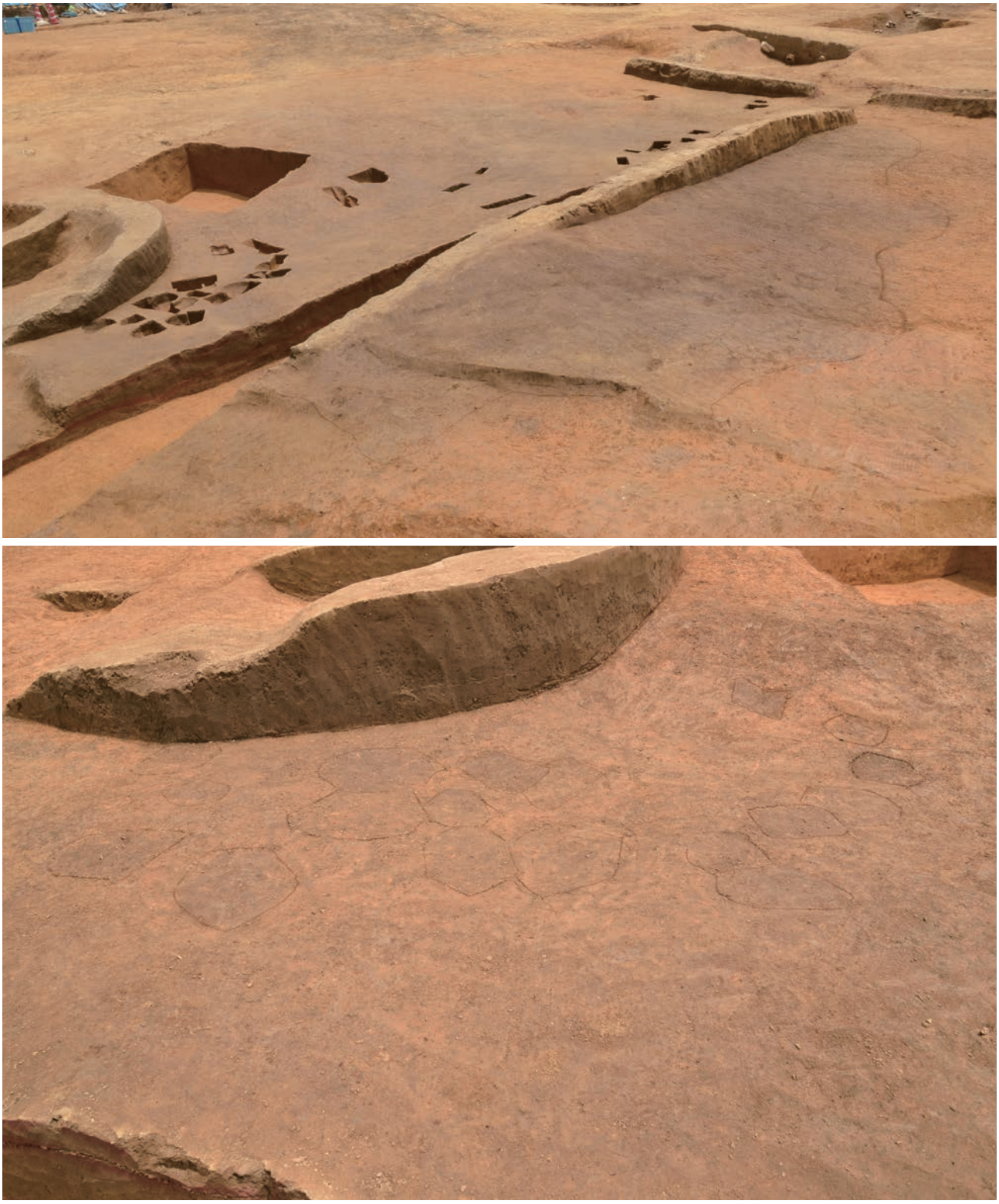
ＮＲ002 下層（Ⅲ層）

10.NR002、南北トレンチの方に堆積が見られ、東西トレンチでは見られない。
11.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に鉄分？が混ざる。
12.10YR3/4 暗褐色、シルト～極細砂に10YR5/8 黄褐色の粒が混ざる。
13.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂2mm大のシルトの粒（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。
14.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に1cmのシルトブロックと炭化物が散見できる。
地山：10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂にマンガンノジュールを含む。地山。

10層は東側の断割(第27図）で見られる

※SP は全て 13 層上面、SK033 は地山面で検出

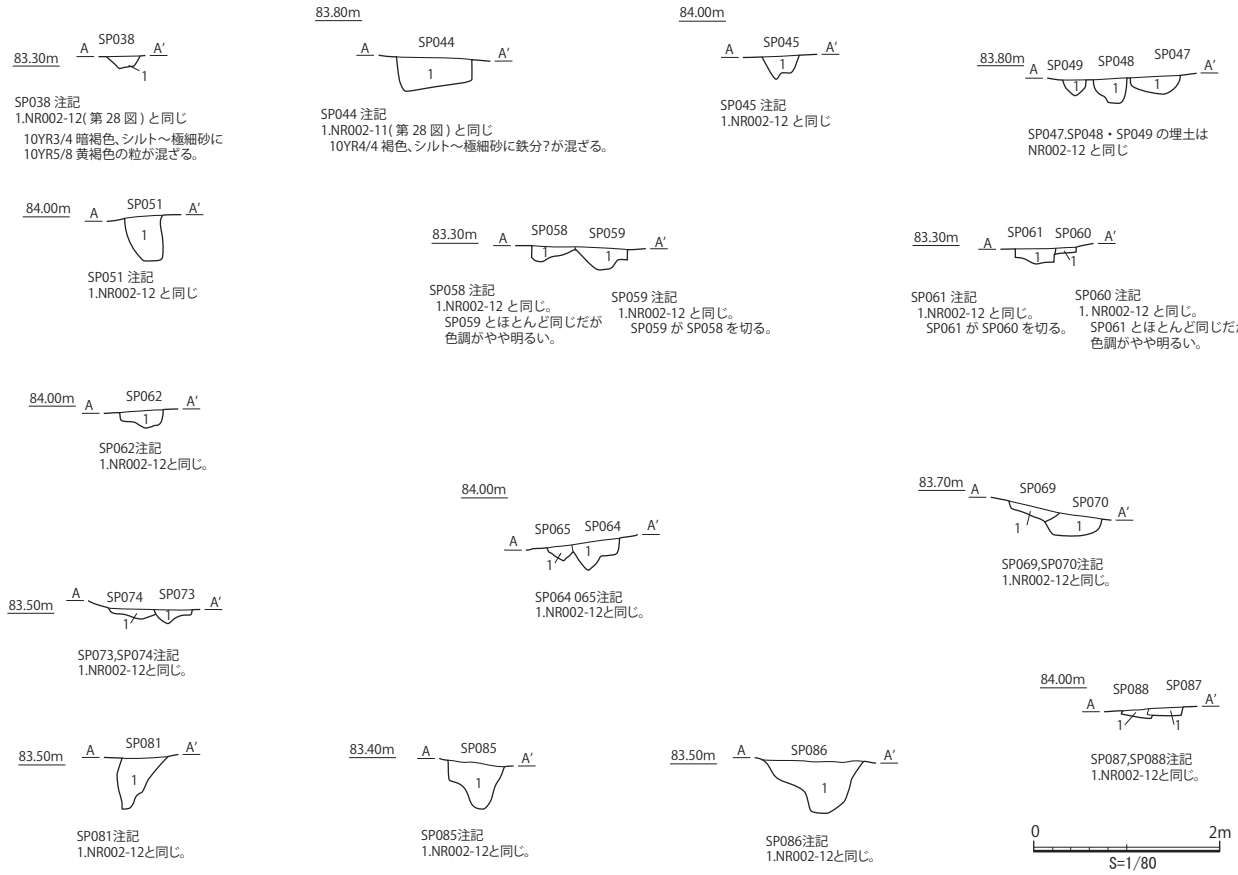
グスク時代　先述したⅢ層が堆積するＮＲ 002 で検出された迫地が、既往の調査によりグスク時代以前と考えられる。ＮＲ 002 の中央部に当たる 8 × 12 mの楕円形の範囲では更に最深 1 mになる窪みとなっており、Ⅲ層が堆積していた。このⅢ層内に一辺 20 ～ 30cm で多角形のプランで、断面が緩やかなＶ字状を呈することが多く、深さは 10cm 内外のピットが多く検出された。これらのピットは、普天間飛行場内の野嵩タマタ原遺跡（宜野湾市 2006）、大謝名軍花原第二遺跡（沖縄県埋文 2006）で確認され、概ねグスク時代のもので植栽痕と言われており、今回もその形態や立地は共通している。ただ、Ⅲ層やピット群からの出土遺物はない（第 28・29 図、図版 36 ～ 38）。



図版 36　Ｂ地区ＮＲ 002 下層遺構検出状況（上…西より　下…拡大）

図版 37　Ｂ地区ＮＲ 002 中下層堆積状況（北より）

図版 38　Ｂ地区ＮＲ 002 下層遺構断面（左…ＳＰ 038　右…ＳＰ 064・065）



第 29 図　Ｂ地区ＮＲ 002 下層遺構ＳＰ 035 ほか断面図

近世・近代　道２、区画６～８を確認した。区画６・８では多くの遺構が確認され屋敷の様相が窺えるが、区画７はＮＲ 002 が大半を占めその堆積からは耕作地であったことが推測される（第 30 図）。

区画６　東は調査区外だが、西はＳＤ 002、北は後述する道２、南はＳＤ 016 で画され、長さ 35 mほどの区画と考えられる。この区画内にコ字状で検出されたＳＤ 001 があり、こちらが屋敷地本体と考えるとその一辺の長さは 24 mとなる。その外側の空間は幅４～５mあり、戦前の空中写真で見られる屋敷林と屋敷間の筋道と推測される。なお、ＳＤ 001 は幅２m前後で、礫や獣骨が集中する範囲や井戸ＳＥ 001 が設けられ、コーラ瓶などが出土し最終的な埋没は戦後であろう（第 31・32 図、図版 39・40）。

区画内の遺構は井戸や土坑が多く見られる一方で、柱穴と考えられるピットなどは少なく明確な建物が確認できていない。ただ、後述するように瓦だまりが検出されている。以下、個別の遺構を説明する。

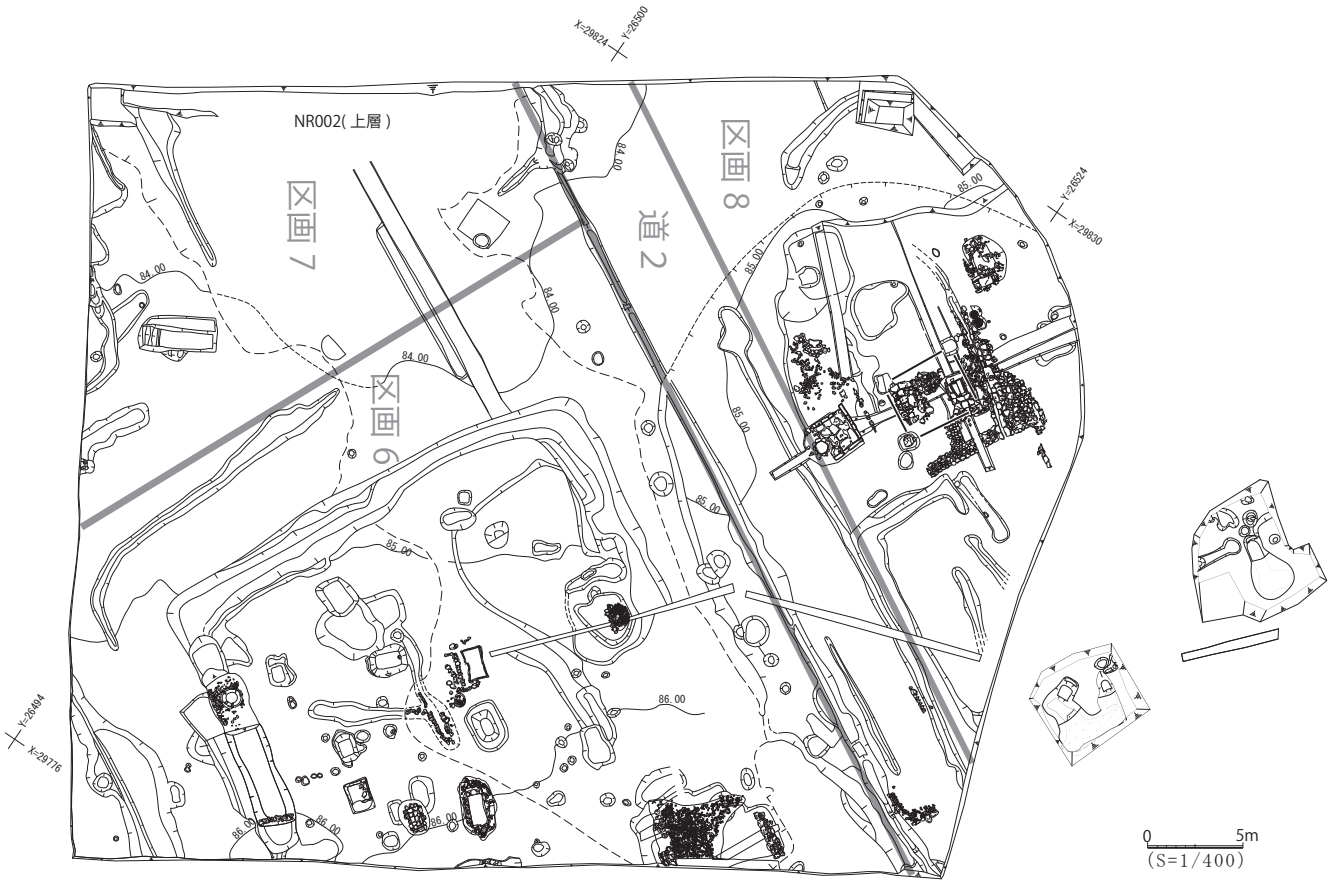
井戸ＳＥ 001 は常に滞水しており、その深さは水面まで約 11 mを測った。石積みによる井戸組みの上に、厚さ 0.2 mの石灰岩切石５枚で隙間にはモルタルで埋め、高さ 0.8 m、内法径 0.6 mの井戸枠を据えている。また、この外面には相対する２ヶ所に幅 20cm ほどでモルタルと礫で柱を貼り付けたような痕があった。これを釣瓶の支柱があったと推測し、移築復元での根拠とした（図版２）。断ち割りの観察では石積みは２m前後の竪穴を掘って積んでいったようである。なお、井戸はＳＤ 001 を埋めて造られており、ＳＫ 001 が掘り形で長さ 10 mを測り細礫混じり土（コーラル）が造成土となる。このことから、ＳＤ 001 は幾度かの変遷を遂げて最終的に戦後に埋まったものと考えられる（第 33 図、図版 41）。

ＳＫ 002 は厚さ 30cm で堆積した瓦だまりで南側は石敷きＳＳ 001 南に接する。ＳＳ 001 南は 4.5 m離れて同方向の石列ＳＳ 001 北が見られ、上面は削平のため平滑な面ではないが本来は同様な石敷きであったと考えられる。そうすると、ＳＫ 002 とＳＳ 001 は瓦葺きの建物の基礎などであったものが廃絶した可能性が考えられる。これらに切られた古い遺構として、新しい順に砲弾片が多く出土したＳＫ 034、７mを超える大型のＳＫ 044、1.5 × 3.0 mの長楕円形のＳＫ 036 が見られる。ＳＫ 036・044 はＮＲ 002 の堆積土が含まれることから近代の中でも古いもので、SK034 は戦後と考えられる。つまり、ＳＫ 002・ＳＳ 001 が建物とすれば、戦後に建てられた可能性が高い（第 34・35 図、図版 42・43）。

石囲い土坑は区画６南半に集中し、ＳＫ 006 は内法 0.7 × 1.4 mで地床、ＳＫ 007 は内法 0.6 × 1.1 mで石敷き、ＳＫ 011 は幅 1.0 mでセメント製というように、微妙な違いが見られる（第 37・38 図、図版 45 ～ 47）。その西にあるＳＫ 012 はレンガ囲いで内法 0.8 × 1.4 mでその一方には並行する石列、２m南には長さ 2.8 m分が残存するＳＫ 013 もみられ、周辺の堆積土は同一であるので同時に造成した可能性が高い（第 39・40 図、図版 48・49）。このようなレンガ囲いは喜界島等などで現存する製糖用炉の可能性なども想定されるが、今後詳細な比較が必要であろう。

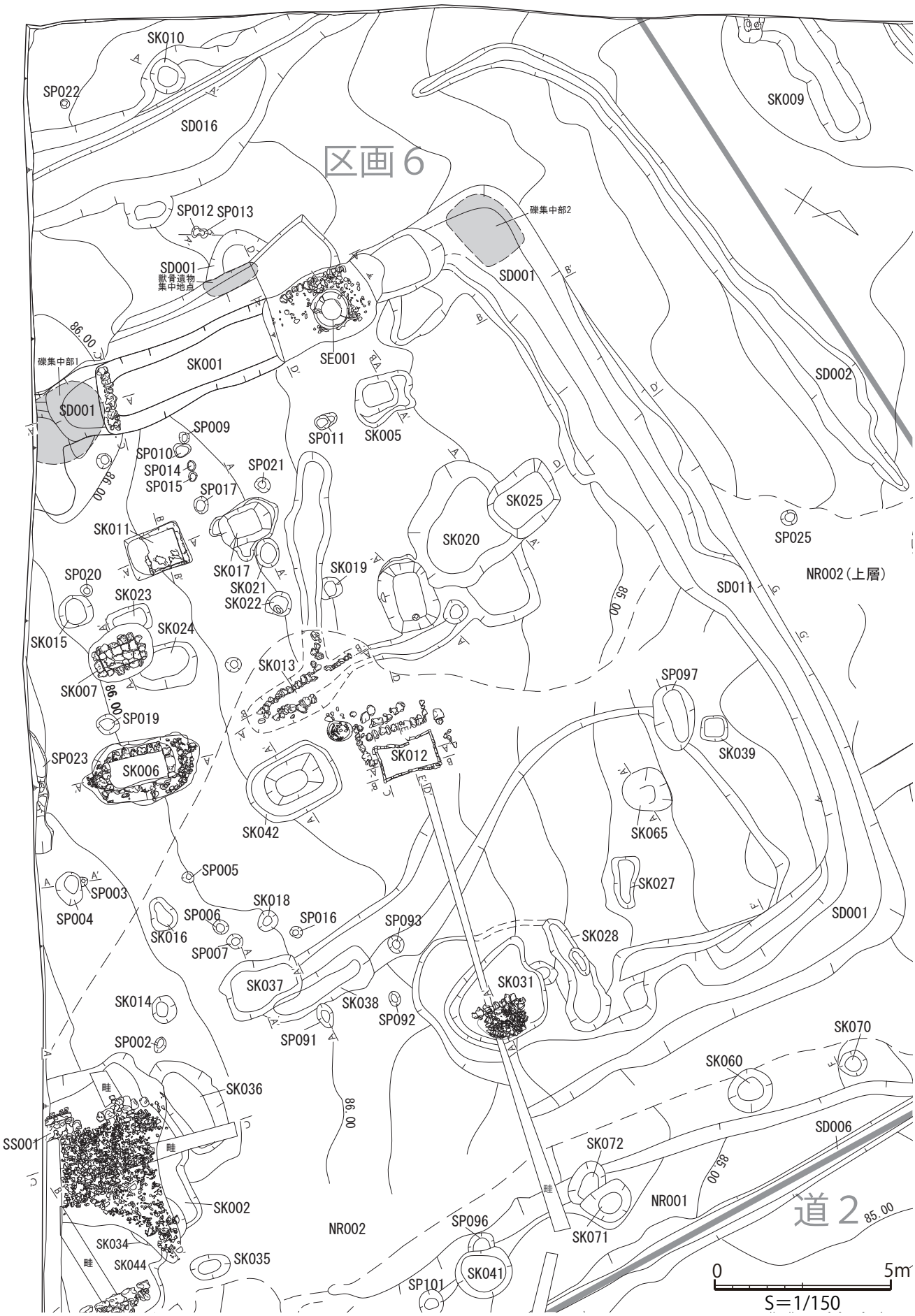
本区画には、ＳＫ 017･024･025･037･020 など長さ 1.5 ～３mの長方形土坑も見られ、規模的には石・レンガ囲いと類似する（第 41 図、図版 51･52）。ＳＫ 031 は、土坑上面に礫が集中している（第 36 図・図版 44）。ＳＫ 010・065 は径１m、深さ 1.5 mに及ぶ土坑も見られるが、その埋土は地山より黒ずんでいるが、質的には変わらないため人工的な遺構かは明確でない（第 41 図、図版 50・53）。

区画７　東を区画６、北に区画７に接しており、内部はＮＲ 002 と同方向で埋土も共通するＳＤ 011、ＳＫ 032・033 などの遺構が見られる一方、区画６・８のような遺物が多く出土みられる遺構は少ない。先述のようにＮＲ 002 の堆積は東側に伸びており、区画よりも切り合い的にふるい。ＮＲ 002 の堆積土は拳大以上の礫は少なくブロックの単位も小さく良く攪拌されており耕作土と思われる。地山面は西に向かって段を構築し、ＳＫ 030・032 もそれに並行しテラス状となっており、迫地を利用した耕作地であったと考えられる。また、ＳＫ 033 は径 0.8 m、深さ 1.2 mの円形土坑で、埋土は先述のＮＲ 002 下層のピット群と共通する可能性もある（第 42・43 図、図版 54 ～ 56）。

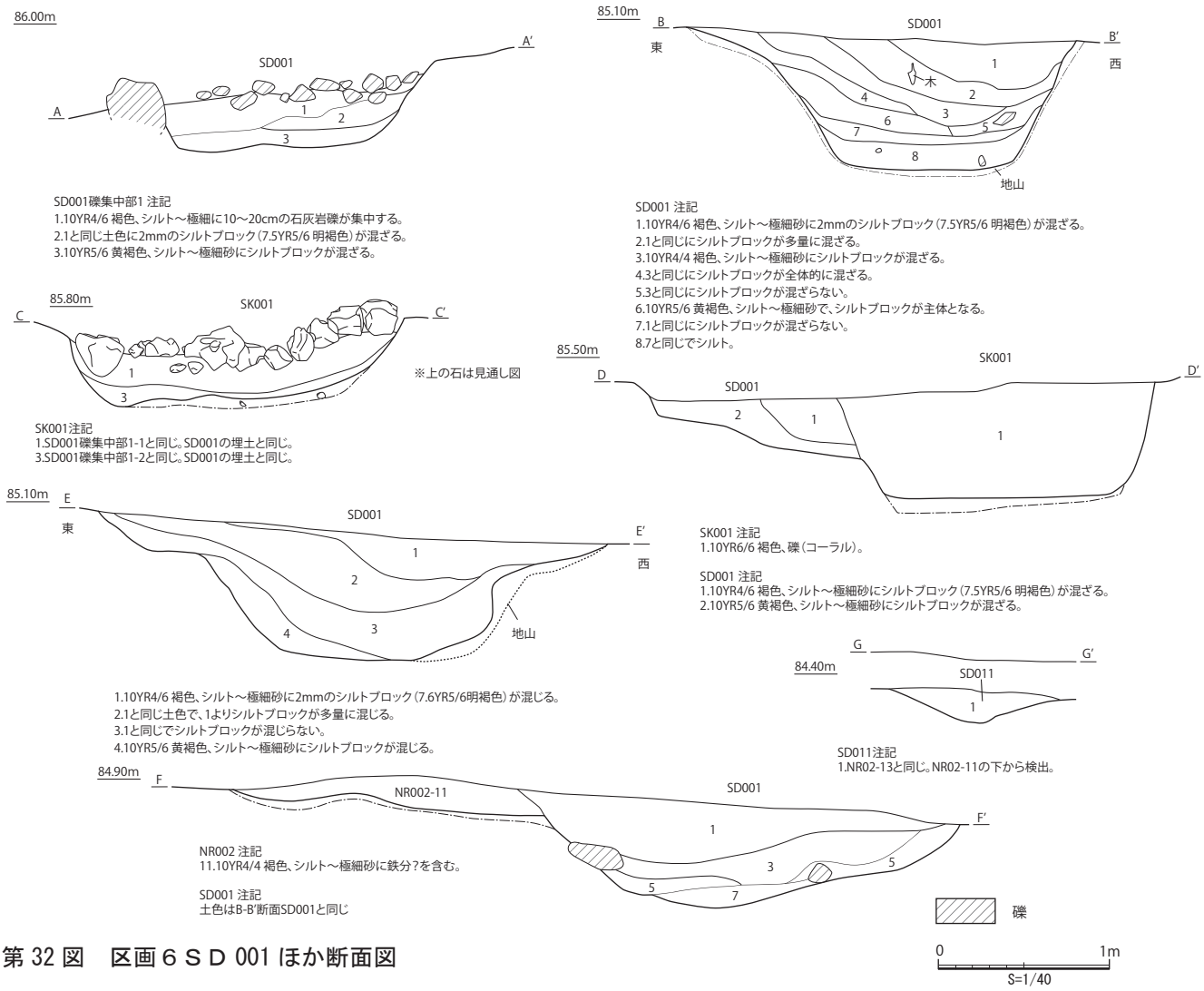


第 30 図　Ｂ地区近代遺構区画割

図版 39　区画６空中写真

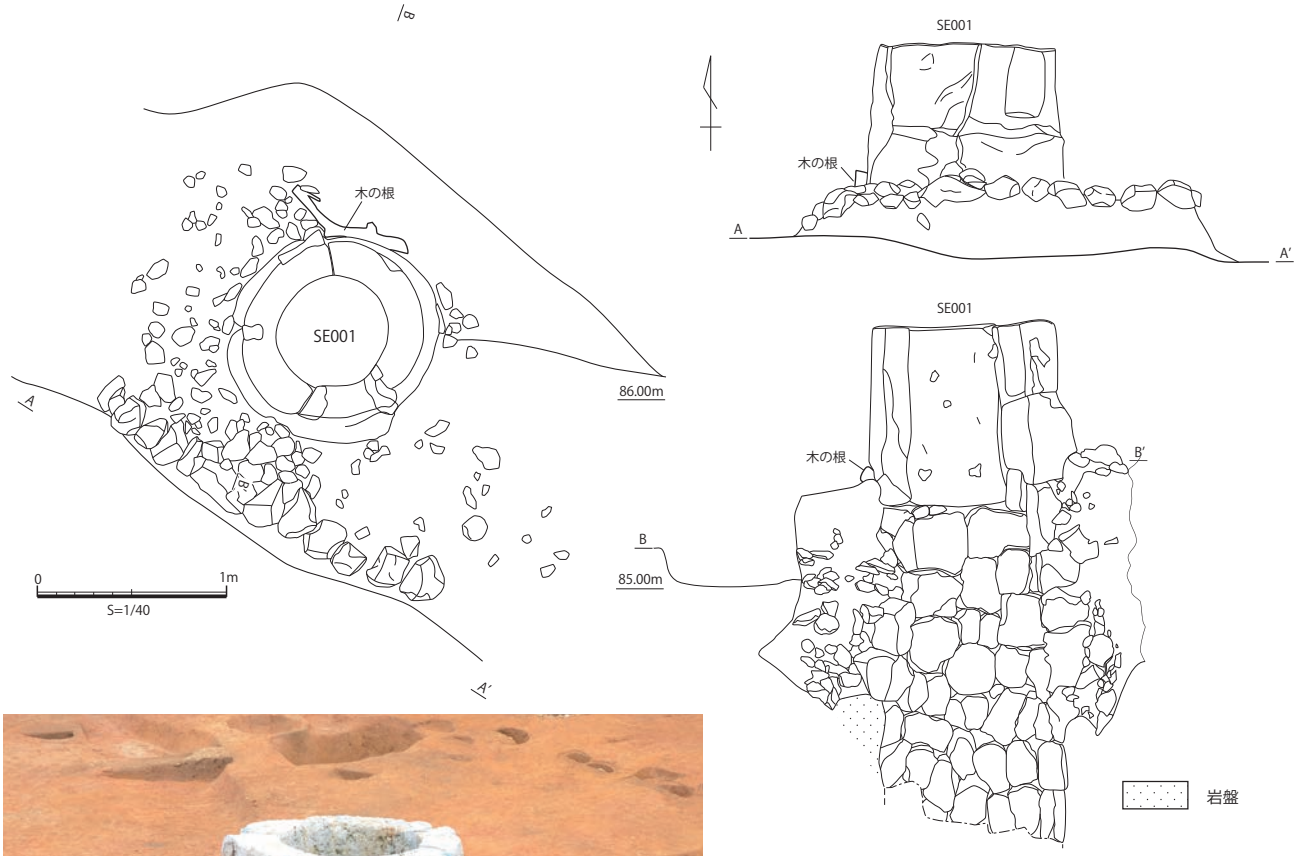

区画６
道２
SK010
SP022
SD016
SK009
SP012
SP013
SD001
獣骨遺物
集中地点
礫集中部2
SD001
SE001
SK001
礫集中部1
SD001
SD002
SP009
SP011
SK005
SP010
SP014
SP015
SP021
SP017
SK025
SK020
SP025
SK011
SK017
SK019
SK021
SK022
SP020
SK023
SK024
SK015
SK013
SK007
SP019
SP097
SK039
SP023
SK006
SK012
SK042
SK065
SP005
SK027
SP003
SP004
SK018
SP006
SP016
SP093
SK016
SP007
SK028
SD001
SK037
SK031
SK014
SK038
SP092
SP091
SP002
SK070
SK060
SK036
SS001
SD006
SK072
SK002
NR001
NR002
SP096
SK071
SK034
SK044
SK035
SK041
SP101
NR002（上層）
86.00
85.00
0
5m
S＝1/150

第 31 図　区画６遺構図



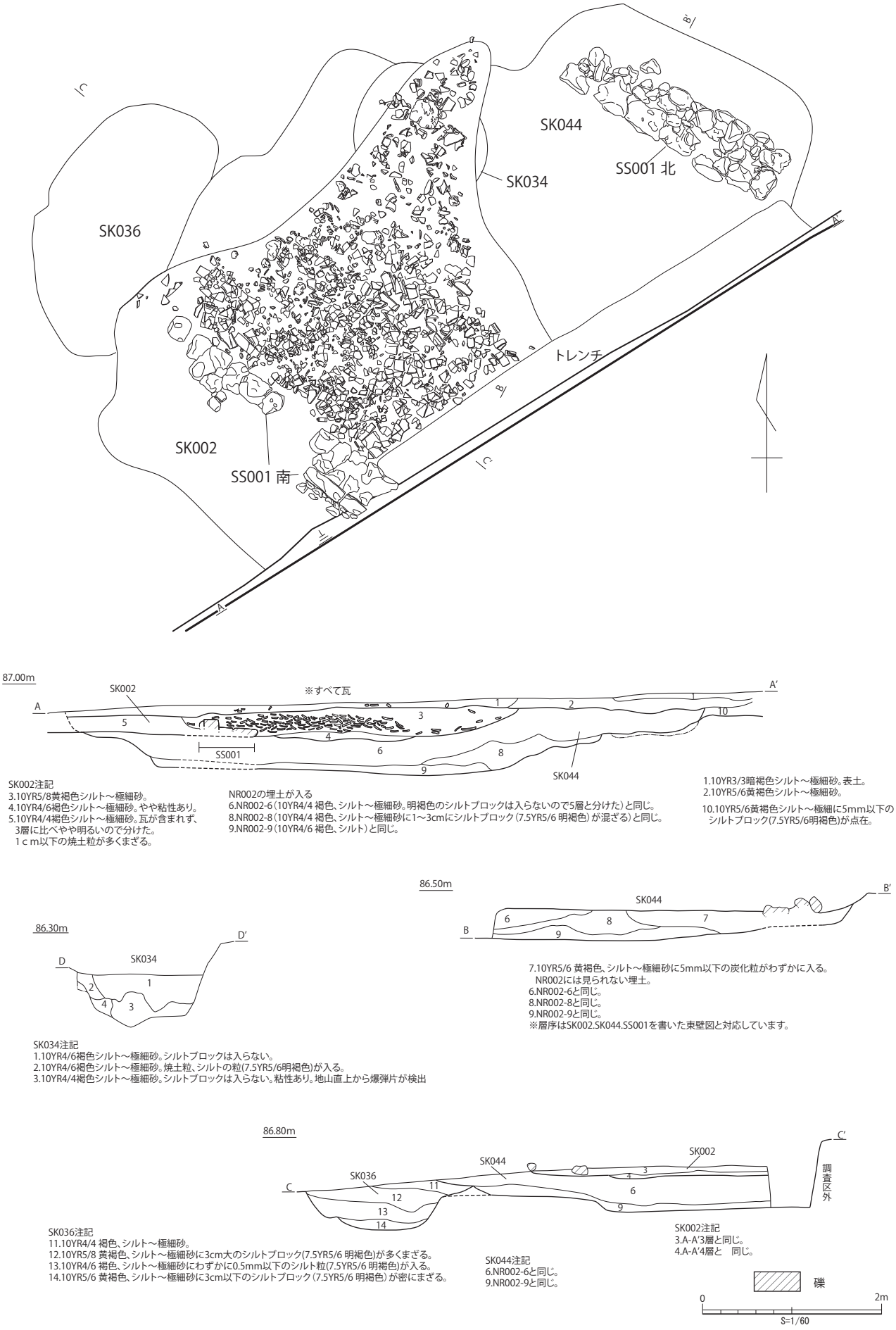
第 32 図　区画６ＳＤ 001 ほか断面図

図版 40　区画６ＳＤ 001（上左…断面　上右…コーラ瓶出土状況　下左…礫検出状況　下右…獣骨出土状況）

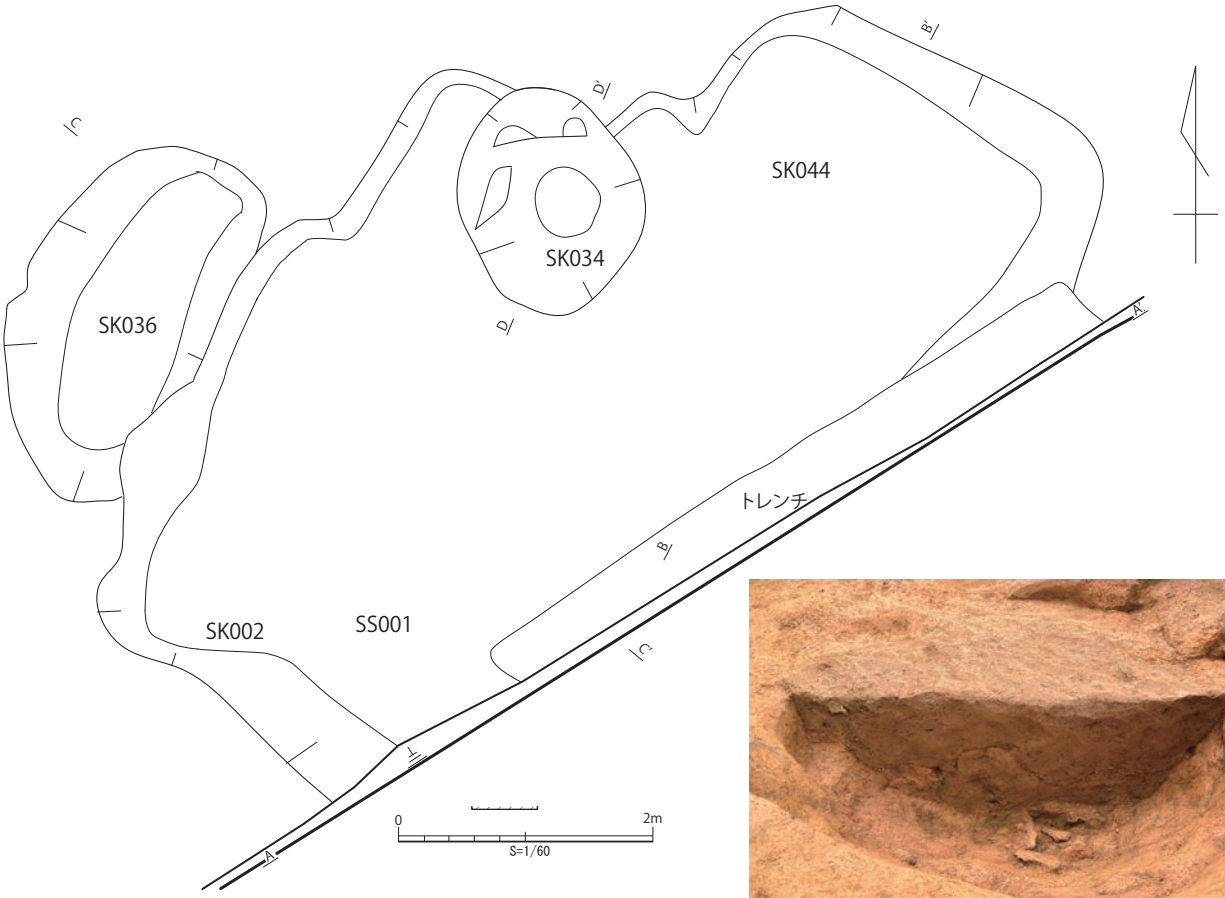


第 33 図　区画６井戸ＳＥ 001 遺構図

図版 41　区画６井戸ＳＥ 001（左上…南より　左下…掘方断面　右上…上方より　右下…断ち割り）



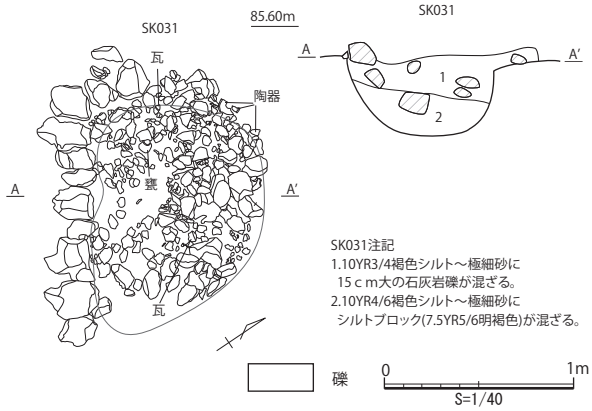
第 34 図　区画６ＳＫ 002・036・044 上面図



第 35 図　区画６ＳＫ 002・036・044 完掘図

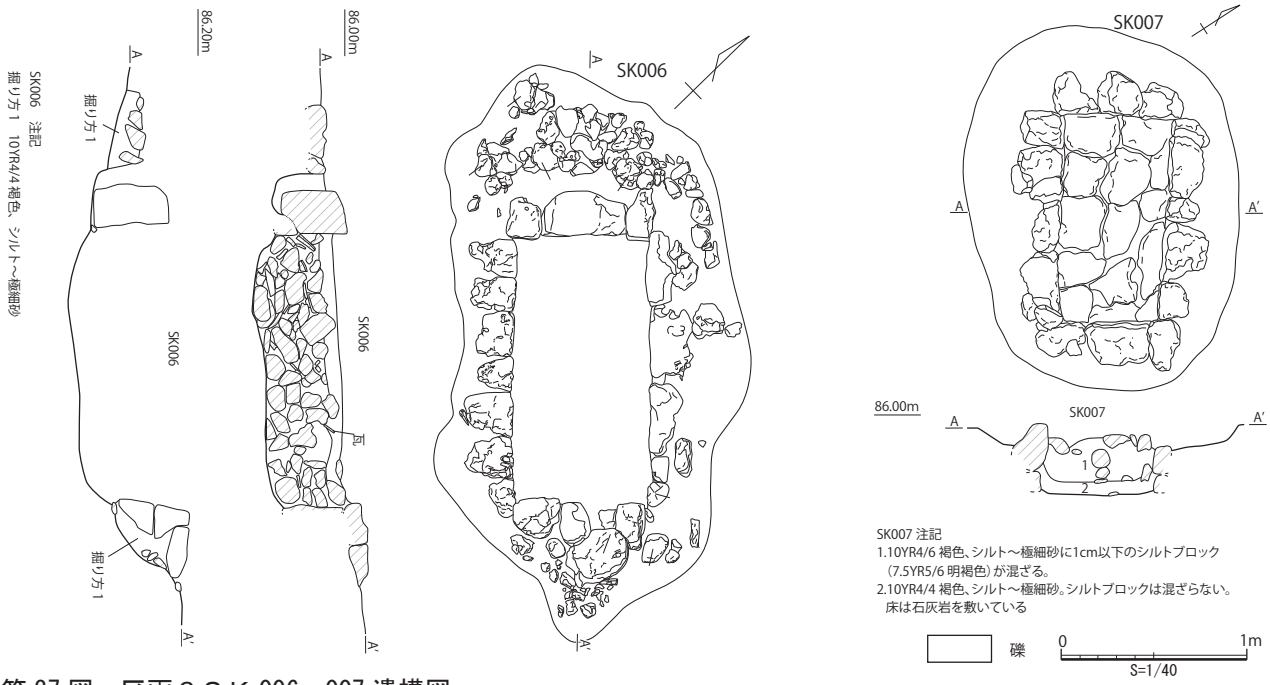
図版 42　区画６ＳＫ 034 断面

図版 43　区画６ＳＫ 002（左…瓦だまり　右…完掘　共に西より）



第 36 図　区画６ＳＫ 031 遺構図

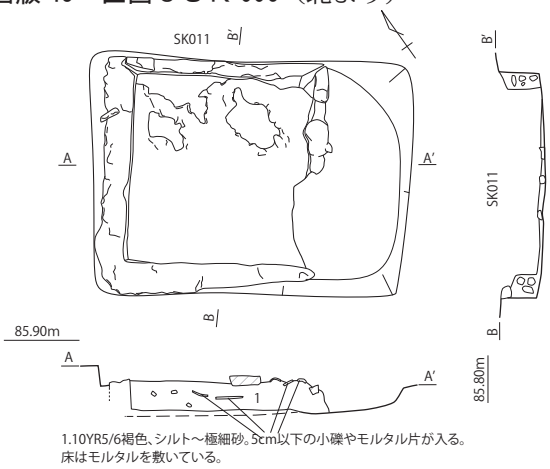
図版 44　区画６ＳＫ 031 断面（南より）



第 37 図　区画６ＳＫ 006・007 遺構図

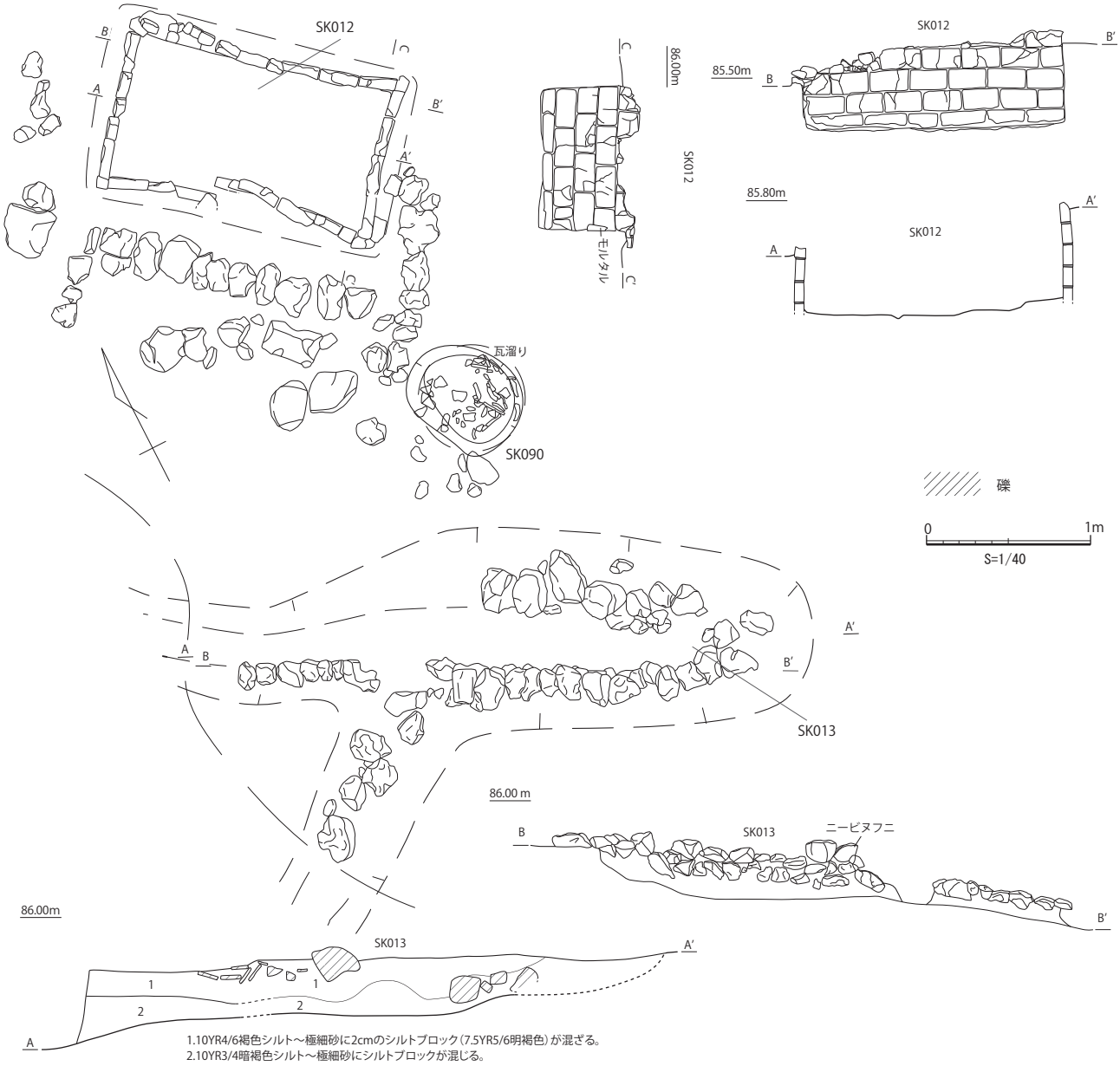
図版 45　区画６ＳＫ 006（北より）

図版 46　区画６ＳＫ 007（南より）



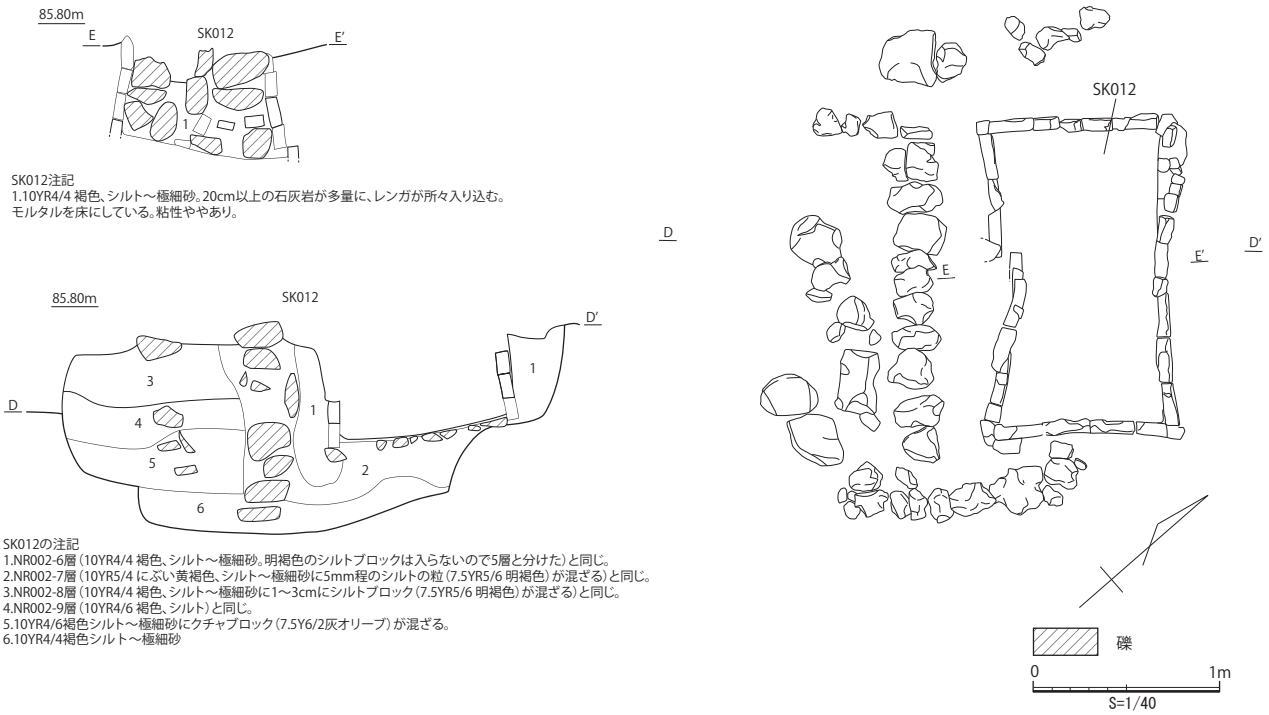
第 38 図　区画６ＳＫ 011 遺構図

図版 47　区画６ＳＫ 011（南より）



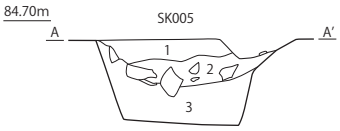
第 39 図　区画６ＳＫ 012・013 遺構図

図版 48　区画６ＳＫ 012・013（西より）

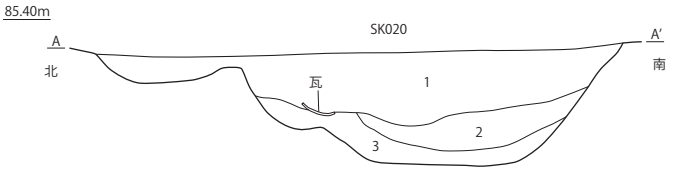


第 40 図　区画６ＳＫ 012 断面図

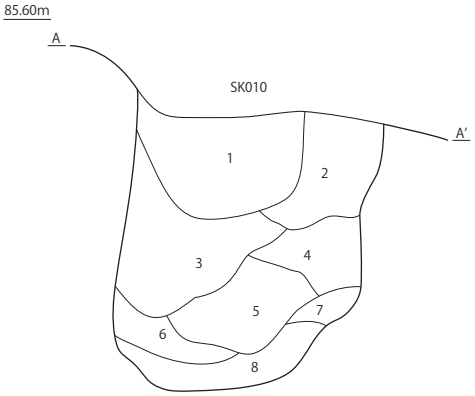
図版 49　区画６ＳＫ 012（上左…完掘　上右…断ち割り西より　下…南より）



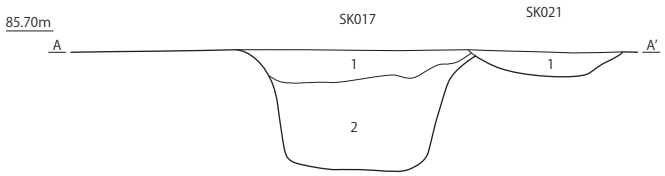
B地区 SK005 注記
1.10YR5/6黄褐色、シルト～極細砂に1～2cmのシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が混ざる。
2.10YR4/4褐色、シルト～極細砂。瓦が多く入り込む。シルトブロックは混ざらない。
3.10YR4/6褐色、シルト～極細砂に、5mm大のシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が点在する。



B区　SK020注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に、1cm以下のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）がまだらに混ざる。
2.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂に多量に石灰岩の小礫が混ざる。
3.10YR5/4 にぶい黄褐色、シルト～極細砂に、0.5mm大の焼土粒、炭化粒が点在する。

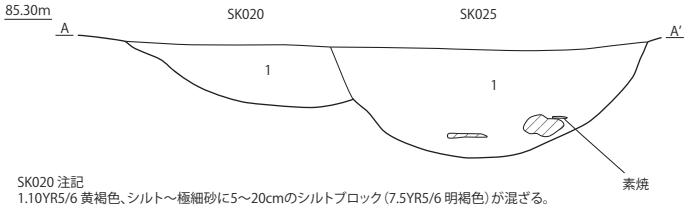


SK010注記
1.10YR3/4暗褐色シルト～極細砂にシルト粒(10YR5/8黄褐色)が混ざる。
2.7.5YR5/8明褐色シルト～極細砂に7.5YR4/6褐色の土がブロック状に混ざる。
3.1と同じで1よりしまっている。
4.10YR4/6褐色シルト～極細砂にシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が混ざる。
5.1と同じ土色。シルトに炭化物が散見される。
6.4と同じ土色だがシルトブロックが4より少ない。
7.4と同じ土色でシルト。
8.4と同じ土色。4よりシルトブロックの量が多くなる。



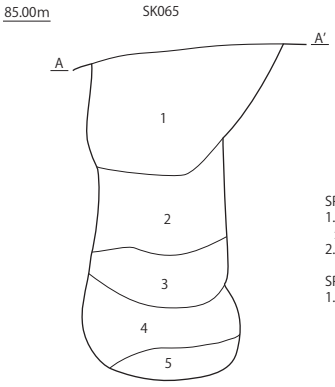
SK021注記
1.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂に、1cm以下のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。

SK017注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂、3cm以下の小礫や白色砂粒を少量含む。
2.1層と同じ土色だが、2cm以下のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざり、小礫や白色の砂粒は混ざらない。

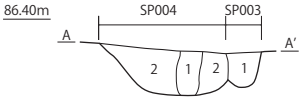


SK020 注記
1.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂に5～20cmのシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。

SK025 注記
1.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に5cm大のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。



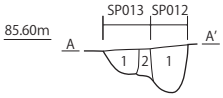
SK065注記
1.SK010-1と同じ。
2.SK010-3と同じ。
3.1と同じ土色シルト。
4.SK010-4と同じでシルト。
5.1と同じ土色シルト。3よりしまっている。



SP004 注記
1.10YR3/4 暗褐色、シルト～極細砂に1cm以下のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）や焼土粒が混ざる。柱痕と思われる。
2.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に2cm以下のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。

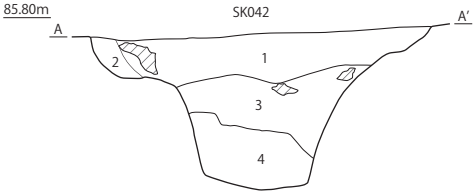
SP003 注記
1.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）がまだらに混ざる。

SK037注記
1.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂に5cm大のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色)が散見される。
2.10YR3/4 暗褐色、シルト～極細砂、炭化物が多く入り、1cm大の焼土粒が散見される。

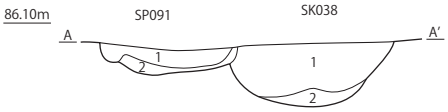


SP012 注記
1.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が混ざる。

SP013 注記
1.SP012と同じ。
2.SK005-1と同じ。

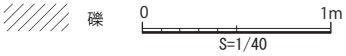


SK042注記
1.10YR4/4 褐色、シルト～極細砂に、1cm以下のシルト粒（7.5YR5/6 明褐色）が多く入る。
2. 1 層と同じ土色で、シルト～極細砂。3cm大のシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が密に入るため 1 層と分けた。
3.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂に1cm以下のシルト粒（7.5YR5/6 明褐色）が点在する。
4.10YR4/3 にぶい黄褐色、シルト～極細砂。粘性はやや強い。



SP091注記
1.10YR5/6黄褐色シルト～極細砂に5mm以下のシルトの粒(7.5YR5/6明褐色)が入る。
2.10YR4/6褐色シルト～極細砂に3ｃｍ大のシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が入る。

SP038注記
1.NR02-10層と対応。
2.10YR5/6黄褐色シルト～極細砂に3～5ｃｍのシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が密に入る。



第 41 図　区画６ＳＫ 005 ほか断面図

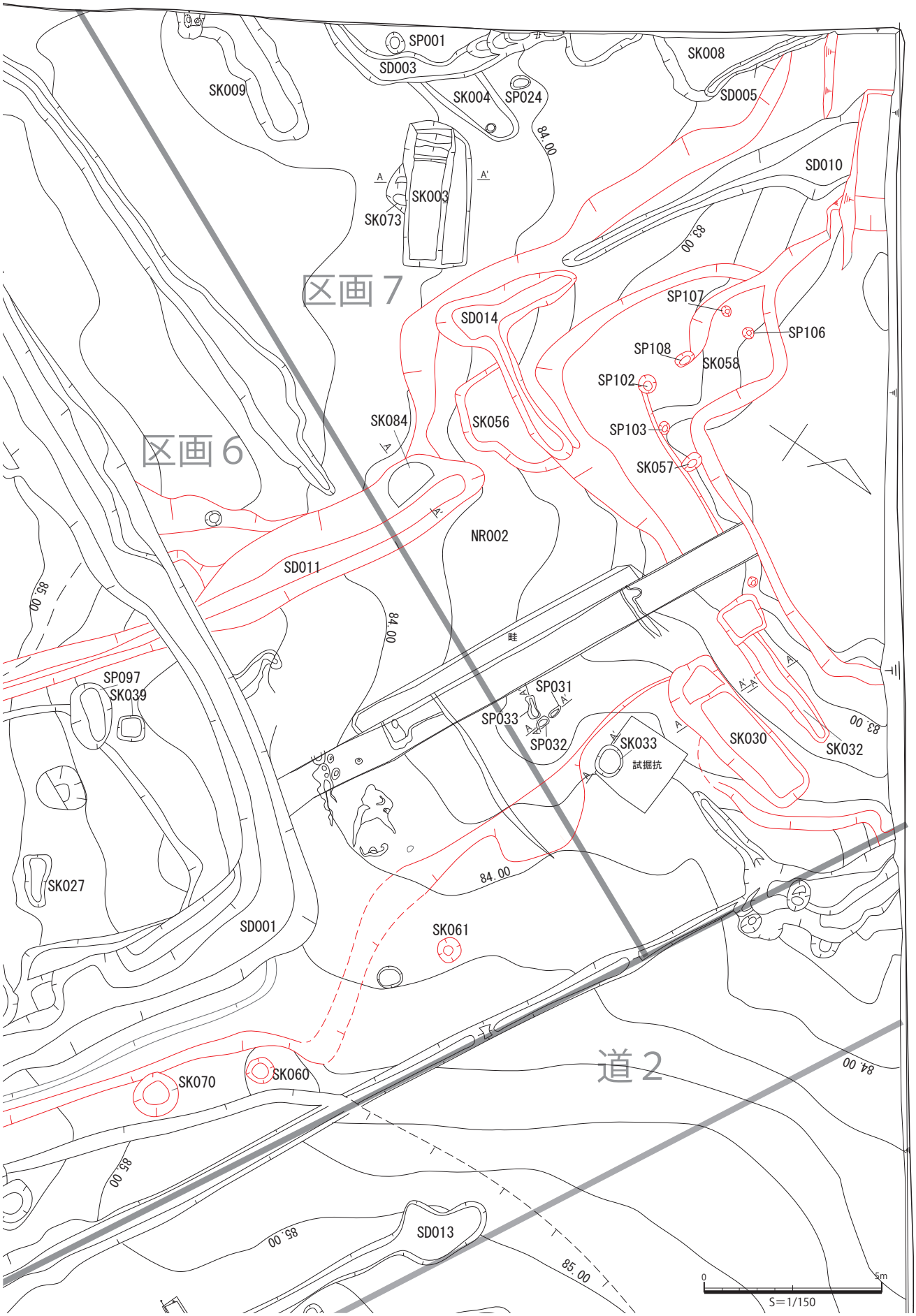
図版 50　区画６ＳＫ 010 断面

図版 51　区画６ＳＫ 020 断面

図版 52　区画６ＳＫ 042 断面

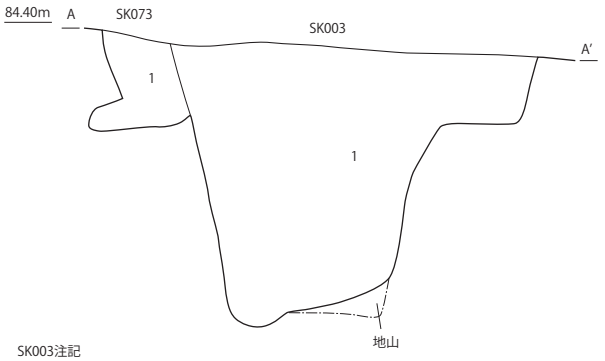
図版 53　区画６ＳＫ 065

図版 54　区画７（南より）



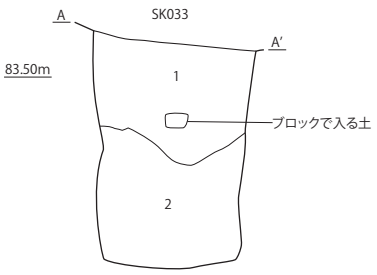
第 42 図　区画７遺構図

※赤線はＮＲ 002 上層時の遺構

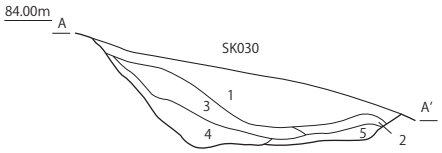


SK003注記
1.10YR 5/6黄褐色、シルト～極細砂にシルトブロック（7.5YR5/6 明褐色）が多量でまだらに混ざる。

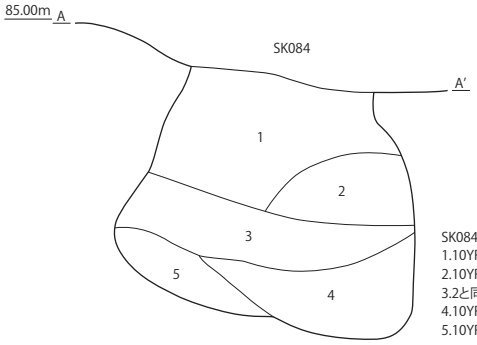
SK073注記
1.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂に、1cm以下のシルト粒（7.5YR5/6 明褐色）がまばらに混ざる。
樹根の痕。



SK033注記
1.NR002-I3層と同じ土が入る。また、ブロックで10YR3/4暗褐色の土が入る。
2.10YR4/6褐色シルトに約5mmの炭化粒が点在する。粘性は強い。



SK030注記
1.NR02-6と同じ
2.10YR4/6褐色シルト～極細砂
3.2と同じにマンガンを含む
4.2と同じに粘性が増す
5.10YR4/4褐色シルト～極細砂にマンガンを含む



SK084注記
1.10YR4/6褐色シルト～極細砂にマンガンが混ざる。
2.10YR4/6褐色シルト～極細砂にシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が混ざる。
3.2と同じに炭化物が混ざる。
4.10YR3/4暗褐色シルトにシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が混ざる。
5.10YR5/6黄褐色シルト～極細砂。

0　1m
S=1/40

第 43 図　区画７ＳＫ 003 ほか断面図

図版 55　区画７ＳＫ 003（左…断面　右…完掘）

図版 56　区画７ＳＫ 033（左…完掘　右…断面）

道２　調査時には遺構番号を付していなかったが、北にＳＤ013、南にＳＤ006を側溝としてその間にはほとんど遺構が見られず平坦になっていることから、幅４ｍの東西方向の道と考えた。この間の出土遺物はＮＲ001としてこの一帯の堆積層という形で取り上げてしまっているが、ＳＤ006・013と同様で近代の遺物が主体で戦後のものも若干混じる状況であった。ＳＤ006は幅が１ｍに近いところも見られるが、その場合も下方は幅0.5ｍで、深さも0.4～0.8ｍとアップダウンがみられＡ地区と同様に交通壕であったと考えられる。それに比べると、SD013は幅0.5ｍだが深さ0.2～0.4ｍと浅く、交通壕とするには浅い印象を受ける。また、東側に見られるSD017もこれらと並行するが、幅0.2ｍ深さ0.1mと狭小でその性格ははっきりとしない。さらにこの周辺にはＳＳ004・005という石列が見られ、道内もしくは区画への階段であった可能性も想定されるが明確にはできなかった（第44図・図版57）。

区画８　南は道２で区画されているが、西側は遺構が希薄であり、戦前の空中写真ではＳＤ007一帯が凹器であった可能性が高いと考えられるが、調査区際でもあり明確な根拠となる状況が把握できなかったので新区画とはしなかった。区画内は、石敷きＳＳ002を中心とした建物２や石敷きの井戸SE002などの他、東側には壕２基も確認できた。また、ＳＳ002の下層にはピットや土坑などの遺構も見られ、区画内での遺構変遷があったことが窺える（第44図）。

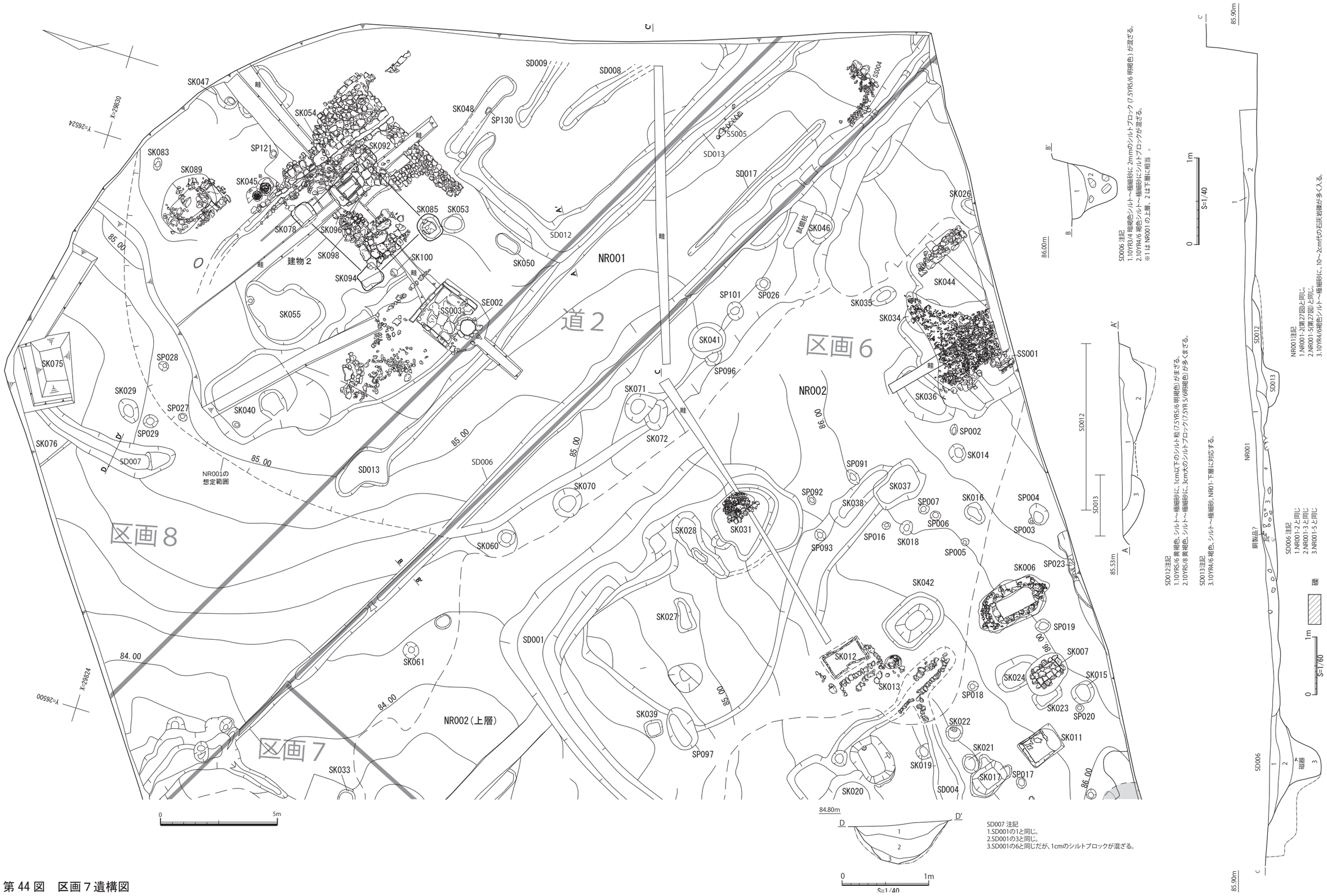
建物２は、石柱が残存するＳＫ085・092とそれに類する掘り形をもつＳＫ078・094で構成される１間のプランを持つ。柱中心間距離は北西（ＳＫ078･094）－南東（ＳＫ092･085）間が3.3～3.6ｍ、北東（ＳＫ078・092）－南西（ＳＫ094・085）間が3.9～4.2ｍで、柱穴の掘り形が１ｍ近く大型であることからいわゆる高倉の可能性も考えられる。また、この内外には石敷きＳＳ002が部分的に見られるが、側溝であるＳＤ015、石囲いがあるＳＫ054の軸が概ね同方向であるので関連性はあると考えられる。ただ、プラン内にはＳＫ054は内法0.6×0.8～1.0ｍ、深さ0.8ｍの石囲い土坑とその南には石敷きの中央には石がなく0.4×0.6ｍの隙間があった。しかし、後者は石がないため掘り下げてしまい、下層遺構としてＳＫ100とした土坑内に含まれることになり、その正確なプラン・構造は確認できなかった。ただ、このような長方形の土坑が建物または屋根内にあるものとして、フール（豚便所）などの可能性も想定される。いずれにせよ、この建物２は母屋ではなく、付属的な性格であったと考えたい（第45図・図版58～62）。

また、ＳＳ002の石敷き残存範囲の北西端には沖縄産陶器甕の底部が２基検出された埋甕が見られ、内部には獣魚骨・貝類遺体が出土した（第46図、図版63）。さらにこの北に切石や礫が上面に集中するＳＫ089も見られた。このようにＳＳ002は北西側に伸びる可能性が高く、母屋などが存在していたとも推測されよう。

井戸ＳＥ002は径0.6ｍ、掘り形1.0ｍの石積み井戸で、その周囲には長さ不明、幅1.8ｍの石敷きＳＳ003が見られ、西側に排水用の隙間をもった水場遺構を有する（第44･47図、図版64）。ＳＳ003の0.8ｍ北側には並行する石列、西側には拳大の礫が集中しており、関連する遺構があった可能性もある。

この他、ＳＳ002より新しい遺構としては、西側にはＳＫ044・055などの長大な土坑、東側にはSD008・009・012などの溝があり、第２章第２節でも述べたように戦後には畑地としての利用もあったため、その関連の可能性もあろうか（第44図）。

一方、ＳＳ002の下層は地山ブロック土を利用した造成層と考えられる部分も見られるが、その出土遺物は近代が主体で上層と明確な差はつけ難いが戦後の遺物は見られない。つまり、それを除去した遺構は少なくとも戦前に構築されたものといえる。これらにはピットも多く見られＡ地区の区画３のような柱穴と考えられるものもあるので、近代の範疇ではあるが建物２より古い時期のものがあったことが推測されよう（第48・49図、図版65・66）。

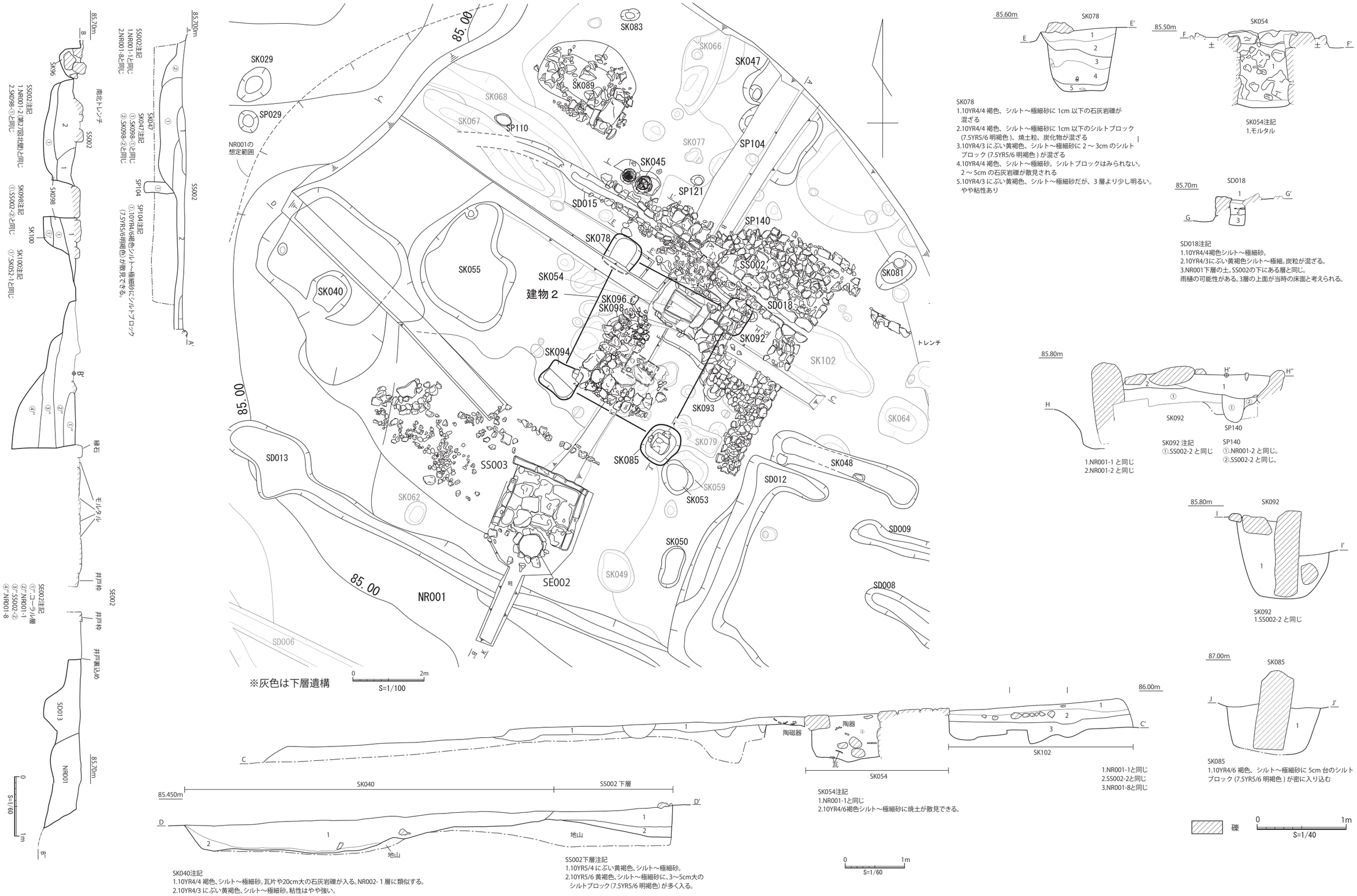


道2
区画6
区画7
区画8
NR001
NR002
NR002（上層）
建物2
NR001の
想定範囲
SD007 注記
1.SD001の1と同じ。
2.SD001の3と同じ。
3.SD001の6と同じだが、1cmのシルトブロックが混ざる。
SD006 注記
1.10YR3/4 暗褐色シルト～極細砂に 2mmのシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色) が混ざる。
2.10YR4/6 褐色シルト～極細砂にシルトブロックが混ざる。
※1 は NR001 の上層、2 は下層に相当 。
SD012注記
1.10YR5/6 黄褐色、シルト～極細砂に、1cm以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) が混ざる。
2.10YR5/8 黄褐色、シルト～極細砂に、3cm大のシルトブロック (7.5YR 5/6明褐色) が多くまざる。
SD013注記
3.10YR4/6 褐色、シルト～極細砂。NR01-下層に対応する。
NR001注記
1.NR001-2(第27図)と同じ。
2.NR001-5(第27図)と同じ。
3.10YR4/6褐色シルト～極細砂に、10～2cm代の石灰岩礫が多く入る。
SD006 注記
1.NR001-2と同じ
2.NR001-3と同じ
3.NR001-5と同じ

第 44 図　区画７遺構図

図版 57　道２（上…東より　中左…西より　中右…ＳＤ 006 断面　下左…ＳＤ 006 遺物出土状況
下右…左よりＳＤ 006・013・012）

図版 58　区画８建物２周辺（上…空中写真　下…西より）



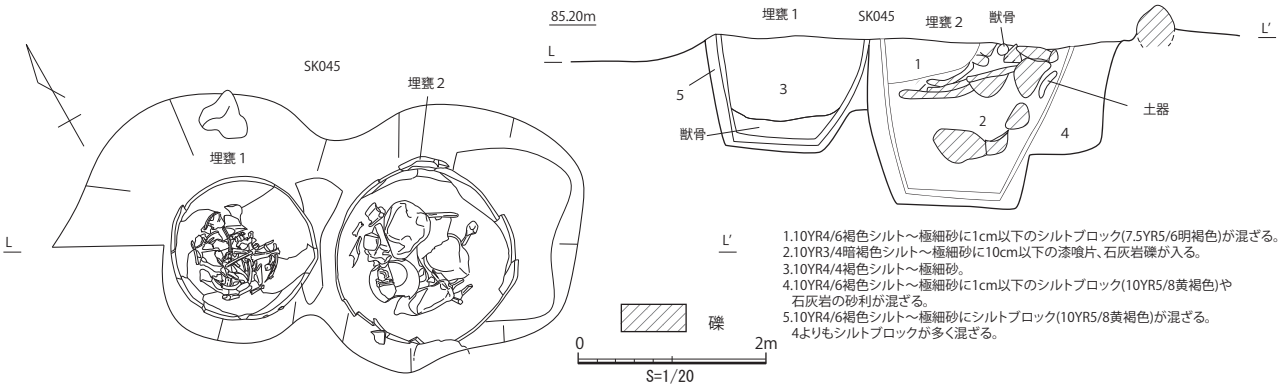
第 45 図　区画８建物２（ＳＳ 002）遺構図

図版 59　区画８建物２周辺（東より）

図版 60　区画８建物２石柱（左…ＳＫ 092　右…ＳＫ 085）

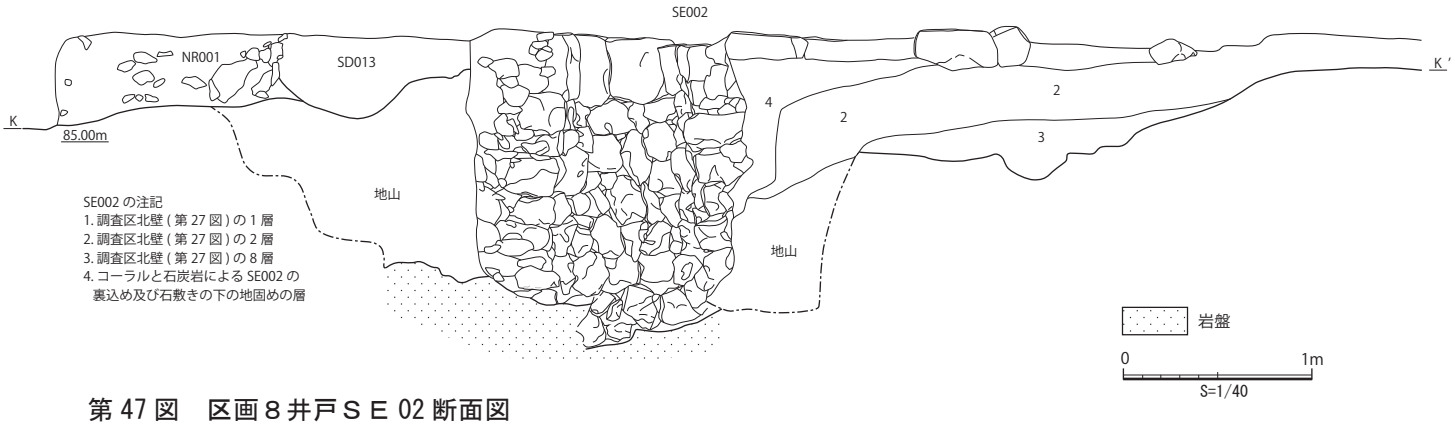
図版 61　区画８建物２石柱（左…ＳＫ 054　右…ＳＫ 085）

図版 62　区画８建物２（ＳＳ 002）周辺下層断面　（左…ＳＫ 040 との切り合い　右…ＳＳ 02 造成層）



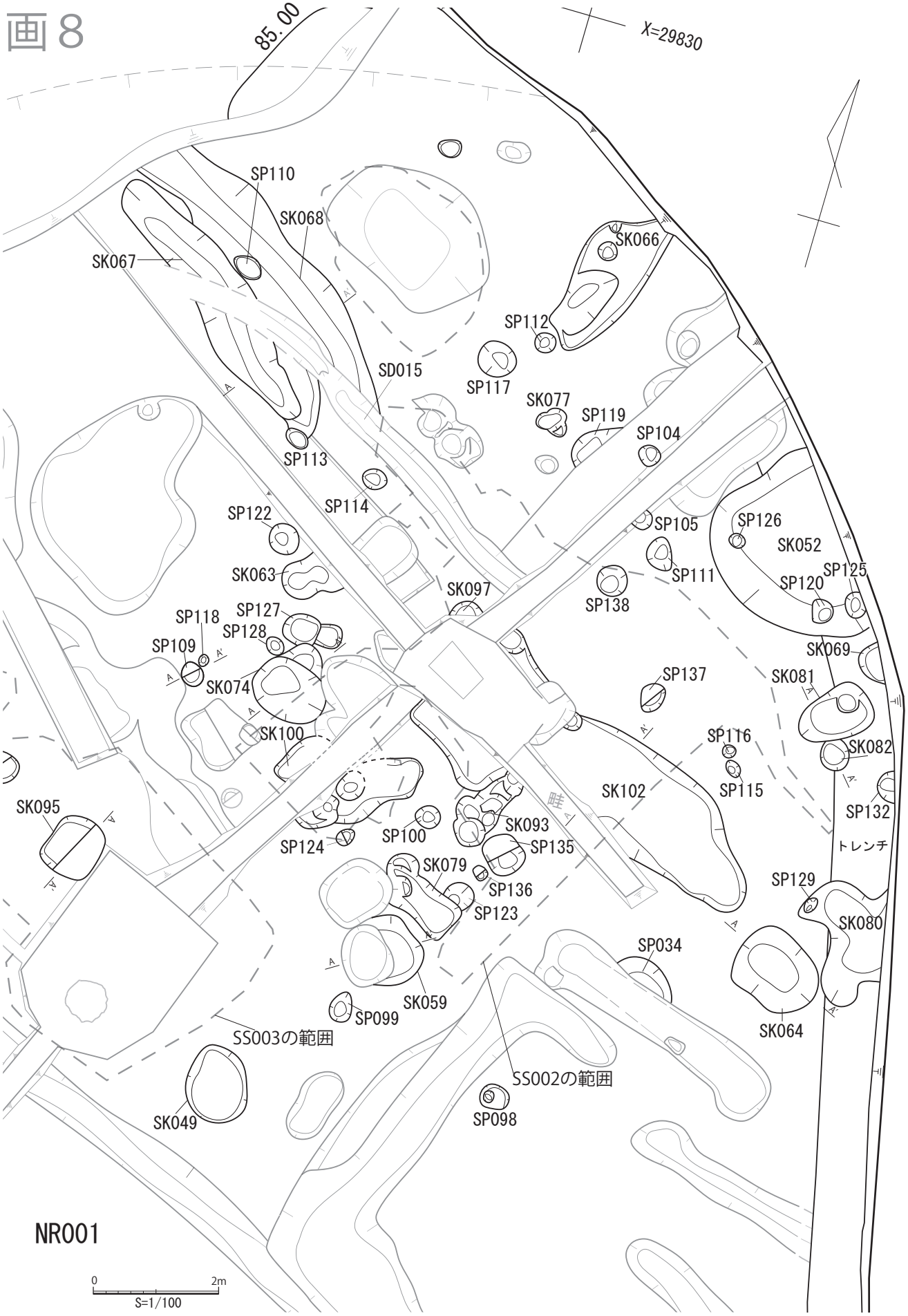
第 46 図　区画埋甕８ＳＫ 045 遺構図

図版 63　区画８埋甕ＳＫ 045(北より)

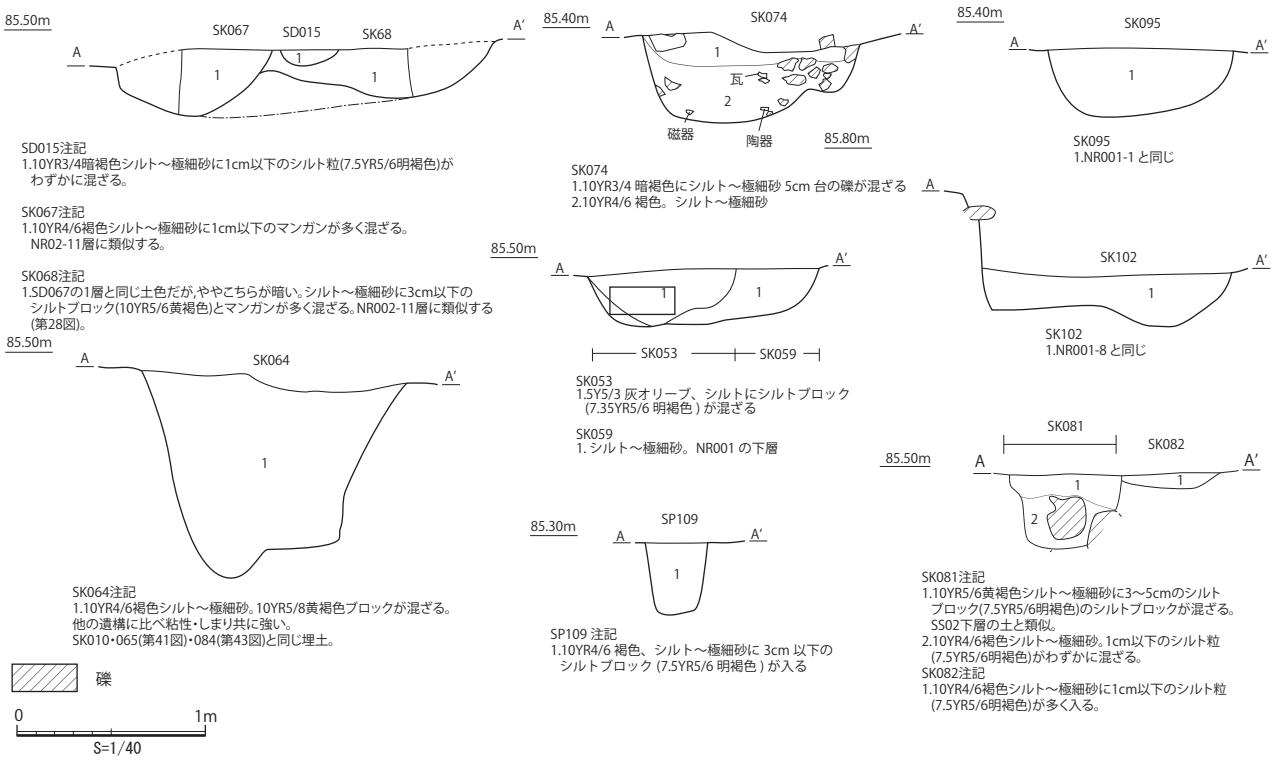


第 47 図　区画８井戸ＳＥ 02 断面図

図版 64　区画８井戸ＳＥ 002　（左…南より　右…断ち割り東より）



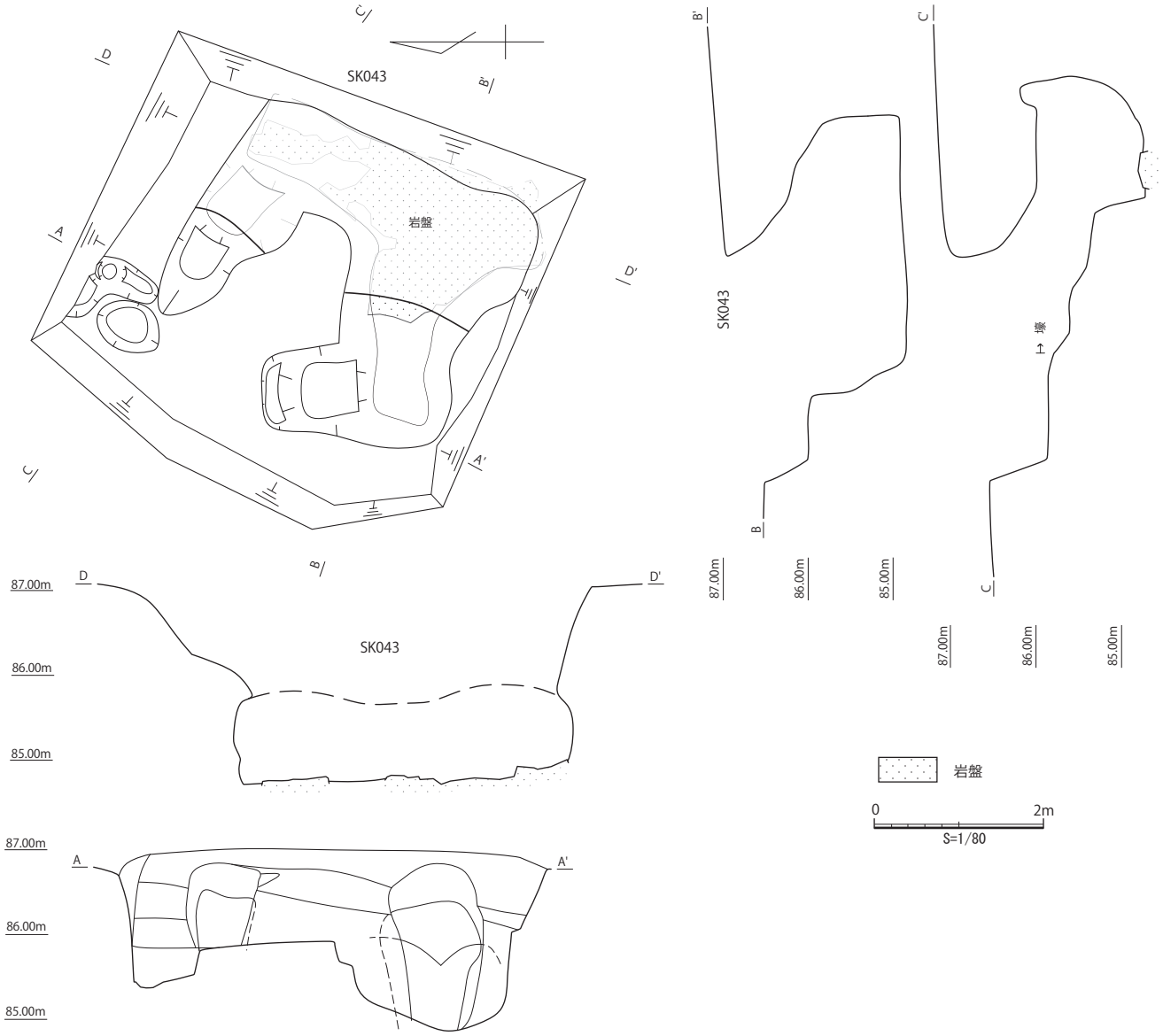
第 48 図　区画８ＳＳ 002 下層遺構図



第 49 図　区画８ＳＳ 002 下層遺構断面図

図版 65　区画８ＳＳ 002 下層遺構（東より）

図版 66　区画８ＳＳ 002 下層遺構断面　（左…ＳＫ 074　右…ＳＫ 095）

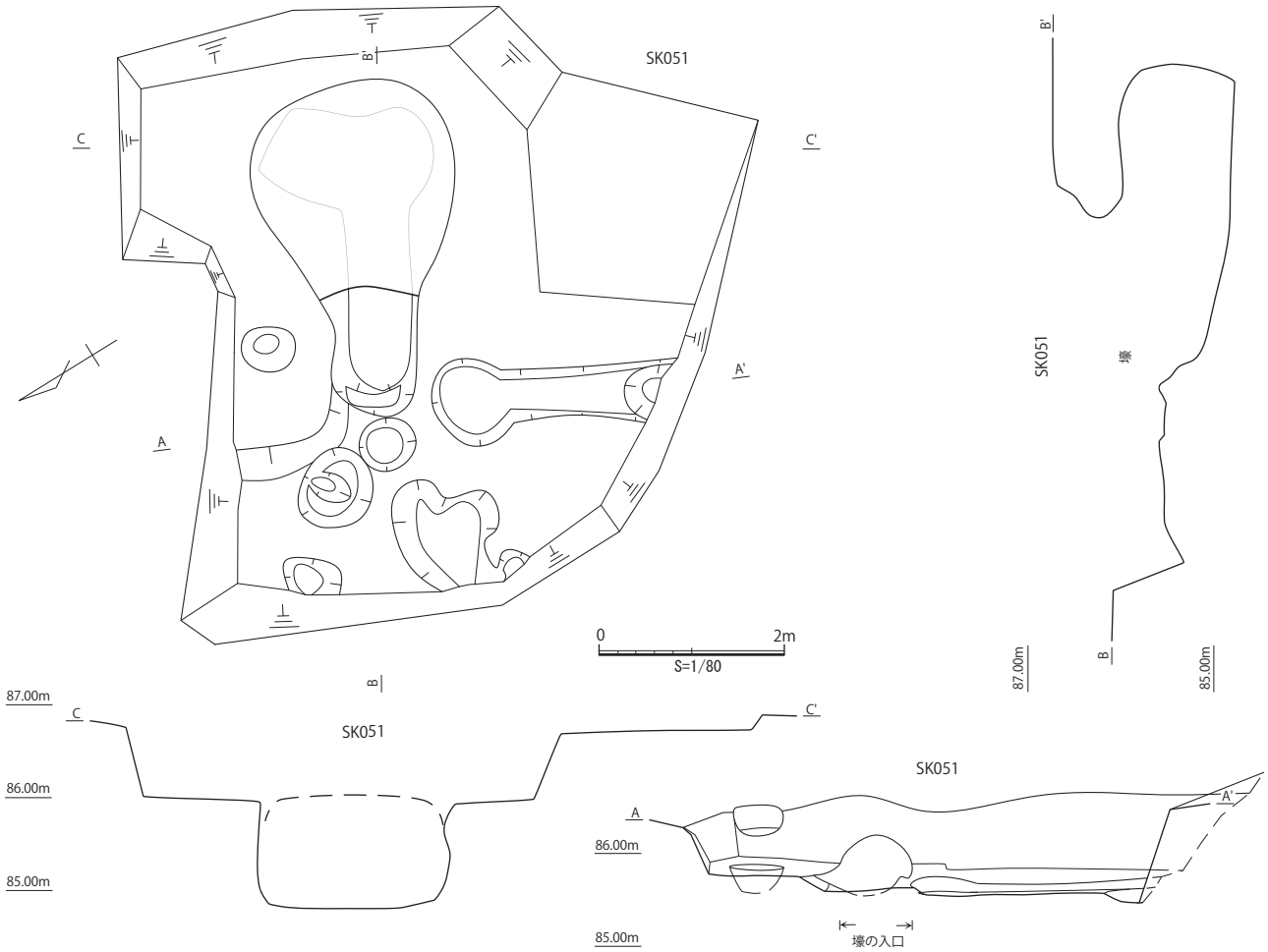


第 50 図　区画８壕ＳＫ 043 遺構図

B 地区の東端には、壕ＳＫ 043 とした壕口２ヶ所を現地踏査で確認していた。一方、10 m北方に窪みがあり重機で掘削したところ壕口を確認したので壕ＳＫ 051 とした。調査はトレンチを設定して壕口を検出し記録をとった後、安全確保のため重機で天井部を除去して調査を進めた。

壕ＳＫ 043 は､北西へ開口する壕口が２ヶ所で内部はコ字状につながっている。壕口は北側が幅 0.6 m、高さ 0.8 mで検出時には拳大の礫と遺物が集中していた。それを除去すると、緩やかな２段のテラス状となって、60cm の段差をつけて奥行き 1.6 mで奥壁に至る。一方、南側は屈曲するように壕内に至るがその段差は 1.0 mで階段状になっており、その部分は北側より広く幅 1.5 m、奥行き 1.5 mで奥壁に至る。両壕口から繋がった奥側の空間は、幅 1.2 ～ 1.6 m、長さ 3.8 m、高さ 1.2 mとなっている。なお、南東端は 0.4 × 1.2 mの張り出し状になっていたと考えられるが、天井や壁面の崩落でややプランが崩れてしまった。壕内は上方からの流出土が堆積していたが、天井までは 0.5 ～ 0.8 mの空間があり全ては埋まっていなかった。出土遺物の大半は北側の壕口の埋土からであった。なお、黄燐弾片が出土しているので、この壕内に投げ込んだかは限定できないが、周辺で使用されたことは確かであろう。また、壕口北側の土坑が見られたが、調査区外に続いていることもあり、その関連は不明である (第 50 図、図版 67)。

図版 67　区画８壕ＳＫ 043（上・中…入口西より　下左…天井除去後　下右…内部）



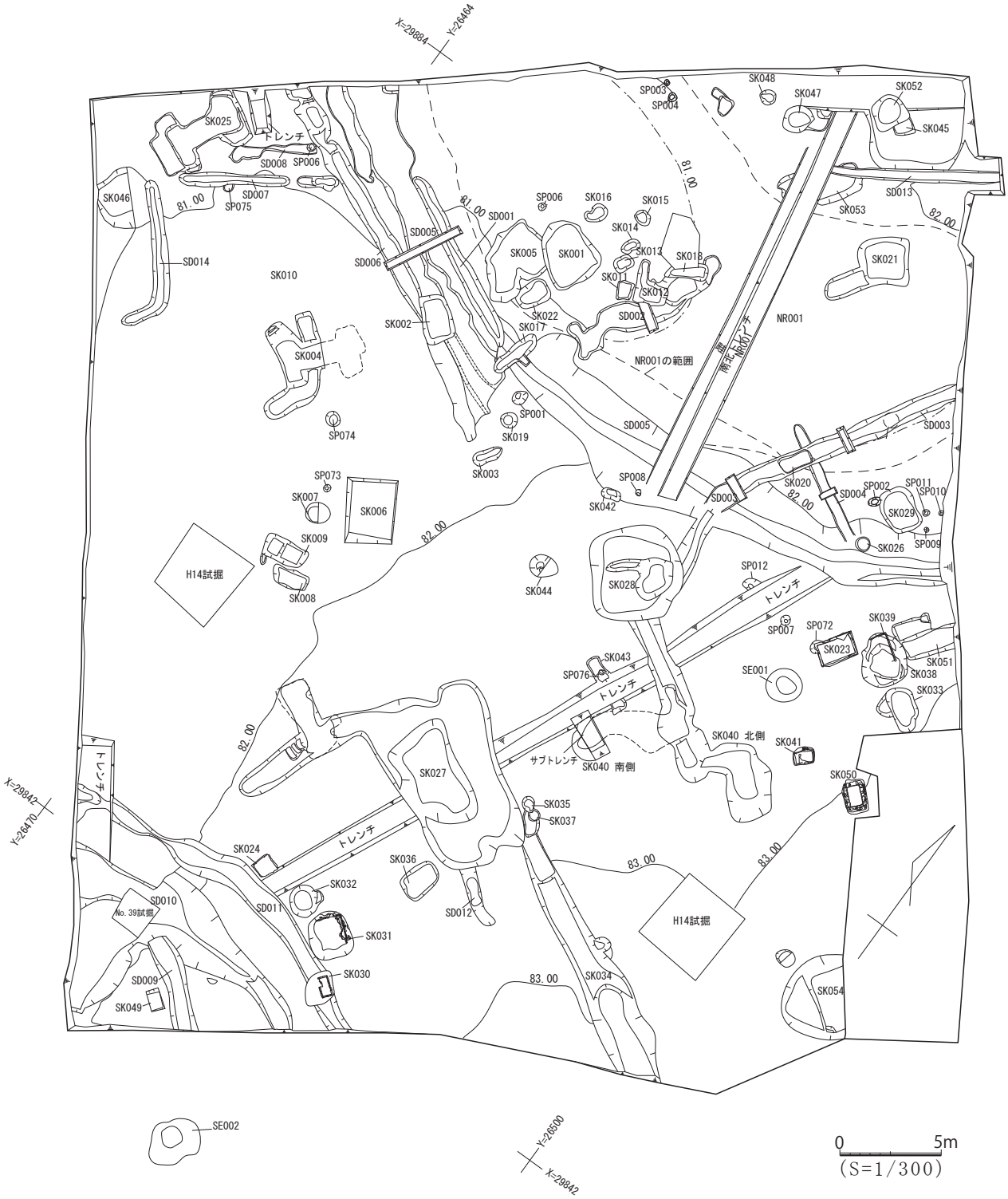
第 51 図　区画８壕ＳＫ 051 遺構図

壕ＳＫ 051 は、北西へ開口する壕口１ヶ所で直進して部屋状の空間に至り、全長は 3.4 mを測る。壕口に至るまでには幅 0.8 m、長さ 1.2 m、深さ 0.4 mの緩やかに掘りこまれた溝状の道があり、そこから高さ 1.3 mで天井部となり、壕内へ続く。壕内へ入ると 0.8 mほど直進し、幅 2.0 m、奥行き 1.2 mの長方形状の部屋に至り、天井までの高さは 1.2 mである。壕口は埋没し若干落ち込んでいた状況であったが、部屋部分の堆積土は 0.2 mほどであった。遺物の大半は壕口の埋土から出土した。壕口周辺には溝や土坑などが見られたが、調査区が狭小でもあるのでその関連は不明である（第 51 図、図版 68）。

図版 68　区画８壕ＳＫ 051（左…入口部北より　右…天井除去後）

３．Ｃ地区

概要　Ｂ地区と同様なグスク時代とされる植栽痕が検出された迫地と、近世・近代の遺構としては区画４つが確認できた。なお、後者は他地区と異なって近世の遺物がほとんど見られないが、耕作地などの可能性は残るため近世・近代と捉えている。その遺構については、石・レンガ囲いの土坑や井戸は確認されたが柱穴と考えられるピットはほとんどなく、沖縄戦時の壕や関連すると考えられる大型土坑が多く確認された。戦前の空中写真（巻頭図版１など）では屋敷地が確認されていたが、1945 年８月時点（巻頭図版２）では既に削平されており、そのために集落に関連する遺構が他地区より少ないものと考えられる（第52図、図版 69・70）。

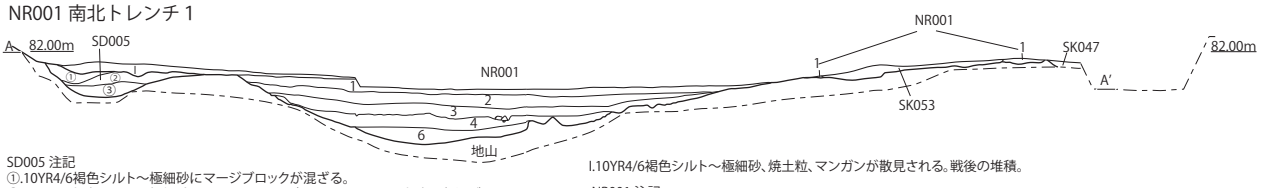


第 52 図　Ｃ地区全体図

図版 69　C地区遠景（東より）

図版 70　C地区空中写真

NR001 南北トレンチ 1



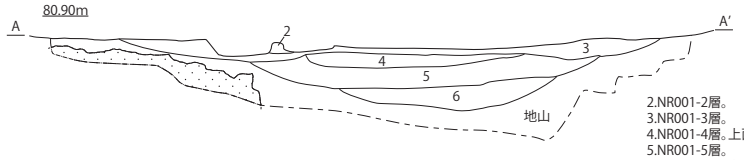
SD005 注記
①.10YR4/6褐色シルト～極細砂にマージブロックが混ざる。
②.10YR4/6褐色シルト～極細砂に1cm下のシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が、混ざる。
③.1と同じで、シルトブロックが混ざらない。

※NR001-5 層は調査区北壁に見られる。

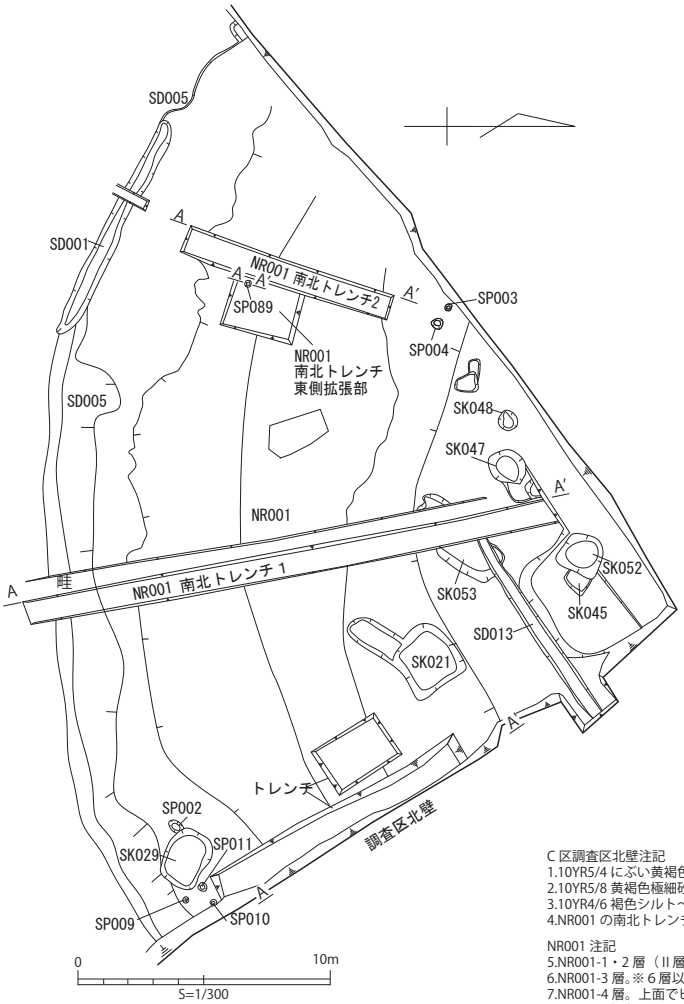
I.10YR4/6褐色シルト～極細砂、焼土粒、マンガンが散見される。戦後の堆積。

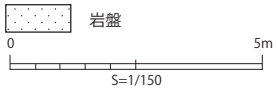
NR001 注記
1.10YR3/4暗褐色シルト～極細砂に、焼土粒が散見できる。NR001-1層（II 層）。
2.1と同じで1よりしまる。NR001-2層（II 層）。
3.10YR3/3暗褐色、シルト～極細砂に焼土粒と炭化物が確認される。NR001- 3 層、以下III 層。
4.1と同じ土色で、シルト～極細砂に焼土粒、炭化物、10YR5/6黄褐色が混ざる。NR001- 4 層。本層上面でピット群検出
6.10YR3/4暗褐色シルト。NR001- 6 層

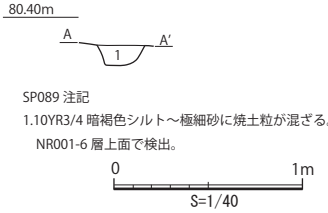
NR001 南北トレンチ 2



2.NR001-2層。
3.NR001-3層。
4.NR001-4層。上面でピット群検出。
5.NR001-5層。
6.NR001-6層。上面でピット群検出。







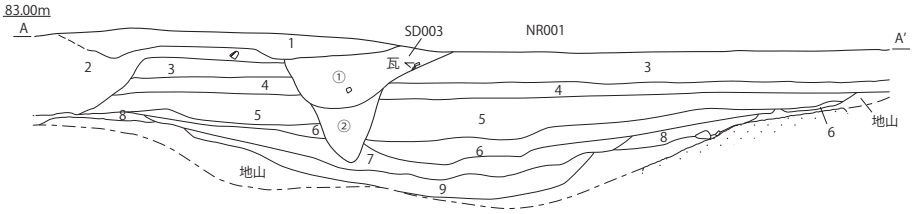
SP089 注記
1.10YR3/4 暗褐色シルト～極細砂に焼土粒が混ざる。
NR001-6 層上面で検出。

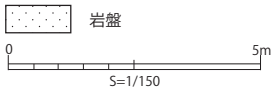
C 区調査区北壁注記
1.10YR5/4 にぶい黄褐色細砂。5ｃｍ以下の石灰岩礫が密に混ざる。現代の客土と思われる。I 層。
2.10YR5/8 黄褐色極細砂。5cm 以下の石灰岩礫が多く混ざる。I 層。
3.10YR4/6 褐色シルト～極細砂。4 層と同じ土色だが、わずかに暗い。II 層。
4.NR001 の南北トレンチ -4 と同じ。II 層。

NR001 注記
5.NR001-1・2 層（II 層）。
6.NR001-3 層。※ 6 層以下はIII 層。
7.NR001-4 層。上面でピット群検出。
8.10YR4/4 褐色シルト～極細砂に 2cm 台のシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色) が多く混ざる。やや粘性あり。NR001-5 層。
9.NR001-6 層。

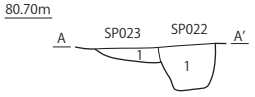
SD003注記
①.10YR4/6褐色シルト～極細砂に1～3cm代のシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が少量入る。
②.10YR4/4褐色シルト～極細砂に3cm以下のシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が散見される。

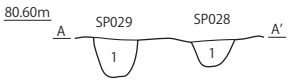
調査区北壁



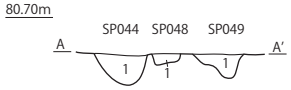


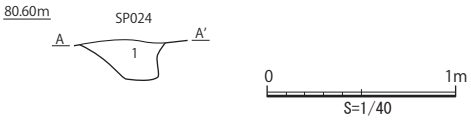
第 53 図　C地区壁面図





埋土の土色は、SP022,SP023,SP024,SP029,SP028,SP044,SP048,SP049
すべて NR001-3(第 53 図) と同じ。





第 54 図　C地区ＮＲ 001 遺構図

図版 71　Ｃ地区ＮＲ 001

図版 72　Ｃ地区ＮＲ 001 トレンチ２下層（左…検出状況　右…土器もしくは焼土片出土状況）

図版 73　Ｃ地区ＮＲ 001 下層
ＳＰ 089 断面

層序　Ⅰ層は 5 cm 以下と非常に薄く、B 地区と同様で工事業者による表土剥ぎで多くは除去された。Ⅱ層は南東側が 10cm 以下と薄く、西側に向かって 50 ～ 80cm 程度堆積している。Ⅲ層は北西に位置し調査区外に伸びるＮＲ 001 下層で見られる（第 53 図、図版８）。

グスク時代　先述したⅢ層が堆積する NR002 で検出された迫地であるが、幅３～５ｍで東西方向に伸び調査区外へ続いている。NR001 の堆積はⅡ層から見られており、Ⅲ層はその直下に堆積している。Ⅲ層で細分された 4 層上面では、西側を中心に B 地区ＮＲ 001 と同様な植栽痕とされるピット群が検出された。この下層を２ヶ所のトレンチ設定し掘り下げたところ、さらに 6 層上面でも径 10cm のピットと

図版 74　Ｃ地区ＮＲ 001 中層遺構（上…東より　中…断面　下左…ピット群検出状況　下右…ＳＰ 024 断面）

土器か焼土と思われる小片が確認された。これらのピットから明確な遺物は出土していないが、既往の調査や第４章第１節で記述する年代測定により、グスク時代以前と推定される（第 54 図、図版 71 ～ 74）。

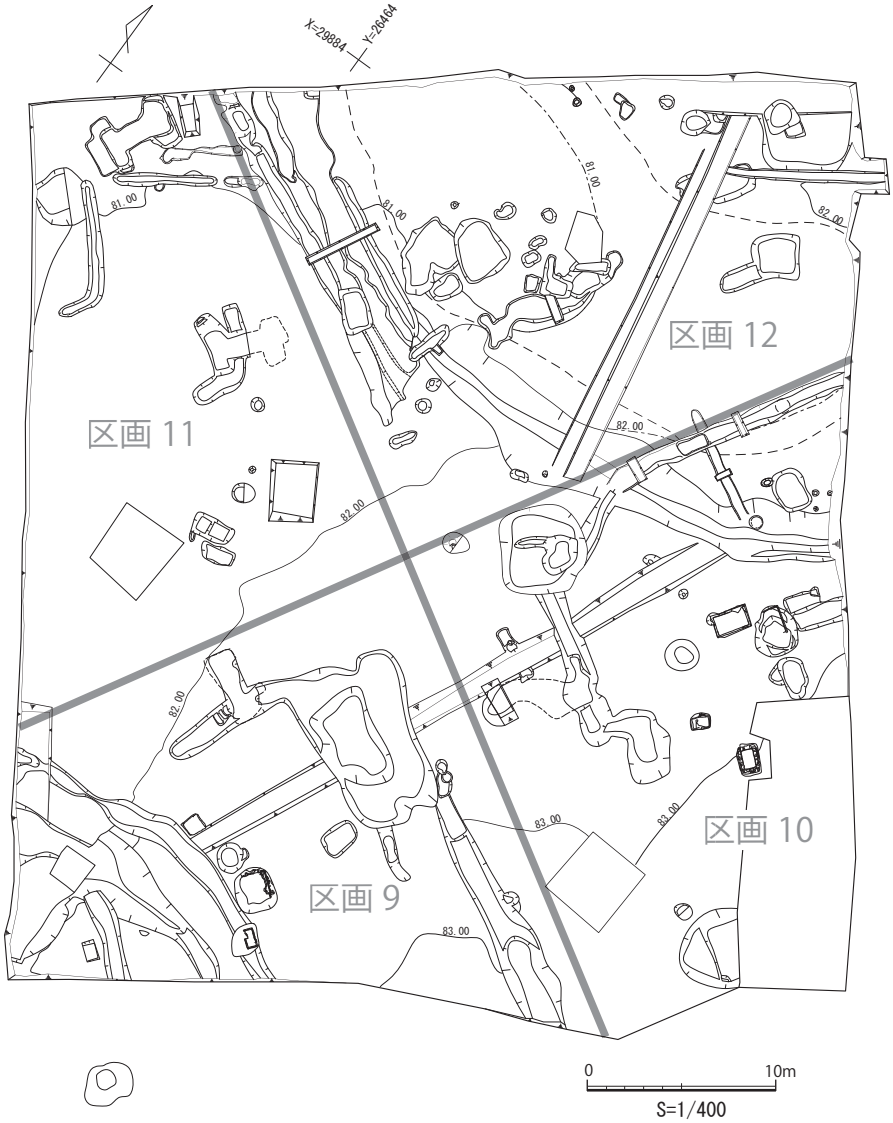
近世・近代　他地区と比べると、明確に道と認定できる遺構はなかったが、戦前の空中写真を参考にして溝の方向・位置と遺構の密度から、区画９～ 12 を設定した。先述したように、大型の土坑を中心として検出されており、戦後間もない頃の造成により削平を受けたことが想定される。一方、ＮＲ 002 とそれに並行するＳＤ 005 の東側はこれらの区画とは異なっている。この出土遺物は多くはないが近世・近代が主体で戦後と限定できるものはないことから、区画９～ 12 より古い遺構といえる (第 55 図)。

区画９　北はＳＫ 034、西は壕ＳＫ 027 付近の遺構分布から設定した。一方、区画南半のＳＤ 009 ～ 011 は隣接または切り合いながら概ね東西方向を志向しているが、南の境界そのものとするには北に寄っている。また、ＳＤ 011 は石囲い土坑であるＳＫ 030 に切られており、区画以前の遺構である可能性も否定できない。しかしながら、ＮＲ 001 に比べると溝自体は小規模であるので判然としない (第 56 図、図版 75・76)。

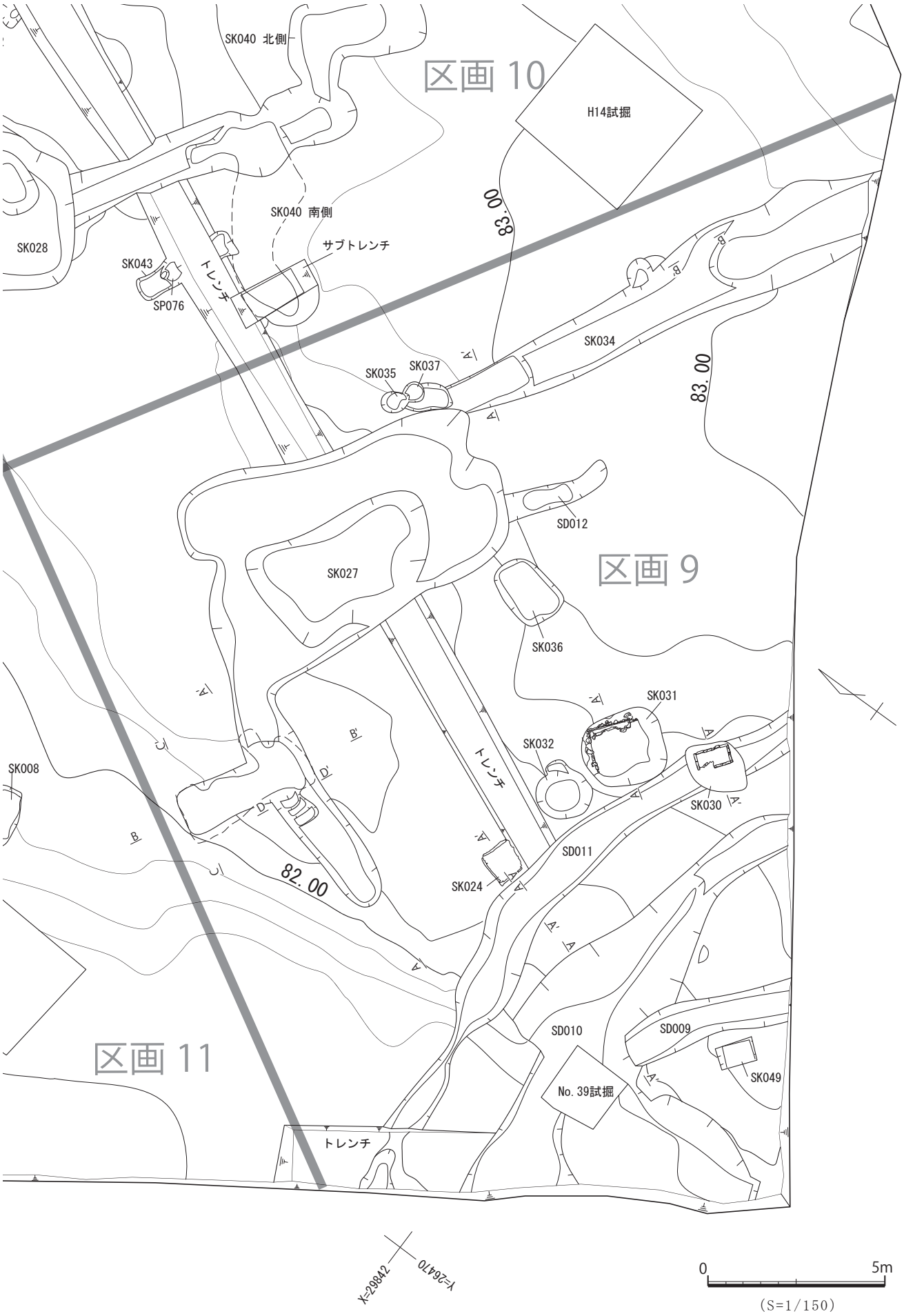
北の境界に位置するＳＫ 034 は幅 0.8 ～ 2.4 m、深さ 30 ～ 50cm、長さ 30 m以上の溝として認識できる遺構である。ただ、床面は部分的に段を有しており、沖縄産陶器壺が集中して出土し埋甕の可能性も見られるなどから、検出時では天井部はなかったが沖縄戦に伴う壕的な利用があった可能性もあり、溝と断定しなかった。この西端に接するＳＫ 035・037 は深さ 50 ～ 70cm で径１ｍの円形土坑であり、沖縄戦に伴うものとするとタコツボなどと考えられる（第 57 図、図版 77)。

西の境界に位置する壕ＳＫ 027 は、５×８ｍの不整な方形土坑の南西端に壕部分となる突出部が取り付く複雑な形態である。突出部は幅 2.0 ｍで、その南側に北へ 1.1 ｍ下る３段の階段が見られ、西・東・北の３方向が壕部分で部屋状になっている。部屋状の部分は、西と東が 0.8 × 1.6 ｍ、北が 0.4 × 0.8 ｍ、高さは崩落しているが１ｍ程度であったことが推測される。出土遺物には本土産近代磁器皿や鉄鍋・鉄鍬などが出土した。長大な土坑部分と壕部分の埋土に明瞭な違いは見られなかった (第 58 図、図版 78・79)。

他に、ＳＫ 024 は内法幅 0.8 ｍ、長さ不明のセメント囲い、ＳＫ 030 は内法 0.4 × 0.8 ｍの床面モルタルでレンガ囲い、



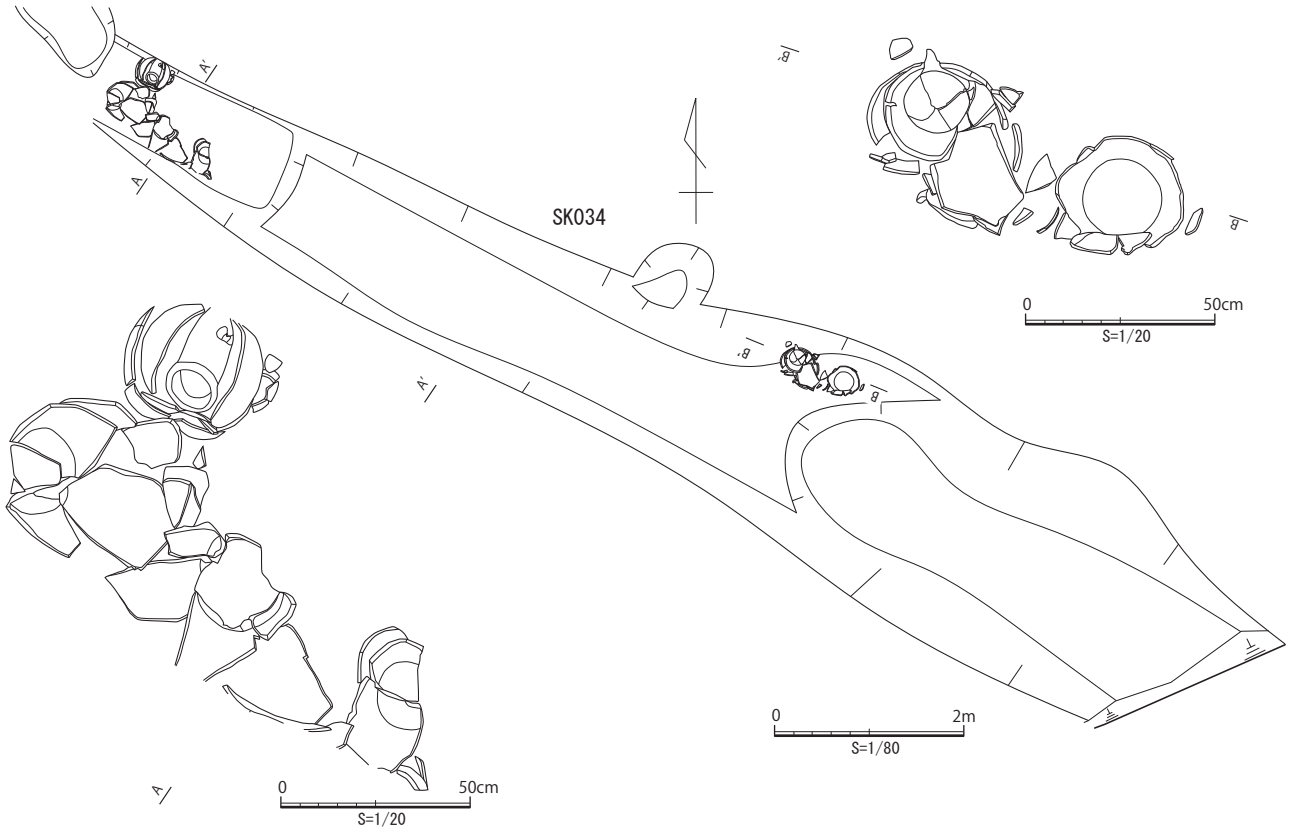
第 55 図　Ｃ地区近代遺構区画割


区画 10
区画 9
区画 11
SK040 北側
SK040 南側
H14試掘
SK028
SK043
SP076
トレンチ
サブトレンチ
SK034
SK035
SK037
83.00
SD012
SK027
SK036
SK031
SK032
SK030
SK008
SD011
SK024
82.00
SD010
SD009
SK049
No. 39試掘
トレンチ
X=29842
Y=26470
0
5m
(S=1/150)

第 56 図　区画９遺構図

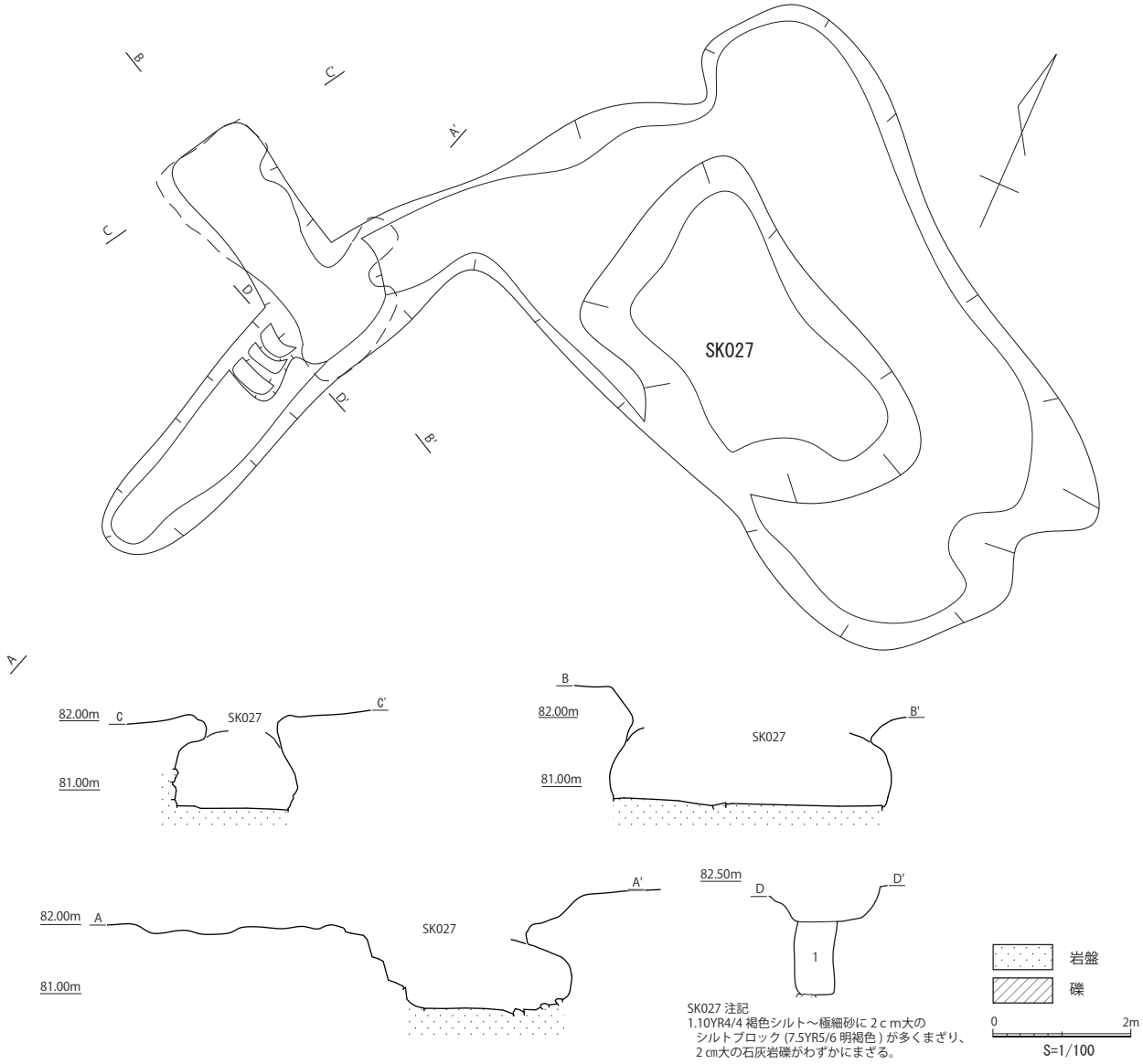
図版 75　区画９空中写真

図版 76　区画９ＳＤ 011・010・009（西より　左から順に）



第 57 図　区画９ＳＫ 034 遺構図

図版 77　区画９ＳＫ 034 全景（左…東より　右上…沖縄産陶器壺出土状況・東側　右下…同・西側）



第 58 図　区画９壕ＳＫ 027 遺構図

図版 78　区画９壕ＳＫ 027 全景（東より）

図版 79　区画９壕ＳＫ 027 部分詳細（左…階段　右…西側部屋）

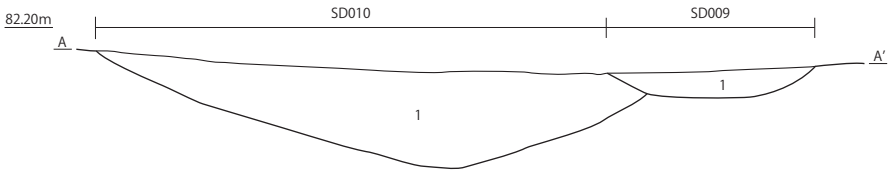
図版 80　区画９ＳＫ 024（東より）

図版 81　区画９ＳＫ 031（東より）

図版 82　区画９ＳＫ 030（左…南より　右…埋土堆積状況）

図版 83　区画９ＳＫ 035 断面（西より）

図版 84　区画９ＳＫ 035・037（西より）

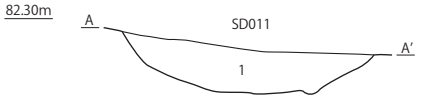


SD009注記

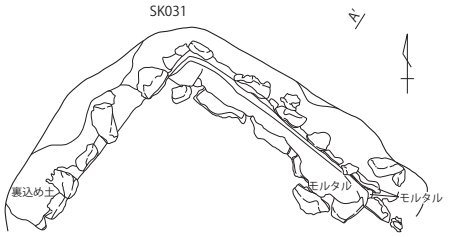
1.10YR4/4褐色　シルト～極細砂に1cm以下の焼土粒や炭化粒が入る

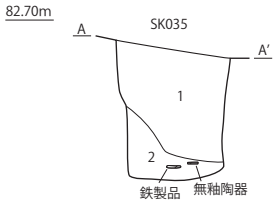
SD010注記

1.10YR4/6褐色　シルト～極細砂に0.5mm以下の炭化粒がわずかに入る



SD011注記
1.10YR4/6褐色　シルト～極細砂に1cm以下のシルトブロックが少量入る

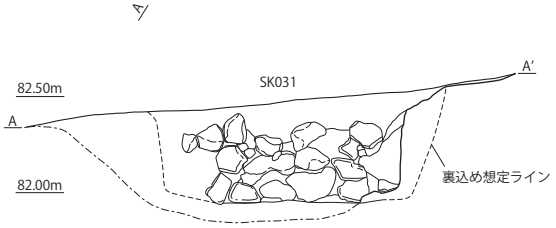


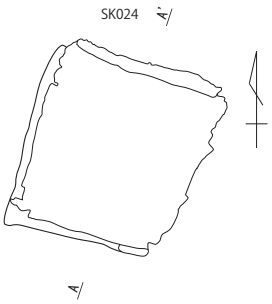


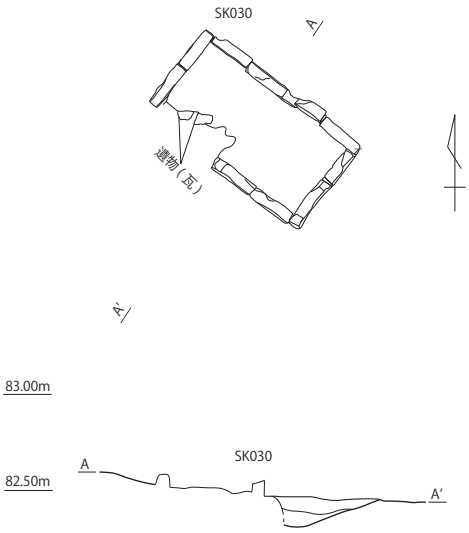
SK035 注記

1.10YR4/4 褐色シルト～極細砂。まだらに 10YR4/6 褐色のシルト～極細砂の砂の土が多く入り、1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) がわずかに点在する。

2.10YR5/6 黄褐色シルト～極細砂に 1cm 以下のシルト粒 (7.5YR5/6 明褐色) がわずかに点在する。







0　1m
S=1/40

第 59 図　区画９ＳＫ 031 ほか遺構図

ＳＫ 031 は推定だが内法 1.2 四方のモルタルを塗布した石囲いを各々設けた土坑などが見られた（第 59 図、図版 80 ～ 84）。また、調査対象外の井戸ＳＥ 002 も本区画内に含まれよう。

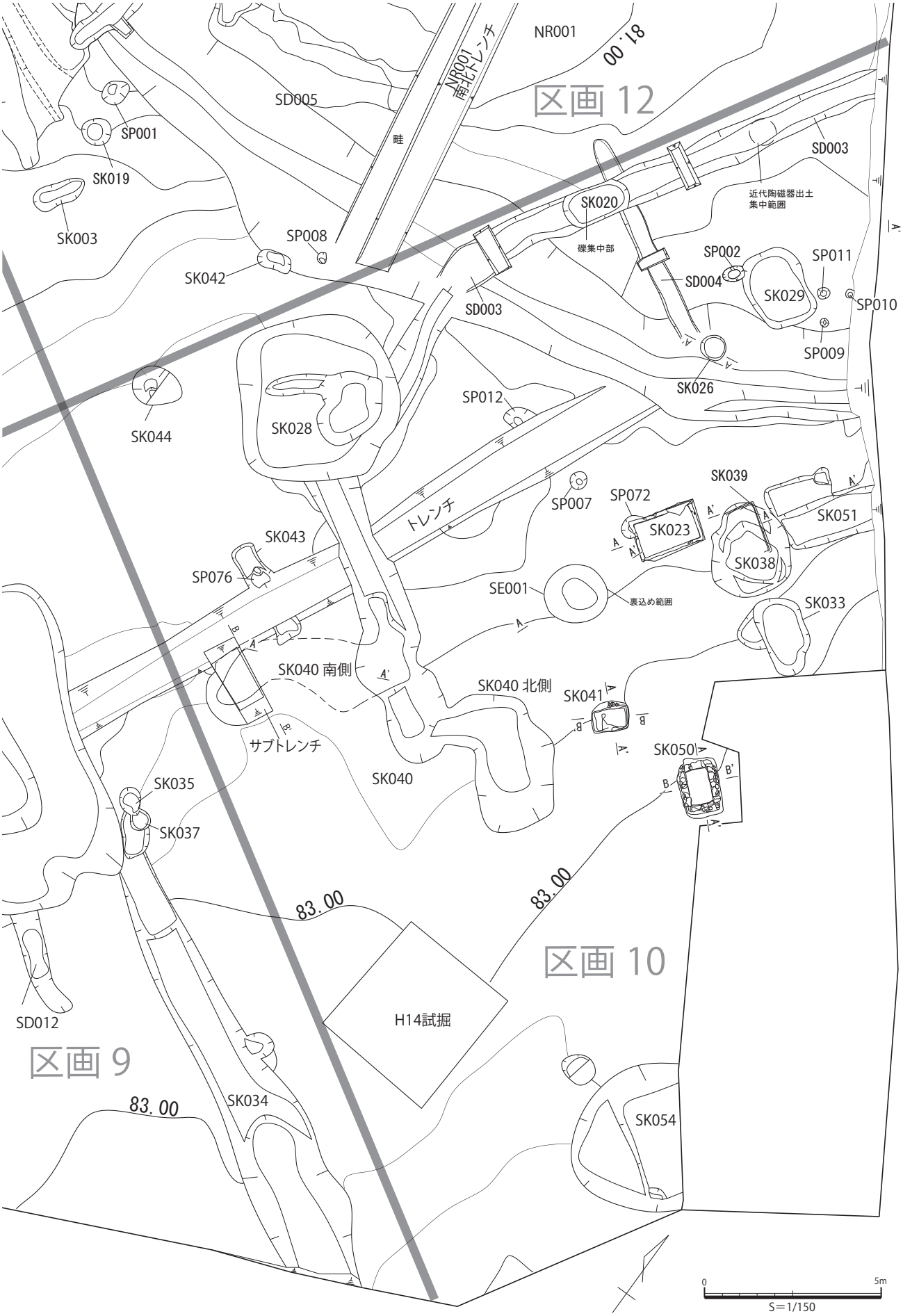
区画 10　南は区画９、西はＳＤ 003 によって区画を認識しているが、本来の屋敷地の境界かは分からない (第 60 図、図版 85)。

ＳＤ 003 は、ＮＲ 002 のⅢ層面で検出した段階は幅 0.9 m、深さ 0.2 mであったが、調査区北壁面ではⅡ層上面で確認されており、本来は幅 1.2 m、深さ 1.0 ～ 1.2 m程度であったものと考えられる。検出時には北壁沿いに本土産近代磁器碗・皿がまとまって出土した（図版８・87）。また、SD003 との切り合いは明確ではないが、その中央付近で検出された SK020 は、0.9 × 1.8 mの長方形プランで壁面に A 地区ＳＫ 041・078 でみられた足掛かりとした同種の幅 0.2 mの凹みがあり、出土遺物には軍靴や缶などがある（第 64 図、図版 92)。さらに溝の南端は長大な土坑ＳＫ 028 と接しており、その先は壕ＳＫ 040 に続いている。このような状況から A・B 地区で見られたように、この溝も沖縄戦時に日本軍が構築した交通壕の役割を担った可能性がある。

ＳＫ 028 は、4.5 m四方のやや不整な方形プランで、大きく２段掘りとなっており最深は 1.9cm の長大な土坑である。先述したように北はＳＤ 003、東は壕ＳＫ 040 が取り付く形になる。出土遺物には外国製ガラス瓶などが出土している（図版 86)。

壕ＳＫ 040 は、溝状に検出された北側と、壕部分の南側で構成される。北側は幅 1.0 ～ 2.0 m、長さ

図版 85　区画 10 空中写真



第 60 図　区画 10 遺構図

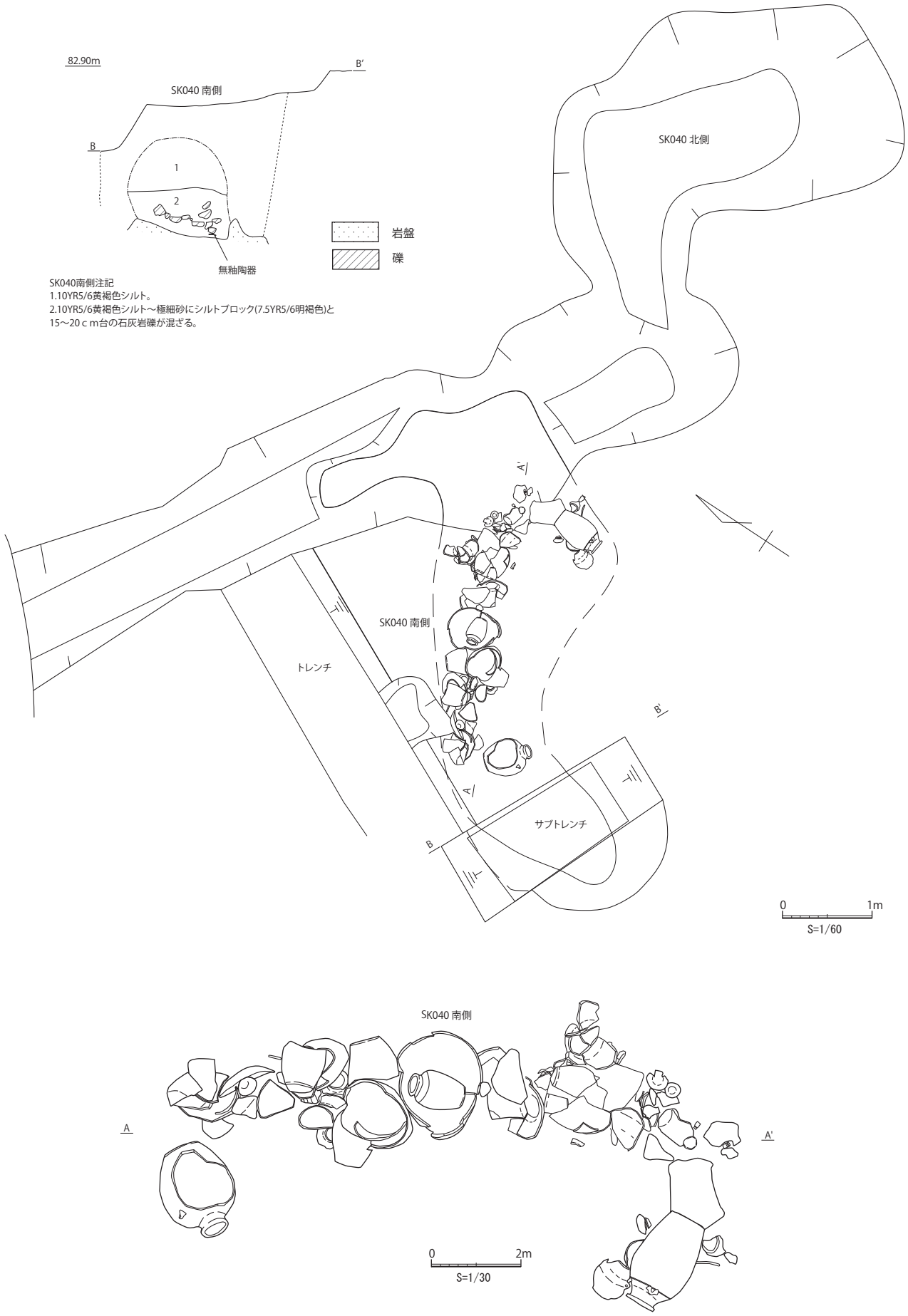
図版 86　区画 10 ＳＫ 028（東より）

図版 87　区画 10 ＳＤ 003（西より）

図版 88　区画 10 ＳＫ 038 断面（西より）

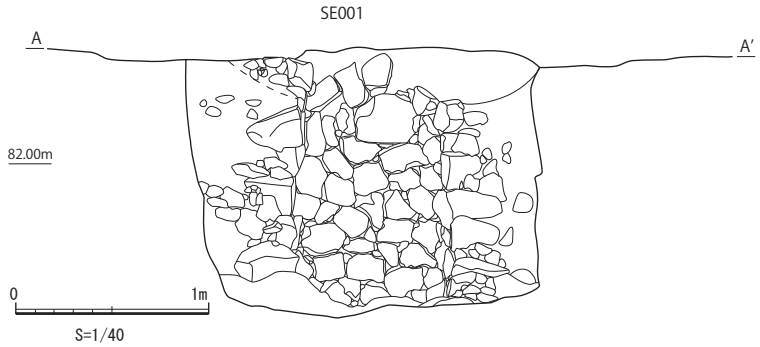
10 mにわたり、東側は屈曲した部分をもつ深さ・幅共に 0.8 ～ 1.1 mの溝状で、検出時は天井部がなかった。その中央付近では南へ分岐し壕部分に至り、この壕部分については重機で天井部を除去し調査を進めた。その規模は、幅 1.0 ～ 2.0 m、一部の断面によるが高さは 1.0 m、長さは 4.4 mを測る。当初、南端では長さ 1.0 ～ 1.5 mほどの楕円形プランを検出しており、この深さが 0.5 m以上となったためサブトレンチを設定し、壕の一部であることが判明した。ただ、この南端部分が本来の壕口に当たるかどうかは、安全面を優先し重機で掘削したため明確にできなかった。その後、サブトレンチの北側を重機で掘削し、壕部分の床面を検出することにしたが、この時点で全て埋没した状態であった。この床面には沖縄産陶器壺を中心に多くの遺物が出土した (第 61 図、図版 89)。

区画内の遺構としては、井戸ＳＥ 001 は内径 0.8 mの石積み井戸でその掘り形の径 1.6 mと井戸枠としては今回の調査では最も広い（第 62 図、図版 90)。ＳＫ 026 は、径 0.7 m、深さ 0.25



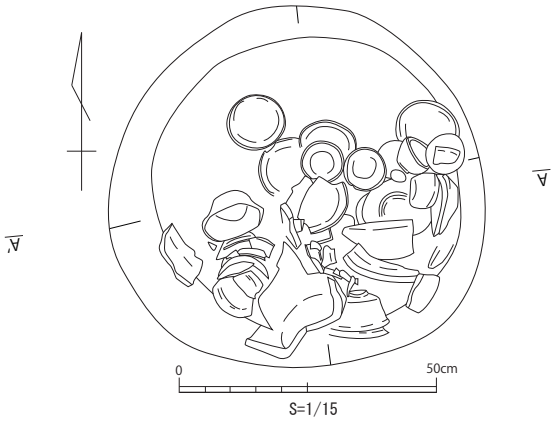
第 61 図　区画 10 ＳＫ 040 遺構図

図版 89　**区画 10 ＳＫ 040**（上…遺物出土状況東より　中左…南より　中右…断面
下左…完掘東より　下右…北より）



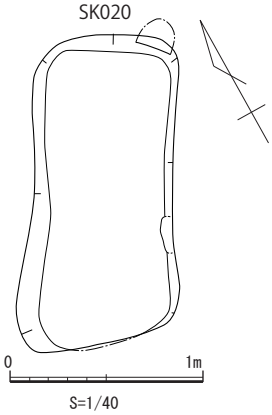
第 62 図　区画 10 井戸ＳＥ 001 遺構図

図版 90　区画 10 井戸ＳＥ 001（東より）



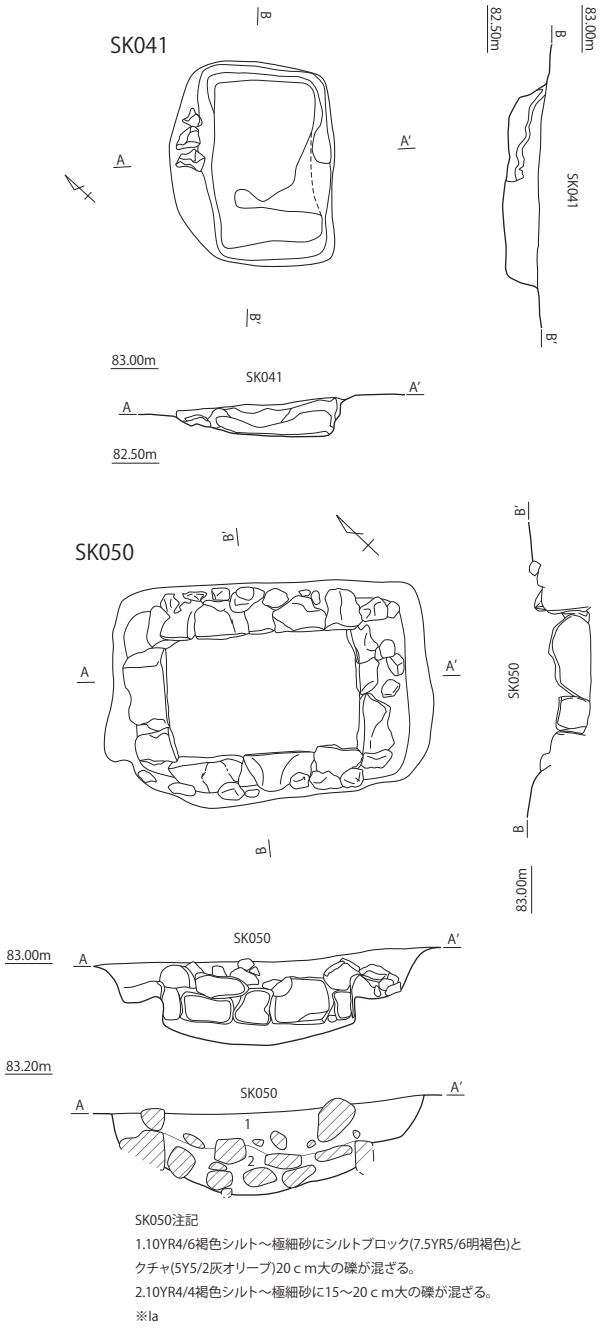
第 63 図　区画 10 ＳＫ 026 遺構図

図版 91　区画 10 ＳＫ 026 遺物出土状況（西より）

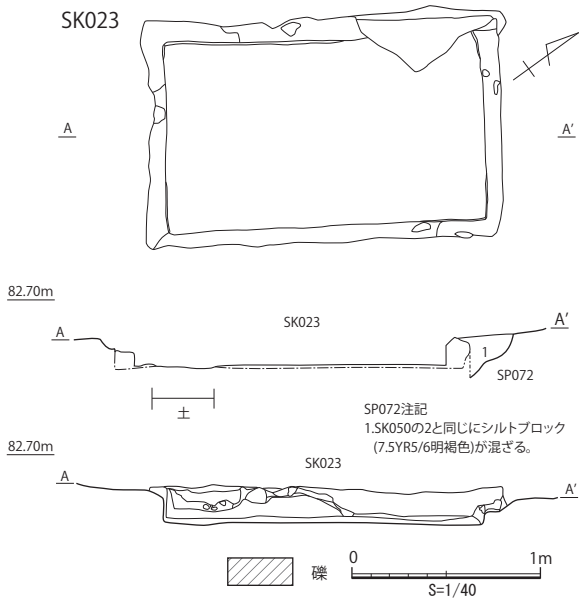


第 64 図　区画 10
ＳＫ 020 遺構図

図版 92　区画 10 ＳＫ 020（左上…完掘　左下…足掛かり　右上…遺物出土状況　右下…拡大）



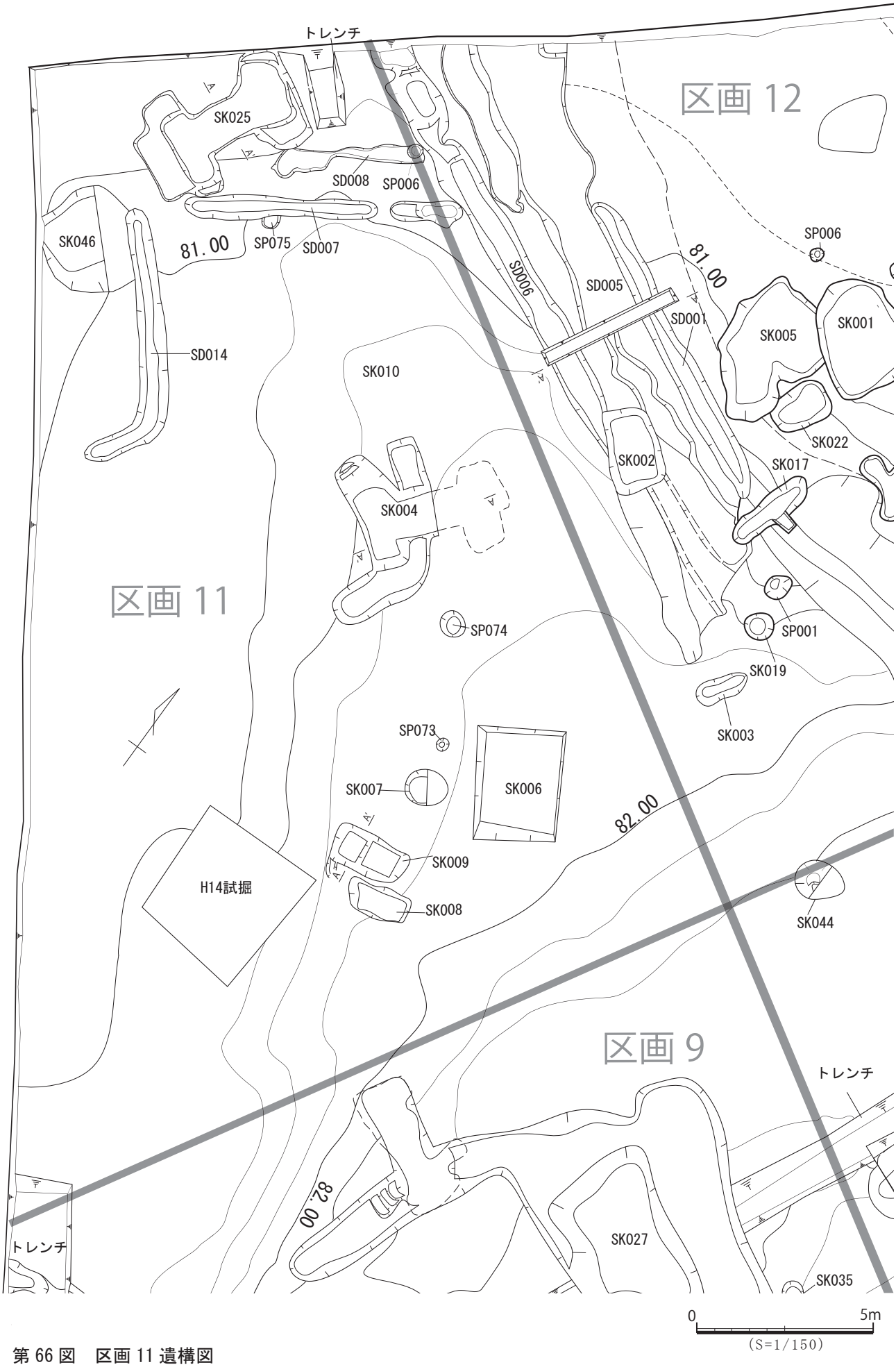
第 65 図　区画 10 ＳＫ 023・041・050 遺構図



図版 93　区画 10 ＳＫ 023（東より）

図版 94　区画 10 ＳＫ 041（南より）

図版 95　区画 10 ＳＫ 050（左…断面南より　右…完掘）

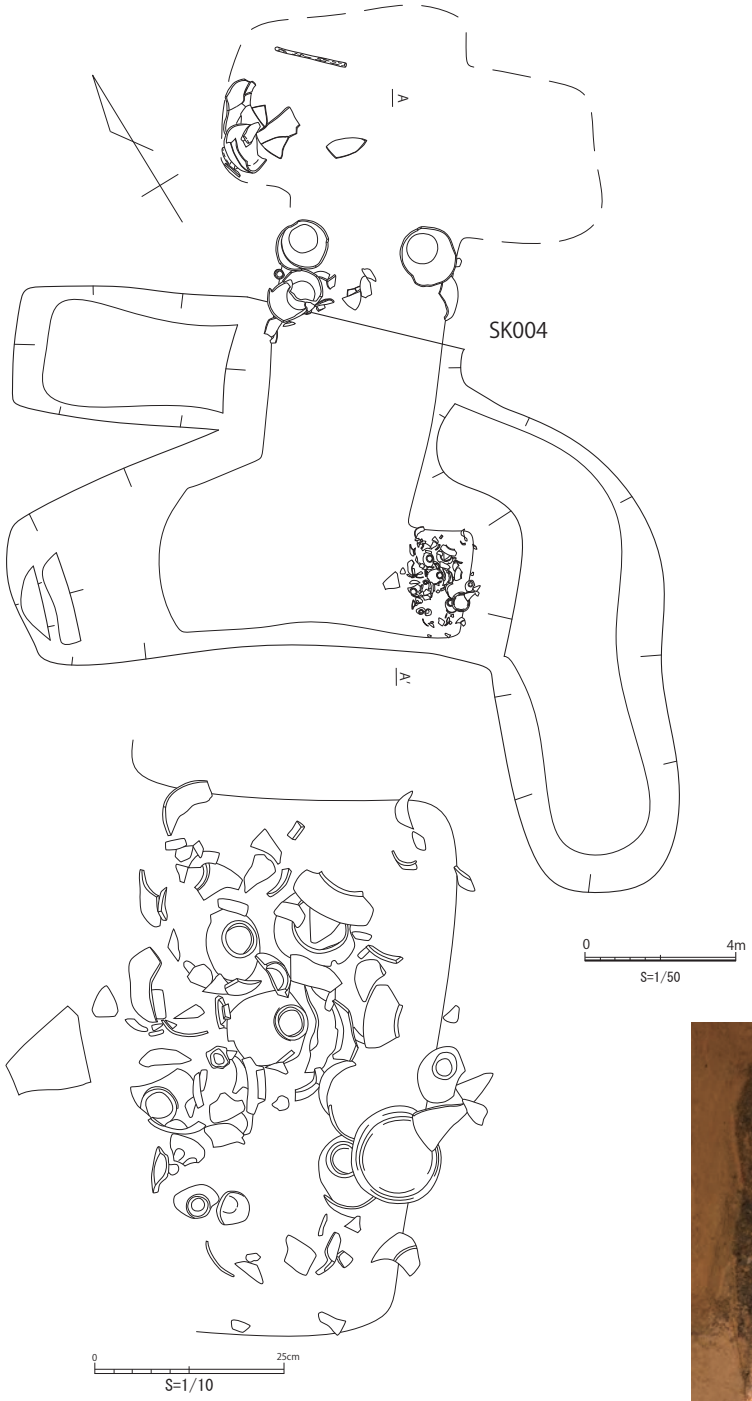


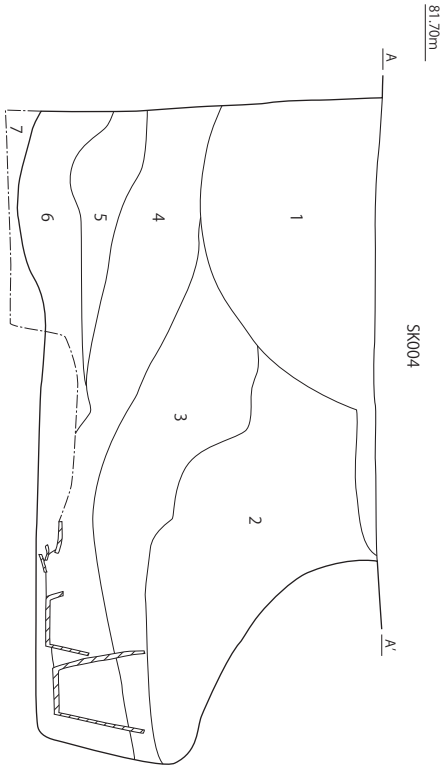
第 66 図　区画 11 遺構図

mの円形土坑で、本土産近代陶磁器碗皿が多く出土しており、埋納したものと思われる（第 63 図、図版 91）。ＳＫ 023 は内法 1.0 × 1.6 mのセメント貼り、ＳＫ 041 は内法 0.5 × 0.9 mのサンゴ礫を固めたいわゆる三和土（タタキ）貼り、ＳＫ 050 は内法 0.6 × 1.0 mの石囲いの土坑が見られた（第 65 図、図版 93 ～ 95）。また、ＳＫ 039 はＳＫ 041 と同様な三和土貼りの土坑であったが、礫が多く混じったＳＫ 038 に切られている（図版 88）。

区画 11　遺構の分布状況から、東は区画９、北は区画 12 によって設定している。遺構としては、壕や大型の土坑が中心に見られ、その遺構分布は散漫である。なお、西側に見られるＳＤ 007・008・014 などは現在の普天間飛行場内の滑走路と同方向および対向であるため、戦後以降と考えられる（第 66 図）。

壕ＳＫ 004 は、検出時点では天井部がなかった南側と壕部分の北側に分かれており、その形態は複雑であるが、壕部分を含めた全長は 3.9 m、床面までの深さは 1.6 mを測る。南側においては西方がスロー





SK004注記
1.10YR4/4褐色　シルト～極細砂に約2cmのシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が少量入る。局所に30cm代のシルトブロックも見られる
2.10YR5/8黄褐色　シルト～極細砂に10YR4/4褐色シルトが少量まだらにまざる
3.10YR3/4暗褐色　シルト～極細砂に15～5cm代のシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が多く入る
4.10YR5/6黄褐色　シルト～極細砂　褐色暗褐色のような暗い土は入らずに層は明るい色を呈している
5.10YR4/6褐色　シルト～極細砂に10～5cm代のシルトブロック（7.5YR5/6明褐色）が多くまだらに入る
6.4層と同じ土色　シルト～極細砂　しまり、粘性がやや強いため4層と分けられる
7.4層と同じ土色　シルト～極細砂 10YR4/4 褐色のシルトが少量まだらにまざる しまり、粘性やや強い

第 67 図　区画 11 壕ＳＫ 004 遺構図

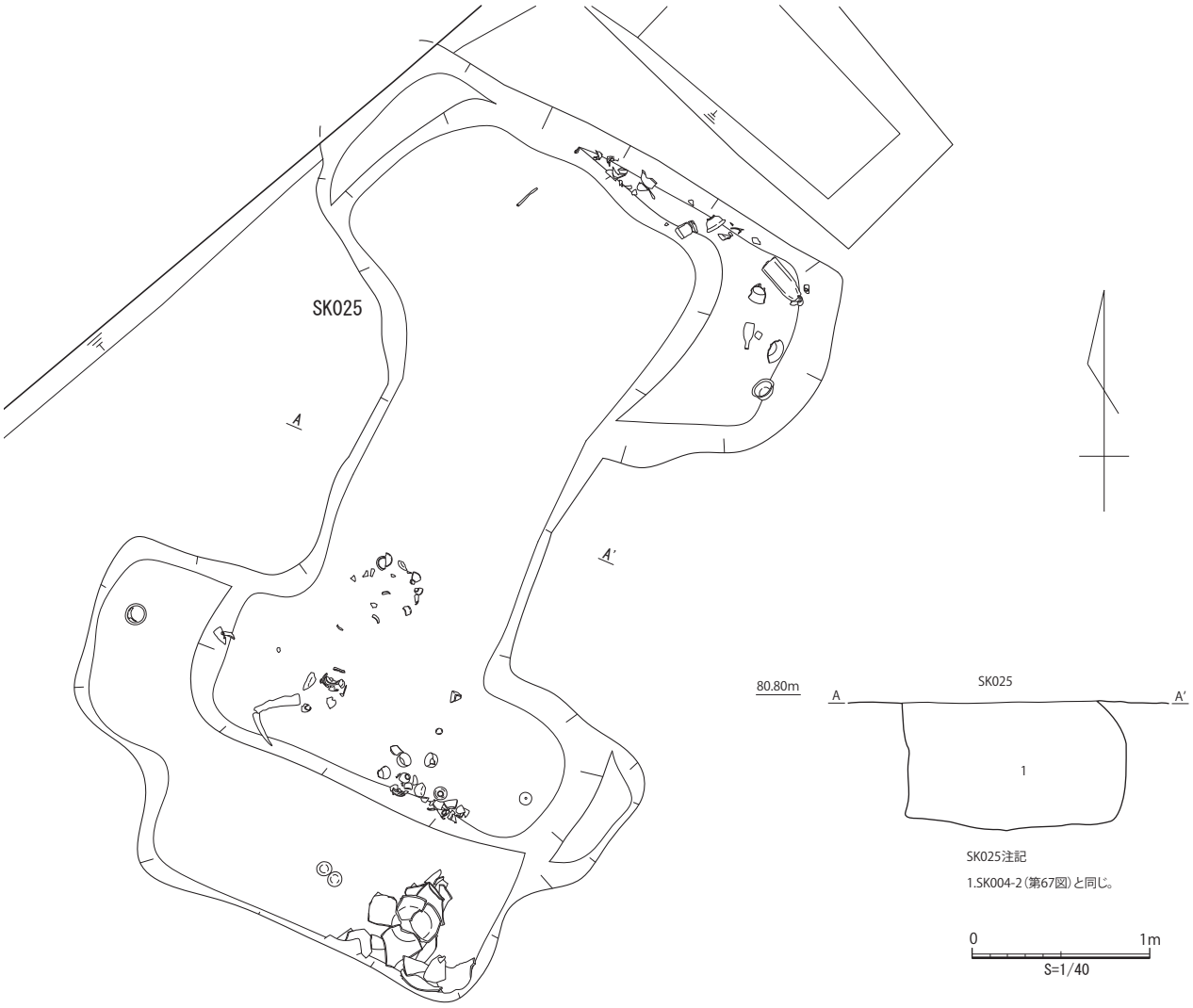
図版 96　区画 11 ＳＫ 004 遺物出土状況詳細

図版 97　区画 11 ＳＫ 004（上・中左・下左…遺物出土状況　中右…断面　下右…完掘東より）

プ状になっており、そのまま床面に至っており、こちらが壕部分への入口と考えられる。一方、東方及び西方の張り出し部は 0.1 ～ 0.2 mと浅くその性格などは不明である。床面は南北端に部屋が取り付く平面H字状で、南側が 0.9 × 1.2 m、接続部は幅 1.0・長さ 1.5 m、北側が 1.5 × 2.5 mの広さを有する。遺物は床面より多量に出土しており、南東側には本土産近代磁器碗・皿など、接続部には沖縄産陶器壺が３基直立しておりその周辺には炭化種子や布片、北西側には沖縄産陶器壺と棒状の木材などが出土した。南東側では焼土が見られたが、この場で火を受けたものかは不明であった。内部の堆積をみると、南より流れ込んだ状況が窺えるので、現在天井がない部分にもあったもしくは蓋状のもので覆われていたが、それらが無くなった状態に土が流入もしくは埋められたものと考えられる（第 67 図、図版 96・97）。

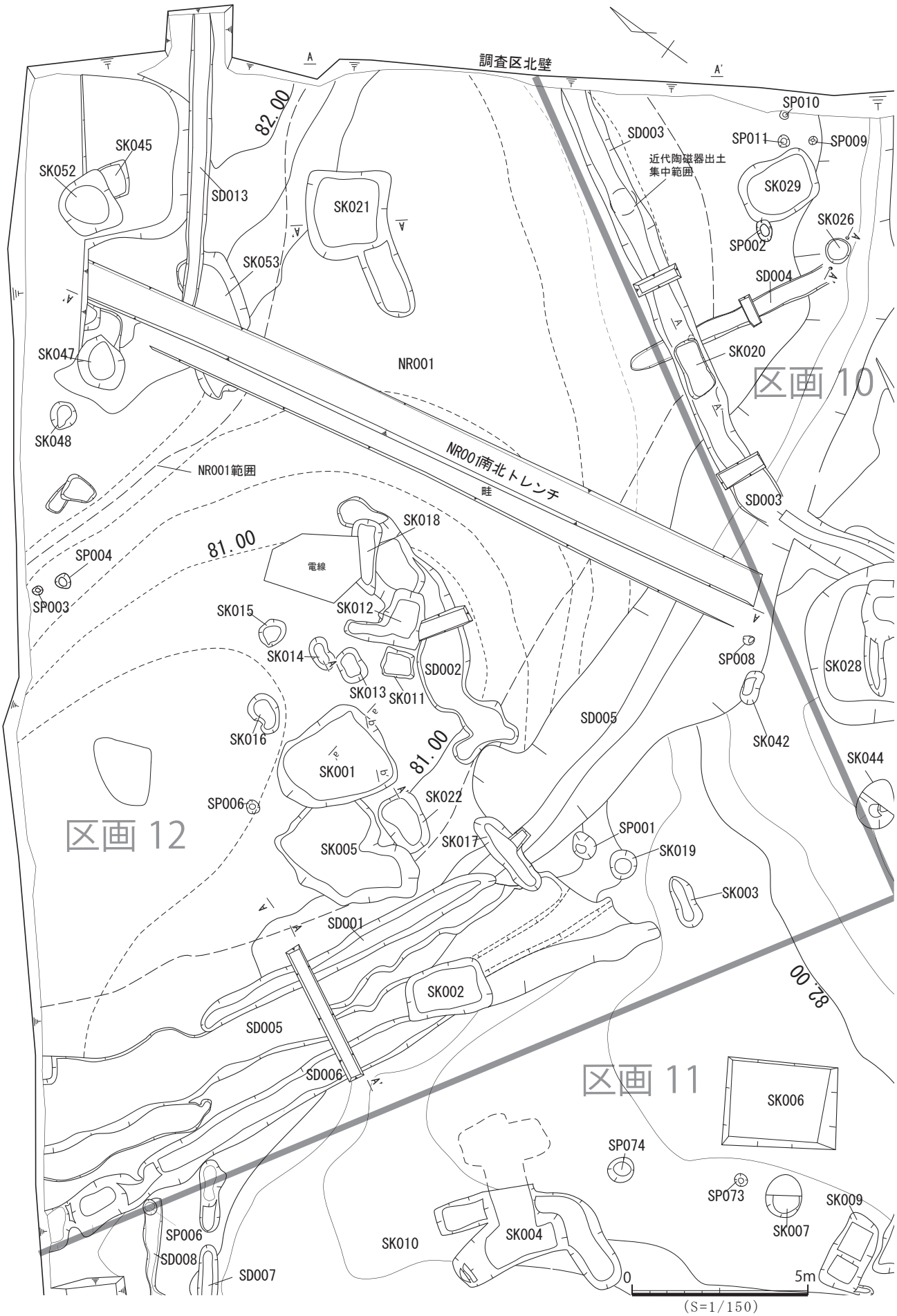
ＳＫ 025 は、長さ 4.6 m、深さ 0.6 mの土坑で両端が大きく部屋状に張り出した平面がＨ字状である。南側は平面凸形で短軸が幅 2.0・長さ 0.8 m、長軸が幅 3.0・長さ 1.0 m、接続部が幅・長さ共に 1.2 m、北側は幅 2.8・長さ 1.6 mを測る。南北の部屋の中央部分と接続部の床面には 5 cm の段差があり、周辺はベッド状に高くなっている。遺物は南東に沖縄産陶器壺、北西には本土産近代磁器香炉、南側中央には同小碗、北東の壁面には同碗・皿、ガラス瓶、ハブラシなどが点在して出土している。堆積状況は、拳大の地山ブロック土が多く見られるので人為的に埋めた可能性が高い。壕ＳＫ 004 と比べると浅く天井部は有していないと思われるが床面の平面形態が類似しており、本調査で壕とした遺構と同様に遺物の出土量が多く、やはり沖縄戦に伴う何らかの遺構と考えられる（第 68 図、図版 98）。

他の遺構としては、ＳＫ 006・008・009 などはまとまって存在する長方形の土坑だが、区画とは方向



第 68 図　区画 11 ＳＫ 025 遺構図

図版 98　区画 11 ＳＫ 025（上…西より　中・下左…遺物出土状況詳細　下右…断面）



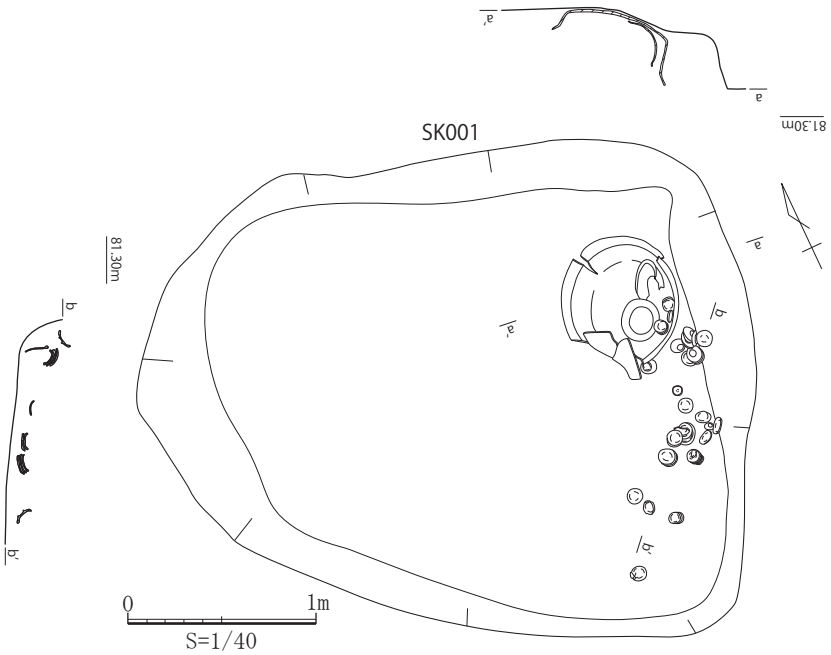
第 69 図　区画 12 遺構図

が異なる。ＳＫ046は、Ｂ地区ＳＫ010などのように不整形な断面で、埋土も地山の変色の可能性が高い。

区画12　南はＳＤ006で区画11、東はＳＤ003で区画10と接している。本区画の遺構はＮＲ001の上面で確認されている。なお、ＳＤ005はＮＲ001に並行するもので、ＳＤ001に切られているように他の遺構よりは古いと考えられる。一方、境界として捉えたＳＤ006は途切れていたが、東側にはＳＤ005と並行するのではなく区画の方向を示すと考えた（第69図）。

ＳＫ001は、2.6 × 3.2 mの不整な方形で深さは0.35 mの土坑で、鉄鍋と本土産時期皿が重ねられて出土しており、埋納したものと思われる（第70図、図版99）。

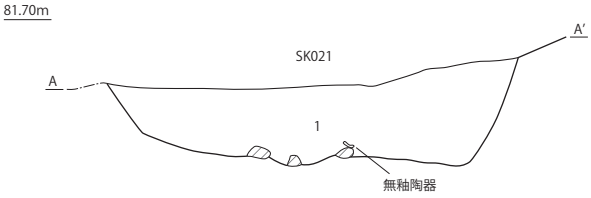
他にＳＫ047は埋土に拳大の礫と粉末状のセメントと思われるものが混じり、ＳＫ002は明らかに重機の爪痕が残る。このように、本区画の土坑の多くは戦後以降の新しい可能性が高い（第71図、図版100～103）。



第70図　区画12ＳＫ001遺構図

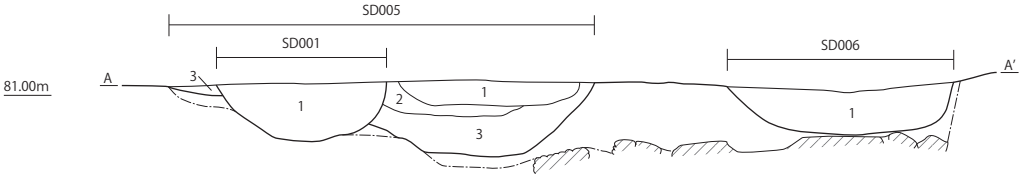
図版99　区画12ＳＫ001（上…西より　下左…遺物出土状況詳細　下右…鉄鍋内磁器皿除去後）

SK053 注記
1.10YR/6 褐色シルト～極細砂。わずかに 5mm以下の炭化物がまざる。
2. 一層と同じ土色、埋土に 3cm 代のシルトブロック (7.5YR5/6 明褐色) が多くまざる。

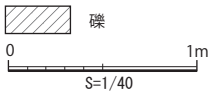


SK021 注記
1.SK027 と同じ

SK047 注記
1.10YR5/6 黄褐色に礫及び
シルトブロック (7.5YR5/6 明褐色) が混ざる。
また、セメントが付着した石囲いの隅も
確認される。



SD001注記
1.10YR4/4褐色　シルト～極細砂　5mm以下の焼土粒がわずかに入る
SD005注記
1.SD006の1層と同じ土色だがこちらの方がわずかに暗い　シルト～極細砂
2.10YR4/4褐色　シルト～極細砂に1～3cm代のシルトブロック(7.5YR5/6明褐色)が多く含まれる
3.2層と同じ土色　シルト～極細砂 0.5mm以下のシルト粒(7.5YR5/6明褐色)がわずかに入る シルト粒の大きさで2層と分けた
SD006注記
1.10YR4/6褐色　シルト～極細砂 5mm以下の焼土粒がわずかに入る



第 71 図　区画 12 ＳＫ 053 断面図

図版 100　区画 12 ＳＤ 001・005・006（西より）

図版 101　区画 12 ＳＫ 047（南から）

図版 102　区画 12 ＳＤ 002 ほか（東より）

図版 103　区画 12 ＳＫ 002（南より）

第４節　遺物

遺物の種類としては、グスク時代以前は石器・中国産陶磁器等、近世～近代は中国・本土・沖縄産の各陶磁器、瓦、石・金属・ガラス・プラスチック等の各種製品があり、遺構出土のものと特徴的なものについての出土点数は 10,989 点である（第１表）。自然遺物については、当センター保管サンプルをもとに同定しており、貝類を第 42 表・図版 133・134、獣魚骨を第 43 表・図版 135 ～ 138 にまとめた。

以下、種類ごとにその概要と分類について説明し、調査区ごとに掲載遺物の中で特徴的なものを記述していくことにするが、記載に当たっての断り書きを記す。陶磁器類の小型品を便宜的に、小皿は 11cm 未満以下、小碗・小鉢は 10cm 未満、小杯は７cm 未満とした。石材名は岩石標本等を参考に同定したものである。各遺物の出土量については先述のように遺構出土及び特徴的なものについて集計しており、出土した遺物の全てではない。集計表では同一個体と思われるものは１つと数えた。

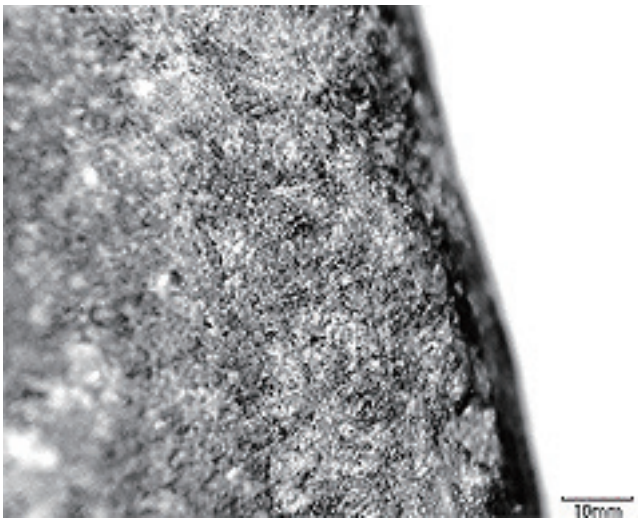
１　グスク時代以前の遺物

時代不明の土器片もみられるが、明確なものとしては石器、中国・タイ産陶磁器がある。

石器（第 16･17 表）　磨製石斧は図示されている２点が出土している。輝緑岩製（766）と緑色片岩製（129）とが認められ、ともに刃部には刃縁に対して斜方向の線条痕が残されることから縦斧と推定される（図版 104）。また、特に前者は重厚・全面研磨・側面定角・輝緑岩製などの特徴から、縄文時代晩期に多いタイプである（大堀 2014）。敲石類は３点が出土しており、そのうちの１点が図示されている（626）。輝緑岩製で平坦面が研磨、端部が敲打に用いられている。その他図示していない石器には、チャート製のＵＦ（微細剥離剥片）や細粒砂岩製の台石が出土している。

中国産陶磁器（第２～４表）　出土量は多くはないが、明代の青磁・白磁（福建産）・青花・褐釉陶器が出土しており、概ね 15 ～ 16 世紀代のものである（瀬戸ほか 2007）。ただ、褐釉陶器壺（476）は四耳壺であるがやや寸胴であまり見られない資料であるので、近世に下るものかもしれない。

タイ産褐釉陶器　壺の胴部片が１点出土している。



図版 104　刃部に見られる使用痕（766）

第１表　人工遺物出土点数

時代	分類		個数	個数
先史	石器		7	7
グスク～近世	中国産	青磁	12	371
		白磁	51	
		青花	269	
		褐釉陶器	21	
		その他陶磁器	17	
	タイ産褐釉陶器		1	
近世～近代	本土産近世陶磁器		71	8913
	沖縄産	施釉陶器	2461	
		無釉陶器	3382	
		陶質土器	486	
	瓦		2496	
	銭貨		17	
近代	本土産近代陶磁器		876	1509
	石造物・石製品		50	
	ガラス製品		164	
	金属製品		358	
	プラスチック製品		26	
	ゴム製品		9	
	レンガ		14	
	乾電池		6	
	骨製品		2	
	軍靴		2	
	銀紙		1	
	布		1	
不確定	円盤状製品		130	189
	産地不明陶器		4	
	土製品		4	
	土器		1	
	漆喰		10	
	漆膜		1	
	木製品・木材		9	
	石材		30	
合計			10989	

2　近世～近代の遺物

出土量では本土産近代陶磁器、沖縄産陶器が圧倒的に多いが、近世の中国・本土産陶磁器も見られる。また、金属・ガラス・プラスチック製品は戦後に及ぶものもある。

（1）中国産陶磁器

最も多いのは清代青花で259点を数え、徳化窯、景徳鎮窯のほか、明確な生産窯は不明だが福建・広東産と思われるものがあり、碗が214点と圧倒的に多い（第4表）。白磁は徳化窯と景徳鎮窯のものが近世のものと思われる（第3表）。その他、主に徳化窯系と考えられる色絵・瑠璃釉、宜興窯の急須等の無釉陶器、緑釉・褐釉磁器がある（第5表）。

（2）本土産近世陶磁器

陶器・染付・色絵・土器があるが71点と出土量は少ない（第6表）。陶器では関西系の褐釉擂鉢（189）や灰釉の碗（261）･鍋（145）･蓋（146･320）、肥前の灰緑釉碗（335・336）・皿（337）の他、掲載していないが薩摩の壺・急須がみられる。染付は草花文碗（335）、濃いコバルトで描かれる蓋（762）がある。

（3）本土産近代陶磁器

明治～戦前・戦中に使用された陶磁器類で876点出土している（第7表）。陶器と磁器があるが、後者の中には、昭和16～21年に戦時中の国による陶磁器生産の統制・管理を行ったことを示す統制番号が標示されているものがある。

1）磁器

磁器は854点で、器形としては、碗･小碗･皿･小皿・小杯・急須・瓶などがあるが、碗・皿類が654点と7割以上占める。技法により下記のA～G類に分類しており、以下その特徴を記す（第8表）。生産地で見ると、A類が砥部産、B～F類が瀬戸・美濃系と考えられ、統制番号も見られ

第2表　中国産青磁出土点数

器形	分類/部位	口縁部	胴部	底部	合計
碗	V	2	3	1	6
	Ⅶ		1		1
皿	V	1			1
	−			1	1
瓶	−			1	1
不明	V		1		1
	Ⅵ		1		1
合計		3	6	3	12

第3表　中国産白磁出土点数

産地	器形	分類/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	合計
景徳鎮	小碗	−		1			1
	小杯	−				1	1
福建	碗	−		1	1		2
		C			1		1
	鉢	−		1	1		2
徳化	碗	−			1		1
	小碗	−		1		1	2
	杯	−	1	14	10	12	37
	小杯	−	1			1	2
	不明	−			1	1	2
合計			2	18	15	16	51

第4表　中国産青花出土点数

時代	産地	器形	分類/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	合計	総計
明	景徳鎮	碗	D群		1			1	10
			−			2	1	3	
		小碗	−			1		1	
		皿	C群		1			1	
			−	1			1	2	
		瓶	−			1		1	
	漳州	碗	−		1			1	
清	景徳鎮	碗	−		8	8	3	19	28
		小碗	−			1	1	2	
		皿	−			1	1	2	
		杯	−		2			2	
		小杯	−				2	2	
		瓶	−				1	1	
	福建・広東	碗	−	1	40	50	31	122	146
		小碗	−			5	1	6	
		鉢	−			1	3	4	
		瓶	−			1		1	
		蓋	−		1			1	
		不明	−			12		12	
	徳化	碗	−	1	32	30	10	73	85
		小碗	−		1		1	2	
		皿	−		2		3	5	
		杯	−		1			1	
		不明	−			4		4	
合計				3	90	117	59	269	

第6表　本土産近世陶磁器出土点数

分類	産地	器形/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	撮	把手	小計	中計	総計
陶器	肥前	碗		4	7	1			12	24	39
		皿	1	4	5	1			11		
		不明			1				1		
	薩摩	壺			1				1	2	
		急須		1					1		
	関西系	碗	1		1				2	8	
		皿		1					1		
		蓋		1			2		3		
		鍋	1						1		
		擂鉢	1						1		
	不明	壺		1	1				2	5	
		不明			3				3		
染付	肥前	碗		5	8	2			15	30	
		小碗		2					2		
		皿		1	4	1			6		
		瓶			4	1			5		
		蓋		1					1		
		不明		1					1		
色絵	肥前	小皿	1						1	1	
土器	不明	焙烙						1	1	2	
合計			5	22	35	6	2	1	71		

第5表　中国産その他の陶磁器出土点数

種類	器形／部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	合計	総計
色絵	碗		1		1	2	6
	小杯	1	2			3	
	杯	1				1	
瑠璃釉	小杯	1				1	1
緑釉	不明			1		1	1
褐釉磁器	杯		1	1		2	2
無釉陶器	急須		1	3	1	5	7
	鍋		1			1	
	不明			1		1	
合計		3	6	6	2	17	17

第７表　本土産近代陶磁器器形別出土点数

種類	器形		分類/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	他・不明	小計	中計	総計
磁器	碗	－	A類	49	41	23	7		120	193	854
			B類	14	6		1		21		
			C類	3	8	4	1		16		
			D類	1	3	1			5		
			E類		1	1			2		
			F類	1					1		
			G類	12	6	3	4		25		
			－		3				3		
	小碗	－	A類	1					1	272	
			B類	53	54	23	17		147		
			C類		3	3	9		15		
			D類	12	22	5	7		46		
			E類	4	11	8	2		25		
			F類	4	3		1		8		
			G類	17	6		2		25		
			－			4	1		5		
	皿	－	A類	2			5		7	72	
			B類	42	2		2		46		
			C類	1	3	1			5		
			D類	4					4		
			E類		2				2		
			F類	5			1		6		
			－	1			1		2		
	小皿	－	A類	4	1				5	117	
			B類	52	4		2		58		
			C類		2		1		3		
			D類	3	1				4		
			E類	1	1				2		
			F類	44					44		
			G類	1					1		
	小杯	－	B類	10	3				13	69	
			C類	2	1		2		5		
			D類	5	1		1		7		
			E類	2	12	3	2		19		
			F類	9	6	2	1		18		
			G類	2	4	1			7		
	瓶	－	B類	1					1	16	
			C類	1		3	1		5		
			E類		1	1	1		3		
			F類		1	1	2		4		
			G類				1		1		
			－			1	1		2		
	小鉢	－	B類	1					1	3	
			F類	1	1				2		
	香炉	－	C類	1					1	5	
			D類	1	2	1			4		
	火入	－	A類	2	1				3	7	
			B類	2	1		1		4		
	蓋	－	B類					5	5	26	
			C類		3			3	6		
			D類		2				2		
			F類		5			2	7		
			－		1			5	6		
	急須	身	B類		2	1	1		4	29	
			C類	4	7	5	4		20		
			E類		1				1		
			－			1	1	1	3		
		蓋	C類					1	1		
	湯呑	－	B類		1				1	12	
			C類		1	1			2		
			E類		2		1		3		
			F類	1	1		2		4		
			－		1		1		2		
	水差	－	E類	1					1	1	
	碍子	－	－					1	1	1	
	不明	－	B類			1			1	31	
			C類			2		1	3		
			D類			1			1		
			E類			2			2		
			－			22	1	1	24		
陶器	碗	－	－		1	1			2	22	
	小碗	－	－	1					1		
	皿	－	－		1		1		2		
	小皿	－		2					2		
	瓶	－	－				1		1		
	鉢	－	－	1					1		
		蓋	－					1	1		
	蓋	－	－					1	1		
	急須	－	－		1	6		1	8		
	湯たんぽ	－	－	1					1		
	袋物	－	－			1			1		
	不明	－	－			1			1		
合計				382	247	134	90	23	876		

第８表　本土産近代磁器分類別出土点数

分類	主要産地	器形	小計	総計
A類（型紙）	砥部	碗	120	136
		小碗	1	
		皿	7	
		小皿	5	
		火入	3	
B類（転写）	瀬戸・美濃	碗	21	302
		小碗	147	
		皿	46	
		小皿	58	
		小杯	13	
		小鉢	1	
		火入	4	
		蓋	5	
		急須	4	
		湯呑	1	
		瓶	1	
		不明	1	
C類（染付）	瀬戸・美濃他	碗	16	82
		小碗	15	
		皿	5	
		小皿	3	
		小杯	5	
		急須	20	
		急須・蓋	1	
		蓋	6	
		香炉	1	
		湯呑	2	
		瓶	5	
		不明	3	
D類（クロム青磁）	瀬戸・美濃他	碗	5	73
		小碗	46	
		皿	4	
		小皿	4	
		小杯	7	
		香炉	4	
		蓋	2	
		不明	1	
E類（白磁）	瀬戸・美濃？	碗	2	60
		小碗	25	
		皿	2	
		小皿	2	
		小杯	19	
		急須	1	
		水差	1	
		湯呑	3	
		瓶	3	
		不明	2	
F類（色絵）	瀬戸・美濃	碗	1	94
		小碗	8	
		皿	6	
		小皿	44	
		小杯	18	
		小鉢	2	
		湯呑	4	
		瓶	4	
		蓋	7	
G類（国民食器他）	瀬戸・美濃他	碗	25	59
		小碗	25	
		小皿	1	
		小杯	7	
		瓶	1	
不明		碗	3	48
		小碗	5	
		皿	2	
		急須	3	
		湯呑	2	
		蓋	6	
		瓶	2	
		碍子	1	
		不明	24	
総計			854	

る。G類にはいわゆる国民食器も含んでおり、大半は瀬戸・美濃系と思われるが産地が不明のものもある。

A類　型紙摺りにより絵付けするもの

大半は砥部産のものと考えられ圧倒的に碗が多く、沖縄で「スンカンマカイ」と称されていた。高台内に統制番号「㋒2」(302・634)と「㋒11」(560～563)が入るものもある。

輪花状大皿(570)はあまり見られない。(231・400)は火入の完品で口縁が内側に厚くなり、碗と同様の鶴・草花が描かれる。

B類　銅板転写やゴム判、吹き絵等による絵付け

瀬戸・美濃系のもので、同一の原版を使用したものがあり、福字文碗(520～524)、皿では鶴3羽(448・533～536・582・583)・青梅花(572～578)・緑梅花(382～385)・天保通寶などの銭文が描かれる(579・580)、小皿では魚文(386・387・730～748)などがみっれる。また、壺尽くしは皿(450・451)、小皿(538～542)と共通する構図がみられる。

銘には、統制番号は小碗で「岐303？」(638)と「岐450」(648～650)、「新興陶器」銘の小碗(652～655)、「ヤマカ陶器會社」銘の洋食器皿(692)などがある。

C類　染付

多くは瀬戸・美濃系と思われるが、B類のように同タイプが複数見られることが少ない。特徴的なものとして、「常山」銘の一合徳利瓶(672)、蟹文の碗(67)、鉄釉班が見られる小杯(181)と急須(93)があり、(601・602)は急須の蓋とセットである。あまり見ないものとして、(673)は脚部のみに文様がある香炉などがある。

D類　クロム青磁

瀬戸・美濃系で完品のものは少ない。

E類　白磁

(656～659)のように外底に「岩」銘が見られるものなど瀬戸・美濃系と思われるが、(603)の水差はあまり見かけない。

F類　色絵

型紙を使った上で色絵付しているものが多く、木苺文小皿(584～588・693～729・761)、いわゆる軍杯(22・667)などがある。扇文が描かれた角皿は(642～645)あまり見られない。

G類　上記以外のもの

幾つかのタイプが見られる。いわゆる口縁に緑色の圏線を巡らす「国民食器」には、小碗(240・430～439・530～532・568・569)、碗(216・278・529)があり、その統制番号には「ヤマカ陶器　岐143」(216・278)、「岐280」(569)、「岐464」(430～437・530～532)が見られる。

(464・467)はいわゆる珉平焼の角型小皿で、生産地で皿D類(角皿変形)Ⅱに分類されるもので、明治中頃～大正まで焼かれたものと考えられている(兵庫県教育委員会2005)。

その他、(104)は絵付けがある緑釉碗、(277)は緑・茶色の圏線を巡らし銘が「㋒？」と見え砥部産のものか、(480・565・566)は茶色釉碗などがある。

2)陶器

陶器類は少なく、瀬戸・美濃系の「意匠新衆登録」銘がある格子状の湯たんぽ(319)や、印判による花文の洋食器皿(338)、(604・605)は近代陶器の蓋付鉢がある。

(4)沖縄産陶器

沖縄産陶器には、施釉陶器、無釉陶器、陶質土器がある。

1)施釉陶器

方言では「上焼 (ジョウヤチ)」と称され、生地土に白化粧や釉薬を施すものである。器形は碗・小碗・皿・鉢・壺・瓶・香炉・火入・蓋・酒器・水滴がある。2,461 点出土しており、なかでも碗が多い (第９表)。特徴的なものとして、蝶形の水滴 (201) がある。碗・小碗については白化粧や文様の有無、釉薬の種類から以下のように分類している。なお、小片のため図化していないものもある。

碗

A 類:白化粧をせず、生地土に直接灰釉を掛けるもの。
B 類:白化粧をせず、生地土に直接黒釉を掛けるもの。
C 類：白化粧を施し、釉を掛けるもの。文様の有無により２つに細分。

１－無文　　２－有文

小碗

A 類:白化粧をせず、生地土に直接灰釉を掛けるもの。
B 類:白化粧をせず、生地土に直接黒釉を掛けるもの。
C 類：白化粧を施し、釉を掛けるもの。文様の有無や外面の加工により３つに細分。

１－胴部面取り　　２－無文　　３－有文

２）無釉陶器

方言では「荒焼 (アラヤチ)」と称され、比較的高温で焼成された焼き締め陶器であり、自然釉や泥釉、マンガン釉が掛かるものもある。このうち、通有のものより色調が鈍く硬質で自然釉などが掛かる「初期無釉陶器」とされる一群は本調査ではほとんど出土していない。

器形は皿・鉢・擂鉢・瓶・壺・植木鉢・蓋・甕がある。3,382 点が出土しており、多くは甕・壺の胴部片であり、口縁・完品の個数では鉢 113 点・壺 106 点となっており、この２つが主体と思われる (第 10 表)。

特徴的なものとして、二次加工品と思われる方形状の破片が出土している（９)。轆轤痕などから鉢の破片と考えられるが、用途不明である。壺・甕については口縁部の形状や頸部の有無から以下のように分類している。

壺　口縁の形態から２つに分けた。

A 類：玉縁状　B 類：方形状

甕　頸の有無で２つに分けた。

A 類：有頸　　B 類：無頸

第９表　沖縄産施釉陶器出土点数

器形	分類/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	他	合計	総計
碗	A類	9	214	222	163		608	1474
	B類	4	43	43	25		115	
	C類		1	1	5		7	
	C-1類	32	211	199	112		554	
	C-2類	31	79	51	26		187	
	－				3		3	
小碗	A類	1	11	1	3		16	201
	B類		18	11	4		33	
	C類				2		2	
	C-1類	2	12	4	7		25	
	C-2類	12	55	10	32		109	
	C-3類	1	10	2	2		15	
	－				1		1	
皿		2	26	8	4		40	
小皿			2				2	
杯			2				2	
小杯		1					1	
瓶		2	3	40	28		73	
壺		3	4	10	1		18	
鉢		2	18	33	19		72	
擂鉢			1	1			2	
鍋			16	5	1	4	26	
香炉		2	2	2	3		9	
火炉			5	2		1	8	
火入		4	15	20	7		46	
蓋			25	7		12	44	
急須		1	21	70	23	14	129	
水滴		1					1	
灯明具					1		1	
酒器			7	26	9	1	43	
袋物			1	51	9		61	
煙管						1	1	
不明			2	205			207	
合計		110	804	1024	490	33	2461	

第 10 表　沖縄産無釉陶器出土点数

器種	分類/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	他・不明	合計	総計
碗			2		1		3	
皿		2	5	1	4		12	
瓶		3	15	85	41		144	
鉢		3	110	13	38		164	
擂鉢		1	65	204	47		317	
植木鉢		1					1	
壺	A類	25	34				59	772
	B類	14	33				47	
	－			580	76	10	666	
甕	A類	2	14				16	77
	B類	3	2				5	
	－			45	11		56	
壺・甕				1150	88		1238	
鍋			1				1	
火炉			5		3		8	
火入			10	4	1		15	
蓋			5			3	8	
急須			1		3		4	
袋物			1	2			3	
二次加工品						8	8	
器種不明				603	4		607	
合計		54	303	2687	317	10	3382	

第 11 表　陶質土器出土点数

器形/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	撮～口縁部	撮	耳	注口	合計
皿	1	2	2	1					6
鉢	1	26	4	11					42
鍋		32	87	2					121
火炉		13	6	5			7		31
蓋		12	3	1	2	7			25
急須		1	29	3				4	37
火入		8	14	5					27
袋物			1	1					2
壺		1		1					2
灯明具		2							2
不明		6	185						191
合計	2	103	331	30	2	7	7	4	486

３）陶質土器

方言では「アカムヌー」又は「カマグァーヤチ」などと称される軟質焼成の土器群で 486 点出土しているが、かなりの小破片であった (第 11 表)。

（５）産地不明陶器

４点あるが、掲載したものは格子タタキ目がある破片で壺等か、その傾きからの陶製の浮きとも考えられる（137）。

（６）ガラス製品

ガラス製品はガラス瓶が主体で、その他にビー玉、ランプ笠などが確認された（第 12 表）。色調別の集計は色調と用途が関連するガラス瓶と、蓋、器種・用途不明品に対してのみ行った。

ガラス瓶

用途の特定や色調分類は『ガラス瓶の考古学』（桜井 2006p130-135）や『日本のレトロびん』（平成ボトル 2017）倶楽部を参考にした。神山古集落で出土したガラス瓶は清涼飲料瓶、調味料瓶、金平糖瓶、薬瓶、化粧瓶、染料瓶、インク瓶に用途が分けられる。緑色系には淡い緑色も含み、色調観察は肉眼で行った（図版 105）。

瓶の用途は以下のように分類した。

清涼飲料瓶…コーラをはじめとする清涼飲料水を入れていた瓶

調味料瓶…醤油瓶、化学調味料瓶等

金平糖瓶…金平糖を入れていた瓶

薬瓶…鎮痛剤、整腸剤、目薬瓶、殺虫剤瓶等

図版 105　ガラス瓶色調分類

化粧瓶…化粧クリーム瓶、化粧水瓶、ポマード瓶等

インク瓶…インクを入れていた瓶。

染料瓶…毛染め、布染につかう染料を入れていた瓶。

清涼飲料瓶の特徴的なものを説明する。コーラ瓶には瓶に直にロゴマークを印刷しているもの（519）があり、この表記方法が第二次大戦後からのものであることや、1960 年代に施されるようになったナーリングと呼ばれる底面の凸凹の加工もみられることから、戦後の遺物と考えられる（桜井 2006p17-18）。

今回確認されたニッキ水かみかん水瓶と考えられる瓶（321）は首里城跡の歓会門・久慶門内側地域の発掘調査で出土した串だんご状のガラス製品と酷似し、同様の製品の可能性がある（沖縄県 1988p138-139,204）。ニッキ水の「ニッキ」は樹皮が香辛料に用いられる肉桂と呼ばれる木のことで、これを使用した飲料水をニッキ水と呼び、みかん水は蜜柑の皮からできた香油で風味を付けた無果汁の飲料水で、これらは駄菓子屋などで売られていたという（平成ボトル 2017p90,96）。

調味料瓶には醤油瓶や化学調味料瓶があり、「NODASHOYU CO LTD TRADE(6 角形に萬のマーク）MARK」（42・507）のエンボスがみられる醤油の一升瓶は野田醤油（のちのキッコーマン）の製品で、醤油の一升瓶は大正 7（1918）年に販売をはじめている（桜井 2006p54）。化学調味料瓶としては、底部に「AJINOMOTO」のエンボスがあるもの（367）が出土している。

金平糖瓶（388）は中身を食べ終わったら玩具になる「菓子入り玩具瓶」の一種と考えられ、大正末期から昭和初期にかけて子どもに人気があり、駄菓子よりも高価で高嶺の花であったいわれる（平成ボトル 2017p106）。金平糖瓶の県内類例は北谷町の平安山原 A 遺跡の報告にみられる（北谷町 2016p49-51）。

薬瓶には「POLYTAMIN」（38）、「神薬」（121）、「Wakamoto」（203）、「EYE LOTION ROHTO」（244）などのエンボスが確認でき、これらの薬瓶には滋養強壮や気つけ、胃腸、眼病への効能が窺われる。また、薬瓶には南風原町の旧日本軍壕などでみられるようなアンプルは確認できなかった（南風原町 2000,2008a,2008b,2010）。化粧瓶には化粧クリーム瓶もしくはポマード瓶、化粧水瓶と考えられるものがみられる。用途不明瓶の中には県内製造のガラス製品に形状が似るものもみられた（195・196）（倉成 2007p92）。

ガラス瓶は無色系が清涼飲料瓶から

第 12 表　ガラス製品出土点数

器種	色調	用途/部位	口～底部	口縁部	胴部	底部	撮～口縁部	撮	－	不明	合計	総計
瓶	黒	化粧瓶	1								1	119
	紫	化粧瓶	1								1	
	茶	薬瓶	9	1		1					11	
		薬瓶か化粧瓶	1								1	
		不明		1	2	4					7	
	黄	薬瓶	1								1	
	緑	清涼飲料瓶	1								1	
		清涼飲料瓶か薬瓶	1								1	
		染料瓶	1								1	
		不明		2	4	4					10	
	コバルト	薬瓶	3	1	1	1					6	
	青	清涼飲料瓶か調味料瓶	1								1	
		調味料瓶	4		1	1					6	
		薬瓶		2							2	
		インク瓶	1								1	
		不明			5	3					8	
	無	清涼飲料瓶	4			1					5	
		調味料瓶	1			1					2	
		金平糖瓶							1		1	
		薬瓶	6	1	2	2					11	
		薬瓶か化粧瓶	1			2					3	
		化粧瓶	4			1					5	
		インク瓶	1								1	
		染料瓶	1			1					2	
		不明	3		7	4					14	
	白	薬瓶か化粧瓶	3	2	3						8	
		化粧瓶	5			2					7	
		不明	1								1	
蓋	緑	－		1			4	1		1	7	9
	無	－					2				2	
ランプ笠	白	－							15		15	15
ランプの油壷	青	－							1		1	1
板ガラス	無	－							5		5	5
コップ	無	－	1								1	1
玩具	白・青	－							1		1	1
ビー玉	緑	－							1		1	6
	緑・白	－							2		2	
	無・赤	－							1		1	
	無・白・コバルト	－							2		2	
オイルタンク	無	－							1		1	1
不明	緑	不明							1		1	6
	無	不明							4	1	5	
合計			56	11	25	28	6	1	35	2	164	

染料瓶まで用途が幅広く、茶色系とコバルト色系には薬瓶、もしくはその可能性がある瓶が偏った。白色系は薬瓶や化粧瓶と考えられるものが占める。

その他ガラス製品

瓶以外のガラス製品ではランプ笠、ランプの油壺の可能性があるもの、板ガラス、コップ、ビー玉、玩具の可能性があるものが出土した。ビー玉はガラス瓶の全てが単色であるのに対してビー玉は複数色(376～379）と単色のもの（380）があり、Ｃ地区ＳＫ024に集中してみられた。出土したランプ笠の色調は全て白色で完形品は無い。県内でのランプ笠は首里城跡で出土している（沖縄県 1988p143,207)。

（７）金属製品

材質からは、青銅・鉄・アルミニウムの他、多様な合金製品があり、358点を数えた（第13表)。

一方、用途で便宜的に、調理具、食器関係、装飾・嗜好品、文具、家財関係、交通関係、農具、工具、兵器、不明と便宜的に分けたが、その中では工具82点、兵器54点の両者が目立った（第14表)。以下、この用途分類によって、特徴的な遺物について記す。

調理具では、鍋（391･754･756）は、口縁が緩やかに開き丸底のもの方言では「シンメーナービ」と言われる形で、(754）は口径25m台とかなり小型で外面に青色に着色したもので、他のものとは用途が異なるであろうか。また、羽釜(513・755）もある。

食器関係には、スプーンにはいわゆるティースプーン（110・679）とデザートスプーン（509）があり、(217）は飯盒の蓋で「九九」との銘があり、サイズから缶詰と思われる缶には鉄銹で覆われたもの(315･419）と､アルミ製でカップ状のもの（630）がある。

装飾・嗜好品には、煙管（233・255・510・752)、簪は男性用（257・369)、女性用（197･296･621）がある。

文具としたものには他の用途もありうるがサイズが小さく便宜的にまとめたもので、ピンセット（51)、絵の具やグリスを入れるような小型のチューブ(63)、画板やボードの角金（511）がある。

家財関係としたものにも他の用途もありうるが、箪笥などの把手（198・268)、押入れなどの引手（411)、懐中電灯などの小型のもの電灯部分（753)、井戸の滑車（256）とした。

交通関係としては、馬用と思われる蹄

第13表　金属製品材質別出土点数

種類	器種	分類	個数	総計
青銅製品	電灯	－	1	70
	手榴弾	－	1	
	砲弾	－	10	
	銃弾	－	2	
	薬莢	－	11	
	スプーン	－	1	
	ピンセット	－	1	
	引手	－	1	
	角金	－	1	
	簪	－	5	
	煙管	－	4	
	把手	－	2	
	軍刀	－	1	
	不明	－	29	
鉄製品	釘	角釘	14	258
		丸釘	22	
	鋲	－	1	
	カスガイ	－	14	
	スコップ	－	1	
	ヘラ	－	5	
	鍬	－	4	
	鎌	－	8	
	金槌	－	3	
	鏨	－	1	
	クサビ	－	1	
	スパナ	－	1	
	ボルト	－	2	
	パイプ	－	1	
	釜	－	2	
	鍋	－	10	
	蓋	－	8	
	缶	－	7	
	滑車		1	
	蹄鉄	－	4	
	鉄筋	－	6	
	鉄線	－	5	
	鉄滓	－	9	
	砲弾	－	21	
	黄燐弾	－	3	
	不明	－	104	
青銅・鉄製品	不明	－	3	3
アルミ製品	飯盒の蓋	－	1	12
	缶	－	9	
	スプーン	－	2	
合金製品	電灯	－	1	15
	三脚	－	1	
	チューブ	－	1	
	手榴弾	－	3	
	砲弾	－	2	
	不明	－	7	
合計			358	

第14表　金属製品用途別出土点数

用途	器種	個数	総計
調理具	釜	2	12
	鍋	10	
食器関係	スプーン	3	20
	飯盒の蓋	1	
	缶	16	
装飾・嗜好品	煙管	4	9
	簪	5	
文具	チューブ	1	3
	ピンセット	1	
	角金	1	
家財関係	引手	1	6
	滑車	1	
	電灯	2	
	把手	2	
交通関係	蹄鉄	4	4
農具	ヘラ	5	17
	鎌	8	
	鍬	4	
工具	カスガイ	14	82
	クサビ	1	
	スコップ	1	
	スパナ	1	
	パイプ	1	
	ボルト	2	
	金槌	3	
	三脚	1	
	釘	36	
	鉄筋	6	
	鉄線	5	
	鉄滓	9	
	鋲	1	
	鏨	1	
兵器	軍刀	1	54
	砲弾	33	
	黄燐弾	3	
	手榴弾	4	
	銃弾	2	
	薬莢	11	
不明	不明	143	151
	蓋	8	
合計		358	

鉄（179・180・350）がある。

工具は最も多いが、カスガイ（90 ほか）・角釘（61 ほか）・丸釘（160 ほか）、金槌は大型（43・287）、通常の先切りのもの（44）、クサビ（46）、スパナ（286）、石工用の鑿（288）、おそらく測量機器を載せる三脚（330）を掲載した。

農具は、ヘラ（45・96・113・218・263）、鎌（125・128・292・351・392・412）、鍬（316・317・393・394）がある。

兵器は、日本軍の可能性があるものとして、軍刀と思われる青銅製柄（322）があるが、他は黄燐弾（318 ほか）、手榴弾（188 ほか）、小銃・機銃の弾・薬莢、ロケット弾（114）、砲弾片などおそらく米軍の備品と考えられる。また、不発弾は確認されなかったが、米軍のものと思われる薬莢付きの小銃弾は調査時に随所で 20 本程度は確認したが遺物としては取り上げなかった。その多くは 7.7mm 小銃弾で、掲載遺物では銃弾（229）薬莢（1・112・370）があたる。

不明品として、特徴的なものをあげる。まず多く見られたのは蓋で、特に（251）はパッキンもついており何かの大型機械のものか。子宝印と陽刻された小型の合金製品（314）、日本軍のものと思われる星が線刻される銅板（323）、文様が陽刻される環状青銅製品（389・390）、日本軍用ヨードチンキの青銅製蓋の可能性があるもの（622）など他にも様々なものがある。

第 15 表　銭貨出土点数

時代	銭種	個数
清	康熙通寶	1
	嘉慶通寶	1
日本	寛永通寶	7
	一銭	7
−	無文銭	1
合計		17

第 16 表　石器・石製品・石造物・石材出土点数

種類	器種	個数	個数
石製品	砥石	15	40
	硯	4	
	碁石	1	
	石臼	7	
	石盤	9	
	蓋	1	
	錘	1	
	火打石	1	
	印部石	1	
石造物	礎石	4	10
	面をもつ不明石造物片	1	
	不明	5	
石器	ＵＦ	1	7
	敲石	2	
	磨石	1	
	磨製石斧	2	
	台石	1	
石材	−	30	30
合計		87	

（８）銭貨

銭貨には、寛永通寶、一銭、清朝銭、無文銭があり、17 枚を数える（第 15 表）。

（９）石製品

石製品は、硯・碁石・砥石・錘・蓋・石臼・印部石がある（第 16・17 表）。

硯　4 点出土している。石材は頁岩製（56・123・254）と泥岩製（124）とが認められた。頁岩製は沖縄県内で比較的出土するタイプの一つで、日本産とみられる（大堀 2012）。一方で泥岩製は不定形かつ両面利用などの特徴から、県内で応急的に製作された製品の可能性がある。

石盤　9 点が得られおり、残存状態の良好な 2 点が図示されている。粘板岩製（208）と頁岩製（226）とがあり、ともに加工痕や使用痕が明瞭に残る。石盤は明治から昭和初期まで学校教育において利用された筆記具で、日本

第 17 表　石質別出土点数

種類	石製品																	石造物									石器							石材																			総計
器種	砥石							硯		碁石	石臼	石盤		火打石	蓋	錘		礎石			印部石	面あり	不明				ＵＦ	敲石		磨石	磨製石斧		台石	-																		
石材	ニービ	中粒砂岩	頁岩	琉球石灰岩	凝灰岩	石灰質砂岩	石灰質砂岩	泥岩	頁岩	粘板岩	ニービ	頁岩	粘板岩	チャート	石灰質砂岩	中粒砂岩	ひん岩	ニービ	石灰質砂岩	琉球石灰岩	琉球石灰岩	ニービ	泥岩	琉球石灰岩	海浜凝固物	チャート	輝緑岩	中粒砂岩	中粒砂岩	輝緑岩	緑色片岩	ニービ	ひん岩	輝緑岩	ニービ	中粒砂岩	片状砂岩	泥岩	頁岩	琉球石灰岩	石灰岩	サンゴ	サンゴ石	緑色片岩	ホルンフェルス	蛇紋岩か？	サンゴ石	石灰質砂岩	
合計	3	2	3	3	2	1	1	1	3	1	7	1	8	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	5	5	1	3	1	1	1	2	1	2	1	1	2	1	87

産とみられる。

碁石　図示された1点（237）のみが出土している。黒の碁石で粘板岩製。

砥石　石製品中で最も多い15点が出土している。石材は細粒砂岩（俗名ニービ）（54・55）、琉球石灰岩（184・228・373）、石灰質砂岩（260）、中粒砂岩（294）、凝灰岩（53・757）など多種に及ぶが、県内で獲得できる石材が利用されている。ただし凝灰岩製のみは県外からの搬入品の可能性がある。

石臼　7点が得られている。粉挽臼の上臼（119）と下臼（169・395・420）、性格不明（118）の3種が確認される。下臼はこぼれ目5区画で、沖縄で特徴的とされるものと一致する（三輪1978）。沖縄の石臼石材には硫黄鳥島産の輝石安山岩と細粒砂岩が代表的であるが（神谷1999）、この遺跡の資料は細粒砂岩製のみである。

印部石　図示された1点（64）のみが出土しており、A地区ＳＫ036石囲い遺構の床石に転用されたものである。文字の彫り込まれる正面はよく研磨されるが、背面は自然面である。銘には「かみ／ま　山原」とあり、字形の大きい「ま」がいろは記号で「かみ山原」が地名と読み取ることが出来る。

錘とみられる有孔製品は、図示された1点（298）のみが得られている。重さ307.8ｇ（82匁）。中粒砂岩製。

蓋とみられる資料は、図示された1点（515）のみが出土している。ほぼ欠損しているが、本来は側縁部が傘状をなす。

その他図示していない資料には、火打石の可能性のあるチャート片や礎石などが得られている。

(10) プラスチック製品

出土したプラスチック製品にはボタン、櫛、髪留めの可能性があるもの、歯ブラシ、煙管入れ、笛、三角定規などが確認された（第18表）。

ボタンはどれも円形で、円い孔の数が4つのタイプ（134、627）、2つのタイプ（628・690・691）、裏に横位に1つ孔があるタイプ（689）に分けられる。

櫛は装飾の無いもの（215・517・518）と、装飾ありのもの（168・516）がみられ、装飾の無いものは3点とも長軸が長く持ち手の部分が弧状であった。髪留めの可能性がある製品（269）は柔軟性のあるプラスチックでできており、類例が県内では首里城跡の歓会門・久慶門内側地域の遺構調査（沖県教1988p92,138,139,144）や与那国島の潮原古墓群の報告（沖埋文2007p61-62）にみられる。

歯ブラシは植毛穴が長軸に沿って4条66穴（117）と3条31穴のもの（183・688）がある。煙管入れは長く扁平な形状で紐通しが付き、表裏面に波状文と両側面に横線が連なるもの（414）と、表裏面に波状文のみのものがみられる（375）。笛（10）は紐が付き、色調の違う2つの部品を組み合わせて作られている。三角定規（353）は目盛り以外に人名のような文字が刻まれている。

(11) 瓦

瓦は明朝系瓦が大半で2,496点を数える（第19表）。また、各地区と区画の出土傾向を部位が不明なものを除いた最低個体数を集計し、B地区が圧倒的に多いことを確認した（第20表）。

軒平瓦（209･210）の瓦当型式は、既往の報告書・分類では確認できなかった。（115・116）は赤色系の巴文軒丸瓦だが、円形ではなく上方に伸びる可能性もあり、明朝系ではなく不明瓦としておく。

第18表　プラスチック製品出土点数

種類/部位	口～底部	口縁部	－	合計
歯ブラシ			3	3
クシ			6	6
フィルムケース	1			1
ボタン			6	6
蓋		1		1
定規			1	1
笛			1	1
箱			1	1
不明			6	6
合計	1	1	24	26

（12）円盤状製品

円盤状製品は130点で、沖縄産無釉・施釉陶器を素材としたものが多い（第21表）。

（13）その他の製品

その他の製品として、土製品（165）ゴム製硯（354）、レンガ（232・396・397）、乾電池（271）、骨製品（473）、軍靴（421）、布（629）、漆膜（758）などがあるが、詳細は観察表を参照されたい。

ゴム製硯（354）は、裏面に「サ？硯」の文字がみられる。類例では浦添市の内間西原近世墓群27号墓より出土した「ミササ硯」の陽刻が確認される硯がある（浦添市2004p101,107,185）。

さらに補足すると骨製品２点とも歯ブラシである。他に、掲載していないが木製品・木材（第22表）、銀紙が出土している。

第19表　瓦出土点数

種類	色調	個数	個数
明朝系軒丸	赤	6	6
明朝系軒平	赤	7	7
明朝系丸瓦	赤	772	899
	褐色	2	
	陶器質	125	
明朝系平瓦	赤	1098	1138
	褐色	8	
	陶器質	32	
明朝系筒部	赤	437	444
	灰	1	
	褐色	4	
	陶器質	2	
不明軒丸瓦	赤色系	2	2
合計		2496	

第20表　瓦地区別個体数

地区	区画	個体数
A	1	18
	2	20
	3	51
	4	25
	5	68
A地区 集計		182
B	6	320
	7	109
	8	127
B地区 集計		556
C	9	10
	10	44
	11	43
	12	4
C地区 集計		101
総計		839

第21表　円盤状製品出土点数

素材	個数
中国産青磁	1
中国産白磁	3
中国産青花	15
中国産褐釉陶器	1
本土産陶器	1
本土産近代磁器	19
本土産近代陶器	1
沖縄産施釉陶器	33
沖縄産無釉陶器	47
陶質土器	4
明朝系赤瓦系	5
合計	130

第22表　木製品・木材出土点数

種類	器種	個数
木製品	柱	1
	不明	1
木材	竹	1
	松葉	1
	－	3
	不明	2
合計		9

３　各調査区の出土遺物

各地区において第３節で設定した区画順に沿って遺構ごとに掲載した遺物の中で特徴的なものを中心に記述する。その際には、文脈に合わせて器形や分類名称などを略記または省略しているので、詳細は遺物観察表（第23～41表）を参照されたい。

（１）Ａ地区

屋敷地の区画を５つ含んでおり、日常的な陶磁器類が最も多い。他地区と比べると、銭貨が11点と最も多いこと、ガラス製ランプなどが特徴的である。

区画１

ＳＫ010から特に多く出土しており、沖縄産無釉陶器壺などは壕状の部分から出土している。

ＳＫ001（第72図　１）（１）は7.7ｍｍ小銃弾の薬莢である。

ＳＫ002（第72図　２～８）　沖縄産施釉陶器の小碗（２・３）・酒器（４・７）・瓶（５・６）で、酒器・瓶は口縁を欠いている。

ＳＫ009（第72図　９）（９）は沖縄産無釉陶器の甕胴部片を方形に加工したものである。

ＳＫ010（第73～76図　11～56）　陶磁器類には、青磁碗Ｖ類（11）、清代青花碗(12)、同景徳鎮窯系小杯（13）、徳化窯系色絵小杯（14）、宜興窯系急須（15）、本土産近代磁器（16～18・20～22）、本土産近世色絵小皿（19）、沖縄産施釉陶器（23～27）、沖縄産無釉陶器（28～31）がある。沖縄産施釉瓶（26）は、小型で口縁を欠いている。ガラス製品（32～42）には、ランプ笠（32）、ランプ油壺（33）、瓶（34～42）には子宮全治丸（37）・キリン清涼飲料（39）・野田醤油（42）などは戦前からのものもあるが、浮文をもつ清涼飲料（40）などは戦後のものであろう。金属製品（43～51）には、鉄製の金槌（43・

44)・ヘラ（45)・クサビ（46）などの農工具、青銅製のピンセット（51）の他は用途が不明である。他に、不明プラスチック製品（52)、砥石（53 ～ 55)、硯（56）がある。

沖縄産無釉陶器壺（30・31）や野田醤油瓶（42）などは壕部分より出土している。

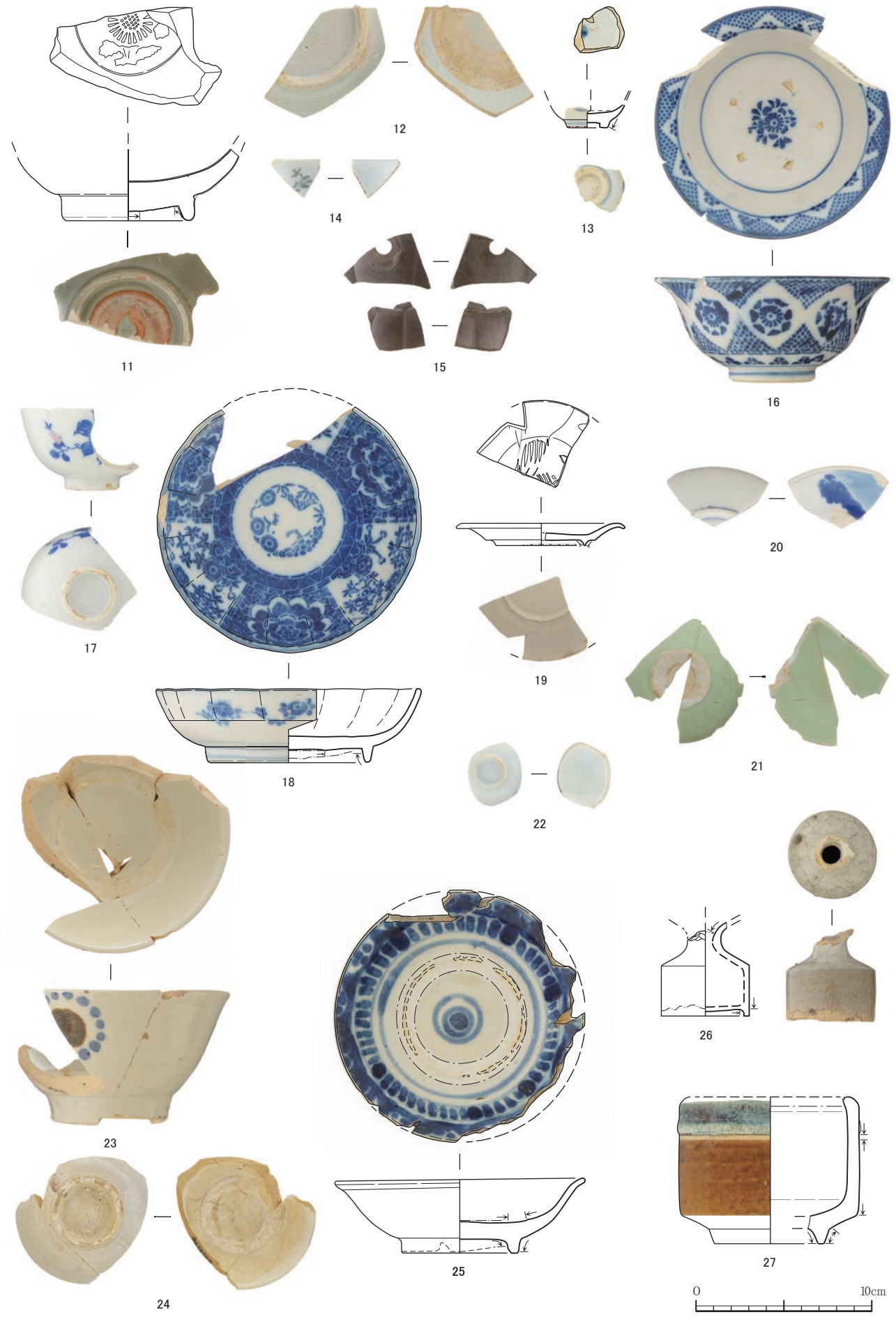
ＳＫ 011（第 72 図　10）（10）は小型のプラスチック製笛である。

ＳＫ 036（第 77 図　57 ～ 64）（57）は景徳鎮窯系白磁小杯、（58）は本土産近代磁器皿、（59）は沖縄産無釉陶器甕、（60）はガラス製カップ状玩具（ミニチュア)、（61）は鉄釘、（62）は鉄製不明品、（63）は合金製小型のチューブ、（64）は印部石「ま　かみ山原」の破片である。

なお、印部石の破片は遺構の床石に転用されていた。

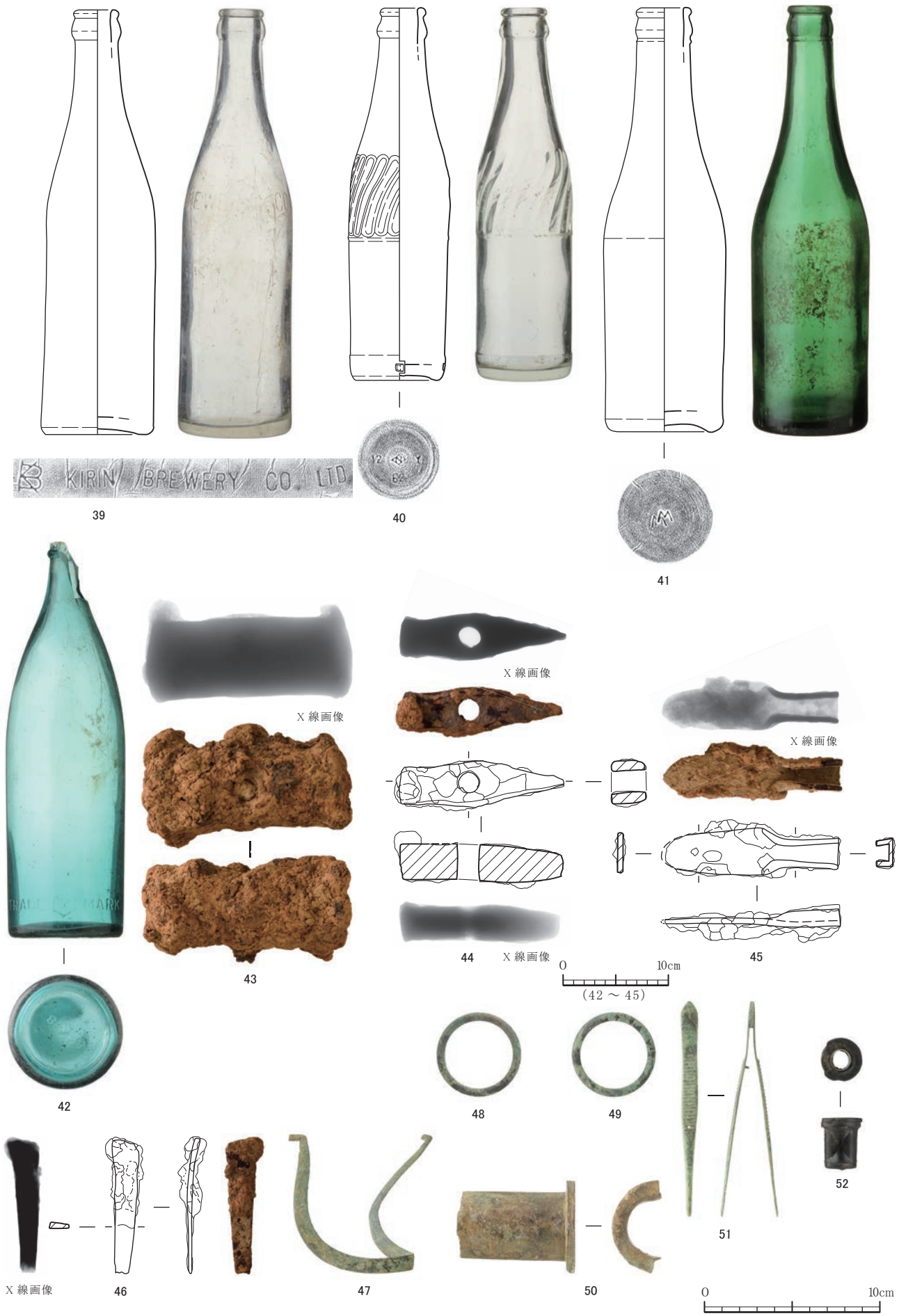
ＳＫ 038（第 77 図　65）（65）は清朝銭の嘉慶通寶である。

第 72 図　Ａ地区区画１出土遺物（１）　ＳＫ 001…１　ＳＫ 002…２～８　ＳＫ 009…９　ＳＫ 011…10



第 73 図　Ａ地区区画１出土遺物（２）　ＳＫ 010…11 ～ 27

第 74 図　A地区区画１出土遺物（３）　ＳＫ 010…28 ～ 38



第 75 図　A 地区区画 1 出土遺物（4）　S K 010…39 ～ 52

区画２

本区画では銭貨が６点と比較的多く出土している。

ＳＫ 041（第 78・79 図　66 ～ 91）　確実に本遺構から出土したものには、本土産近代磁器（66 ～ 77）、景徳鎮窯系色絵小杯（78）、沖縄産施釉陶器（79 ～ 83）、ガラス瓶（84 ～ 87）がある。（87）は化粧クリーム瓶で平尾分店と刻印される。また取り上げ時に混入していしまい SF001 の可能性があるものとして、（88）は青銅製板状不明製品、（89）は青銅製砲弾の弾体片、（90）は鉄製カスガイ、（91）は明治十年銘一銭銅貨である。

本遺構はタコツボとして考えているが、これらの遺物の多くは集落に係るものが大半であるため、戦後に埋没した際に流入したものが多いと思われる。

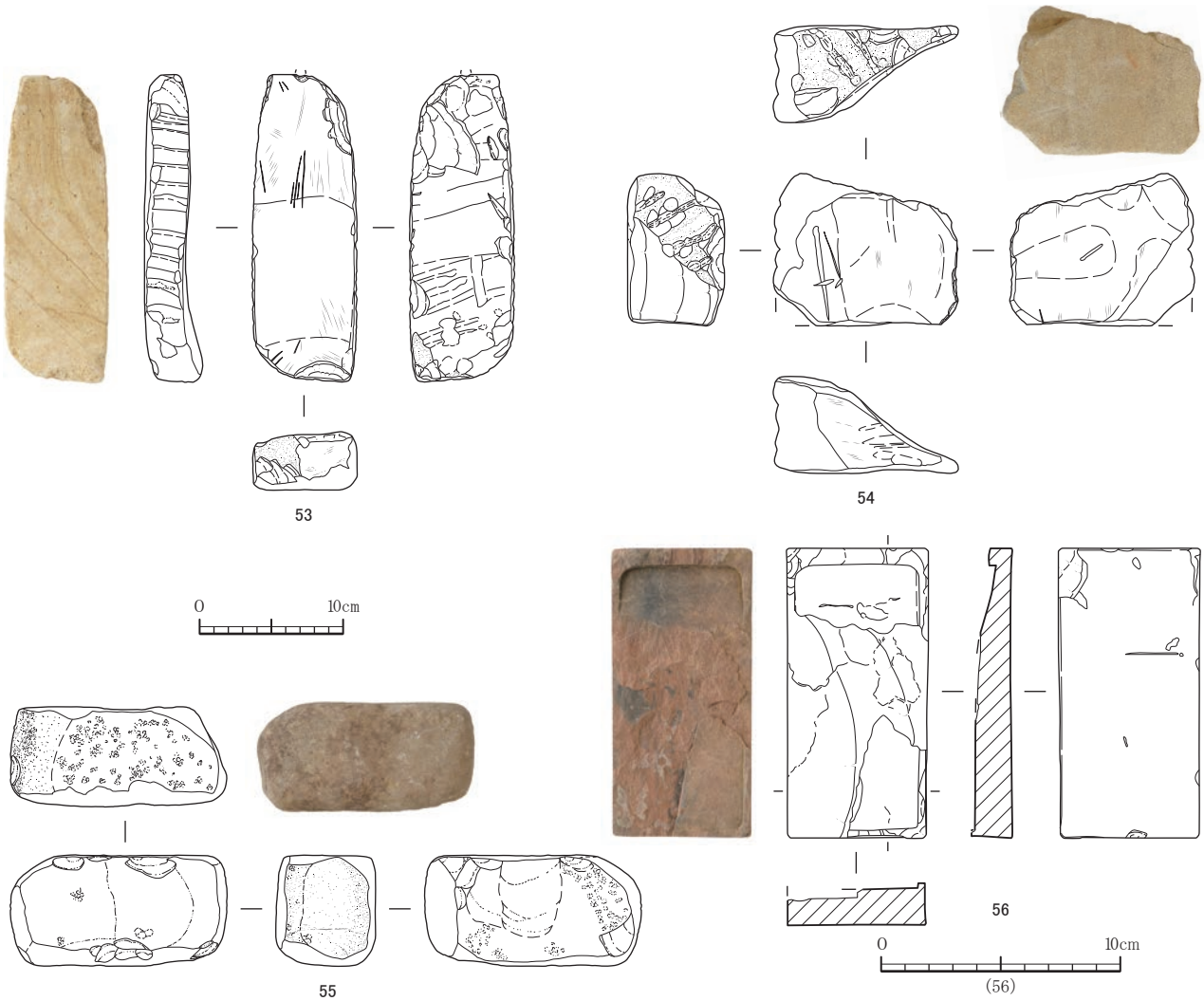
ＳＫ 042（第 79 図　92 ～ 101）（92）は徳化窯系白磁小杯、（93）は本土産近代磁器急須、（94）はガラス製の蓋（栓）、（95）は鉄製板状不明製品、（96）は鉄製ヘラ、（97 ～ 99）は寛永通寶、（100）は清朝銭の康熙通寶、（101）は明治三十二年銘稲一銭青銅貨である。

銭貨が５点と比較的多く出土しており、区画の境界に位置することと関連するのであろうか。

ＳＫ 078（第 79 図　102）（102）はコーラ瓶であり、本遺構は戦後に埋没したものと思われる。

区画３

建物１が検出されているが、遺物の出土量はそれほど多くない。ただ、小破片のため掲載できなかったが、建物１では近世の陶磁器が大半である（第 53 表）。

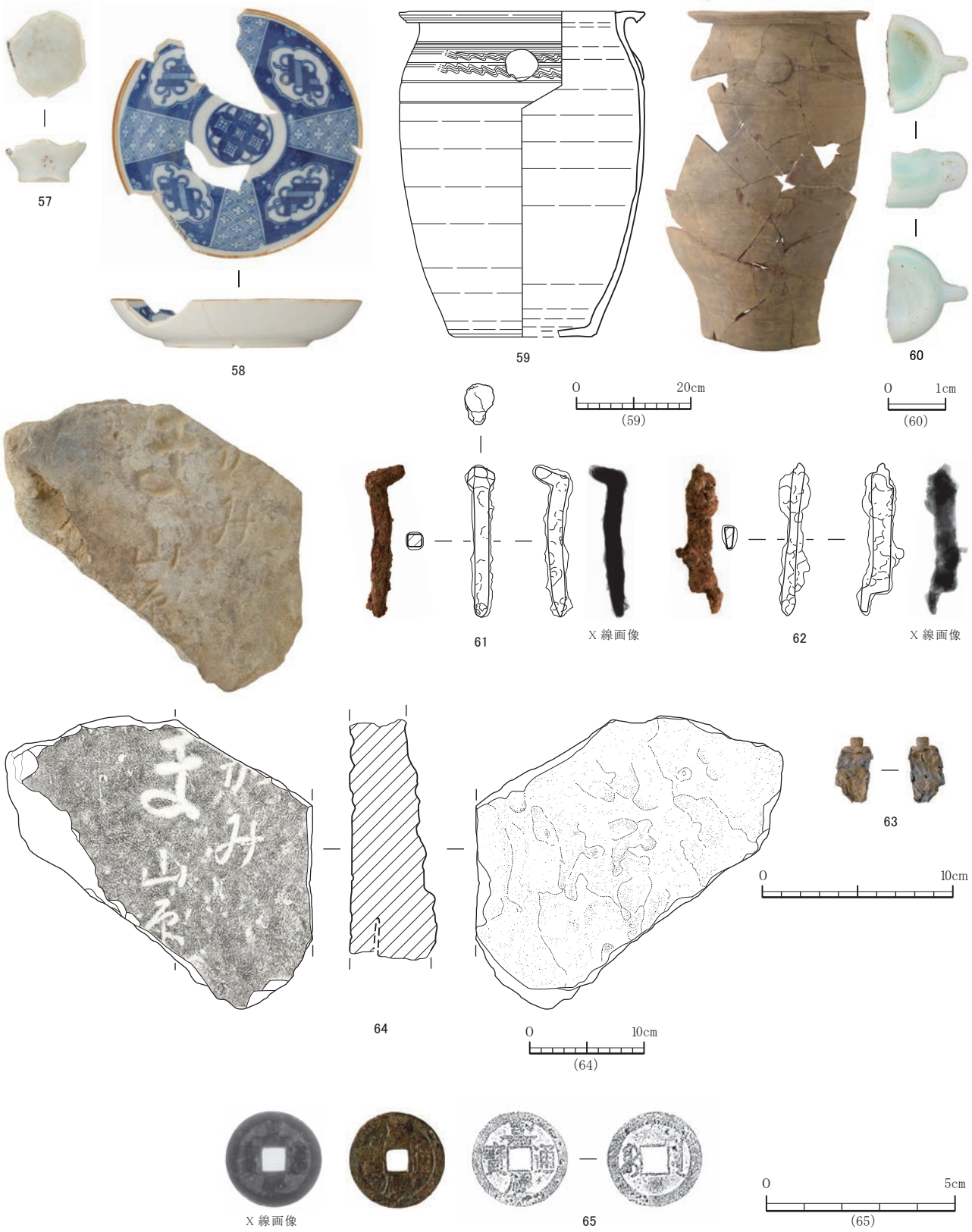


第 76 図　Ａ地区区画１出土遺物（５）　ＳＫ 010…53 ～ 56

道１（ＳＦ 001）（第 80 図　103 ～ 117）（103）は徳化窯系白磁杯、（104・105）は本土産近代磁器、（106 ～ 108）はガラス瓶、（109）はガラスコップ、（110）は青銅製スプーン、（111）は青銅不明製品、（112）は 7.7mm 小銃弾の薬莢、（113）は鉄ヘラ、（114）はロケット弾の一部、（115・116）は型式未確認の巴文軒丸瓦、（117）はプラスチック製歯ブラシである。

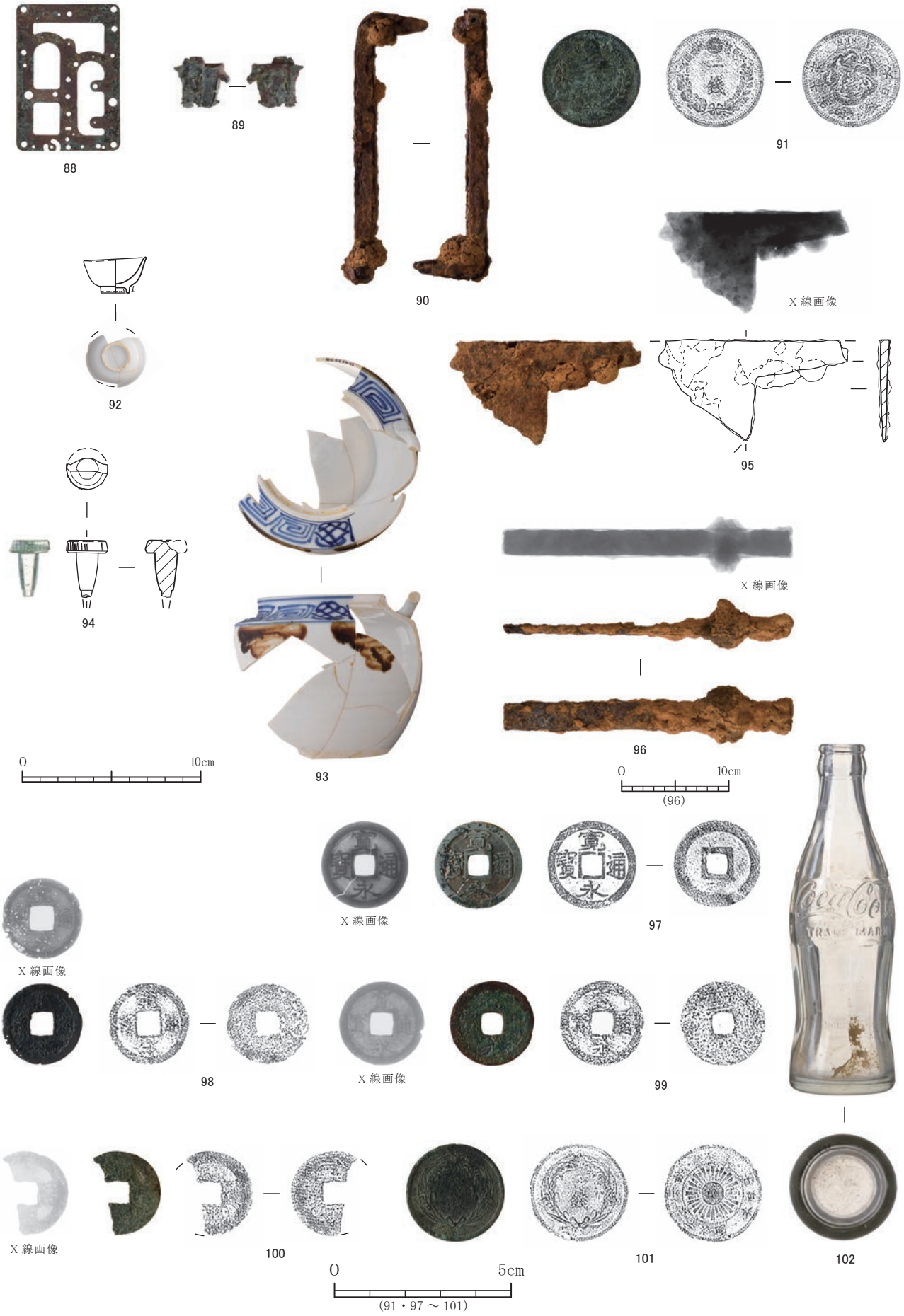
大半は交通壕と考えられる側溝から出土しているが、多くは埋没時の屋敷地からの流入であろう。

ＳＫ 013（第 81 図　118・119）（118・119）は石臼で、後者は粉挽き臼の上臼である。



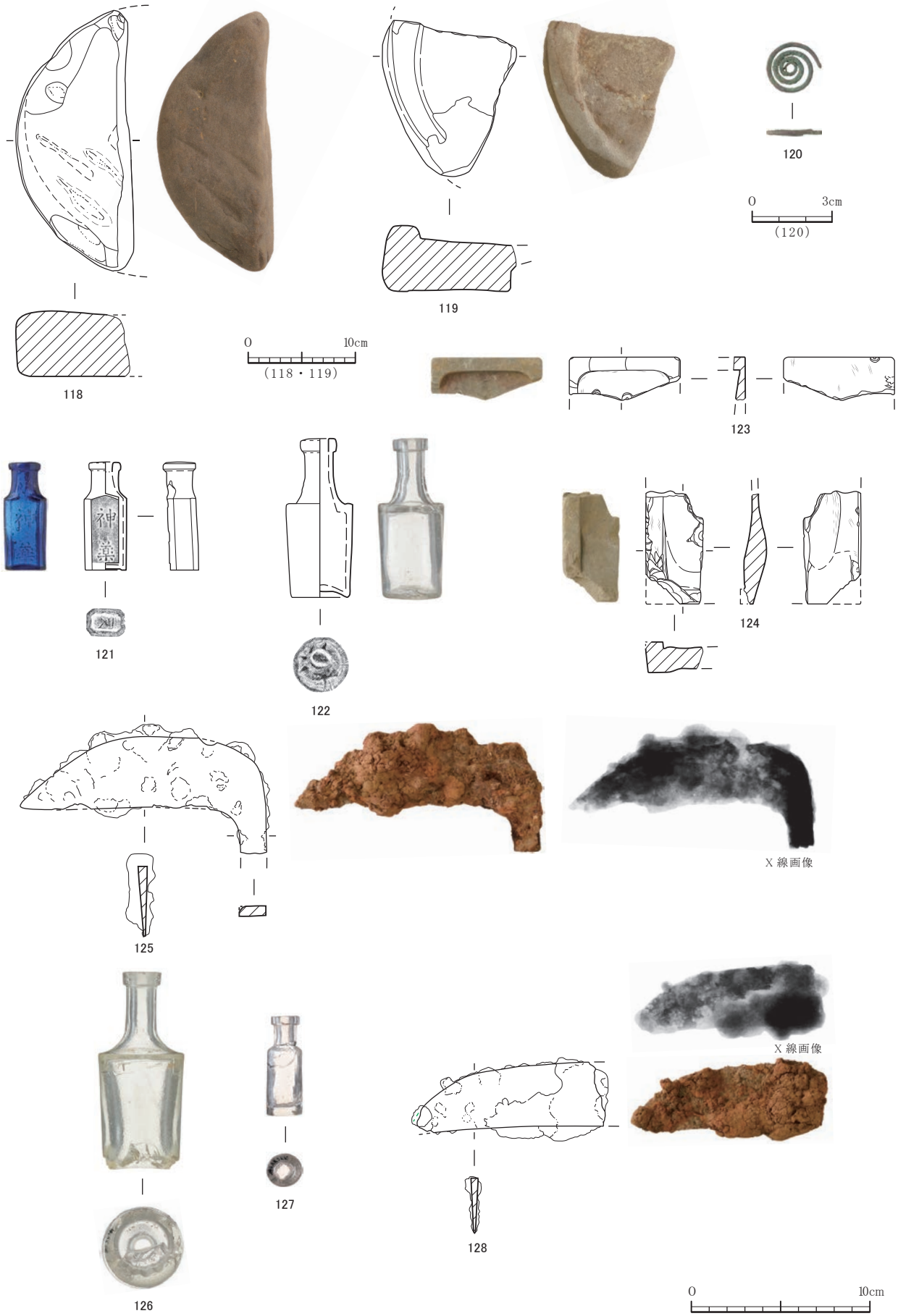
第 77 図　Ａ地区区画１出土遺物（６）　ＳＫ 036…57 ～ 64　ＳＫ 038…65

第 78 図　Ａ地区区画２出土遺物（１）　ＳＫ 041…66 ～ 87



第 79 図　A地区区画２出土遺物（２）　ＳＫ 041・ＳＦ 001…88～91　ＳＫ 042…92～101　ＳＫ 078…102

第 80 図　A地区区画３出土遺物（１）　ＳＦ 001…103 ～ 117



第 81 図　Ａ地区区画３出土遺物（２）　ＳＫ 013…118･119　ＳＫ 022…120　ＳＫ 023…121 ～ 124
ＳＫ 026…125　ＳＫ 032…126　ＳＫ 045…127・128

ＳＫ 022（第 81 図　120）（120）は青銅製の渦巻き状不明品である。

ＳＫ 023（第 81 図　121 ～ 124）（121・122）はガラス瓶、（123・124）は硯である。

ＳＫ 026（第 81 図　125）（125）は鉄鎌である。

ＳＫ 032（第 81 図　126）（126）は化粧瓶と考えられるガラス瓶である。

ＳＫ 045（第 81 図　127・128）（127）は薬瓶と考えられるガラス瓶、（128）は鉄鎌である。

ＳＰ 031（第 82 図　129）（129）は使用痕が残る磨製石斧である。

ＳＰ 082（第 82 図　130）（130）は本土産近代青磁の三足瓜形香炉である。

ＳＤ 011（第 82 図　131 ～ 134）（131）は「神薬」と銘されるガラス瓶、（132）は青銅製板状不明品、（133）はネジ孔を有する板状鉄製品、（134）はプラスチック製ボタンである。

区画４

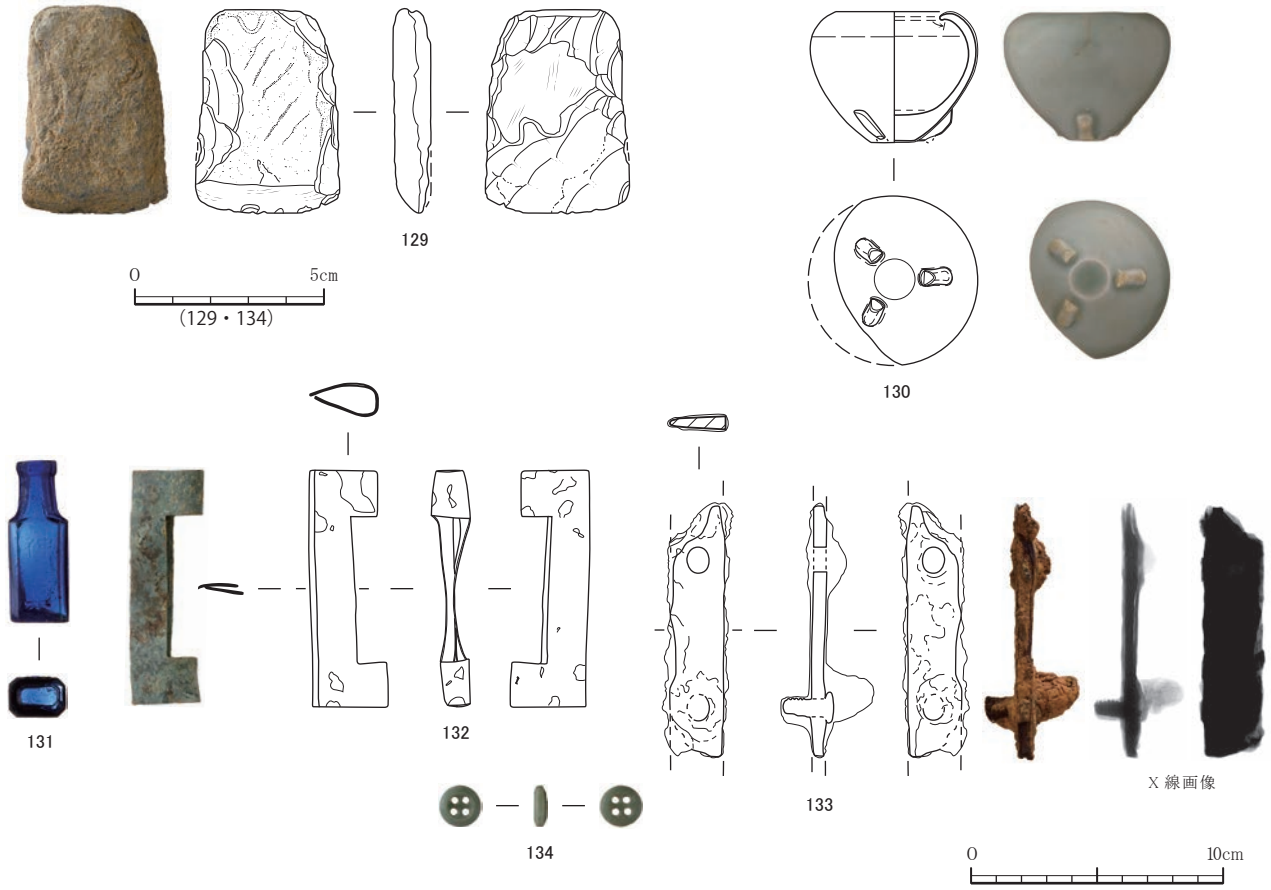
大型土坑の SK067 から多く出土しているが、壕 SK068 はそれに接しており後者のものが含まれている可能性は高い。また、銭貨が 4 点出土している。

ＳＫ 067（第 83・84 図　135 ～ 168）（135）は福建産白磁碗、（136）は徳化窯系青花碗、（137）はタタキ目のある産地不明陶器、（138 ～ 144）は本土産近代磁器、（145・146）は関西系陶器鍋と蓋、（147 ～ 149）は沖縄産施釉陶器、（150）は沖縄産無釉陶器、（151 ～ 153）はガラス製ランプ笠、（154 ～ 158）はガラス瓶、（159）はビー玉の変形品か、（160）は丸釘、（161）は無文銭、（162）は寛永通寶、（163・164）は一銭銅貨、（165）は蓋状の土製不明品、（166）は円盤状製品、（167）は不明プラスチック製品、（168）はプラスチック製クシである。

ランプ笠や銭貨がまとまって出土している。

壕ＳＫ 068（第 85 図　169 ～ 171）（169）は石臼、（170・171）は沖縄産無釉陶器甕である。

ＳＤ 015（第 86 図　172 ～ 180）（172 ～ 174）は本土産近代磁器、（175 ～ 178）は沖縄産施釉陶器、（179・



第 82 図　Ａ地区区画３出土遺物（３）　ＳＰ 031…129　ＳＰ 082…130　ＳＤ 011…131 ～ 134

第 83 図　A地区区画４出土遺物（１）　ＳＫ 067…135 ～ 150

第 84 図　A地区区画４出土遺物（２）　S K 067…151 ～ 168

180）は蹄鉄である。

区画５

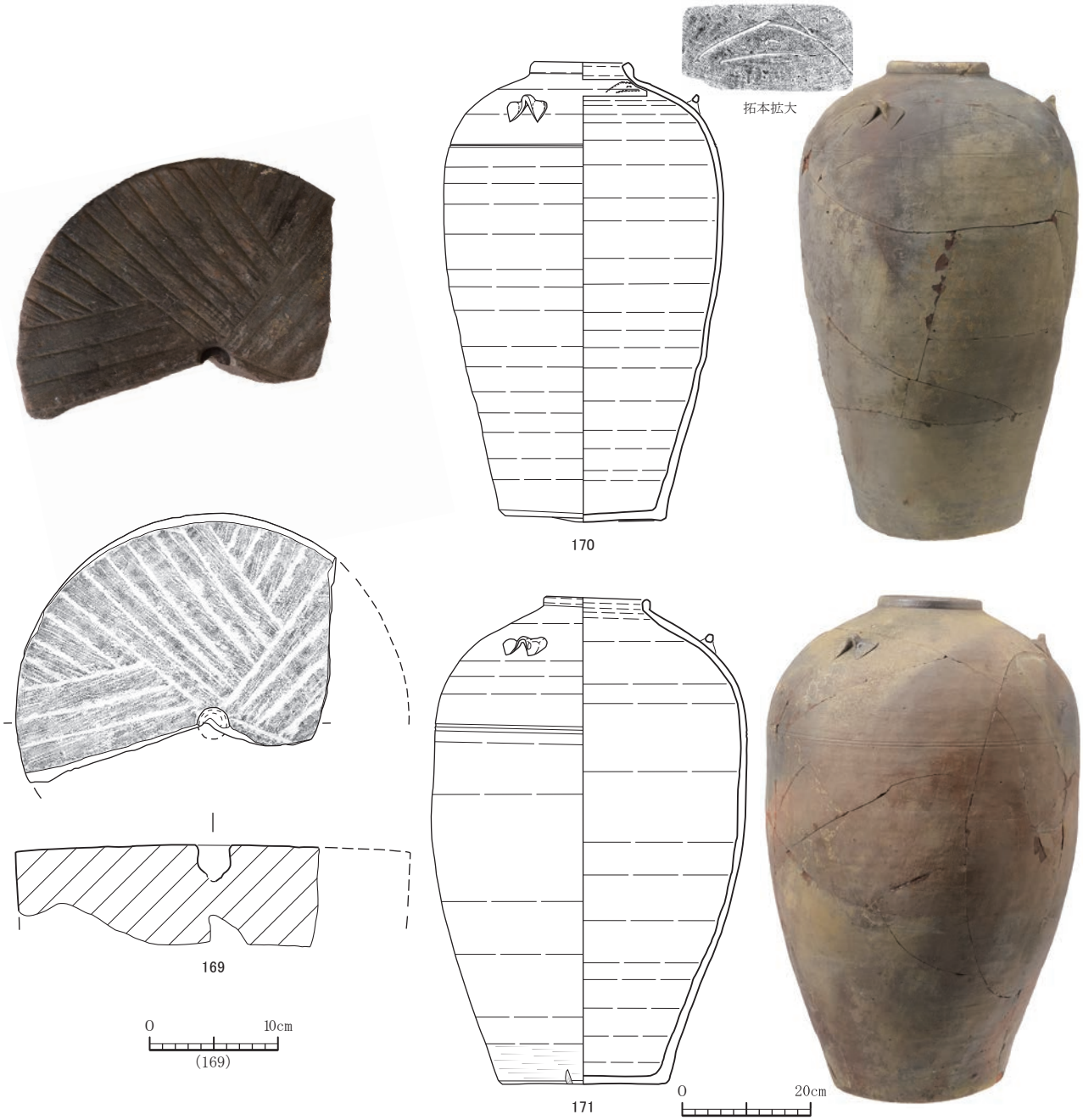
壕ＳＫ066が位置しており、沖縄産無釉陶器壺がまとまって出土している。また手榴弾も２点見られた。

ＳＫ051（第87図　181～183）（181）は本土産近代磁器小杯、（182）はガラス製インク瓶、（183）はプラスチック製歯ブラシである。

ＳＫ061（第87図　184・185）（184）は砥石と思われるもの、（185）はガラス瓶である。

ＳＫ063（第87図　186～188）（186）はガラス製化粧瓶、（187）は12.7mm機銃弾、（188）は手榴弾の信管部である。

壕ＳＫ066（第88図　189～200）（189）は関西系近世陶器擂鉢、（190～193）は沖縄産無釉陶器壺、（194～196）は同一個体の可能性が高く器壁が薄い蓋付きの広口で口縁に返しがあるガラス瓶、（197）は女性用青銅製簪、（198）は青銅製把手、（199）は手榴弾の信管部、（200）は明朝系丸瓦である。



第85図　Ａ地区区画４出土遺物（３）　ＳＫ067・068…169　ＳＫ068…170・171

第 86 図　A地区区画４出土遺物（４）　ＳＤ 015…172 ～ 180

（２）Ｂ地区

Ａ地区と同様の印象を受けるが、瓦の出土量が最も多い。なお、図面・図版のレイアウトの都合で、区画６→８→７の順に記述しているので注意されたい。

区画６

区画内には石・レンガ囲いなどの長方形土坑が多い一方ピットは少ないが、瓦だまりであるＳＫ 002があり建物が建っていたものと思われる。沖縄産陶器壺などの大型品が少ない傾向である。

ＳＫ 002（第 89 図、図版 106　201 ～ 215）（201）は沖縄産施釉陶器瓶、（202 ～ 204）はガラス瓶、（205）は 12.7mm 機銃弾薬莢、（206）は鉄製蓋と思われる不明製品、（207）は鉄製砲弾弾殻破片、（208）は石盤、（209・210）は新出型式の明朝系軒平瓦、（211・212）は同丸瓦、（213・214）は同平瓦、（215）はプラスチック製クシである。

本遺構は瓦だまりで、小片のため全て採取しておらず、最低個体数は 80 点程度を数える。遺構の説明で述べたが、後述する砲弾片が出土するＳＫ 034 よりも新しい遺構なので、戦後の一時期に瓦葺建物があった可能性が考えられる。

ＳＫ 005（第 90 図、図版 107　216 ～ 220）（216）は国民食器碗、（217）はアルミ製飯盒の蓋、（218）は鉄ヘラ、（219）は板状不明鉄製品、（220）は明朝系丸瓦である。

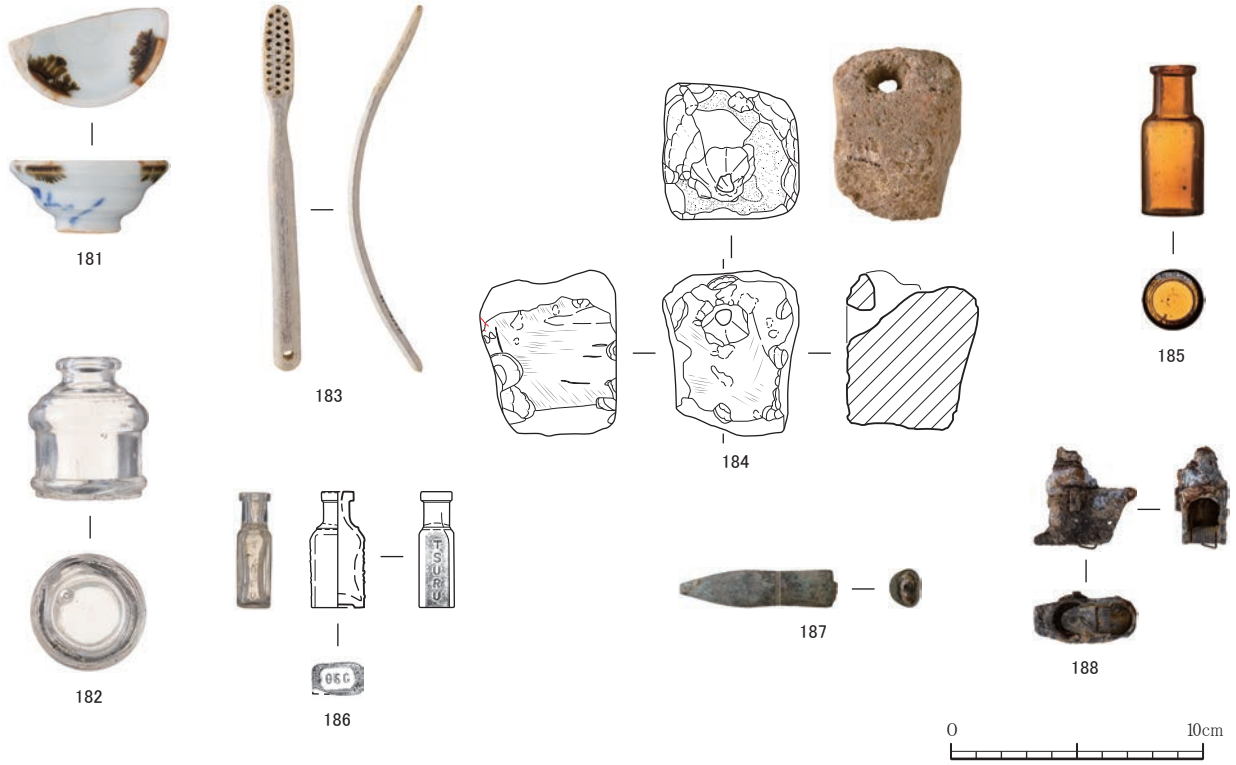
ＳＫ 006（図版 107　221 ～ 226）（221）は徳化窯系色絵杯、（222 ～ 224）は本土産近代磁器、（225）は沖縄産施釉陶器小碗、（226）は石盤である。

ＳＫ 007（第 90 図、図版 108　227・228）（227）は産地不明の中国産青磁瓶、（228）は穿孔されている小型の砥石である。

ＳＫ 011（図版 108　229）（229）は 7.7mm 小銃弾で薬莢部分が一部欠損している。

ＳＫ 012（第 90 図、図版 108　230 ～ 232）（230）は砥部産碗、（231）はおそらく砥部産香炉、（232）はレンガである。レンガの完品のサイズは 24 × 13 × 6 cm であった。

ＳＫ 017（第 90 図、図版 108　233）（233）は青銅製煙管の雁首で羅宇が部分的に残る。



第 87 図　Ａ地区区画５出土遺物（１）　ＳＫ 051…181 ～ 183　ＳＫ 061…184・185　ＳＫ 063…186 ～ 188

第 88 図　Ａ地区区画５出土遺物（２）　ＳＫ 066…189 ～ 200

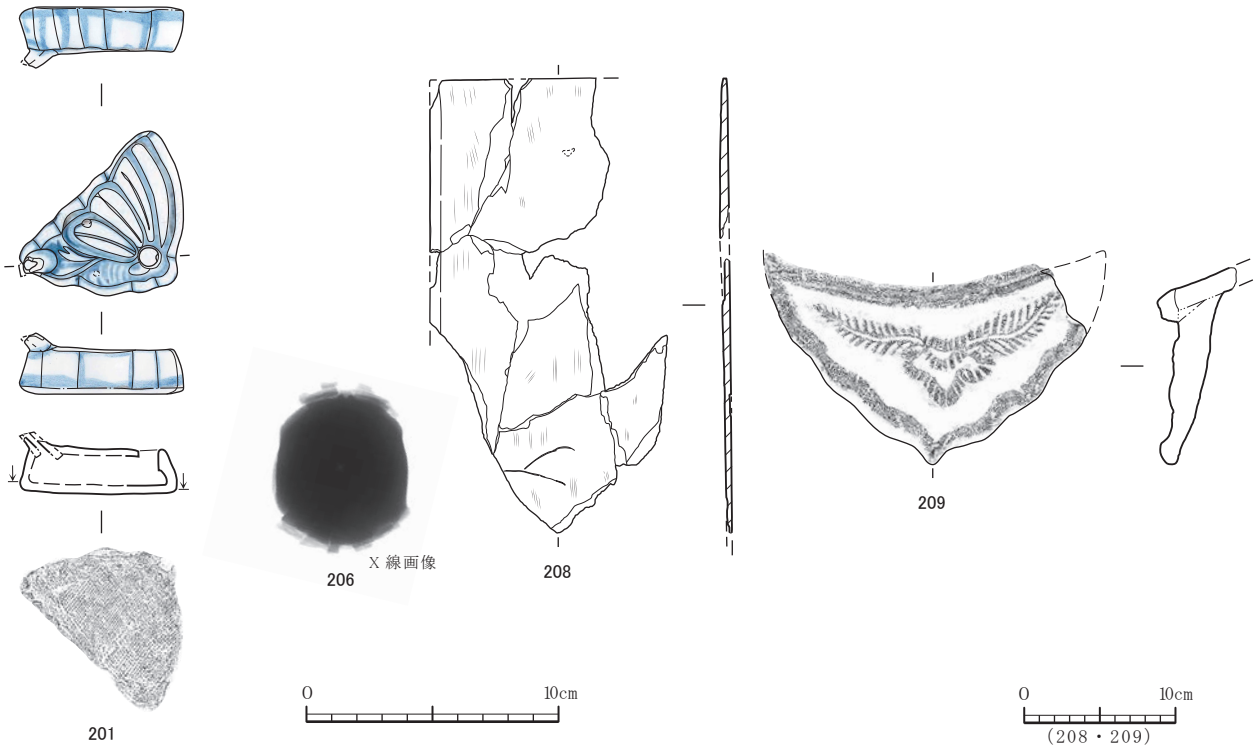
ＳＫ 025（図版 108　234）（234）はいかり肩のガラス瓶である。

ＳＫ 034（第 91 図、図版 109　238・239）（238・239）は砲弾の鉄製弾殻片に青銅製弾体片が付着している。

　この土坑が爆弾穴と規模の点からは考えにくいので、戦後に整理もしくは造成されたものと思われる。先述のように瓦だまりである SK002 は本遺構よりも新しい。

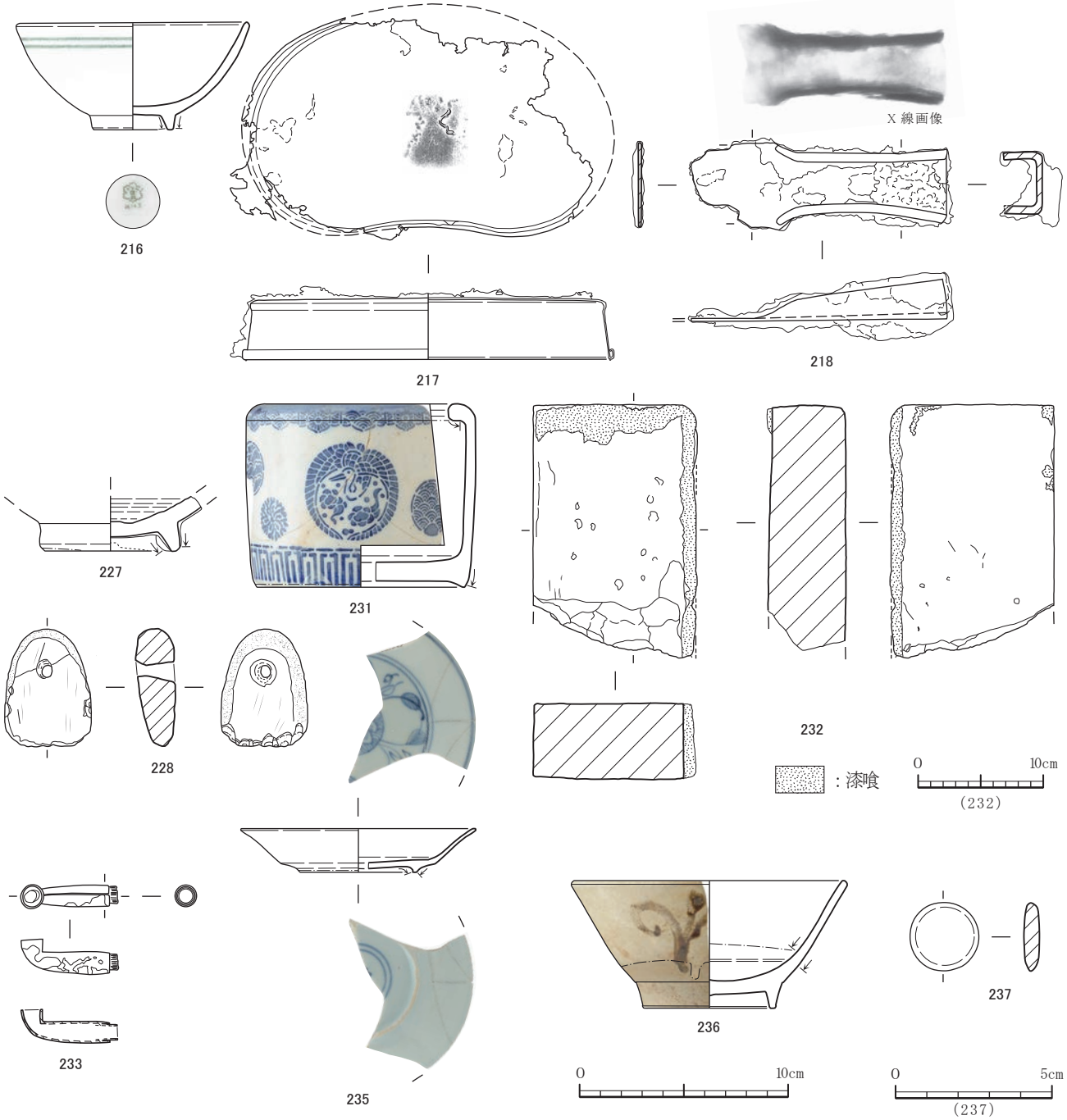
ＳＫ 042（第 90 図、図版 108　235 ～ 237）（235）は明代景徳鎮窯系青花皿、（236）は沖縄産施釉陶器碗、（237）は碁石である。

ＳＤ 001（第 92 図、図版 110　240 ～ 254）（240）は国民食器小碗、（241）は沖縄施釉陶器碗、（242）



第 89 図　Ｂ地区区画６出土遺物（１）　ＳＫ 002…201・206・208・209

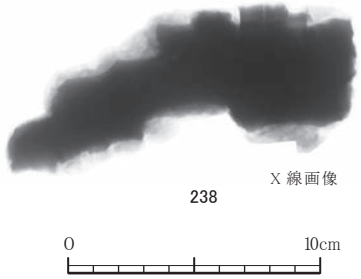
図版 106　Ｂ地区区画６出土遺物（１）ＳＫ 002…201 ～ 215



第 90 図　Ｂ地区区画６出土遺物（２）　ＳＫ 005…216 ～ 218　ＳＫ 007…227・228　ＳＫ 012…232
ＳＫ 017…233　ＳＫ 042…235 ～ 237

図版 107　Ｂ地区区画６出土遺物（２）ＳＫ 005…216 ～ 220　ＳＫ 006…221 ～ 226

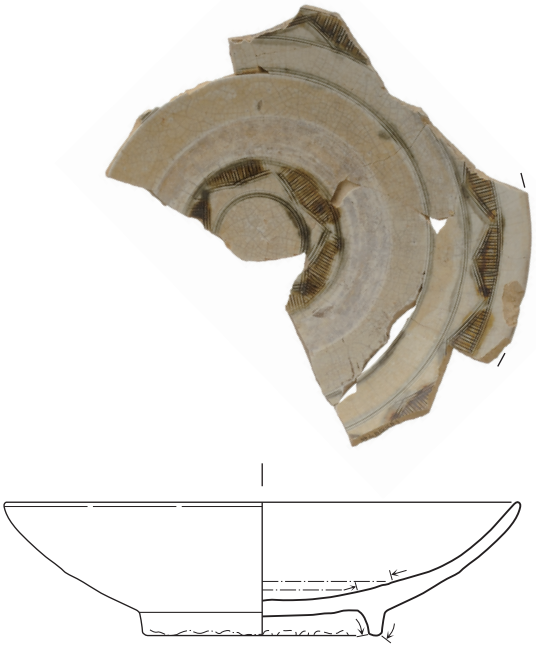
図版 108　Ｂ地区区画６出土遺物（３）　ＳＫ 007…227・228　ＳＫ 011…229　ＳＫ 012…230 ～ 232
ＳＫ 017…233　ＳＫ 025…234　ＳＫ 042…235 ～ 237

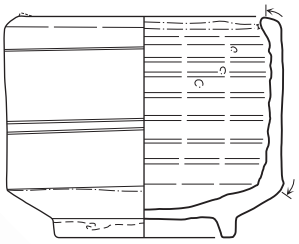


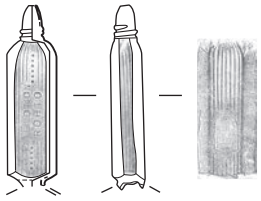
第 91 図　Ｂ地区区画６出土遺物（３）
ＳＫ 034…238

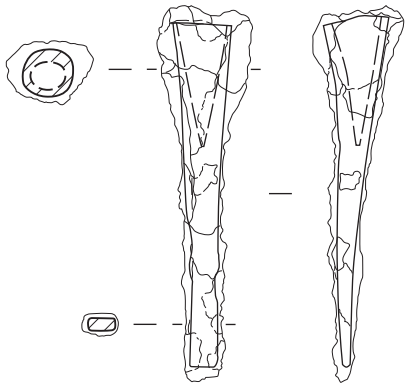
図版 109　Ｂ地区区画６出土遺物（４）　ＳＫ 034…238・239

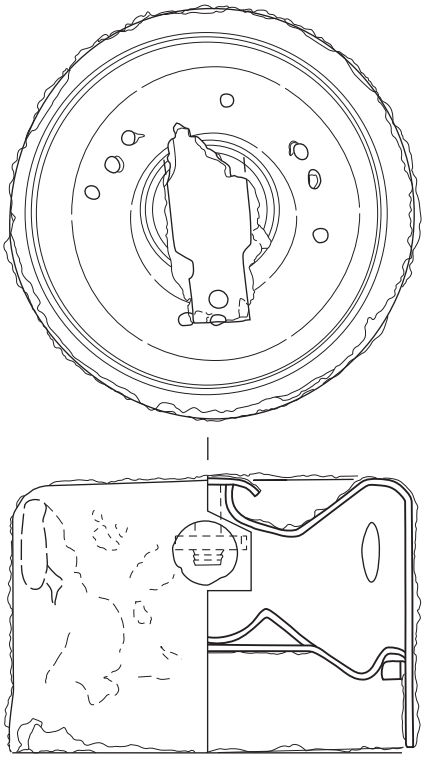
図版 110　Ｂ地区区画６出土遺物（５）　ＳＤ 001…240 ～ 254　ＳＤ 002…255

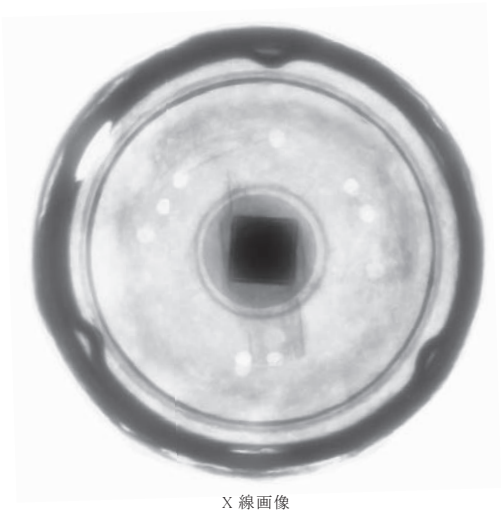


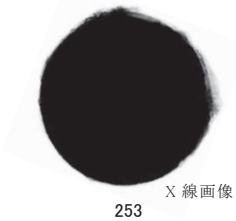


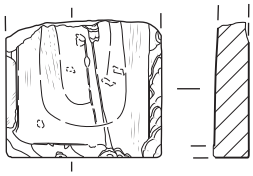


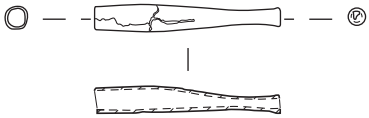




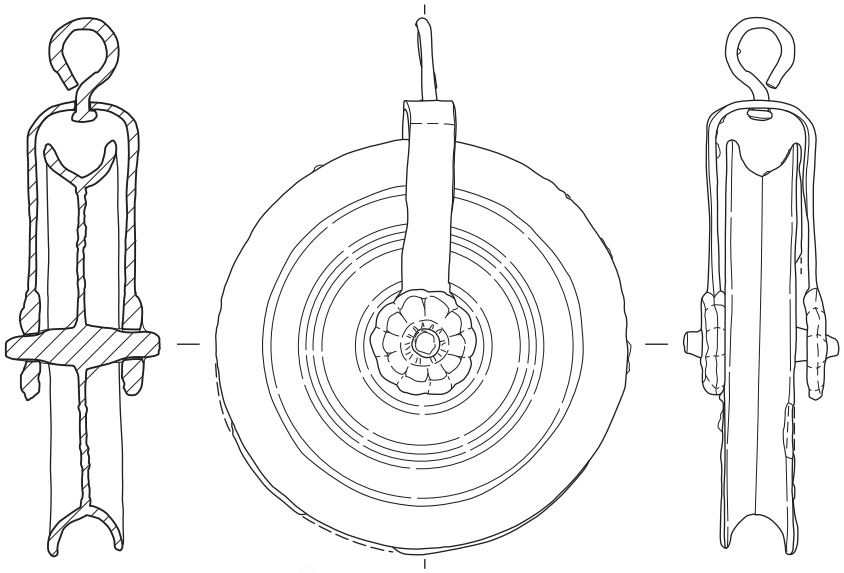






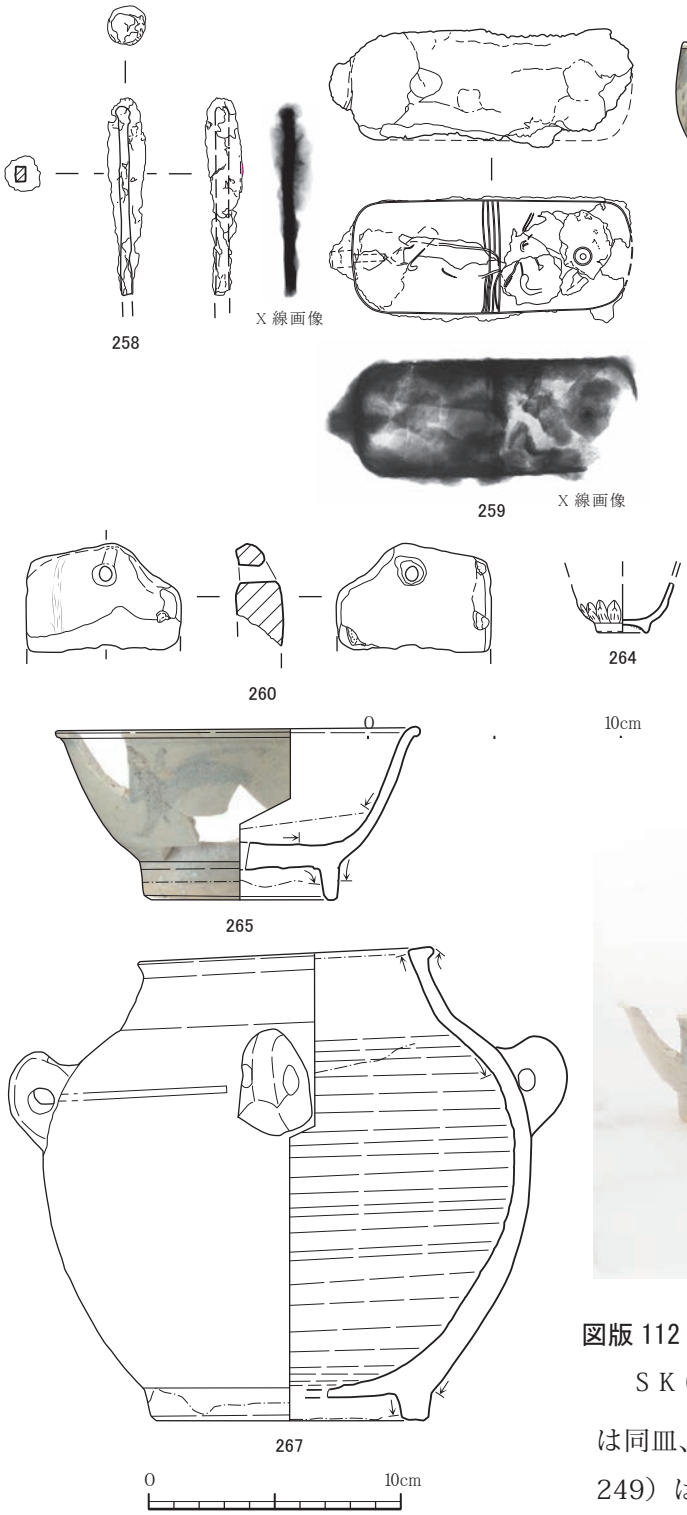


第 92 図　B地区区画６出土遺物（４）　ＳＤ 001…242 ～ 244・251 ～ 254　ＳＤ 002…255



第 93 図　B地区区画６出土遺物（５）　B地区南端外表採…256

図版 111　B地区区画８出土遺物（１）　ＳＤ 006…257 ～ 260　ＳＤ 007…261 ～ 263　ＳＤ 012・013…264



第 94 図　Ｂ地区区画８出土遺物（１）

ＳＤ 006…258 ～ 260　ＳＤ 007…261 ～ 263

ＳＫ 40…265・267

図版 112　Ｂ地区区画８出土遺物（２）

ＳＫ 040…265 ～ 269

は同皿、(243)は同火入、(244 ～ 247)はガラス瓶、(248・249）は不明青銅製品、（250）は 12.7mm 機銃弾薬莢、（251）は何らかの鉄製蓋、(252・253）は鉄製不明製品、（254）は硯である。

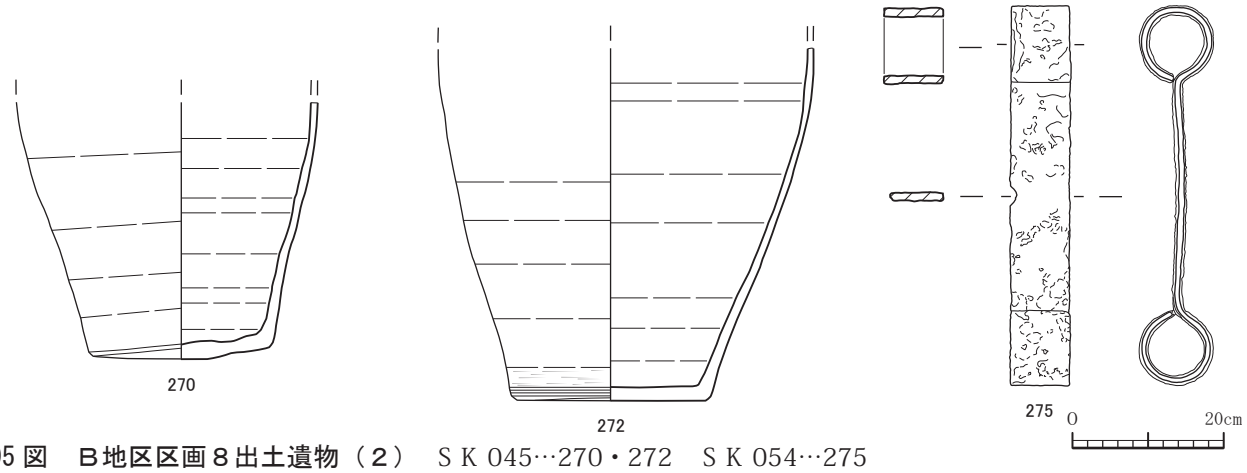
コーラ瓶（246）が埋土下層で出土しているので、本遺構は戦後に埋没したものと思われる。

ＳＤ 002（第 92 図、図版 110　255）（255）は青銅製煙管の吸口である。

区画６付近表採（第 93 図　256）（256）は鉄製滑車であり、Ｂ地区南西端の調査区外の地表で採集した。井戸の滑車と考えられ、位置的にはＢ地区井戸ＳＥ 001 が近いためこれに伴った可能性も考えられる。

区画８

石敷きＳＳ 002 や周辺の建物２などの遺構が見られるが、他地区と突出した内容は窺えない。一方、



第 95 図　Ｂ地区区画８出土遺物（２）　ＳＫ 045…270・272　ＳＫ 054…275

図版 113　Ｂ地区区画８出土遺物（３）　ＳＫ 045…270 ～ 274　ＳＫ 054…275　ＳＫ 055…276

東側に位置する壕ＳＫ 043・051 では、どちらとも沖縄産陶器壺は少なく、後者には沖縄戦に関連するような遺物が多いのが特徴といえる。

ＳＤ 006（第 94 図、図版 111 257 ～ 260）（257）は男性用の青銅製簪、（258）は角釘、（259）はボンベ状の不明鉄製品、（260）は砥石である。

道２の南側溝であり、他に沖縄産陶器（図版 57 下左）も見られたが、遺物は多くはない。

ＳＤ 007（第 94 図、図版 111 261 ～ 263）（261）は関西系近世陶器碗、（262）は沖縄産施釉陶器香炉、（263）は鉄へ

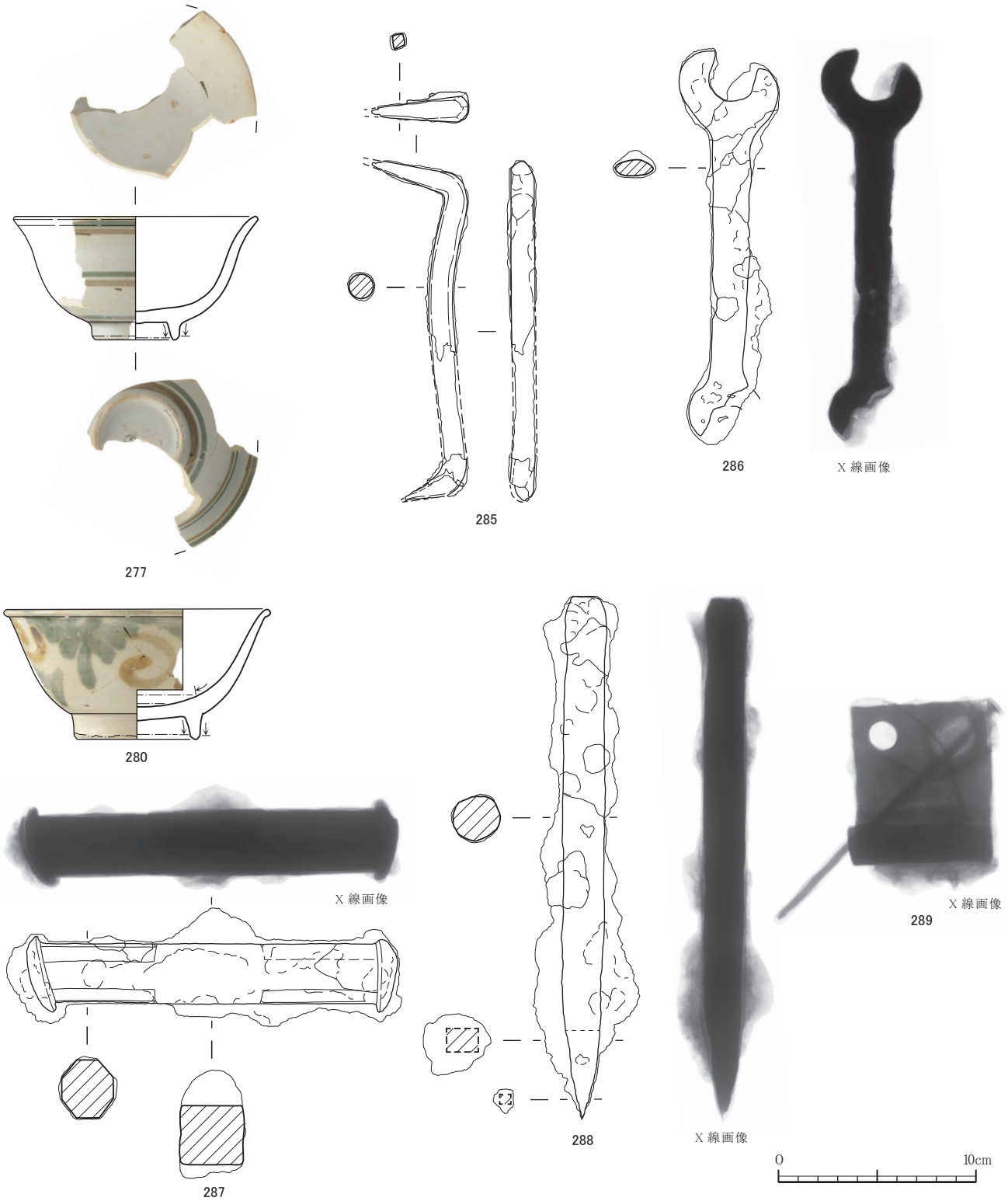
図版 114　Ｂ地区区画８出土遺物（４）　ＳＳ 002 直上…284
ＳＳ 002…下層 277 ～ 283・285 ～ 290

ラである。

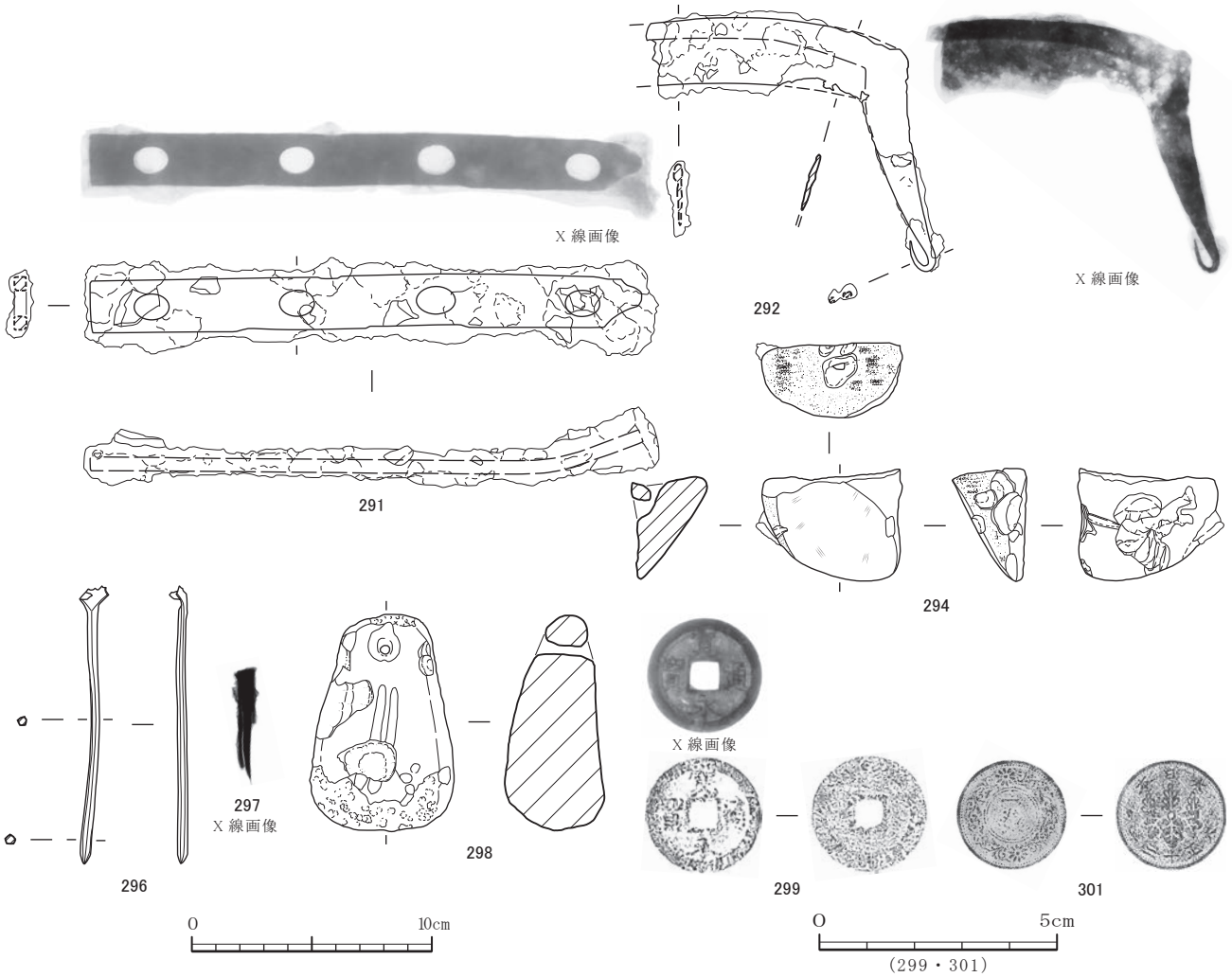
ＳＤ 012・013（第 94 図、図版 111　264）（264）は徳化窯系白磁小杯である。

ＳＫ 040（第 94 図、図版 112　265 ～ 269）（265）は清代福建・広東産青花碗、（266）は本土産近代磁器瓶、（267）は沖縄産施釉陶器壺、（268）は青銅製把手、（269）はプラスチック製棒状不明品である。

ＳＫ 045（第 95 図、図版 113　270 ～ 274）　沖縄産無釉陶器甕の底部（270・272）が２基埋められており、その中に獣魚骨や他の遺物が出土した。甕１（270）から乾電池の炭素棒（271）、甕２（272）から本土産近代磁器小皿（273）・沖縄産施釉陶器碗（274）が出土している。

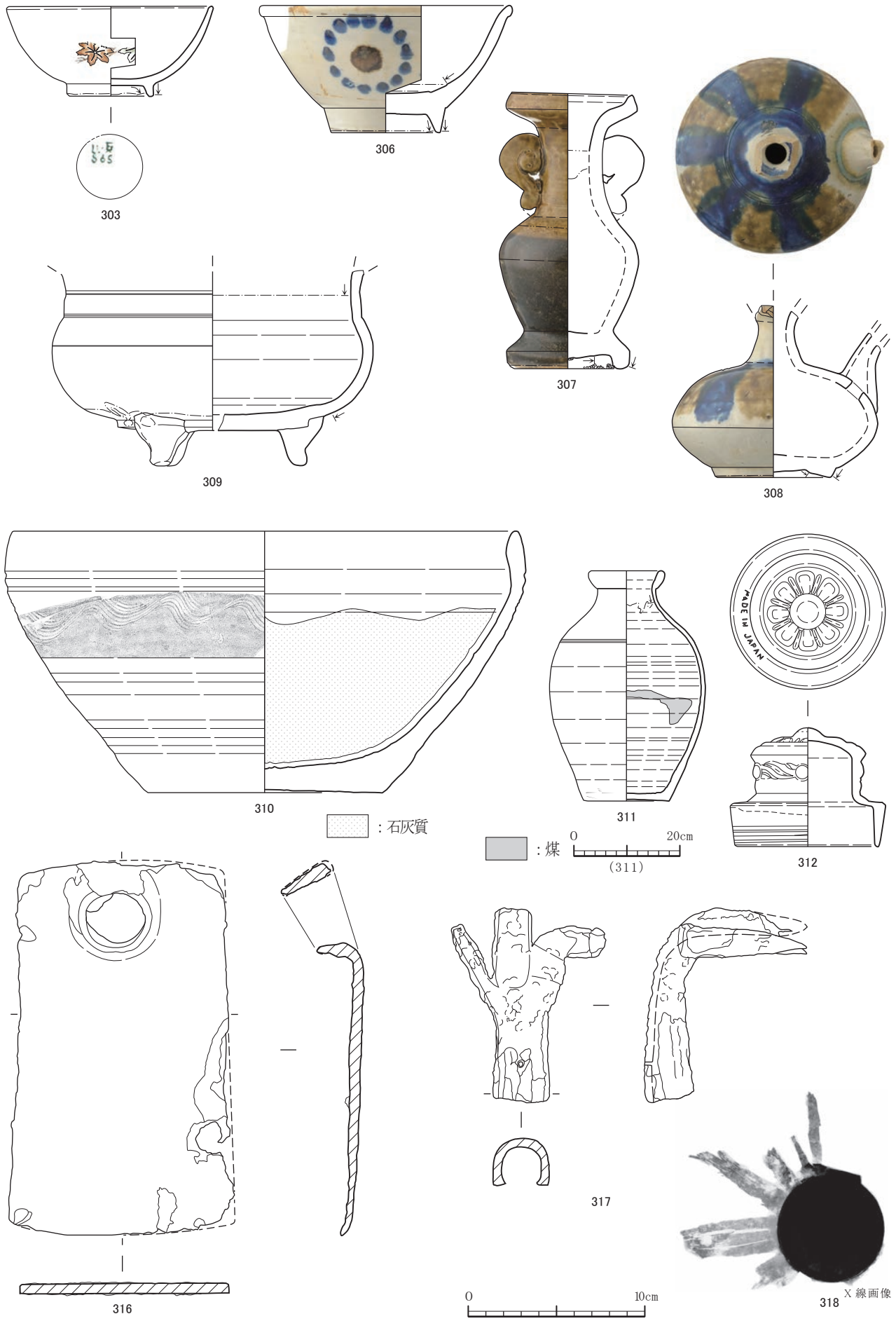


第 96 図　Ｂ地区区画８出土遺物（３）　ＳＳ 002 下層…277・280・285 ～ 289



第 97 図　B 地区区画８出土遺物（４）　S K 074…291・292・294　S K 089…296 ～ 299　B 地区不明…301

図版 115　B 地区区画８出土遺物（５）　S K 074…291 ～ 294　S K 089…295 ～ 299　S K 095…300
B 地区不明…301



第 98 図　B地区区画８出土遺物（５）　ＳＫ 043…303・306 ～ 312・316 ～ 318

甕の破断された面は意識的なものは見られないので、本来は甕全体が埋まっていたのが廃絶時に上半が削平されたものと考えられる。

ＳＫ 054（第 95 図､図版 113　275）（275）は両端を折り曲げ環状にした大型の板状不明鉄製品である。建物２のプラン内にある石囲い土坑で、他の遺物は沖縄産陶器片など若干みられた。

ＳＫ 055（図版 113　276）（276）は沖縄産無釉陶器瓶で、頚部より上を欠いているが意識的なものかは不明である。

ＳＳ 002 直上（図版 114　284）（284）は板状不明合金製品である。

ＳＳ 002 下層（第 96 図、図版 114　277 ～ 283･285 ～ 290）（277 ～ 279）は本土産近代磁器、（280･281）は沖縄産施釉陶器碗、（282）は陶質土器蓋、（283）はガラス製染料瓶、（285）はカスガイ、（286）はスパナ、（287）は金槌、（288）は石工用鑿、（289）は丸釘が付着した不明板状鉄製品である。

ＳＳ 002 は建物２内外に広がる石敷きであり、その下層は造成土にあたり明確に戦後といえる遺物は見られないため、戦前以降に構築された遺構といえよう。それに対し、下層遺構は戦前に構築された可能性が高い。

ＳＫ 074（第 97 図、図版 115　291 ～ 294）（291）は細長い板状不明鉄製品、（292）は鉄鎌、（293）は板状不明青銅製品、（294）は２ヶ所に穿孔された砥石である。

ＳＫ 089（第 97 図、図版 115　295 ～ 299）（295）は漆喰が付着した本土産近代磁器蓋、（296）は女性用青銅製簪、（297）は角釘、（298）は石錘かと思われる有孔石製品、（299）は寛永通寶（新）である。

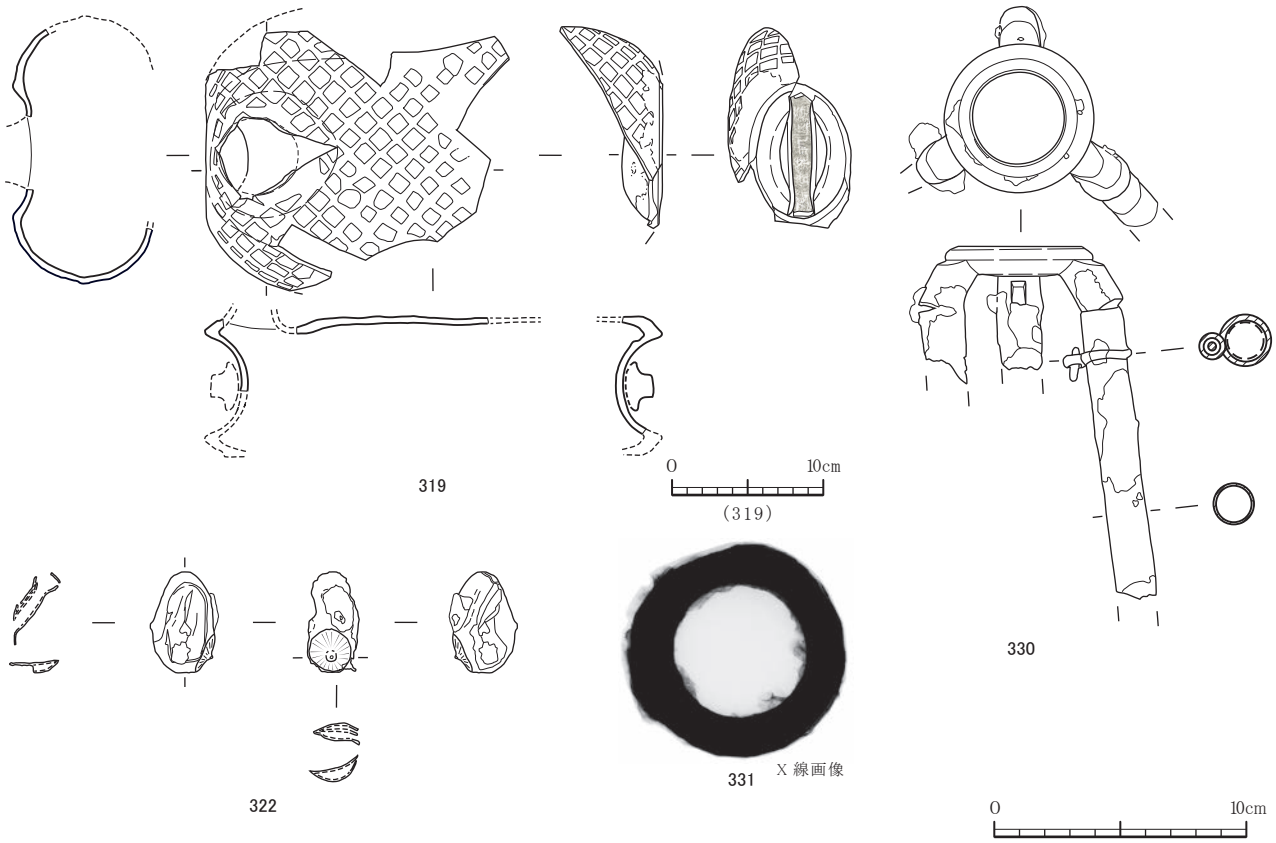
ＳＫ 095（図版 115　300）（300）は筒状青銅不明製品である。

壕ＳＫ 043（第 98 図、図版 116　302 ～ 318）（302 ～ 305）は本土産近代磁器、（306 ～ 309）は沖縄産施釉陶器、（310・311）は沖縄産無釉陶器、（312・313）はガラス製蓋、（314）は「子宝印」と陽刻された合金製品、（315）は鉄製缶、（316）は平鍬、（317）は三又鍬、（318）は黄燐弾の弾頭片である。

本遺構は沖縄戦時の壕と考えており、この場に投げ込んだかは確定できないが黄燐弾片が出土するなど当時の状況を窺うことができる。ただ、他地区の壕よりは沖縄産陶器壺が少ないという特徴がある。

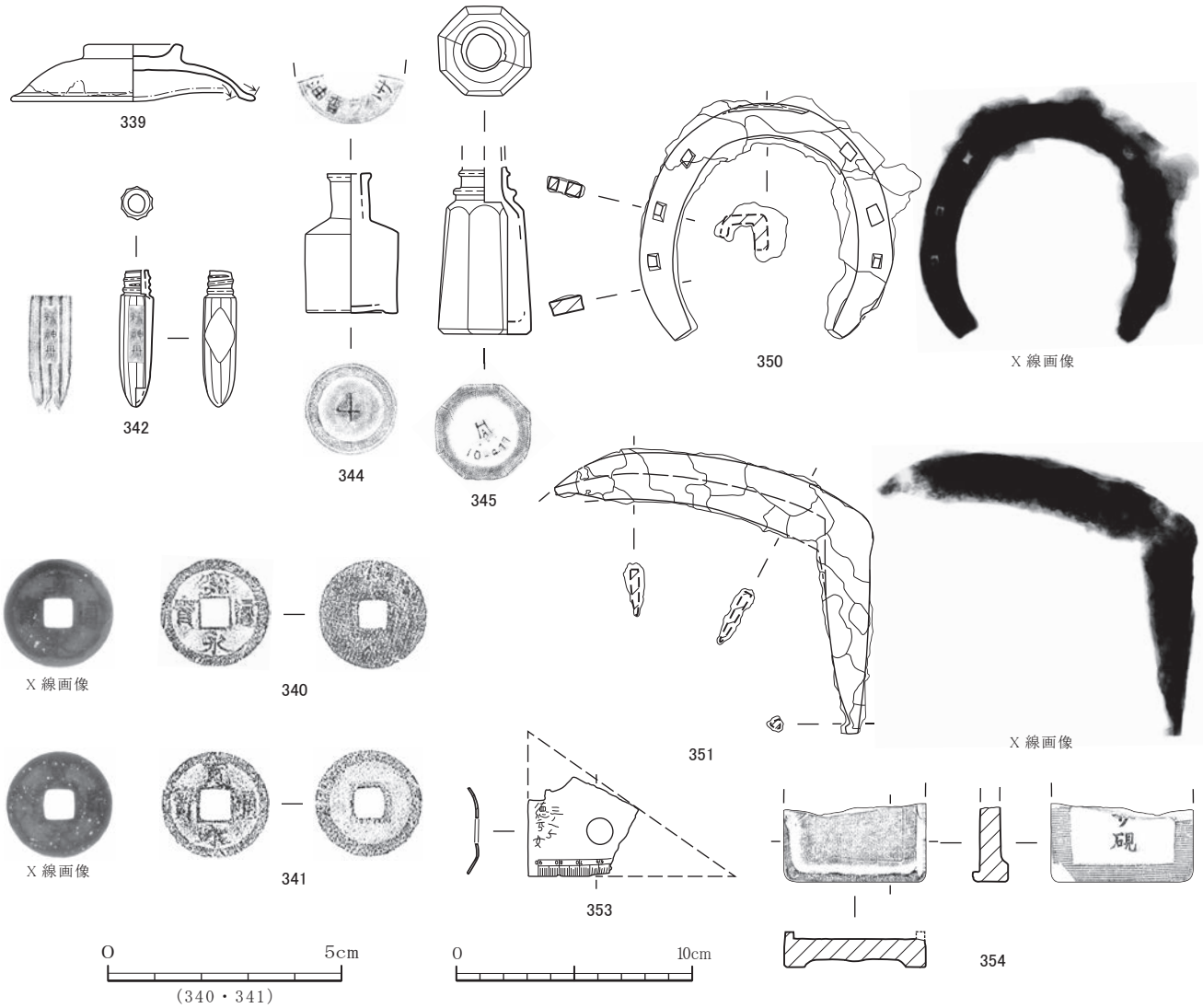
壕ＳＫ 051（第 99 図、図版 117　319 ～ 331）（319）は瀬戸・美濃系近代陶器の湯たんぽ、（320）は関西系近世陶器の蓋、（321）は団子が連なった形態のガラス製ニッキ水やみかん水などの清涼飲料瓶、

図版 116　Ｂ地区区画８出土遺物（６）　ＳＫ 043…302 ～ 318



第 99 図　Ｂ地区区画８出土遺物（６）　ＳＫ 051…319・322・330・331

図版 117　Ｂ地区区画８出土遺物（７）　ＳＫ 051…319 ～ 331



第 100 図　Ｂ地区区画８出土遺物（７）　ＮＲ 001…339 ～ 342・344・345・350・351・353・354

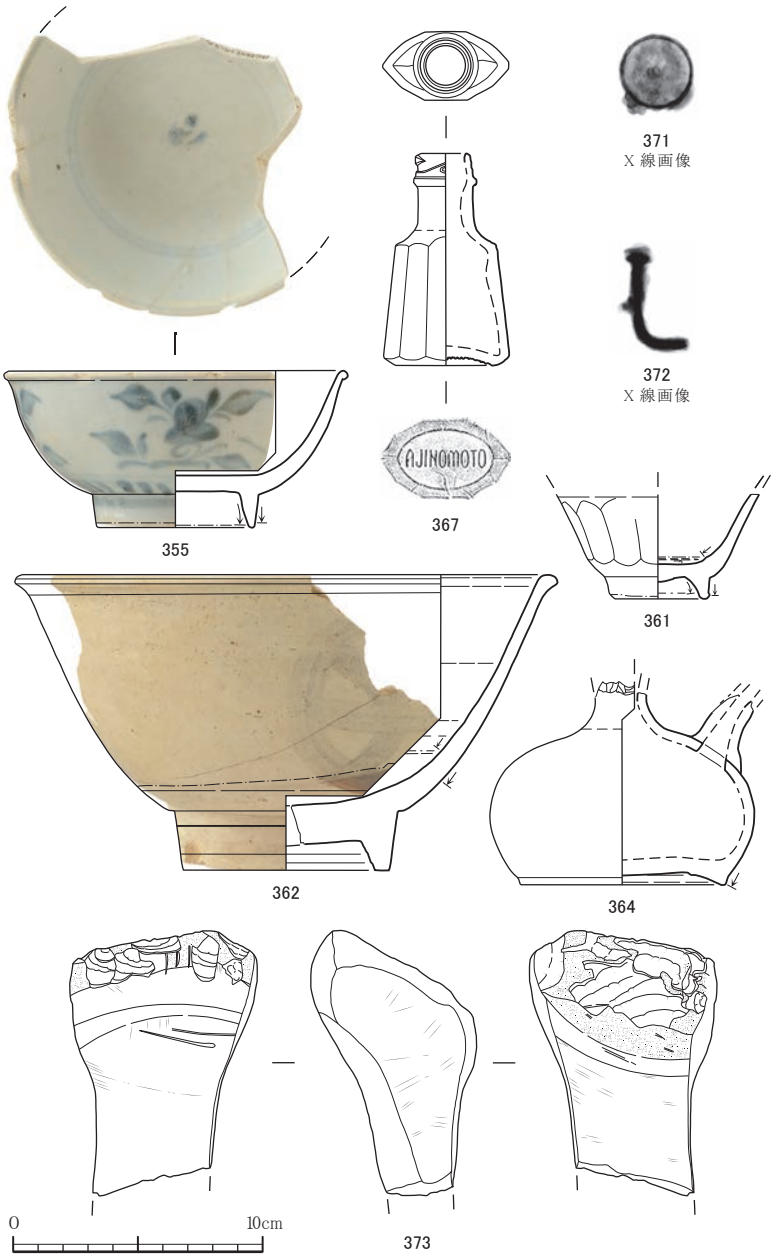
図版 118　Ｂ地区区画８出土遺物（８）　ＮＲ 001…332 ～ 354

青銅製品には刀の柄と思われるもの（322）・星を線刻する板状（323）・炎など刻印される円盤状（324）・その他不明製品（325 ～ 327）、合金には手榴弾の信管部（328）・筒状不明製品（329）・三脚の雲台部（330）、環状不明鉄製品（331）がある。

こちらも沖縄戦時の壕であるが、他の壕よりも遺物が少ない。湯たんぽや三脚などあまり出土例がないもの、星が線刻された板状青銅品などから日本軍に関連する遺物の可能性が高いと考えられる。

ＮＲ 001（第 100 図、図版 118　332 ～ 354）（332・333）は清代青花碗、（334）は明代青花皿、（335）は近世染付碗、（336）は肥前系近世陶器、（338）は本土産近代洋食器皿、（339）は沖縄産施釉陶器蓋、（340・341）は寛永通寶（新）、（342 ～ 345）はガラス瓶、（346）は板状不明青銅製品、（347･348）は砲弾信管部、（349）は機銃弾薬莢の底部、（350）は蹄鉄、（351）は鉄鎌、（352）は円盤状製品、（353）はプラスチック製の小型三角定規、（354）はゴム製硯である。

道２周辺を覆っている堆積土から取り上げたものが主体で多様な遺物が見



第 101 図　Ｂ地区区画７出土遺物

ＮＲ 002…355・361・362・364・367・371 ～ 373

図版 119　Ｂ地区区画７出土遺物　ＮＲ 002…355 ～ 375

られ、砲弾片などからは戦後の堆積と考えられる。

区画７　屋敷地に伴う遺構は少なく、耕作地と考えられるＮＲ 002 からの出土遺物が多い。

ＮＲ 002（第 101 図、図版 119　355 ～ 375）（355･356）は清代青花碗、（357）は肥前系近世陶器皿、（358 ～ 360）は本土産近代磁器、（361 ～ 364）は沖縄産施釉陶器、（365）は同無釉陶器、（366）は本土産近世土器焙烙、（367・368）はガラス瓶、（369）は青銅製簪、（370）は 7.7mm 小銃薬莢、（371）は不明鉄製品、（372）は丸釘、（373）は砥石、（374）は円盤状製品、（375）はプラスチック製の長方形の箱である。

Ｂ地区出土不明（第 97 図、図版 115　301）（301）は大正十三年銘桐一銭青銅貨である。

（３）Ｃ地区

本地区は戦後すぐに削平を受けているが、、埋納遺構や壕などの大型の土坑が多く、完品に近い沖縄産陶器壺、本土産近代磁器碗・皿などが多く出土している。一方、軍靴や布炭化種子など他地区でみられないものが出土しているが、砲弾・銃弾片などは少ない。

なお、他地区より掲載遺物が多いが、それは壕や埋納遺構などからの完品が多く、それらにおける違いなどを検討するために、できる限り取り上げたためである。

区画９

壕ＳＫ 027 では鍬・鍋等の鉄製品、ＳＫ 034 は沖縄産無釉陶器が集中して出土している。

ＳＫ 024（図版 132　ＳＫ 024…376 ～ 380）（376 ～ 380）はビー玉である。

壕ＳＫ 027（第 102 図、図版 120　381 ～ 395）（381）は本土産近代磁器小碗、（382 ～ 385）は同皿、（386･387）は同小皿、（388）は拳銃形ガラス製金平糖瓶、（389･390）は文様がある環状青銅製品、（391）は鉄鍋、（392）は鉄鎌、（393・394）は鉄鍬、（395）は粉挽き用石臼の下臼である。

本土産近代磁器皿は壕部分の床面から出土したものもある。

ＳＫ 030（第 103 図、図版 132　396･397）　本遺構はレンガ囲いで（396･397）はその一部のレンガである。

ＳＫ 034（第 104 図、図版 121　398 ～ 410）（398･399）は砥部産碗、（400）は砥部産と思われる火入、（401）は沖縄産施釉陶器碗、（402）は沖縄産無釉陶器擂鉢、（403 ～ 407）は沖縄産無釉陶器壺、（408）は同甕、（409・410）はガラス瓶である。沖縄産無釉陶器壺・甕は、器高 40cm 台（403 ～ 405）、60 ～ 70cm 台（406 ～ 408）とサイズでは大きく２種で捉えられる。

本遺構は、遺物集中範囲が２ヶ所あり、（398 ～ 400・402・407・409・410）は東、（403 ～ 406・408）は西から出土している。

ＳＫ 035（図版 132　411）（411）は青銅製引手である。

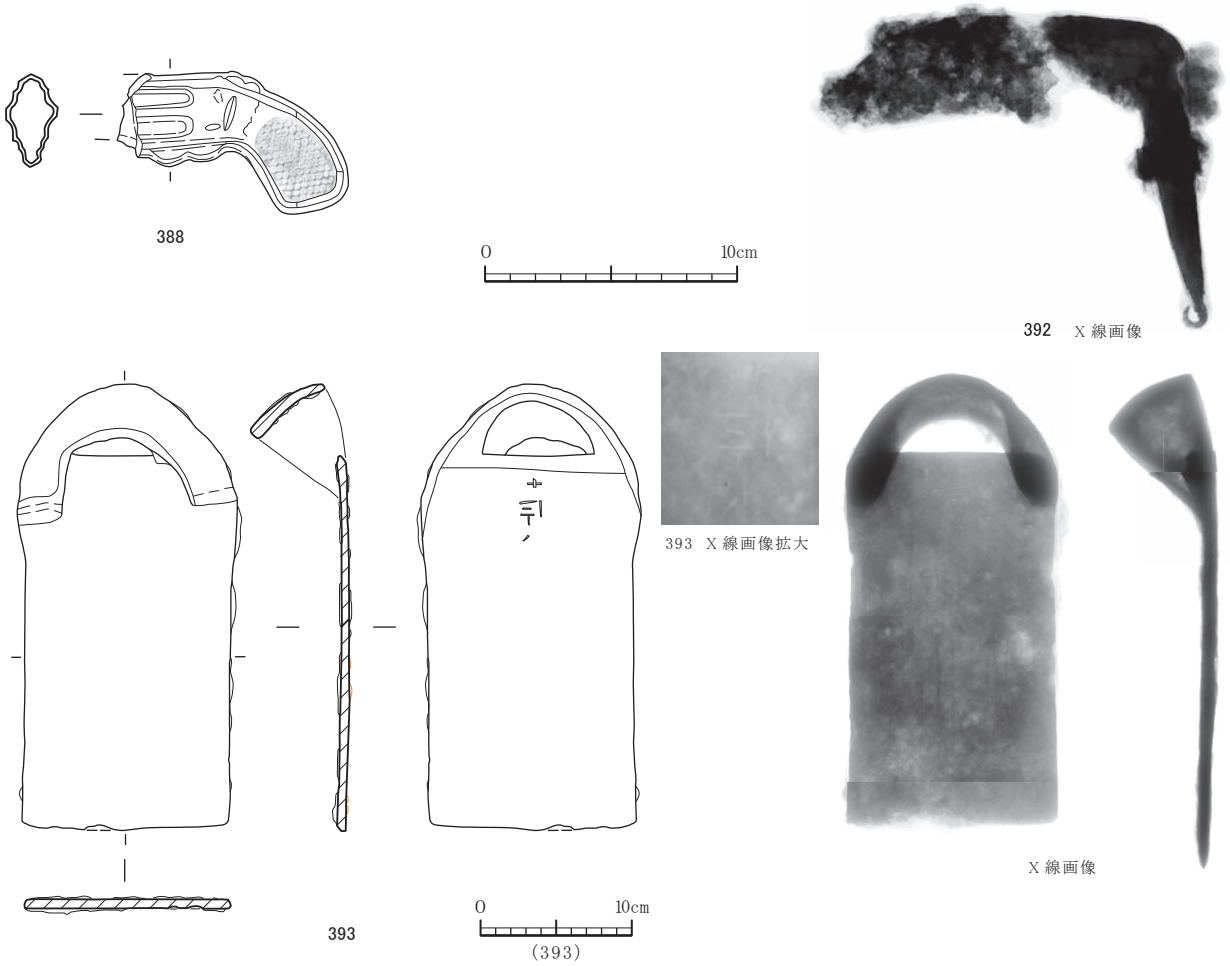
ＳＤ 009（第 103 図、図版 132　412 ～ 414）（412）は鉄鎌、（413）は環状鉄製品、（414）は不明プラスチック製品である。

区画 10

軍靴が出土したＳＫ 020、埋納土坑であるＳＫ 026、壕ＳＫ 040 などが特徴的である。

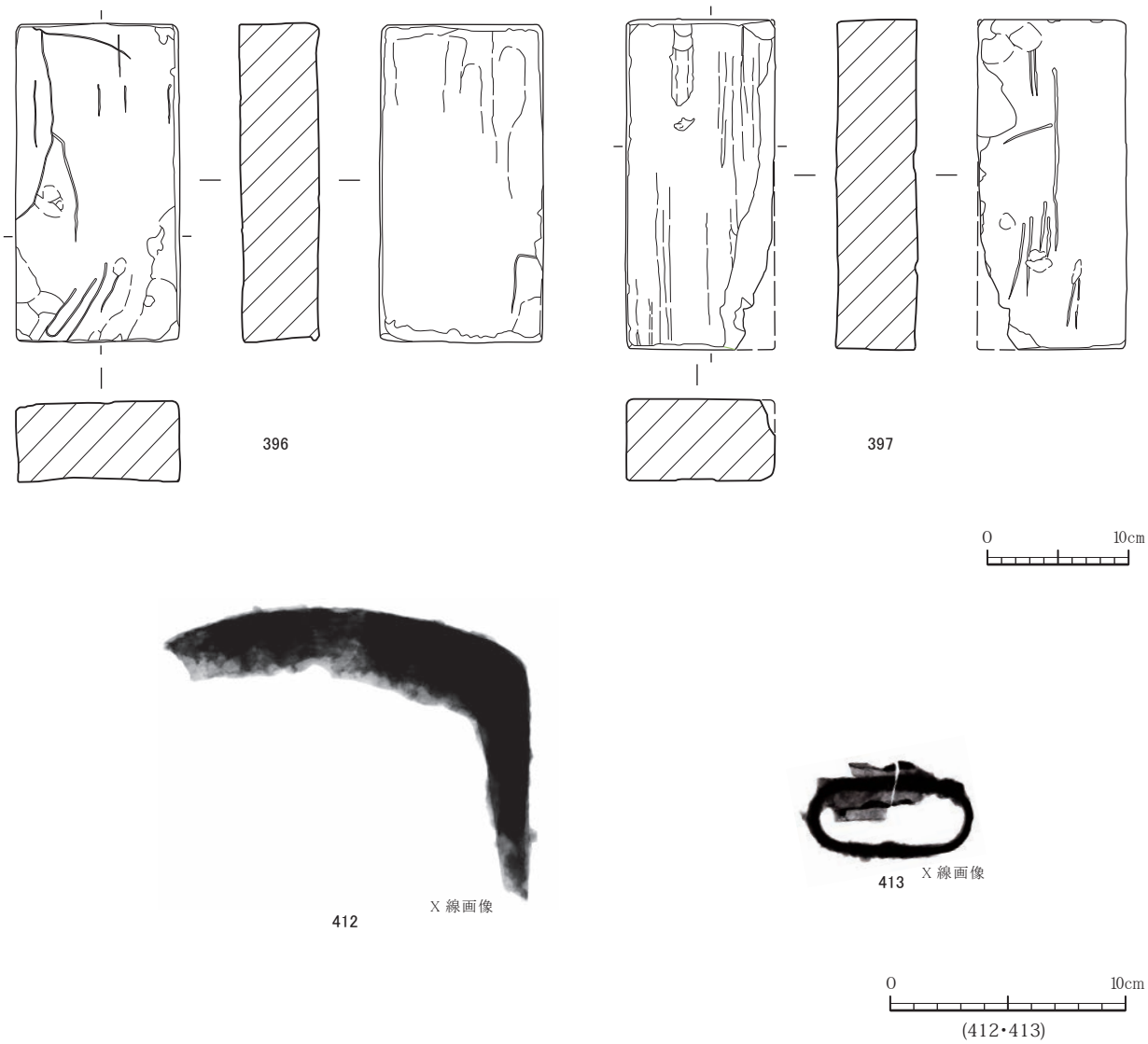
ＳＫ 020（第 105 図、図版 122　415 ～ 421）（415）は本土産近代磁器皿、（416）は沖縄産無釉陶器鉢、（417）は同壺、（418）は合金製不明楕円形容器、（419）は鉄製缶、（420）は粉挽石臼の下臼、（421）は軍靴で踵・後皮・紐孔のリングなどが出土している。

ＳＫ 026（第 106 図、図版 123　422 ～ 466）　本土産近代磁器（422 ～ 464）が 43 個体、沖縄産無釉陶器壺（465・466）が２個体出土している。本土産近代陶磁器には、砥部産（Ａ類）が碗８個体（422 ～ 429）・火入１個体（463）、瀬戸・美濃系国民食器（Ｇ類）が小碗 10 個体（430 ～ 439）、同系皿（Ｂ類）が絵付けの青色７個体（440 ～ 443・447 ～ 449）・緑色５個体（444 ～ 446・450・451）、同小皿



第102図　C地区区画９出土遺物（１）　ＳＫ027…388・392・393

図版120　C地区区画９出土遺物（１）　ＳＫ027…381～395



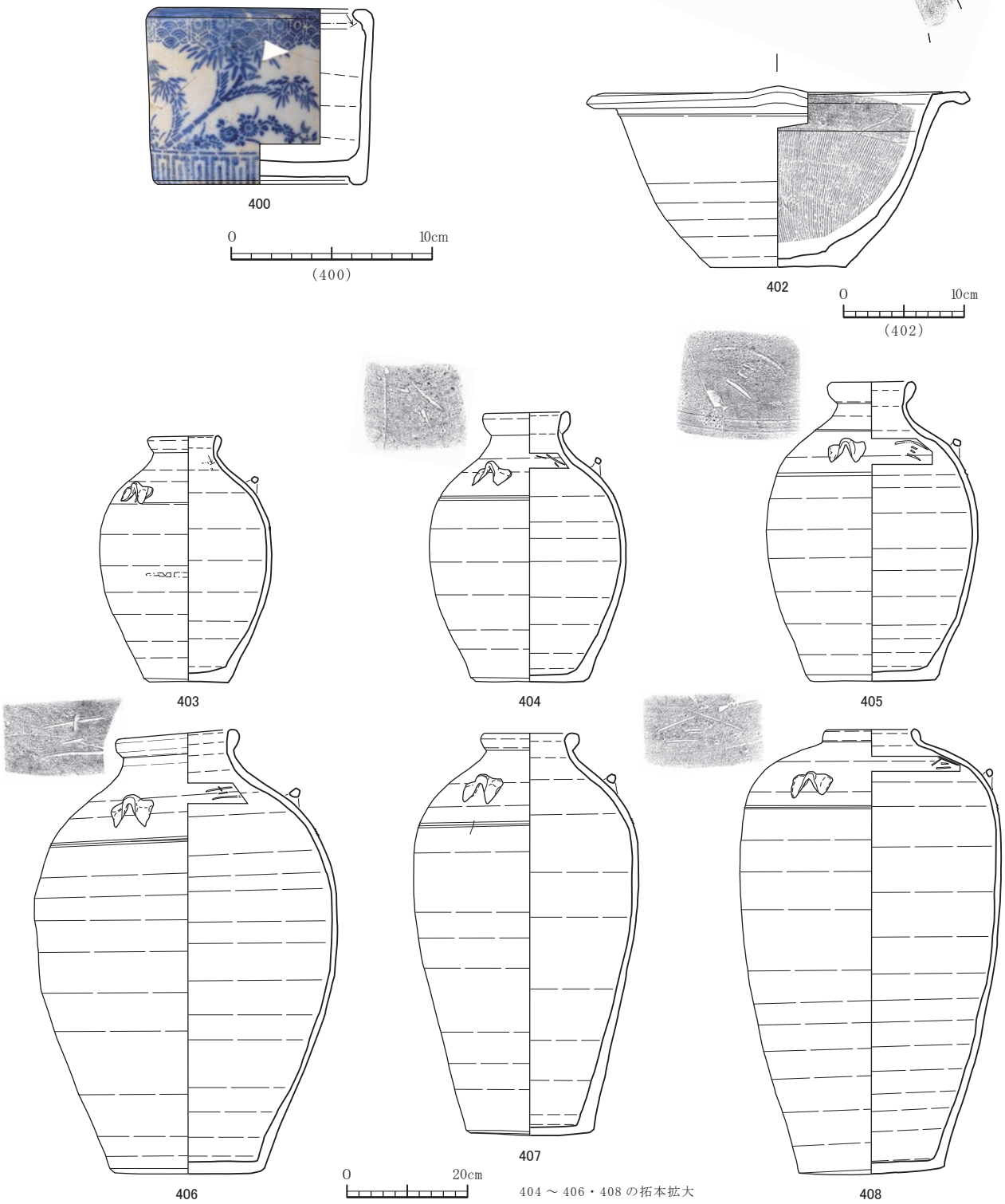
第 103 図　C地区区画９出土遺物（２）　ＳＫ 030…396・397　ＳＤ 009…412・413

図版 121　C地区区画９出土遺物（２）　ＳＫ 034…398 ～ 410

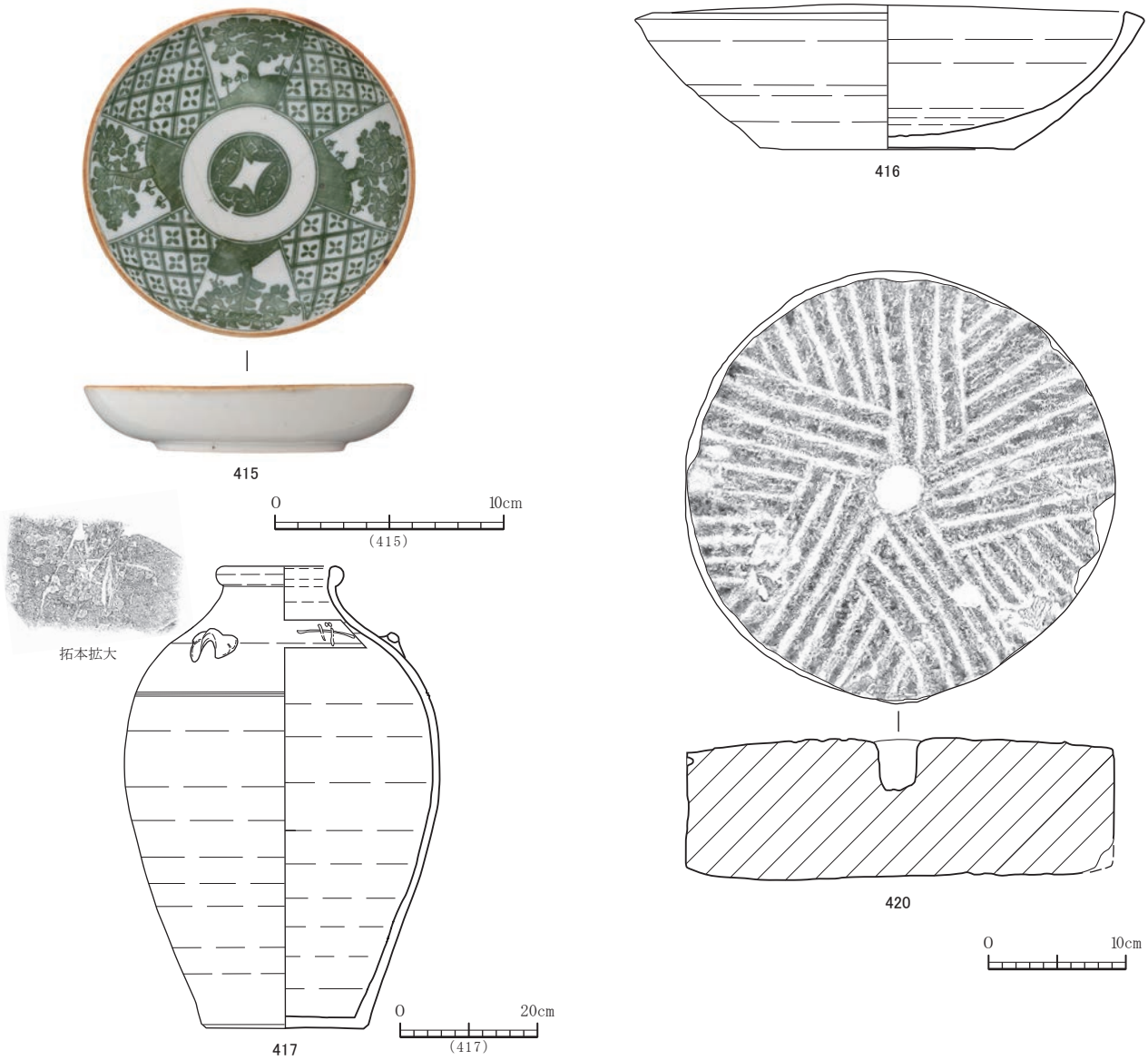
11 個体（452 ～ 462）、いわゆる珉平焼の小型角皿（464）である。

沖縄産無釉陶器は破片で本土産近代磁器碗・皿に覆い被さるように出土しており、ほぼ完品の後者を覆うことで隠匿する意図があった可能性が考えられる（第 63 図・図版 91）。

ＳＫ 023 か 028（第 107 図、図版 132　467・471 ～ 473）（467）は珉平焼の小型角皿、（468・469）は大きさから使用時のセットと思われる瓶と蓋、（470･471）はガラス瓶、（472）は桐一銭青銅貨、（473）は骨製歯ブラシである。調査時には（468 ～ 470）がＳＫ 028 から出土していたのを確認していたが、整理時にＳＫ 023 と間違った遺構番号を付けてしまっていたのを気づいたので、確



第 104 図　Ｃ地区区画９出土遺物（３）　ＳＫ 034…400・402 ～ 408

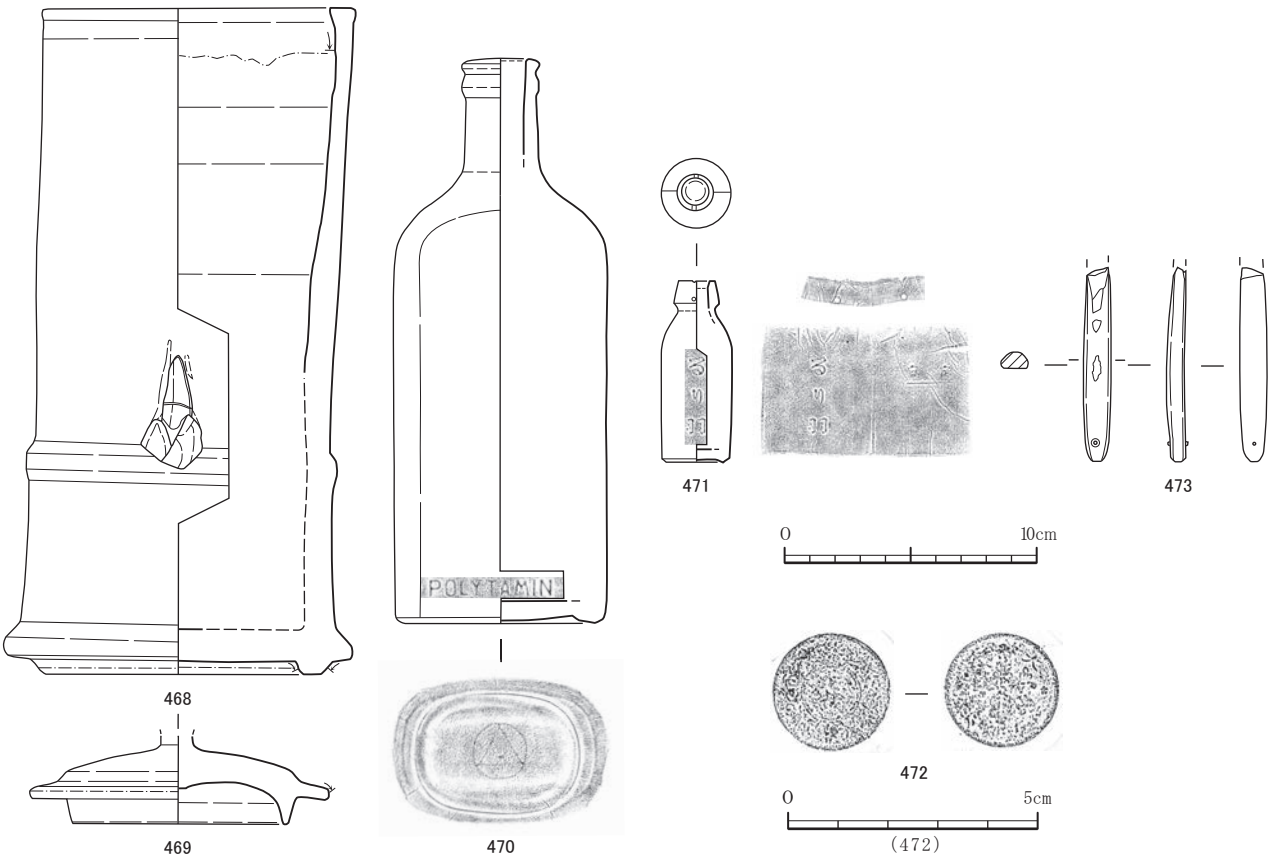


第 105 図　C地区区画 10 出土遺物（1）　S K 020…415 ～ 417・420

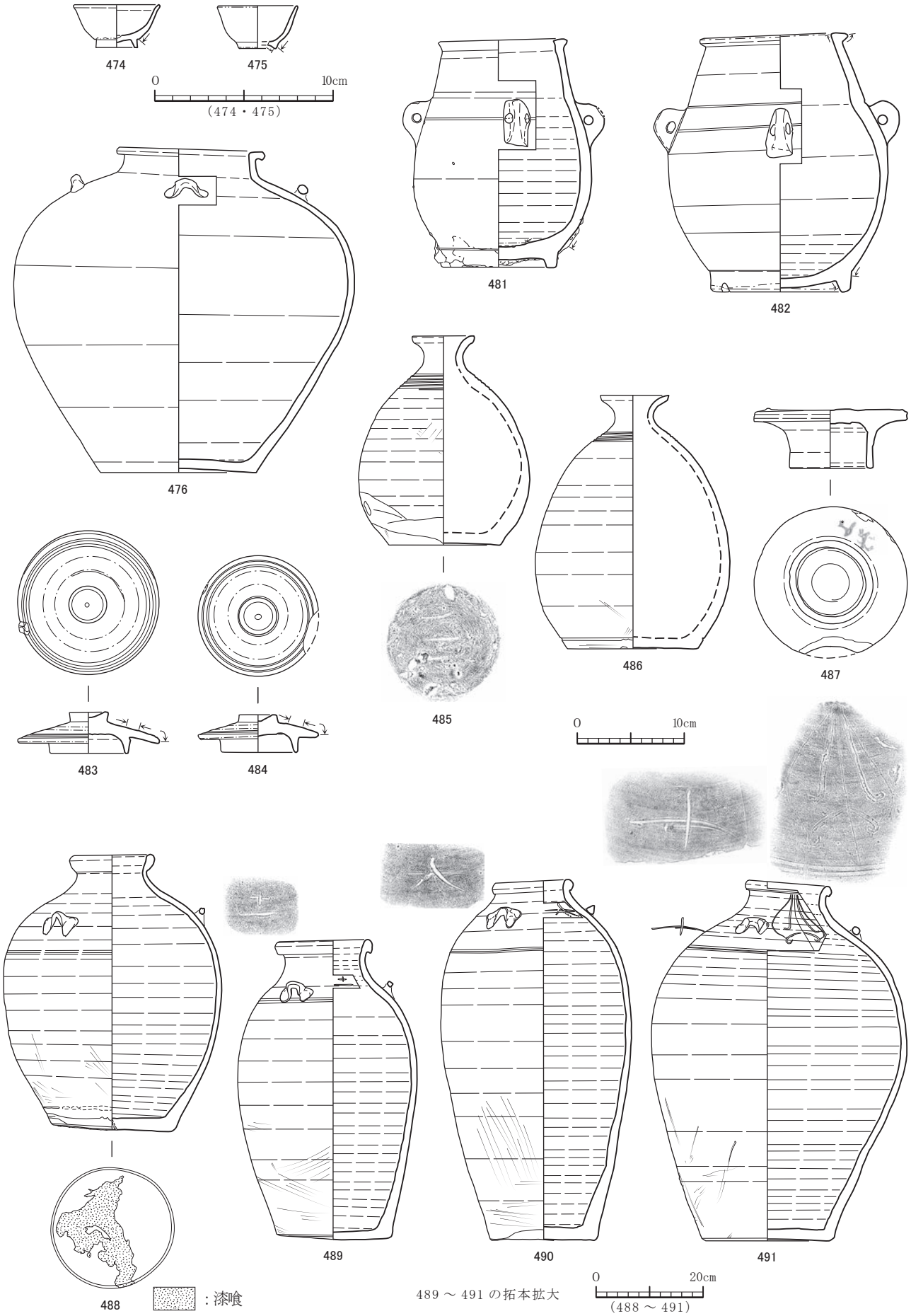
図版 122　C地区区画 10 出土遺物（1）　S K 020…415 ～ 421

第 106 図　C地区区画 10 出土遺物（２）　ＳＫ 026…422・440・442・444・447 ～ 450・459・463・464

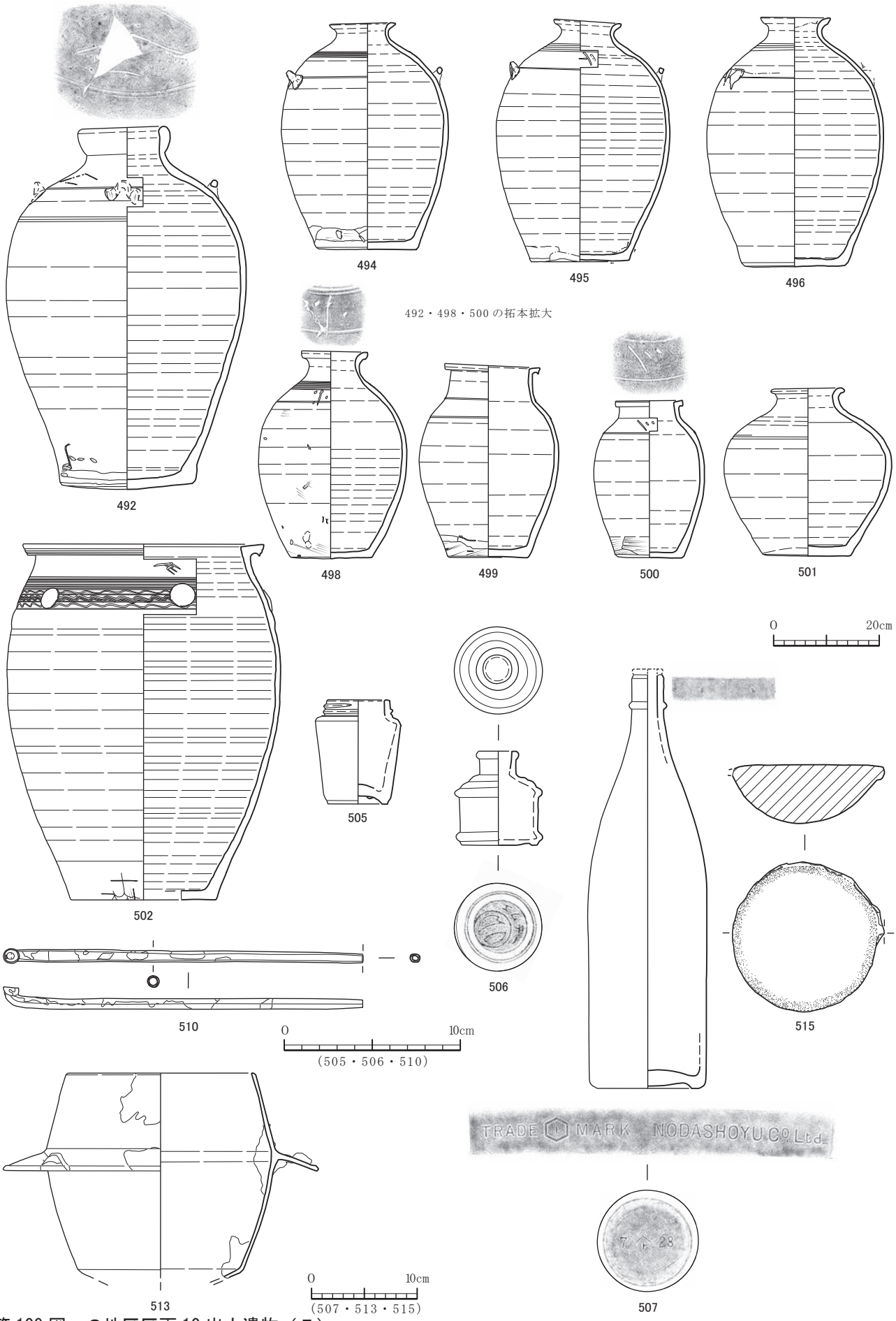
図版 123　C地区区画 10 出土遺物（２）　ＳＫ 026…422 ～ 466



第 107 図　C地区区画 10 出土遺物（３）　ＳＫ 028…468 ～ 470　ＳＫ 023 か 028…471 ～ 473



第 108 図　C地区区画 10 出土遺物（4）　ＳＫ 040…474 ～ 476・481 ～ 491



第109図　C地区区画10出土遺物（5）

S K 040…492・494～496・498～502・505～507・510・513・515

図版 124　C地区区画 10 出土遺物（３）　ＳＫ 040…474 ～ 518

525
526
535
536
523
531
538
539
0 10cm

第 110 図　C地区区画 10 出土遺物（６）　ＳＤ 003…523・525・526・531・535・536・538・539

図版 125　C地区区画 10 出土遺物（４）　ＳＤ 003…520 ～ 545

証が持てない遺物はＳＫ 023 の可能性もあるので、このような形で記載することになった。

壕ＳＫ 040（第 108・109 図、図版 124　474 ～ 518）（474）は沖縄産施釉陶器小杯、（475）は中国産瑠璃釉小杯、（476）は中国産褐釉陶器壺の耳を持つタイプ、（477 ～ 480）は本土産近代磁器碗、（481・482）は沖縄産施釉陶器壺で使用時には蓋（483・484）が各々セットの可能性があり、（485・486）は沖縄産無釉陶器瓶、（487）は同蓋、（488 ～ 501）は同壺、（502）は同甕、（503 ～ 507）はガラス瓶、（509）はアルミ製スプーン、（510）は青銅製延べ煙管、（511）は角金、（512）は青色塗料を着色した鉄蓋、（513）は羽釜、（514）はサンゴ化石、（515）は石製蓋か、（516 ～ 518）はプラスチック製クシである。沖縄産無釉陶器壺には、器高が 65cm 前後（490 ～ 492）、50cm 前後（488・489）、40cm 前後（493 ～ 496・498）、30cm 前後（499 ～ 501）と 4 サイズくらいの差が見られる。

本遺構は沖縄戦時の壕と考えられるが、大小の沖縄産陶器壺や、インク瓶（506）、野田醤油瓶（507）、クシやスプーンなど多様な種類の遺物が完品に近い形で出土している。このような遺物と先述した遺構の状況から、第 5 章で検討するように本遺構は日本軍の構築・利用が想定される。

ＳＤ 003（第 110 図、図版 125　520 ～ 545）　本土産近代磁器は掲載したものは全て瀬戸・美濃系で、碗（520 ～ 528）、（529）は国民食器の碗、（530 ～ 532）は同小碗、（533 ～ 537）は皿、（538 ～ 542）は小皿、（543・544）は小杯である。国民食器以外は、文様から碗・皿は 2 タイプあり、
（545）は沖縄産施釉陶器香炉である。

これらは、SD003 の掘削中にまとまって出土しており、一気に取り上げてしまったので詳細な状況は不明だが、SK026 のように埋納遺構であった可能性もある。

区画 11

壕 SK004、SK025 で多様な遺物が出土しており、これらは先述のように沖縄戦時で特に日本軍に関連する遺構だと考えられるものである。

壕ＳＫ 004（第 111 ～ 113 図、図版 126 ～ 128　546 ～ 629）　本土産近代磁器が最も多く、砥部産（A 類）では碗 18 個体（546 ～ 563）・同皿 1 個体（570）、瀬戸・美濃系では国民食器（G 類）小碗 2 個体（568・569）、銅版転写（B 類）小碗 1 個体（567）・同皿 13 個体（571 ～ 583）・同小皿 5 個体（584 ～ 588）・同小杯 6 個体（595 ～ 600）・色絵小杯 3 個体（592 ～ 594）クロム青磁（D 類）小杯 2 個体（589・591）・急須の蓋（601）と身（602）、産地不明では茶色釉（G 類）碗 2 個体（565・566）・緑釉小碗 1 個体（590）、白磁（E 類）水差（603）がある。（604・605）は本土産近代陶器の蓋付き鉢である。（606 ～ 609）は、沖縄産施釉陶器碗である。沖縄産無釉陶器壺（610 ～ 620）には、耳が無いもの（610）、器高 60 ～ 75cm の大型品（614 ～ 619）がある。（621）は女性用青銅製簪、（622）は軍用ヨードチンキの青銅製栓と思われるもの、（623）は手榴弾の信管部、（624）は青銅製スナップボタン、（625）は黄燐弾の弾頭部片、（626）は敲石、（627・628）はプラスチック製ボタン、（629）は炭化した布片である。他に、第 5 章第 2 節で詳述するようにアワ・ダイズ・ソラマメ属の炭化種子や炭化した竹やマツなどの木材もある（図版 141・142）。

本遺構は沖縄戦時の壕と思われるが、沖縄産無釉陶器壺や本土産近代磁器碗・皿などの他、炭化種子などが出土している。これらの状況より、第 5 章で検討するように日本軍による構築・利用が想定される。ただ先述したように、土坑内にも焼土が見られるが陶磁器類には顕著な被熱痕は見られないので、砲弾や銃弾などによる攻撃を本遺構が受けたもしくはそれにより廃絶したとまでは言えないと考えられる。

ＳＫ 006（図版 132　630）（630）はアルミ缶で潰れているが本来はカップ状で蓋付きのものと思われる。

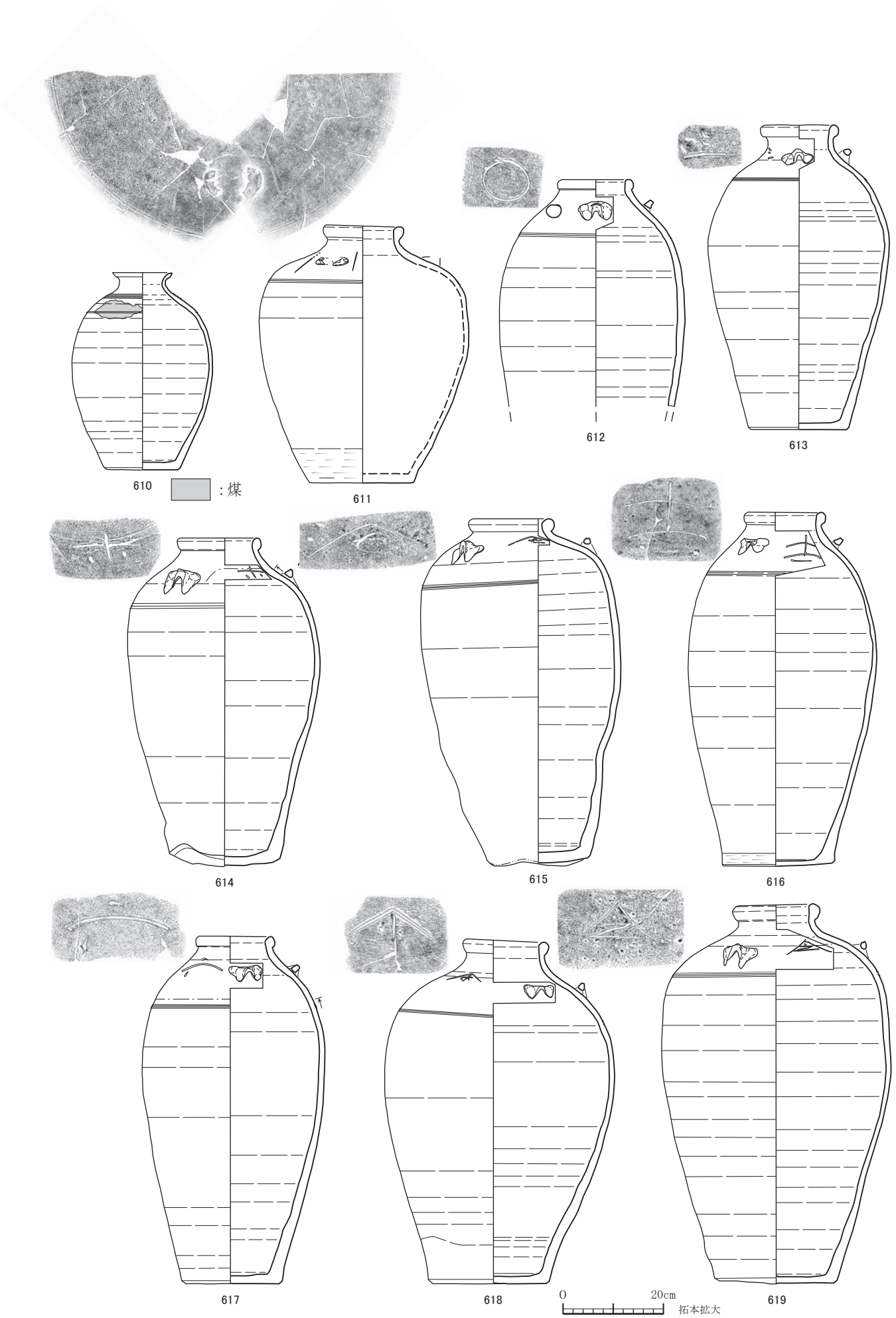
ＳＫ 025（第 114・115 図、図版 129　631 ～ 691）　本土産近代磁器には、砥部産（A 類）では碗（631 ～ 636）、瀬戸・美濃系では銅版転写（B 類）の碗（637）・同小碗（638 ～ 641・648 ～ 650・652 ～

第 111 図　C地区区画 11 出土遺物（1）

S K 004…557・563・570・571・576・580・581・583～585

655）・セット関係は確定できないが小碗の蓋（660 ～ 664）・小鉢（646）・瓶（671）、色絵（F 類）の角皿（642 ～ 645）・小鉢（647）・小碗（651）・小杯（667 ～ 670）、染付（C 類）の急須蓋（665）・瓶（672）・香炉（673）、緑釉（G 類）の小杯（666）がある。特徴的なものとして、（642 ～ 645）はあまり見られない扇文などが描かれる角皿、（671・672）は一合徳利、（667）は軍杯などがある。また、小碗と蓋なども本遺構で見られるものが多く、（652 ～ 655）は「新興陶器」、（656 ～ 659）は「岩」銘など各々同

第 112 図　C地区区画 11 出土遺物（2）　S K 004…589・592 ～ 594・601 ～ 605・608・621・625・626



第 113 図　C地区区画 11 出土遺物（3）　ＳＫ 004…610 ～ 619

図版 126　C地区区画 11 出土遺物（1）　SK 004…546 ～ 620

図版 127　C地区区画 11 出土遺物（２）　ＳＫ 004…621 ～ 628

図版 128　C地区区画 11 出土遺物（３）　ＳＫ 004…629

一品の揃いの一部と思われる。他には、(674) は沖縄産陶器壺、(675) は同壺か甕、(676) は化粧瓶、(677) は一升瓶、(678) は耳付き大型瓶、(679) はアルミ製スプーン、(682) は黄燐弾片、(680・681・683 ～ 686) は不明金属製品、(687) はアルミ製富士一銭、プラスチック製品は歯ブラシ (688)・ボタン (689 ～ 691) がある。

第 114 図　C地区区画 11 出土遺物（4）

S K 025…634・637 ～ 644・646・649・652・660・665・667・668

図版 129　C地区区画 11 出土遺物（4）　S K 025…631 ～ 691

図版 130　C地区区画 12 出土遺物（1）　S K 001…692 ～ 755・757

本遺構は壕ではないが、平面形態がＳＫ 004 に類似しており、多様な遺物と陶磁器には揃いものや珍しいものなどがあることから、第５章で検討するように日本軍による構築・利用が想定される。

区画 12

ＳＫ 001 は多くの陶磁器類が出土し埋納遺構の可能性があるが、全体的に出土量は多くない。

ＳＫ 001（第 116 図、図版 130・131　692 ～ 758）　本土産近代磁器は瀬戸・美濃系で、(692) が銅版転写（Ｂ類）の「ヤマカ陶器會社」銘洋食器皿、小皿は色絵（Ｆ類）で木苺などを描くもの（693 ～ 729）とＢ類で魚文を描くもの (730 ～ 748) の２タイプ、Ｂ類小杯 (749) がある。他には、本土産近代陶器蓋 (750)、ガラス製薬瓶（751）、青銅製延べ煙管（752）、合金製電灯のフード部（753）、鉄鍋は小型（754）と大型（756）、羽釜（755）、砥石と思われるもの（757）、土に付着した赤漆膜（758）がある。

鉄鍋の内部と周辺に本土産近代磁器皿が出土しており、意識的に埋めた埋納遺構と思われる。

ＳＫ 005（図版 132　759）（759）はガラス瓶の底部で、銘より外国製と思われる。

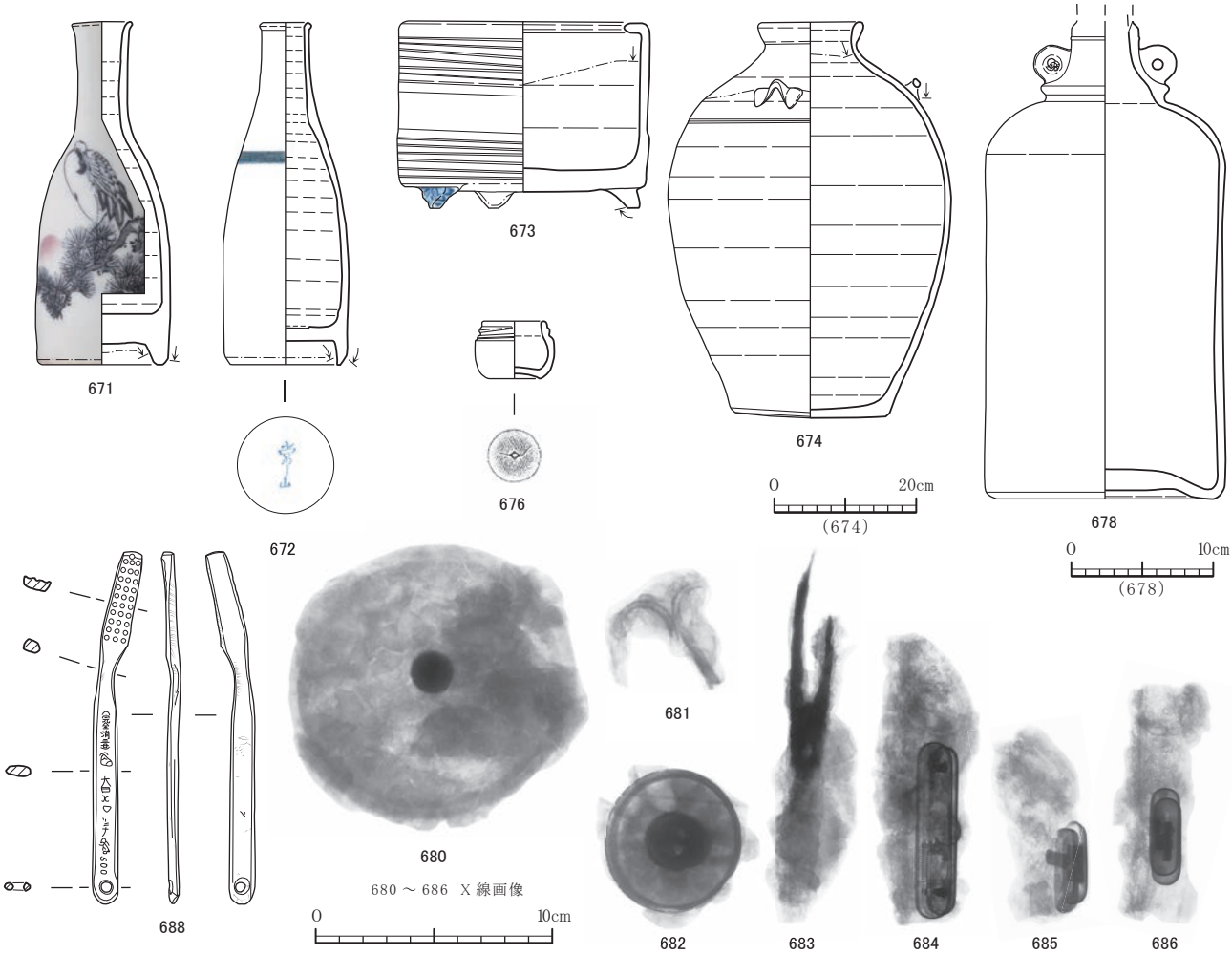
ＳＫ 013（第 117 図、図版 132　760）（760）は沖縄産陶器の球形瓶で口縁を欠いている。

ＳＫ 047（第 117 図、図版 132　761）（761）は瀬戸・美濃系の木苺など描く色絵皿で良好に残存している。

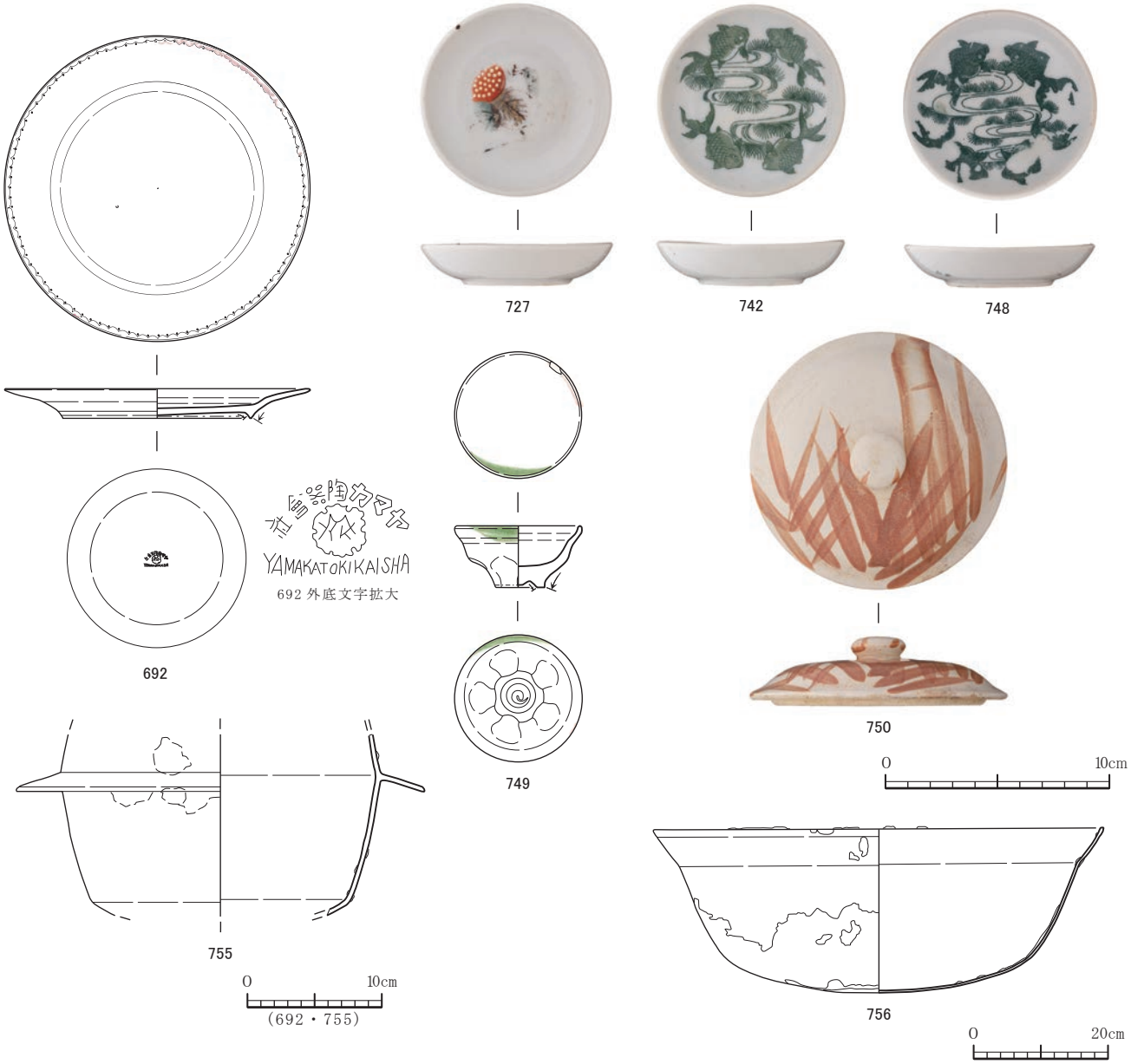
ＳＰ 001（図版 132　762）（762）は肥前系近世染付の蓋である。

ＳＤ 006（第 117 図、図版 132　763・764）（763）は福建産白磁鉢、(764) は沖縄産施釉陶器碗である。

Ｃ地区表採（第 117 図、図版 132　765・766）（765）は沖縄産無釉陶器瓶だがあまり見ない赤褐色のいわゆる梅瓶形のもの、(766) は磨製石斧である。

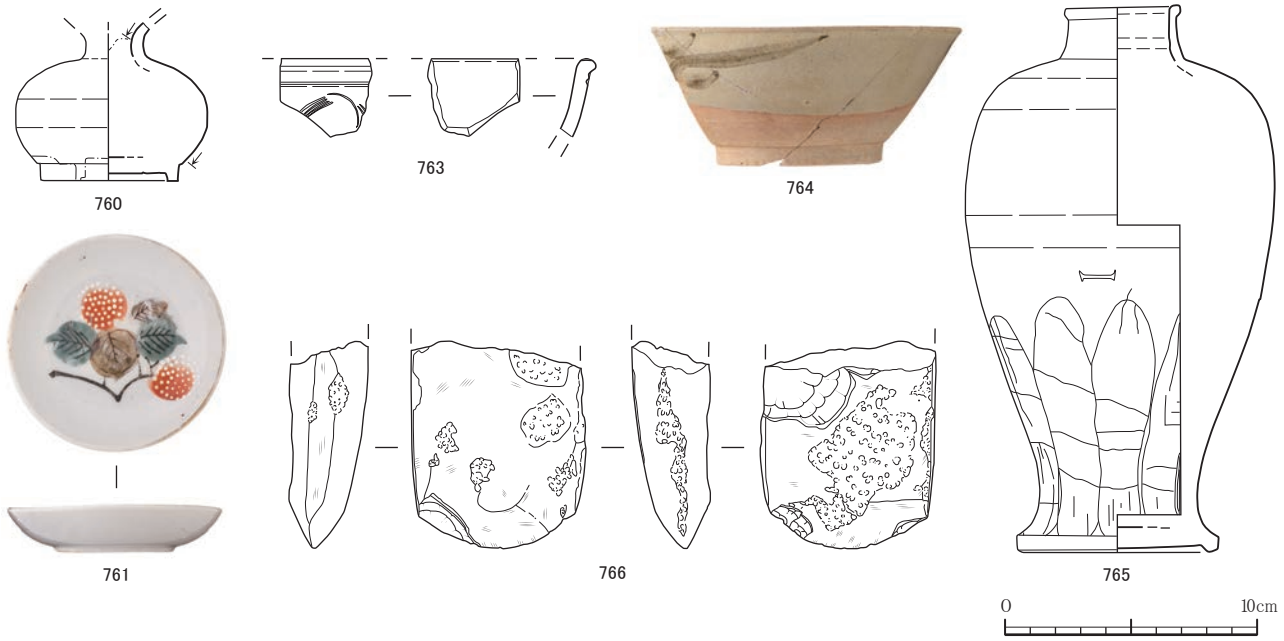


第 115 図　Ｃ地区区画 11 出土遺物（５）　ＳＫ 025…671 ～ 674・676・678・680 ～ 686・688



第 116 図　C地区区画 12 出土遺物（1）　S K 001…692・727・742・748 ～ 750・755・756

図版 131　C地区区画 12 出土遺物（2）　S K 001…756・758



第 117 図　C地区区画 12（2）・表採遺物　ＳＫ 013…760　ＳＫ 047…761　ＳＤ 006…763・764
表採…765・766

図版 132　C地区区画９～ 12・表採遺物　区画９（ＳＫ 024…376 ～ 380　ＳＫ 030…396・397　ＳＫ 035…411　ＳＤ 009…412 ～ 414）区画 10（ＳＫ 028…468 ～ 470　ＳＫ 023 か 028…467・471 ～ 473　ＳＫ 054…519）区画 11（ＳＫ 006…630）区画 12（ＳＫ 005…759　ＳＫ 013…760　ＳＫ 047…761　ＳＰ 001…762　ＳＤ 006…763・764）表採…765・766

第 23 表　遺物観察表（１）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
1	金属製品（青銅）	薬莢		5.3+	－	1.2	7.7mm小銃弾の薬莢。半分欠損。底面にO、E、Lの刻印。重量10.7g。	A	1	ＳＫ001
2	沖縄産施釉陶器	小碗	－	－	－	3.4	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。内底蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面面取。	A	1	ＳＫ002
3	沖縄産施釉陶器	小碗	Ｃ-1類	7.8	4.05	3.6	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。内底蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面面取。	A	1	ＳＫ002
4	沖縄産施釉陶器	酒器	－	5.4	－	－	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。	A	1	ＳＫ002
5	沖縄産施釉陶器	瓶	－	－	－	5.1	外面口縁～頸部：呉須、頸部～腰部：透明釉、腰部以下：褐釉。高台無釉。胎土灰白色。外底砂付着。	A	1	ＳＫ002
6	沖縄産施釉陶器	瓶	－	－	－	5.2	外面口縁～頸部：呉須、頸部～腰部：透明釉、腰部以下：褐釉。高台無釉。胎土灰白色。外底砂付着。	A	1	ＳＫ002
7	沖縄産施釉陶器	酒器	－	－	－	7.3	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。外底無釉。外面線彫りによる施文。呉須、褐釉、緑釉で色付。	A	1	ＳＫ002
8	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	25.4	－	－	内外ともに赤褐色、口縁部のみ暗褐色。鍔上面凹線１条。内面全体に擂目。	A	1	ＳＫ002
9	沖縄産無釉陶器	二次加工品	－	8.0	1.3	4.6	内外ともに明赤褐色。轆轤痕やナデ明瞭。方形状。内面四隅に研磨痕あり。甕の胴部片か。	A	1	ＳＫ009
10	プラスチック製品	笛	－	2.8	－	1.0	灰色や黄色、青色、赤色のマーブル模様と明るい緑色のパーツを組合せている。両側面に星印。吹き口は破損しているが、紐は残存している。	A	1	ＳＫ011
11	中国産青磁	碗Ｖ類	－	－	－	7.1	深緑色の釉でやや厚い。外底蛇の目釉剥ぎ。見込みは印花による花芯文。	A	1	ＳＫ010
12	中国産青花	碗	清（福建・広東）	－	－	7.3	青白色の釉、貫入多い。胎土やや軟質、淡黄色。見込み蛇の目釉剥ぎ。	A	1	ＳＫ010
13	中国産青花	小杯	清（景徳鎮）	－	－	2.25	蛇の目高台。	A	1	ＳＫ010
14	中国産色絵	小杯	徳化窯	－	－	－	光沢のある白色の釉。彩色は灰青色が残存。	A	1	ＳＫ010
15	中国産無釉陶器	急須	宜興窯	－	－	－	器面がやや摩滅。胴部に刻みがつく瓜形。	A	1	ＳＫ010
16	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.3	6.0	4.5	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。素地は白色で緻密。砥部産。	A	1	ＳＫ010
17	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.4	4.6	2.9	銅版転写。外面に花文、つぼみのみ桃色。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	1	ＳＫ010
18	本土産近代磁器	皿	Ａ類	15.1	4.2	8.9	口縁部が微弱な波状を呈する。外面に花唐草文。内面に花文、亀甲文。見込みに松竹梅文。底部は蛇の目凹形。畳付けに釉有り。砥部産。	A	1	ＳＫ010
19	本土産近世色絵	小皿	不明	9.6	1.25	5.1	透失性のない灰白色の釉。胎土は軟質精良。見込みに刻文と色絵が残存、草文か。腰折皿。	A	1	ＳＫ010
20	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.8	2.7	5.9	銅版転写（青色）。外面、高台内に圏線。内面に花文。素地は白色で緻密。	A	1	ＳＫ010
21	本土産近代磁器	小碗	Ｄ類	8.0	3.9	3.4	クロム青磁。外底無釉。外面に飛び鉋有り。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	1	ＳＫ010
22	本土産近代磁器	小杯	Ｆ類	－	－	1.9	高台に砂付着。彩色無くなる。見込みに色抜けしているが「祝」の文字。軍杯か。	A	1	ＳＫ010
23	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	13.8	7.5	6.3	白化粧後、透明釉。胎土浅黄橙色。見込み蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕。外面印花文。	A	1	ＳＫ010
24	沖縄産施釉陶器	小碗	Ｃ-2類	8.4	4.3	3.9	白化粧後、透明釉。胎土浅黄橙色。見込み蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕。	A	1	ＳＫ010
25	沖縄産施釉陶器	皿	－	14.2	4.1	6.55	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。内底蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。内面呉須で施文。	A	1	ＳＫ010
26	沖縄産施釉陶器	瓶	－	－	－	5.0	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。外底に砂付着。	A	1	ＳＫ010
27	沖縄産施釉陶器	火入	－	10.2	8.35	6.2	白化粧後、口縁部緑釉、胴部褐釉。胎土浅黄橙色。高台脇は掻き取り。使用のためか口唇釉欠け。	A	1	ＳＫ010
28	沖縄産無釉陶器	瓶	－	6.0	－	－	外面灰赤褐色、内面赤褐色。頸部凹線５条。内面絞り痕あり。	A	1	ＳＫ010
29	沖縄産無釉陶器	植木鉢	－	14.2	11.3	7.1	橙色。内外口縁部にマンガン釉。底部中央に円孔1(直径3cm)。	A	1	ＳＫ010
30	沖縄産無釉陶器	壷	Ａ類	18.8	51.8	21.5	外面暗赤褐色、内面暗褐色。肩部ヘラ記号？「一」。	A	1	ＳＫ010
31	沖縄産無釉陶器	壷	Ａ類	12.8	48.0	15.3	外面暗赤褐色、内面赤褐色。外面気泡によりざらつく。	A	1	ＳＫ010
32	ガラス製品	ランプ笠（白色）	－	7.8	－	－	上端から下方にかけて緩やかに広がる。器面には白い筋が無数に横位にはしる。	A	1	ＳＫ010
33	ガラス製品	ランプ油壷（青色）	－	－	－	5.8	胴部断面形は円形で上から約1cm、5mmと段状に絞られていく。1mm大の気泡が含まれる。	A	1	ＳＫ010
34	ガラス製品	瓶（黒）	化粧瓶	3.4	4.3	3.9	化粧クリーム瓶もしくはポマード瓶。広口で背の低い円筒形。ネジ栓。	A	1	ＳＫ010
35	ガラス製品	瓶（白）	化粧瓶	2.9	4.4	2.3	広口で肩部を波状に加工している。ネジ栓。	A	1	ＳＫ010
36	ガラス製品	瓶（無）	薬瓶か	1.8	5.4	1.8	首部から底部にかけて、縦に合わせ目が明瞭に残る。垂直な胴部で底部は円形。胴部下に「命（？）」のエンボス。	A	1	ＳＫ010
37	ガラス製品	瓶（茶）	薬瓶	2.7	9.4	5.6	胴部断面形はやや楕円形。器面中央に縦に「子宮全治丸」とエンボス。ネジ栓。	A	1	ＳＫ010
38	ガラス製品	瓶（茶）	薬瓶	2.6	18.3	6.6	底形は隅丸長方形。胴部下端に「POLYTAMIN」、底部に「8　（○に△を重ねたようなマーク）」のエンボス。	A	1	ＳＫ010
39	ガラス製品	瓶（無）	清涼飲料瓶か	2.6	24.2	5.9	なで肩で、肩部に「KIRIN BREWERY CO.LTD.　（BとKを合わせた商標マーク）」。	A	1	ＳＫ010
40	ガラス製品	瓶（無）	清涼飲料瓶か	2.6	21.2	4.8	なで肩で、胴部に帯状に巡る縦位波状の浮き文。底部に「12　（◇形の中にＮのマーク）　Ｙ62」のエンボス。	A	1	ＳＫ010
41	ガラス製品	瓶（緑）	清涼飲料瓶か薬瓶	3.2	24.2	5.9	サイダー瓶または殺虫剤瓶。なで肩で、底部にMを二重にしたようなマークのエンボス。	A	1	ＳＫ010

第 24 表　遺物観察表（２）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
42	ガラス製品	瓶（青）	調味料瓶	－	－	10.0	醤油瓶（一升瓶）。なで肩で、胴部下端に「NODASHOYU CO LTD TRADE(6角形に萬のマーク)MARK」、底部に「8 K 8」のエンボス。	A	1	ＳＫ010
43	金属製品（鉄）	金槌	－	20.2	10.3	10.1	大型金槌の頭部。重量5480g。	A	1	ＳＫ010
44	金属製品（鉄）	金槌	－	15.6	孔径 2.2	4.5	先切り金槌の頭部。片側は平頭で、片側は細く尖る。重量865g。	A	1	ＳＫ010
45	金属製品（鉄）	ヘラ	－	16.8	0.5	4.5	ヘラ部は剣先状で、柄部の断面はコの字状。重量302.7g。	A	1	ＳＫ010
46	金属製品（鉄）	クサビ	－	7.8	0.35	2.1	先端部は欠けている。錆に覆われている。重量22.7g。	A	1	ＳＫ010
47	金属製品（青銅）	不明	－	9.1	0.2	0.9	全体の平面はU字状、両端部はL字状。半分から曲がっている。重量20.6g。	A	1	ＳＫ010
48	金属製品（青銅）	不明	－	4.8	0.2	4.7	輪状の製品。重量7.8g。	A	1	ＳＫ010
49	金属製品（青銅）	不明	－	4.8	0.2	4.7	環状の製品。重量8.1g。	A	1	ＳＫ010
50	金属製品（合金）	不明	－	6.8	0.2	5.5	筒状の製品。重量102.7g。	A	1	ＳＫ010
51	金属製品（青銅）	ピンセット	－	12.3	0.2	1.0	先端部は直型。重量21.8g。	A	1	ＳＫ010
52	プラスチック製品	不明	－	2.5	3.0	1.2	筒形で孔径1.2cm。片方の口は内側がラッパ状に広がる造形。色調は黒色。	A	1	ＳＫ010
53	石製品	砥石	－	21.4	3.4	7.3	**石材：**凝灰岩。**加工痕：**両側面・背面に切断痕。**使用痕：**正面に凹状砥面。**その他：**下面に自然面残。	A	1	ＳＫ010
54	石製品	砥石	－	－	6.75	10.6	**石材：**細粒砂岩（ニービ）。**加工痕：**側面・上下面に切断痕、下面研磨。**使用痕：**正・背面に砥面	A	1	ＳＫ010
55	石製品	砥石	－	15.1	6.95	7.7	**石材：**細粒砂岩（ニービ）。**加工痕：**側面・背面に敲打痕。**使用痕：**前面に凹状砥面。**その他：**背面一部と両側面に自然面残。	A	1	ＳＫ010
56	石製品	硯	－	12.2	2.2	5.95	**石材：**頁岩。**加工痕：**全面研磨。**使用痕：**残存部には無し。**その他：**表面赤色に変色。	A	1	ＳＫ010
57	中国産白磁	小杯	景徳鎮窯	－	－	2.6	細高台。白濁した釉調。内面のざらつきは使用時か埋没時か。	A	1	ＳＫ036
58	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	13.2	2.6	7.4	銅版転写（青色）。口錆。内面に菱文。見込みに七宝文。高台内に砂付着。瀬戸・美濃系。	A	1	ＳＫ036
59	沖縄産無釉陶器	甕	Ａ類	43.0	57.0	24.2	外面灰黄褐色、内面赤褐色。口唇部凹線２条。肩部凹線や波状文、丸文貼付による施文。	A	1	ＳＫ036
60	ガラス製品	玩具か（白＋青）	－	－	1.0+	1.2	原形は把手のついたカップ状の玩具か。色調は白色系と青色系のマーブル模様。	A	1	ＳＫ036
61	金属製品（鉄）	角釘	－	8.0	0.9	2.1	軸部方形。頭部は三角形状で側面観はL字状。重量31.9g。	A	1	ＳＫ036
62	金属製品（鉄）	－	－	8.0	0.8	2.5	棒状の製品で先端部はL字状となる。軸部長方形。全体的に錆で膨れている。重量18.7g。	A	1	ＳＫ036
63	金属製品（合金）	チューブ	－	3.5+	0.7	1.7	チューブ。先端部はねじ式。全体的に潰れており底部欠損。重量2.5g。	A	1	ＳＫ036
64	石製品	印部石	－	26.9＋	7.8	25.65＋	**石材：**琉球石灰岩。**加工痕：**正面・側面研磨。**使用痕：**なし。**その他：**銘有「か（？）み／ま山原」、背面自然面残。	A	1	ＳＫ036
65	銭貨	嘉慶通寶	－	外径 2.53	0.13	孔径 0.54	4.7ｇ。背面は満州文字。孔縁のバリあり。	A	1	ＳＫ038
66	本土産近代磁器	碗	Ａ類	12.2	5.5	5.2	型造り成形。口縁部は外反。外面に水仙文、松文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。素地は白色で緻密。砥部産。	A	2	ＳＫ041
67	本土産近代磁器	碗	Ｃ類	12.0	5.0	4.1	外面に蟹文。外面下半ロクロ目により蛇腹状。素地は白色で緻密。	A	2	ＳＫ041
68	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.1	4.8	3.4	銅版転写。外面に花鳥文、花弁は桃色。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
69	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	7.2	4.0	3.2	銅版転写（緑・茶色）。外面口縁部周辺に吹き絵、胴部に花芯文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
70	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	7.0	4.4	3.3	銅版転写（緑・茶色）。外面に樹木文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
71	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.0	4.9	3.5	銅版転写（茶色）。外面に福・寿・万歳の吉祥文字。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
72	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.2	4.8	2.9	ゴム判と転写併用。外面に網目文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
73	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.5	4.8	3.0	釉は薄緑色。外面にゴム判による吉祥文字。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
74	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.4	4.8	3.6	緑色による外面に抹茶と不明字款あり。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
75	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	10.6	2.4	6.8	銅版転写（緑色）。内面に亀甲文、花文。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
76	本土産近代磁器	皿	Ｄ類	11.0	1.9	6.8	クロム青磁。内面に梅花文？。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
77	本土産近代磁器	小杯	Ｄ類	6.8	2.8	2.6	クロム青磁。外面に飛び鉋。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	2	ＳＫ041
78	中国産色絵	小杯	景徳鎮	7.0	2.6	2.6	口縁部は外反。青赤黄は残るが、文様不明。素地は白色で緻密。	A	2	ＳＫ041
79	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	13.8	6.5	5.8	白化粧後、透明釉。胎土浅黄橙色。見込み蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕。外面に印花文。	A	2	ＳＫ041
80	沖縄産施釉陶器	小碗	Ｃ-3類	7.8	4.0	4.6	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。見込み蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕。外体面に呉須で花文。	A	2	ＳＫ041
81	沖縄産施釉陶器	瓶？	－	－	－	－	白化粧後、透明釉。胎土灰白色。外面飛鉋で刻文。器壁最大２cmと厚め。	A	2	ＳＫ041
82	沖縄産施釉陶器	火入	－	13.0	10.4	8.8	褐釉。胎土黄褐色。内面口縁部以外は無釉。高台脇は施釉後、掻き取り。	A	2	ＳＫ041

第 25 表　遺物観察表（３）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
83	沖縄産施釉陶器	蓋	－	4.2	3.0	2.0	呉須、内面白化粧のみ。胎土浅黄色。円孔１(直径0.6cm)。	A	2	ＳＫ041
84	ガラス製品	瓶(青)	薬瓶か	2.8	－	－	口縁内部にガラス栓（共栓）を使用していた痕と考えられる擦れがみられる。	A	2	ＳＫ041
85	ガラス製品	瓶(緑)	染料瓶か	1.7	5.4	2.0	気泡を多く含む。	A	2	ＳＫ041
86	ガラス製品	瓶(無)	化粧瓶	－	－	3.0	化粧水瓶。首部が長く、いかり肩、底形が円形。底部にトンボと桃のマークのエンボス。	A	2	ＳＫ041
87	ガラス製品	瓶(白)	化粧瓶	3.9	6.3	3.9	化粧クリーム瓶。胴部は10面取り。底部に「平尾分店」のエンボス。	A	2	ＳＫ041
88	金属製品(青銅)	不明	－	8.2	0.1	5.8	板状。ねじ穴多数穿孔され、ねじ穴径は大（5mm）中（2～3mm）小（1mm）あり。上部に○内にUS？の刻印あり。重量23.4ｇ。	A	2	ＳＫ041かＳＦ1
89	金属製品(青銅)	砲弾	－	3.1＋	0.4	2.9＋	弾体。一部熱により溶けている。重量13.7g。	A	2	ＳＫ041かＳＦ1
90	金属製品(鉄)	カスガイ	－	15.8	1.4	4.2	手違い鋲。両端の爪はねじれ、相互に直角方向を向く。軸部方形。重量148.6g。	A	2	ＳＫ041かＳＦ1
91	銭貨	一銭	－	外径2.77	0.14	－	6.4ｇ。一銭銅貨。明治十年。	A	2	ＳＫ041かＳＦ1
92	中国産白磁	小杯	徳化窯	3.5	2.0	1.6	光沢のある白色の釉調、胎土も白色で割れ目ざらつく。畳付釉剥ぎ。	A	2	ＳＫ042
93	本土産近代磁器	急須	Ｃ類	7.5	9.1＋	8.0	外底、内面頸部無釉。外面に雷文帯、外面に鉄釉により施文。素地は白色で緻密。	A	2	ＳＫ042
94	ガラス製品	蓋(緑)	－	－	－	－	縁に凹凸。	A	2	ＳＫ042
95	金属製品(鉄)	不明	－	10.6	0.5	5.7	板状の製品で、鋸の首部分の可能性あり。重量58.1g。	A	2	ＳＫ042
96	金属製品(鉄)	ヘラ	－	27.0	0.7	2.7	刃部は板状で、柄には鍔が付く。柄は錆で覆われている。重量415g。	A	2	ＳＫ042
97	銭貨	寛永通寶	－	外径2.47	0.1	孔径0.55	2.7ｇ。古寛永。背面側に緩く折れる。	A	2	ＳＫ042
98	銭貨	寛永通寶	－	外径2.28	0.08	孔径0.63	1.8ｇ。新寛永。側縁に欠け目立ち、スが多い。	A	2	ＳＫ042
99	銭貨	寛永通寶	－	外径2.38	0.11	孔径0.59	2.9ｇ。古寛永。背面段差なし。	A	2	ＳＫ042
100	銭貨	康熙通寶	－	外径2.37	0.05	孔径0.6	1/2残存。0.9ｇ。「康熙通■」。背面満州文字。	A	2	ＳＫ042
101	銭貨	一銭	－	外径2.75	0.15	－	6.6ｇ。稲一銭青銅貨。明治三十二年。	A	2	ＳＫ042
102	ガラス製品	瓶(無)	清涼飲料瓶	3.6	19.6	5.0	コーラ瓶。胴部上にコカコーラのロゴと「TRADE-MARK」、胴部下に「2（○の中にｃの入ったマーク）44」のエンボス。	A	2	ＳＫ078
103	中国産白磁	杯	徳化窯	8.2	4.5	3.4	口縁外反、端部釉剥ぎ。外底無釉。	A	3	ＳＦ001下側溝
104	本土産近代磁器	碗	Ｇ類	10.8	5.7	4.3	全面に緑釉、白・黒で絵付けあり。畳付け釉剥ぎ。	A	3	ＳＦ001下側溝
105	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.3	4.9	3.1	銅板転写。外面に桃色の花文、以外の葉などは青色。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	3	ＳＦ001下側溝
106	ガラス製品	瓶(無)	薬瓶か	1	2.95	1.3	肩から底部にかけて垂直な胴部。底部円形。底部に「w80（？）」と小さく記されたエンボス。ネジ栓。	A	3	ＳＦ001下側溝
107	ガラス製品	瓶(無)	薬瓶か	1.5	5.1	1.8	肩から底部にかけて垂直な胴部。底部円形。気泡を多く含む。	A	3	ＳＦ001下側溝
108	ガラス製品	瓶(無)	不明	3.2	5.9	3.4	胴部横断面が隅丸方形、底部円形。胴部に三ツ星を囲って装飾のあるマークのエンボス。ネジ栓	A	3	ＳＦ001下側溝
109	ガラス製品	コップ(無)	－	7.6	8.1	5.2	胴部中央から底部まで8面体。上げ底。内底中央部は僅かに窪む。	A	3	ＳＦ001下側溝
110	金属製品(青銅)	スプーン	－	11.2	0.2	0.3	重量8.2g。	A	3	ＳＦ001下側溝
111	金属製品(青銅)	不明	－	4.8＋	0.1	1.2	輪状で両端は曲げられている。重量6.4g。	A	3	ＳＦ001下側溝
112	金属製品(青銅)	薬莢	－	6.4＋	－	1.2	7.7mm小銃弾の薬莢。上方に溝が巡っており、訓練用の可能性。底面に刻印みられるが不明瞭。重量12.6g。	A	3	ＳＦ001下側溝
113	金属製品(鉄)	ヘラ	－	－	0.4	4.5	刃部は方形状で、柄部の断面はコの字状。全体が錆に覆われている。重量460g。	A	3	ＳＦ001
114	金属製品(鉄)	砲弾	－	－	5.8	5.9	ロケット弾の弾頭が取り付く推進装置の一部か。重量1100g。	A	3	ＳＦ001
115	不明瓦	軒丸	赤色系	－	2.2	－	胎土軟質精良、雲母混入。巴文。文様部上面ナデ？116と同タイプ。	A	3	ＳＦ001
116	不明瓦	軒丸	赤色系	－	2.0	－	胎土軟質精良、雲母混入。巴文。文様部上面ナデ？115と同タイプ。	A	3	ＳＦ001下側溝
117	プラスチック製品	歯ブラシ	－	13.6	0.3	1.2	ブラシ部に長軸に沿って4条66穴の植毛穴。植毛穴内には縦位に糸のようなものが見える。柄に「特（？）製毛止」の線刻。柄尻の通し孔には釘のようなものがはめ込まれている。色調は茶色く、ブラシ部は半透明。	A	3	ＳＦ001下側溝
118	石製品	石臼	－	24.4＋	6.1	10.6＋	**石材：**細粒砂岩（ニービ）。**加工痕：**全周研磨。**使用痕：**正面に溝状の凹み。**その他：**なし。	A	3	ＳＫ013
119	石製品	石臼	－	14.6＋	6.2	12.6＋	**石材：**細粒砂岩（ニービ）。**加工痕：**全周研磨。**使用痕：**確認できず。**その他：**粉挽臼の上臼。	A	3	ＳＫ013
120	金属製品(青銅)	不明	－	2.0	0.1	1.8	銅線を渦巻き状に曲げた製品。重量1.8g。	A	3	ＳＫ022
121	ガラス製品	瓶(コバルト)	薬瓶	1.75	6.05	2.2	胴部横断面が横長八角形。細かい気泡を含む。胴部に縦に「神薬」、底部に「と又を重ねたようなマークのエンボス。	A	3	ＳＫ023
122	ガラス製品	瓶(無)	化粧瓶	2.05	8.9	3.2	化粧水瓶。首部が長く、いかり肩、底形が円形。底部にトンボと桃のマークのエンボスがみられるが不明瞭。	A	3	ＳＫ023
123	石製品	硯	－	6.2	0.65	0.65	**石材：**頁岩。**加工痕：**全周研磨。**使用痕：**残存部には無し。**その他：**残存部一帯の大部分が赤色に変色。	A	3	ＳＫ023

第 26 表　遺物観察表（４）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
124	石製品	硯	－	6.3＋	1.7	3.25＋	**石材：**泥岩。**加工痕：**全周研磨、正面に陸部作出に伴う擦切痕。**使用痕：**正・背面ともに溝状の凹み。**その他：**なし。	A	3	ＳＫ023
125	金属製品（鉄）	鎌	－	13.95	0.6	7.25＋	鎌の刃部か。全体は錆で覆われている。重量128.3g。	A	3	ＳＫ026
126	ガラス製品	瓶（無）	化粧瓶か	2.2	11.1	4.2	首部が長く、いかり肩、底形が円形。胴部上に「ムエーゼ」のエンボス。底部は大きく破損しているが、菊紋のような意匠がみられる。	A	3	ＳＫ032
127	ガラス製品	瓶（無）	薬瓶か	1.5	5.5	1.9	肩から底部にかけて垂直な胴部。底部円形。	A	3	ＳＫ045
128	金属製品（鉄）	鎌	－	11.0＋	0.4	4.7	鎌の刃部か。全体は錆で覆われている。重量93.8g。	A	3	ＳＫ045
129	石器	磨製石斧	－	5.4	1.0	3.8	**石材：**緑色片岩。**加工痕：**背面身部、正・背面刃部研磨。**使用痕：**刃縁損耗・線条痕。**その他：**正面身部に自然面残、縦斧。	A	3	ＳＰ031
130	本土産近代磁器	香炉	Ｄ類	3.6	5.2+	1.8	脚部欠損。三足瓜形香炉。緑白色の均質な釉調、口縁内面より下半露胎し淡黄色、断面灰白色。割れ口やざらつく。	A	3	ＳＰ082
131	ガラス製品	瓶（コバルト）	薬瓶	1.6	6.5	2.1	胴部横断面が横長八角形。細かい気泡を含む。胴部に縦に「神薬」のエンボス。	A	3	ＳＤ011
132	金属製品（青銅）	不明	－	9.4	0.1	1.8	板状で平面がロ字状の製品で、半分から曲げられている。重量18.8g。	A	3	ＳＤ011
133	金属製品（鉄）	不明	－	10.1	0.7	3.6	板状の製品で、ネジ孔２つあり。ネジ孔は錆で覆われている。重量78.7g。	A	3	ＳＤ011
134	プラスチック製品	ボタン	－	1.2	0.3	1.2	4つ孔タイプ。表は孔のある中央部が窪み、裏面は孔のある中央部が僅かにフラットになる。色調は灰色がかった緑色。	A	3	ＳＤ011
135	中国産白磁	碗	福建産	－	－	－	直口碗の口縁。外面のロクロ目が顕著。	A	4	ＳＫ067
136	中国産青花	碗	清（徳化）	－	－	5.8	青白色の釉。外面草花文、見込み花弁か＞	A	4	ＳＫ067
137	産地不明陶器	不明	－	－	－	－	外面に格子状のタタキ目。内面平滑。陶器製の浮きか？	A	4	ＳＫ067
138	本土産近代磁器	碗	Ａ類	－	－	－	直口碗。外面は青海波文地に花文。内面に瓔珞文。素地は白色で緻密。	A	4	ＳＫ067
139	本土産近代磁器	小杯	Ｂ類	4.9	2.8	1.8	端反口縁。吹き絵。外面に葉文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	4	ＳＫ067
140	本土産近代磁器	碗	Ｃ類	12.2	－	－	内面にやや黒い呉須による海老文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	A	4	ＳＫ067
141	本土産近代磁器	火入	Ｂ類	10.2	8.8	10.6	銅版転写（青色）による口縁部に四方襷文、外面胴部に梅文、腰部にラマ式蓮弁文、発色が不良。外面の高台まで施釉。瀬戸・美濃系。	A	4	ＳＫ067
142	本土産近代磁器	火入	Ｂ類	10.8	－	－	銅版転写（青色）による外面胴部に梅文、鳥文。146・147は同一か。外面の高台まで施釉。瀬戸・美濃系。	A	4	ＳＫ067
143	本土産近代磁器	火入	Ｂ類	－	－	10.8	銅版転写（青色）による外面胴部に花文、腰部にラマ式蓮弁文。146・147は同一か。瀬戸・美濃系。	A	4	ＳＫ067
144	本土産近代磁器	不明	Ｃ類	9.5＋	0.2	1.5	円柱状、把手か。外面は全面施釉。内面は施釉無し。底面に0.1cmの孔有り。	A	4	ＳＫ067
145	本土産近世陶器	鍋	関西系	13.4	10.0	4.75	灰釉か、外面下半は無釉。片口あり。	A	4	ＳＫ067
146	本土産近世陶器	蓋	関西系	13.8	－	－	灰釉。胎土軟質。上部凹線。	A	4	ＳＫ067
147	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-1類	14.2	6.9	6.4	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。見込み蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕。口唇直下に鉄絵による圏線１条。	A	4	ＳＫ067
148	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	13.6	6.7	5.6	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。見込み蛇の目状釉剥ぎ。重ね焼き痕あり。外面印花文。	A	4	ＳＫ067
149	沖縄産施釉陶器	蓋	－	15.5	3.3	摘み 6.5	褐釉。胎土浅黄褐色。内面中央部緩やかに凹む。つまみ高台形。	A	4	ＳＫ067
150	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	26.0	－	－	外面暗赤褐色、内面鈍赤褐色。擂目９条/1.5cm。	A	4	ＳＫ067
151	ガラス製品	ランプ笠（白）	－	－	－	－	上部開口部片。被熱により変形。色調は白色系。	A	4	ＳＫ067
152	ガラス製品	ランプ笠（白）	－	－	－	－	上部開口部片。被熱により変形。原型は円盤状と考えられる。	A	4	ＳＫ067
153	ガラス製品	ランプ笠（白）	－	－	－	20.2	端部片。縁は折曲げて成形されている。原型は円盤状と考えられる。	A	4	ＳＫ067
154	ガラス製品	瓶（白）	化粧瓶	2.7	5.1	3.4	化粧クリーム瓶。肩から胴部下にかけて僅かにすぼまり、8面取。ネジ栓。胴部に縦に「美晶」のエンボス。	A	4	ＳＫ067
155	ガラス製品	瓶（白）	化粧瓶か	6.4	4.6	6.7	広口で筒形。ネジ栓。底部に松の木様のマークのエンボス。	A	4	ＳＫ067
156	ガラス製品	瓶（無）	薬瓶か化粧瓶	－	－	2.6	細口で首部が短く、いかり肩。胴部断面形は隅丸長方形、底部は長方形。口唇部に細かい打割痕。	A	4	ＳＫ067
157	ガラス製品	瓶（無）	薬瓶	1.9	－	－	口縁～胴部。細口で首部が短く、いかり肩。胴部に目盛と「60」のエンボス。	A	4	ＳＫ067
158	ガラス製品	瓶（茶）	薬瓶か	2.0	10.8	4.3	細口で首部が短く、肩から底部まで垂直な胴部、底形は円形。ネジ栓。底部に「16」のエンボス。	A	4	ＳＫ067
159	ガラス製品	ビー玉か（無＋赤）	－	1.9	0.8	1.9	おはじき状だが、被熱により変形したビー玉か。色調は無色系＋赤色系。	A	4	ＳＫ067
160	金属製品（鉄）	丸釘	－	7.95	0.4	1.05	丸釘。錆に覆われている。重量5.8g。	A	4	ＳＫ067
161	銭貨	無文銭	－	外径 1.86	0.05	孔径 0.52	0.9ｇ。	A	4	ＳＫ067
162	銭貨	寛永通寶	－	外径 2.31	0.07	孔径 0.64	1.7ｇ。新寛永。	A	4	ＳＫ067
163	銭貨	一銭	－	外径 2.8	0.14	－	6.5ｇ。一銭銅貨。記年不明。	A	4	ＳＫ067
164	銭貨	一銭	－	外径 2.81	0.14	－	6.6ｇ。一銭銅貨。明治十年。	A	4	ＳＫ067

第 27 表　遺物観察表（５）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
165	土製品	不明	－	－	5.4	－	一面が平坦で、もう一面が中央に盛り上がる。蓋状か。	A	4	ＳＫ067
166	円盤状製品	－	沖縄産無釉陶器製	7.2	0.7	6.0	壺胴部を加工。	A	4	ＳＫ067
167	プラスチック製品	不明	－	6.2	－	－	内側に他の部品と接続するためのものと考えられるネジ溝がみられ、裏面に十字の突帯。色調は黒色。	A	4	ＳＫ067
168	プラスチック製品	クシ	－	4.4＋	0.2	3.1＋	大部分が欠損。持ち手の部分にダイヤモンド状の透明な装飾パーツが横位に4つ残存。色調は黒色。	A	4	ＳＫ067
169	石製品	石臼	－	23.65＋	8.2＋	16.35＋	**石材：**細粒砂岩（ニービ）。**加工痕：**側面研磨、正面中心部に穿孔具による凹み、正面に断面山形の臼目作出による刻み。**使用痕：**正面損耗。**その他：**臼目こぼれ目型。粉挽臼の下臼。	A	4	ＳＫ067・068
170	沖縄産無釉陶器	甕	Ｂ類	16.2	71.9	24.2	外面灰黄色、一部暗褐色。内面赤褐色。肩部ヘラ記号あり。「へ」の字状下に「二」状。底部亀裂。	A	4	ＳＫ067・068＋ＳＫ68
171	沖縄産無釉陶器	甕	Ｂ類	16.5	76.1	25.4	内外ともに灰黄褐色、部分的に赤褐色。肩部凹線２条。凹線以下は斜位や縦位にナデ痕。	A	4	ＳＫ068
172	本土産近代磁器	碗	Ａ類	12.8	5.7	4.4	外面に花文、寿字文。見込みに花弁文。内面に目痕あり。砥部産。	A	4	ＳＤ015
173	本土産近代磁器	碗	Ｂ類	－	－	3.6	銅版転写。外面に窓内に黒色で山水文か、花弁は桃色。高台外面には青色で渦文か。外底に２行で山「ロ？」本、沢田「製？」銘。瀬戸・美濃系。	A	4	ＳＤ015
174	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	8.2	4.6	3.8	銅版転写（青・緑色）。花文と不明字款。瀬戸・美濃系。	A	4	ＳＤ015
175	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	13.4	6.1	6.2	白化粧後、透明釉。内底蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面線彫りや釉で施文。	A	4	ＳＤ015
176	沖縄産施釉陶器	瓶	－	－	－	7.2	白化粧後、透明釉。内面無釉。外面凹線２条後、呉須。	A	4	ＳＤ015
177	沖縄産施釉陶器	瓶	－	－	－	4.8	透明釉。胎土赤褐色、白粒混じり。内面、外底無釉。内外ともに轆轤痕明瞭。	A	4	ＳＤ015
178	沖縄産施釉陶器	火入	－	14.8	9.4	9.0	褐釉。胎土黄褐色。外面腰部以下無釉。外面獣耳、内面口縁付近には突起粘土貼付。	A	4	ＳＤ015
179	金属製品（鉄）	蹄鉄	－	9.55	0.8	9.4	釘孔が左右に３つ。全体は錆で覆われている。重量107g。	A	4	ＳＤ015
180	金属製品（鉄）	蹄鉄	－	11.4	0.6	10.45	釘孔が左右に３つ。全体は錆で覆われている。重量134g。	A	4	ＳＤ015
181	本土産近代磁器	小杯	Ｃ類	6.4	2.8	2.4	口縁部外面、内面共に鉄釉を施釉。外面胴部に呉須による文様。中位と腰部に折れがあり、２段状。外底無釉。瀬戸・美濃系。	A	5	ＳＫ051
182	ガラス製品	瓶（無）	インク瓶	2.6	5.6	4.0	肩に段がある。底部円形。2mm大の気泡が含まれる。	A	5	ＳＫ051
183	プラスチック製品	歯ブラシ	－	14.5	0.4	1.2	長軸に沿って3条31穴の植毛穴と柄下部に通し孔。柄には○に公のマークと「一四號品118工」の線刻。色調は黒く細かい立て筋の入ったクリーム色。	A	5	ＳＫ051
184	石製品	砥石？	－	6.6	5.4	5.4	**石材：**琉球石灰岩。**加工痕：**２方向から穿孔。**使用痕：**上面を除き砥面。**その他：**上面に自然面残。	A	5	ＳＫ061
185	ガラス製品	瓶（茶）	薬瓶か	1.8	5.9	2.3	肩から底部にかけて垂直な胴部。合わせ目が明瞭。	A	5	ＳＫ061
186	ガラス製品	瓶（無）	化粧瓶	1.25	4.6	2.1	底形は隅丸長方形で、胴部両側面に縦書きで「TSURU」、底に「OSG」のエンボス。	A	5	ＳＫ063
187	金属製品（青銅）	銃弾	－	6.2	1.3	0.9	変形しているがおそらく12.7mm機銃弾。側面にライフルマークあり。重量36.1g。	A	5	Ｓ0Ｋ063
188	金属製品（合金）	手榴弾	－	4.0＋	1.7	3.6	手榴弾の信管部分。重量48.2g。	A	5	ＳＫ063
189	本土産近世陶器	擂鉢	関西系	23.8	10.25	12.55	褐釉、高台無釉。胎土軟質精良、黄橙色。注口1ヶ所。擂目７本/cm、原体幅約５cmか、見込み周辺がやや摩滅。	A	5	ＳＫ066
190	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	16.4	44.5	21.0	外面口縁～肩部：黄褐色、肩部以下赤褐色。内面赤褐色。肩部横耳４箇所貼付し、挟むように凹線各２条。	A	5	ＳＫ066
191	沖縄産無釉陶器	壺	Ｂ類	10.8	39.0	15.2	外面灰黄色。内面赤褐色。肩部ヘラ記号(欠損のため詳細不明)。	A	5	ＳＫ066
192	沖縄産無釉陶器	壺	Ｂ類	11.5	39.0	16.0	外面口縁～肩部：赤褐色、肩部以下暗褐色。内面赤褐色。肩部ヘラ記号あり。「へ」の字状下に点を３つ三角形状配置。	A	5	ＳＫ066
193	沖縄産無釉陶器	壺	Ｂ類	11.4	45.8	18.2	外面暗褐色、一部赤褐色。内面赤褐色。肩部ヘラ記号「三」状。	A	5	ＳＫ066
194	ガラス製品	蓋（緑）	－	7.2	5.8	2.8	円形。直径2.8cmのつまみが付き、下部中央に1.1cmの孔。色調は緑色系。195･196の蓋か。	A	5	ＳＫ066
195	ガラス製品	瓶（緑）	不明	10.3	－	－	口唇部は外反。195･196は同一個体。	A	5	ＳＫ066
196	ガラス製品	瓶（緑）	不明	－	－	10.6	底部は平底。195･196は同一個体。	A	5	ＳＫ066
197	金属製品（青銅）	簪	－	12.3＋	0.3	1.2	カブは匙状で破損している。断面は六角形。重量8.2g。	A	5	ＳＫ066
198	金属製品（青銅）	把手	－	6.0	0.5	3.7	把手状の製品に割り鋲が付く。重量14.1g。	A	5	ＳＫ066
199	金属製品（合金）	手榴弾	－	5.0＋	1.8	3.3＋	手榴弾の信管部分。重量50.1g。	A	5	ＳＫ066
200	明朝系瓦	丸瓦	赤	29.2	7.3	13.7	筒部上端に漆喰付着。平瓦部厚1.6cm。	A	5	ＳＫ066
201	沖縄産施釉陶器	水滴	－	7.4	1.8	6.3	白化粧後、透明釉。外底無釉、布目痕あり。凸帯や呉須で蝶を描く。端部に注口あり(直径0.8cm)。	B	6	ＳＫ002
202	ガラス製品	瓶（茶）	薬瓶	1.1	2.9	1.2	肩から底部にかけて垂直な胴部。底形は円形。ネジ栓。	B	6	ＳＫ002
203	ガラス製品	瓶（茶）	薬瓶	3.0	11.3	4.0	肩から底部にかけて垂直な胴部で円筒形。首部に「わかもと　わかもと」、胴部に「Wakamoto」、底部に「18 NAGA 9」のエンボス。	B	6	ＳＫ002
204	ガラス製品	瓶（青）	清涼飲料瓶か調味料瓶	2.6	23.3	5.1	なで肩で底部円形。底部に「3」のエンボス。	B	6	ＳＫ002
205	金属製品（青銅）	薬莢	－	9.9	0.1	2.0	12.7mm機銃弾。底面に「DM43」刻印あり。重量47.9g。	B	6	ＳＫ002

第 28 表　遺物観察表（６）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
206	金属製品（鉄）	蓋？	－	6.2	5.5	5.7	蓋状の製品で、上部に方形状の摘み。重量540g。	B	6	ＳＫ002
207	金属製品（鉄）	砲弾	－	25.6＋	1.5	6.0＋	砲弾弾殻破片。錆に覆われている。重量1540g。	B	6	ＳＫ002
208	石製品	石盤	－	30.5	0.55	15.2	**石材：**粘板岩。**加工痕：**全面擦切痕・研磨。**使用痕：**正・背面磨面・線条痕。**その他：**なし。	B	6	ＳＫ002
209	明朝系瓦	軒平	赤	20.5＋	3.2 瓦当	6.5＋	石英粒混入。瓦当文様新出か。210と類似。	B	6	ＳＫ002
210	明朝系瓦	軒平	赤	11.6＋	3.0 瓦当	6.4＋	石英粒混入。瓦当文様新出か。209と類似しているが、上方に伸びる可能性がある。	B	6	ＳＫ002
211	明朝系瓦	丸瓦	陶器質	28.6＋	1.5	12.5	黒色・赤色粒混入。硬質。筒部上端横位のユビナデ２条。筒部張高7.7cm。	B	6	ＳＫ002
212	明朝系瓦	丸瓦	陶器質	26.0＋	1.5	11.2	黒色粒混入。硬質。筒部上端横位のユビナデ２条。筒部張高7.5cm。	B	6	ＳＫ002
213	明朝系瓦	平瓦	赤	25.0	1.3	17.5＋	赤色粒含む。縦方向の布綴じ痕１条あり。	B	6	ＳＫ002
214	明朝系瓦	平瓦	赤	23.8	1.3	22.5	赤色粒含む。広端部存、内面ヨコナデ２条。	B	6	ＳＫ002
215	プラスチック製品	クシ	－	15.0＋	0.7	3.8	持ち手の部分が弧状。持ち手の中央に文字らしき線刻がみられるが不明瞭。色調はべっ甲のような黄土色の半透明。	B	6	ＳＫ002
216	本土産近代磁器	碗	Ｇ類	11.3	5.2	3.8	口縁部下部に二重の圏線。素地は白色で緻密。高台内に「ヤマカ陶器　岐143」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	B	6	ＳＫ005
217	金属製品（アルミ）	飯盒の蓋	－	18.0	2.95	－	蓋上部に「九九」の銘あり。重量61.7g。	B	6	ＳＫ005
218	金属製品（鉄）	ヘラ	－	12.8	0.2	4.5	ヘラ部は破損している。柄部の断面はコの字状。重量147.3g。	B	6	ＳＫ005
219	金属製品（鉄）	不明	－	10.5	2.5	8.8	ロ字形の板状製品。重量290.9g。	B	6	ＳＫ005
220	明朝系瓦	丸瓦	赤	28.5	1.4	14.4	ほぼ完形。玉縁部長2.9cm、内面端部ナデ。横方向の布綴じ痕。	B	6	ＳＫ005
221	中国産色絵	杯	徳化窯	8.2	4.5	4.0	口縁わずかに外反。底部薄い。畳付砂付着。青色残存、花弁文。	B	6	ＳＫ006
222	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	7.2	4.1	3.0	口縁部に吹き絵。外面に銅版転写による花文、桜文に「五足隼王」字。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	B	6	ＳＫ006
223	本土産近代磁器	小碗	Ｄ類	7.9	4.1	3.1	クロム青磁。外底無釉。外面に飛び鉋有り。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	B	6	ＳＫ006
224	本土産近代磁器	皿	Ｄ類	10.6	1.8	6.0	クロム青磁。型紙による内面に生垣文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	B	6	ＳＫ006
225	沖縄産施釉陶器	小碗	Ｃ-2類	8.8	4.3	3.6	白化粧後、透明釉。内底蛇の目状釉剥ぎ。口唇部釉二度塗り。高台付近段あり。	B	6	ＳＫ006
226	石製品	石盤	－	9.7	4.0	7.0＋	**石材：**頁岩。**加工痕：**全面擦切痕・研磨。**使用痕：**正・背面磨面・線条痕。**その他：**なし。	B	6	ＳＫ006
227	中国産青磁	瓶	－	－	－	6.3	内面無釉で橙色呈する。胎土やや軟質で灰白色。畳付砂付着。産地不明。	B	6	ＳＫ007
228	石製品	砥石	－	5.6	1.9	4.1	**石材：**琉球石灰岩。**加工痕：**側・背面弱研磨、２方向から穿孔。**使用痕：**正面磨面・線条痕。**その他：**正面除き自然面残。	B	6	ＳＫ007
229	金属製品（青銅）	銃弾	－	4.8＋	0.1	1.2	7.7mm小銃弾で、薬莢下部が残る。重量12.4g。	B	6	ＳＫ011
230	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.0	5.3	4.8	外面文様、長六角形の窓部に「福壽福」など。砥部産。	B	6	ＳＫ012
231	本土産近代磁器	火入	Ａ類	11.0	8.8	10.0	内面、外底無釉。外面中央に円文、内部に鶴や波頭文。砥部産？。	B	6	ＳＫ012
232	レンガ	－	－	20.2+	6.3	13.0	約１／４欠損。２側面に漆喰付着。レンガ囲いの一部。	B	6	ＳＫ012
233	金属製品（青銅）	煙管	－	－	1.0	4.2	煙管の雁首。接合部に羅宇が残る。重量5.8g。	B	6	ＳＫ017
234	ガラス製品	瓶（無）	薬瓶か化粧瓶	1.8	9.0	3.4	いかり肩で、底部隅丸長方形。	B	6	ＳＫ025
235	中国産青花	皿	明（景徳鎮）	11.3	2.1	5.6	ペンシルドローイングによる施文、見込み花弁蔓文。外底二重圏線内字款不明。	B	6	ＳＫ042
236	沖縄産施釉陶器	碗	Ａ類	13.2	6.1	6.3	灰釉か。胎土灰白色。外面鉄絵。風化により釉色不明瞭。フィガキー。	B	6	ＳＫ042
237	石製品	碁石	－	2.2	0.5	2.2	**石材：**粘板岩。**加工痕：**全面研磨。**使用痕：**確認できず。**その他：**なし。	B	6	ＳＫ042
238	金属製品（鉄）	砲弾	－	14.4	3.5	6.7＋	弾殻片か。青銅製の弾体片が付着。重量480g。	B	6	ＳＫ034
239	金属製品（鉄）	砲弾	－	－	－	－	239と同様で最長32cmの破片の集合。	B	6	ＳＫ034
240	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	7.9	4.4	3.5	口縁部下部に三重の圏線。素地は白色で緻密。国民食器。瀬戸・美濃系。	B	6	ＳＤ001
241	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	－	－	－	白化粧後、透明釉。胎土黄橙色。内外コバルト釉で施文。寿字文か。	B	6	ＳＤ001
242	沖縄産施釉陶器	皿	－	20.3	5.3	9.0	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状釉剥ぎ。内面線彫りで施文。褐釉や緑釉で色付け。	B	6	ＳＤ001
243	沖縄産施釉陶器	火入	－	10.9	8.7	6.9	白化粧後、外面のみ褐釉。腰部釉剥ぎ。胎土暗灰色。使用により口唇部釉欠けか。	B	6	ＳＤ001+ ＳＤ001レキ2
244	ガラス製品	瓶（コバルト）	薬瓶	0.3	7.25	－	目薬瓶。胴部に「10」「EYE LOTION ROHTO」のエンボスと盾状のマーク。極細口でネジ栓。	B	6	ＳＤ001
245	ガラス製品	瓶（紫）	化粧瓶か	3.6	6.0	3.9	肩から胴部下にかけて僅かにすぼまる。底部縁は膨らみ、底形は円形。広口でネジ栓。	B	6	ＳＤ001
246	ガラス製品	瓶（無）	清涼飲料瓶	2.7	19.6	4.9	コーラ瓶。胴部上にコカコーラのロゴと「TRADE-MARK」、胴部下に「1R（楕円形に目のマークを重ねたようなもの）45」のエンボス。	B	6	ＳＤ001

第 29 表　遺物観察表（７）

遺物№	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
247	ガラス製品	瓶（無）	不明	－	－	2.6	首部は短く、肩が張る。胴部断面形が隅丸長方形。細口で、口唇部に細かい打割痕。	B	6	ＳＤ001
248	金属製品（青銅）	不明	－	11.0	0.2	10.0	銅線を網状に曲げた製品。重量47.8g。	B	6	ＳＤ001
249	金属製品（青銅）	不明	－	2.3	0.1	1.8	輪状の製品。重量4.9g。	B	6	ＳＤ001
250	金属製品（青銅）	薬莢	－	9.1	0.1	2.0	12.7mm機銃の薬莢。上部欠損。重量46.1g。	B	6	ＳＤ1ホネ2
251	金属製品（鉄）	蓋	－	15.8	11.0	摘み 3.1	上部に把手状の摘みがあり、側面に窓をもつ何らかの蓋か。内部には縁部にゴムパッキンをもつ円盤状のものが付着している。重量2260ｇ。	B	6	ＳＤ001
252	金属製品（鉄）	不明	－	14.8	0.55	3.8	何らかの工具の先端部か。錆に覆われている。重量162.9g。	B	6	ＳＤ001
253	金属製品（鉄）	不明	－	7.3	3.2	－	饅頭形の製品。全体が錆に覆われている。重量370.8g。	B	6	ＳＤ001
254	石製品	硯	－	5.4	1.4	6.1	**石材：**頁岩。**加工痕：**全面研磨、正面に陸部作出に伴う擦切痕。**使用痕：**陸部中央に凹み。**その他：**なし。	B	6	ＳＤ001
255	金属製品（青銅）	煙管	－	7.3	0.9	1.1	煙管の吸口。重量11.1g。	B	6	ＳＤ002
256	金属製品（鉄）	滑車	－	35.5	10.2	27.4	定滑車で軸は９ピン状。保存処理実施。重量3600g。	B	6	南西側表採
257	金属製品（青銅）	簪	－	14.3＋	0.4	－	カブは破損。U字状に折れ曲がっている。断面は六角形。重量12.5g。	B	8	ＳＤ006
258	金属製品（鉄）	角釘	－	7.3	1.5	0.4	軸部方形。全体が錆に覆われている。重量16.1g。	B	8	ＳＤ006
259	金属製品（鉄）	不明	－	19.9	0.1	7.4	ボンベ状の容器で内部に別の部品がみられる。重量660ｇ。	B	8	ＳＤ006
260	石製品	砥石	－	6.0	1.9	4.4	**石材：**石灰質砂岩。**加工痕：**全面研磨、２方向から穿孔。**使用痕：**正・背面に砥面、穿孔部上面に紐擦痕。**その他：**なし。	B	8	ＳＤ006
261	本土産近世陶器	碗	関西系	8.8	5.7	4.0	灰釉。胎土灰白色。外底のみ無釉。外面鉄絵による草花文。	B	8	ＳＤ007
262	沖縄産施釉陶器	香炉	－	13.8	7.85	7.5	白化粧後、緑釉。内面無釉。内外底重ね焼き痕あり。内面頸部に釉４点、指跡か。	B	8	ＳＤ007
263	金属製品（鉄）	ヘラ	－	24.9	0.45	5.45	ヘラ部は方形状で、破損している。柄部の断面はコの字状。全体が錆に覆われている。重量420g。	B	8	ＳＤ007
264	中国産白磁	小杯	徳化窯	－	－	1.8	外面下半蓮弁状の陽刻。	B	8	ＳＤ012・013
265	中国産青花	碗	清（福建・広東）	14.5	6.9	7.2	灰色の釉。見込み蛇の目釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面粗雑な草文。	B	8	ＳＫ040
266	本土産近代磁器	瓶	Ｇ類	－	－	4.8	外面は透明釉と鉄釉による施釉。内面無釉。	B	8	ＳＫ040
267	沖縄産施釉陶器	壷	－	11.75	18.8	10.6	褐釉。胎土灰橙色。口唇部無釉。内面轆轤痕明瞭。	B	8	ＳＫ040
268	金属製品（青銅）	把手	－	8.7	0.2	3.4	把手状の製品に割り鋲が付く。重量30.7g。	B	8	ＳＫ040
269	プラスチック製品	不明	－	10.7	0.3	1.4	丸く枠を作るように交差し、端部が円錐状に尖る。断面形は円形。色調は半透明のくすんだ緑色。	B	8	ＳＫ040
270	沖縄産無釉陶器	甕	－	－	－	23.2	外面鈍赤褐色。内面黄褐色、内底のみ暗褐色。外面気泡によりざらつく。	B	8	ＳＫ045埋甕1
271	乾電池	一	－	5.5	0.8	0.8	円柱状の炭素棒。一端に緑青（銹）が付着しており、乾電池のプラス端子。重量4.3g。	B	8	ＳＫ045埋甕1
272	沖縄産無釉陶器	甕	－	－	－	24.9	外面灰黄色、一部赤褐色。内面赤褐色、内底黒色。	B	8	ＳＫ045埋甕2
273	本土産近代磁器	小皿	Ｇ類	8.8	1.5	4.5	外反皿。内面に緑二重の圏線。素地は白色で緻密。国民食器。瀬戸・美濃系。	B	8	ＳＫ045埋甕2
274	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	13.3	6.8	6.0	白化粧後、透明釉。内底蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。内面気泡により粗アバタ。外面印花文。	B	8	ＳＫ045埋甕2
275	金属製品（鉄）	不明	－	50.0	1.0	9.8	両端を折り曲げ環状になった大型の板状製品。環の直径約８cm。	B	8	ＳＫ054
276	沖縄産無釉陶器	瓶	－	－	－	8.4	外面暗赤褐色、内面暗褐色。外面アバタ状。肩部凹線３条。外底雑な成形。	B	8	ＳＫ055
277	本土産近代磁器	碗	Ｇ類	12.3	6.25	4.2	見込みに目痕あり。外面に緑色と茶色の2条1組の圏線を3段。素地は　。高台内に「㋝？」が入る。砥部産か。	B	8	ＳＳ002下層
278	本土産近代磁器	碗	Ｇ類	11.3	5.2	3.8	口縁部下部に二重の圏線。素地は白色で緻密。高台内に「ヤマカ陶器　岐143」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	B	8	ＳＳ002下層
279	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	13.0	2.6	7.5	銅版転写。口錆。内面の文様は花文。瀬戸・美濃系。	B	8	ＳＳ002下層
280	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	13.6	6.6	6.0	白化粧後、透明釉。胎土鈍赤褐色。内底蛇の目状に釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面草花文。	B	8	ＳＳ002下層
281	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-1類	12.5	6.2	5.8	白化粧後、外：褐釉、内：透明釉。胎土赤褐色。内底蛇の目状に釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。	B	8	ＳＳ002下層
282	陶質土器	蓋	－	5.8	－	－	内外黄橙色。外面轆轤痕。	B	8	ＳＳ002下層
283	ガラス製品	瓶（無）	染料瓶	－	－	2.1	口唇部に細かい打割痕。底形は円形。胴部に「谷利」、底部に八と古を合わせたようなマーク（谷？）のエンボス。	B	8	ＳＳ002下層
284	金属製品（合金）	不明	－	6.0	0.6	5.0	半円形の板状製品。中央に一辺8ｍｍの台形状の突起あり。重量122.4g。	B	8	ＳＳ002直上
285	金属製品（鉄）	カスガイ	－	17.2	1.4	4.9	鋩。軸部円形。重量142.5g。	B	8	ＳＳ002下層
286	金属製品（鉄）	スパナ	－	20.0	1.4	5.1	スパナ。片側は欠損。錆に覆われている。重量282.6ｇ。	B	8	ＳＳ002下層
287	金属製品（鉄）	金槌	－	20.0	3.0	5.5	金槌の頭部。重量1180g。	B	8	ＳＳ002下層

第 30 表　遺物観察表（８）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
288	金属製品（鉄）	鑿	－	26.5	2.5	5.4	上～中位は断面円形で、下位は四角形で先端は尖る鑿。上端角は縁取り。石工用か。重量840g。	B	8	ＳＳ002下層
289	金属製品（鉄）	不明	－	9.5	0.8	7.0	Ｊ字形の板状製品。丸釘が溶着する。重量580g。	B	8	ＳＳ002下層
290	円盤状製品	－	中国産青磁	6.5	2.6	5.3	完形。青磁Ｖ類碗底部。	B	8	ＳＳ002下層
291	金属製品（鉄）	不明	－	23.95	0.5	4.0	細長い板状の製品で、孔が四箇所みられる。全体が錆に覆われている。重量263.0g。	B	8	ＳＫ074
292	金属製品（鉄）	鎌	－	12.5	1.0	10.85	鎌の刃部。全体は錆で覆われている。重量63.0g。	B	8	ＳＫ074
293	金属製品（青銅）	不明	－	6.6＋	0.2	3.8＋	板状で、ねじ穴あり。重量12.0ｇ。	B	8	ＳＫ074
294	石製品	砥石	－	5.85	3.1	4.7	**石材：**中粒砂岩。**加工痕：**上面除き研磨、２方向から穿孔。**使用痕：**正・背面に砥面。**その他：**上面自然面か、側面に鉄釘付着。	B	8	ＳＫ074
295	本土産近代磁器	蓋	Ｃ類	7.3	2.9	－	急須の蓋か。底部の内面のみを釉剥ぎ。外面に呉須による絵付け。蓋外面から内面にかけて漆喰付着。	B	8	ＳＫ089
296	金属製品（青銅）	管	－	11.6	4.5	4.5	カブは破損。断面は六角形。重量7.5g。	B	8	ＳＫ089
297	金属製品（鉄）	角釘	－	4.9	－	1.1	軸部方形。全体が錆に覆われている。重量12.0g。	B	8	ＳＫ089
298	石製品	錘？	－	9.05	4.15	6.1	**石材：**中粒砂岩。**加工痕：**下面除き弱研磨、下面敲打痕、２方向から穿孔。**使用痕：**確認されず。**その他：**重さ307.8g。	B	8	ＳＫ089
299	銭貨	寛永通寶	－	外径2.4	0.2	孔径0.6	2.6ｇ。新寛永。	B	8	ＳＫ089
300	金属製品（青銅）	不明	－	12.3＋	0.1	0.8	筒状の製品。延べ煙管の二次加工品？重量20.3g。	B	8	ＳＫ095
301	銭貨	一銭	－	外径2.29	0.13	1.3	3.6ｇ。桐一銭青銅貨。大正十三年。	B	－	不明
302	本土産近代磁器	碗	Ａ類	12.7	5.5	4.7	外面の文様は花文、見込みは五弁文。素地は白色で緻密。内面に目痕あり。高台内に「Ⓑ2」の統制番号。砥部産。	B	8	ＳＫ043
303	本土産近代磁器	碗	Ｆ類	11.7	5.1	4.7	外面に色絵による絵付け。素地は白色で緻密。高台内に「岐865」の統制番号。瀬戸・美濃系。	B	8	ＳＫ043
304	本土産近代磁器	小皿	Ｂ類	11.0	2.3	6.3	銅版転写（緑色）による内面に鶴文。素地は白色で緻密。瀬戸･美濃系。	B	8	ＳＫ043
305	本土産近代磁器	湯呑	Ｆ類	6.6	7.4	3.7	型紙による絵付けか。色は残らず。外面の文様は松文、鳥文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	B	8	ＳＫ043
306	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-2類	14.4	7.2	6.2	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面印花文。	B	8	ＳＫ043
307	沖縄産施釉陶器	瓶	－	6.95	15.65	6.2	白化粧後、口縁～肩部：褐釉、肩部以下：黒釉。釉二度塗りか。胎土黄褐色。高台内に砂付着。	B	8	ＳＫ043
308	沖縄産施釉陶器	酒器	－	－	－	6.4	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。外面呉須・褐釉で施文。注口付け根は緑釉。外底無釉。	B	8	ＳＫ043
309	沖縄産施釉陶器	香炉	－	－	－	8.3	灰釉、内面無釉。胎土灰黄色。外底・脚部橙色。頸部凹線２条。	B	8	ＳＫ043
310	沖縄産無釉陶器	鉢	－	28.6	14.8	13.35	外面赤褐色、内面黄白色。外面波状文（８条／1.7㎝）。	B	8	ＳＫ043
311	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	14.4	43.4	16.2	マンガン釉により外面暗褐色。内面明赤褐色、一部黒色。口縁内面に凹線あり、調整痕か。内面轆轤痕明瞭。	B	8	ＳＫ043
312	ガラス製品	蓋（無）	－	8.0	6.7	撮み2.0	円形、撮みに花形の造形。袴が擦れている。内面に「MADE IN JAPAN」のエンボス。	B	8	ＳＫ043
313	ガラス製品	蓋（緑）	－	10.0	－	－	円形で周囲が擦れている。細かい気泡を多く含む。	B	8	ＳＫ043
314	金属製品（合金）	不明	－	6.6	0.1	2.0	ドーム状の金具で短冊状の網目となっている。外面に陽刻で「子宝印」と唐草文様がみられる。ねじ孔が三箇所あり。重量8.0g。	B	8	ＳＫ043
315	金属製品（鉄）	缶	－	8.0	0.1	－	丸缶。全体が錆に覆われている。重量112.6g。	B	8	ＳＫ043
316	金属製品（鉄）	鍬	－	21.2	0.6	12.8	鍬先は方形状。平鍬。重量860ｇ。	B	8	ＳＫ043
317	金属製品（鉄）	鍬	－	11.0	0.5	9.2	三又の鍬。錆に覆われている。重量263.3g。	B	8	ＳＫ043
318	金属製品（鉄）	黄燐弾	－	6.3	13.0	－	黄燐弾の弾頭部。重量188.8g。	B	8	ＳＫ043
319	本土産近代陶器	湯たんぽ	－	－	－	9.8	釉調は外面褐色、内面緑白色。胎土は灰白色、やや砂っぽい。型作りによる成形。外面格子状。把手に「意匠新衆登録」銘あり。瀬戸・美濃系。	B	8	ＳＫ051
320	本土産近世陶器	蓋	関西系	5.3	－	－	外面に灰釉。胎土は淡黄色、軟質。鉄釘片付着。	B	8	ＳＫ051
321	ガラス製品	瓶（無）	清涼飲料瓶	－	－	2.0	ニッキ水もしくはみかん水瓶。球体状の胴部が三段で構成され、底部は円形平底。気泡を多く含む。	B	8	ＳＫ051
322	金属製品（青銅）	軍刀か	－	4.0	0.7	2.7	軍刀の柄端部か。花弁状の鋲が付く。重量13.6g。	B	8	ＳＫ051
323	金属製品（青銅）	不明	－	9.7＋	0.1	6.5＋	輪花形の板状製品で、外面は鮫肌状で、中央に星を線刻。日本軍関係か。重量30.0g。質感は324と類する。	B	8	ＳＫ051
324	金属製品（青銅）	不明	－	13.5	0.05	7.0	円盤状の製品（直径約10㎝）が２枚、不明の板状製品、瓦・陶器片が溶着。円盤には炎と頁？を含む漢字が刻印。重量195.0g。質感は323と類する。	B	8	ＳＫ051
325	金属製品（青銅）	不明	－	9.3	0.1	2.0	楕円形を呈した板状の製品。重量10.4g。	B	8	ＳＫ051
326	金属製品（青銅）	不明	－	5.2	0.1	3.3	板状でねじ孔が穿孔されている。重量19.7g。	B	8	ＳＫ051
327	金属製品（青銅）	不明	－	6.2	0.8	0.8	円柱状の製品。重量32.7g。	B	8	ＳＫ051
328	金属製品（合金）	手榴弾	－	2.6	－	1.3	手榴弾の信管部分とピン。重量24.1g。	B	8	ＳＫ051

第 31 表　遺物観察表（９）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
329	金属製品（合金）	不明	－	11.4＋	0.1	2.8	筒状の製品。重量380g。	B	8	ＳＫ051
330	金属製品（合金）	三脚	－	5.9	－	－	三脚の雲台部分か。脚に環状の留め具が付く。重量1200g。	B	8	ＳＫ051
331	金属製品（鉄）	不明	－	8.2	1.0	1.7	環状の製品。錆に覆われている。重量203.7g。	B	8	ＳＫ051
332	中国産青花	碗	清（景徳鎮）	－	－	5.7	失透性の釉、呉須は青みが強い。外面円文。	B	8	ＮＲ001
333	中国産青花	碗	清（福建・広東）	－	－	6.6	淡青色の釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。外面不明花文か。	B	8	ＮＲ001
334	中国産青花	皿	明（景徳鎮）	－	－	8.1	外反皿底部。見込み鱗状の表現。	B	8	ＮＲ001
335	本土産近世染付	碗	肥前	－	－	－	外面粗雑な草花文か。	B	8	ＮＲ001
336	本土産近世陶器	碗	肥前	11.2	－	－	灰釉。胎土灰白色。	B	8	ＮＲ001
337	本土産近世陶器	皿	肥前	12.0	3.3	4.1	緑釉、見込み蛇の目釉剥ぎ。胎土灰白色。	B	8	ＮＲ001
338	本土産近代陶器	皿	－	－	－	12.0	洋食器。見込み印判による色絵、花文。	B	8	ＮＲ001
339	沖縄産施釉陶器	蓋	－	10.4	－	摘み 4.0	内外褐釉。胎土灰黄色。内縁無釉。つまみ高台形。	B	8	ＮＲ001
340	銭貨	寛永通寶	－	外径 2.3	0.09	孔径 0.56	新寛永。2.5ｇ。	B	8	ＮＲ001
341	銭貨	寛永通寶	－	外径 2.26	0.11	孔径 0.61	新寛永。2.5ｇ。	B	8	ＮＲ001
342	ガラス製品	瓶（無）	薬瓶か	0.9	5.8	－	筆の穂状の形状。胴部に「精神丹」のエンボス。ネジ栓。	B	8	ＮＲ001
343	ガラス製品	瓶（無）	薬瓶か化粧瓶	－	－	2.6	底形は隅丸長方形で、胴部が変形。底部に「三笠」のエンボス。1㎜大の気泡を多く含む。	B	8	ＮＲ001
344	ガラス製品	瓶（無）	化粧瓶	1.85	5.9	3.85	香油瓶。首部に歪みがあり、肩から底部にかけて垂直な胴部。底形は円形。肩に「サハラ香油」、底部に「4」のエンボス。	B	8	ＮＲ001
345	ガラス製品	瓶（無）	調味料瓶か	－	－	3.6	8面体の器面。底部に「（Ｈの下にAが付いたようなマーク）10-477」のエンボス	B	8	ＮＲ001
346	金属製品（青銅）	不明	－	14.5	0.1	9.2	板状で、ねじ穴多数穿孔あり。重量83.2ｇ。	B	8	ＮＲ001
347	金属製品（合金）	砲弾	－	5.3	1.0	－	砲弾の信管末端部。片面には溝あり。重量93.0g。	B	8	ＮＲ001
348	金属製品（合金）	砲弾	－	5.9＋	－	4.8	砲弾の信管先端部。重量116.5g。	B	8	ＮＲ001
349	金属製品（青銅）	薬莢	－	－	0.8	2.3	機銃弾の薬莢か。底面に刻印みられるが不明瞭。重量3.4g。	B	8	ＮＲ001
350	金属製品（鉄）	蹄鉄	－	12.0	1.0	10.4	釘孔が左右に３つ。全体は錆で覆われている。重量184g。	B	8	ＮＲ001
351	金属製品（鉄）	鎌	－	16.5	0.4	13.5	鎌の刃部。全体は錆で覆われている。重量76.9g。	B	8	ＮＲ001
352	円盤状製品	－	中国産青花	8.5	1.4	4.9	清代青花（福建広東）底部。半円形。	B	8	ＮＲ001
353	プラスチック製品	定規	－	10.0	0.1	7.0	直角三角形、内2角が欠損、60～90㎜の数値部分が残存。直径1.3㎝の孔を設ける。「徳」「三」「女」「5」などの字が線刻。色調は茶褐色と黄色味がかった透明。	B	8	ＮＲ001
354	ゴム製品	硯	－	－	1.5	6.0	全体的に亀裂。陸部には光沢のある粒子が塗布。裏面には「サ（？）硯」の陽刻、その周りを細かい横線のはいった縁が囲む。	B	8	ＮＲ001
355	中国産青花	碗	清（徳化窯）	13.8	6.3	6.3	釉は青白色、吾須はやや鈍い。全体的に細かな傷あり。外面花芯文。	B	7	ＮＲ002－7～9層
356	中国産青花	碗	清（福建・広東）	－	－	7.3	内面蛇の目釉剥ぎ、釉剥ぎ部滑らか。見込み花弁文。底部側縁剥離痕あり、円盤状を意図したのか。	B	7	ＮＲ002－6・7層
357	本土産近世陶器	皿	肥前	－	－	4.9	内面銅緑釉、外面灰釉。見込み蛇の目釉剥ぎ。	B	7	ＮＲ002－11層
358	本土産近代磁器	小杯	Ｃ類	6.2	2.8	2.2	口縁部外面、内面共に鉄釉を施釉。外面胴部に呉須による文様。底部は露出。	B	7	ＮＲ002－2・3層
359	本土産近代磁器	小杯	Ｄ類	5.9	2.5	2.4	クロム青磁。口縁部は直口。高台内面は透明釉を施釉。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	B	7	ＮＲ002－2層
360	本土産近代磁器	急須	Ｃ類	7.0	9.3	7.8	口縁部内面と底部を釉剥ぎ。外面に雲文？、鳥文。素地は白色で緻密。瀬戸・美濃系。	B	7	ＮＲ002－2+4層
361	沖縄産施釉陶器	小碗	Ｃ-1類	－	－	3.7	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面面取り。	B	7	ＮＲ002－2・3層
362	沖縄産施釉陶器	鉢	－	21.7	11.85	8.3	白化粧後、透明釉。外面鉄絵。フィガキー。	B	7	ＮＲ002－10層
363	沖縄産施釉陶器	瓶	－	－	－	10.5	胎土灰黄色。底部資料で内外無釉。内底一部に白化粧、褐釉垂れ。	B	7	ＮＲ002－7～9層
364	沖縄産施釉陶器	酒器	－	－	－	4.1	黒釉。胎土灰黄色。外底無釉。	B	7	ＮＲ002－7～9層
365	沖縄産無釉陶器	皿	－	9.6	2.4	4.8	初期沖縄産無釉陶器。鈍赤褐色。底部は内外ともに灰色。	B	7	ＮＲ002－6層
366	本土産近世土器	焙烙	－	8.6	1.6	2.6	胎土は細礫含むが比較的精良、黄橙色。把手。	B	7	ＮＲ002－10層
367	ガラス製品	瓶（無）	調味料瓶	2.0	8.5	3.9	味の素瓶。胴部が10面体。底部に「AJINOMOTO」のエンボス。ネジ栓。	B	7	ＮＲ002－2層
368	ガラス製品	瓶（茶）	不明	－	－	6.0	底部片。底面に「…IERED 5 28 （◇と楕円形を重ねたようなマーク）2 679-A B.P.LTD.」とエンボスが確認できる。	B	7	ＮＲ002－6層
369	金属製品（青銅）	簪	－	10.6＋	0.2	－	カブは破損。断面は六角形。重量3.3g。	B	7	ＮＲ002－7層

第 32 表　遺物観察表（10）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
370	金属製品（青銅）	薬莢	－	4.8＋	0.1	1.2	7.7㎜小銃の薬莢。上部欠損。火薬が詰まっている。重量12.4g。	B	7	ＮＲ002－6層
371	金属製品（鉄）	不明	－	3.0	1.1	－	全体が錆に覆われている。重量9.2g。	B	7	ＮＲ002
372	金属製品（鉄）	丸釘	－	6.0＋	－	0.6	丸釘。折れ曲がっている。錆に覆われている。重量8.1g。	B	7	ＮＲ002
373	石製品	砥石	－	10.6	6.65	7.5	**石材：**琉球石灰岩。**加工痕：**上面除き研磨。**使用痕：**正面に砥面、削り痕。**その他：**上面に自然面残。	B	7	ＮＲ002
374	円盤状製品	-	本土産陶器製	－	－	3.8	関西系陶器碗の底部を利用。	B	7	ＮＲ002－12層
375	プラスチック製品	箱	－	15.8	0.1	2.1	全体形が長く扁平で紐通しを持ち、身の端部に楕円形の孔。蓋表面に7条、身表面に5条の波状文を線刻。色調は黒部分的に色あせ。	B	7	ＮＲ002－11層
376	ガラス製品	ビー玉（緑＋白）	－	1.1	1.1	1.1	色調は緑色系＋白色系の複数色。	C	9	ＳＫ024
377	ガラス製品	ビー玉（緑＋白）	－	1.2	1.2	1.2	色調は緑色系＋白色系の複数色。	C	9	ＳＫ024
378	ガラス製品	ビー玉（無＋白＋コバルト）	－	1.2	1.2	1.2	色調は無色系＋白色系＋コバルト色系の複数色。	C	9	ＳＫ024
379	ガラス製品	ビー玉（無＋白＋コバルト）	－	1.5	1.5	1.5	色調は無色系＋白色系＋コバルト色系の複数色。	C	9	ＳＫ024
380	ガラス製品	ビー玉（緑）	－	1.6	1.6	1.6	色調は緑色系。	C	9	ＳＫ024
381	本土産近代磁器	小碗	Ｂ類	7.9	5.0	3.3	銅版転写。外面に桃色の花文、葉・花芯は灰色。	C	9	ＳＫ027
382	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.3	2.4	6.1	内面に青色で細かな格子文にバックを桜花形に抜く。見込みには二重円文。瀬戸・美濃系。	C	9	ＳＫ027
383	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.1	2.4	6.1	内面に青色で細かな格子文にバックを桜花形に抜く。見込みには二重円文。瀬戸・美濃系。	C	9	ＳＫ027
384	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.1	2.4	6.1	内面に青色で細かな格子文にバックを桜花形に抜く。見込みには二重円文。瀬戸・美濃系。	C	9	ＳＫ027
385	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.4	2.1	5.9	内面に緑色で円文の中に梅花を入れたものを６つ配し、隙間には花菱文。瀬戸・美濃系。	C	9	ＳＫ027+ ＳＫ027西
386	本土産近代磁器	小皿	Ｂ類	8.6	1.8	5.1	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	9	ＳＫ027西
387	本土産近代磁器	小皿	Ｂ類	8.6	1.9	4.9	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	9	ＳＫ027西
388	ガラス製品	瓶（無）	金平糖瓶	9.15	0.15	5.7	拳銃形で銃身部分が欠損。	C	9	ＳＫ027西
389	金属製品（青銅）	不明	－	5.1	0.3	5.1	環状の製品で陽刻による文様あり。重量10.6g。	C	9	ＳＫ027西
390	金属製品（青銅）	不明	－	5.1	0.2	5.1	環状の製品で陽刻による文様あり。重量10.7g。	C	9	ＳＫ027西
391	金属製品（鉄）	鍋	－	68.6	－	－	鉄鍋の破片。全体は錆に覆われている。重量4220g。	C	9	ＳＫ027
392	金属製品（鉄）	鎌	－	15.9	0.6	1.4	鎌の刃部。全体は錆で覆われている。重量193.2g。	C	9	ＳＫ027
393	金属製品（鉄）	鍬	－	29.5	0.6	14.9	鍬先は方形状。銘がみられるが不明擁。保存処理実施。重量1760ｇ。	C	9	ＳＫ027
394	金属製品（鉄）	鍬	－	26.5＋	0.9	13.0	鍬先は方形状。重量1260ｇ。	C	9	ＳＫ027
395	石製品	石臼	－	32.9	10.1	32.8	**石材：**細粒砂岩（ニービ）。**加工痕：**側・背面敲打痕・研磨、正面中心部に穿孔具による凹み、正面に断面山形の臼目作出による刻み。**使用痕：**正面損耗。**その他：**臼目こぼれ目型５区画。粉挽臼の下臼。	C	9	ＳＫ027
396	レンガ	－	－	22.6	5.8	11.5	完形。レンガ囲いの一部。	C	9	ＳＫ030
397	レンガ	－	－	23.4	5.8	10.5	一部欠損。レンガ囲いの一部。	C	9	ＳＫ030
398	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.7	6.5	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	9	ＳＫ034東
399	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.8	5.9	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	9	ＳＫ034東
400	本土産近代磁器	火入	Ａ類	11.3	8.80	10.1	外面の高台まで施釉。口縁部に青海波、亀甲文。外面胴部に竹梅文、腰部にラマ式蓮弁。砥部産か。	C	9	ＳＫ034東
401	沖縄産施釉陶器	碗	Ｃ-1類	14.3	7.1	6.6	白化粧後、透明釉。胎土灰黄色。内面全体アルミナ付着。内底蛇の目状に釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。	C	9	ＳＫ034
402	沖縄産無釉陶器	擂鉢	－	30.8	14.5	11.3	鈍赤褐色、外面鈍黄褐色。鍔上面凹線１条。内面密に擂目。	C	9	ＳＫ034東
403	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	12.3	40.9	13.0	明赤褐色。外面～内面頚部マンガン釉。横耳貼付４箇所。肩部凹線２条。	C	9	ＳＫ034+ ＳＫ034西
404	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	14.6	44.8	17.9	外面暗赤褐色、内面鈍赤褐色。肩部にヘラ記号か？	C	9	ＳＫ034+ ＳＫ034西
405	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	14.5	49.6	20.6	外面灰黄色、内面暗橙色。頚部と肩部に２条の凹線。頚部は調整痕の可能性もあり。	C	9	ＳＫ034+ ＳＫ034西
406	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	20.5	73.8	24.1	外面暗赤褐色、部分的に赤褐色。内面赤褐色。外体面一部アバタ。肩部にヘラ記号あり（縦書で十二）。	C	9	ＳＫ034+ ＳＫ034西
407	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	16.3	66.8	19.8	外面灰黄色、内面橙色で部分的暗褐色。内底周辺は轆轤痕明瞭。	C	9	ＳＫ034東
408	沖縄産無釉陶器	甕	Ｂ類	16.3	73.9	24.1	外面灰黄色、内面赤褐色。外面一部気泡によりアバタ。内面胴部中央以下、轆轤痕明瞭。内底は丁寧なナデ消し。	C	9	ＳＫ034+ ＳＫ034西
409	ガラス製品	瓶（無）	不明	－	－	2.2	肩から底部にかけて垂直な胴部。合わせ目が明瞭に残る。1㎜大の気泡を多く含む。	C	9	ＳＫ034東
410	ガラス製品	瓶（白）	不明	3.6	4.7	2.9	ネジ栓。側面は輪花状に凹凸を施し、窓部を２か所設ける。	C	9	ＳＫ034東

第 33 表　遺物観察表（11）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
411	金属製品（青銅）	引手	－	10.1	0.4	9.3	襖などの引手か。花弁状で四隅に釘孔あり。重量46.0g。	C	9	ＳＫ035
412	金属製品（鉄）	鎌	－	15.5＋	0.3	12.5＋	鎌の刃部。全体は錆で覆われている。重量135.8g。	C	9	ＳＤ009
413	金属製品（鉄）	不明	－	7.5	0.4	4.6	環状の製品。全体が錆に覆われている。重量27.9g。	C	9	ＳＤ009
414	プラスチック製品	不明	－	17.7＋	1.6	2.1	全体形が長く扁平で紐通しを持ち、表面に波状文、両側面に横線が連なる。蓋は取れず、両端部が欠損。色調は黒色。	C	9	ＳＤ009
415	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	14.5	2.9	7.9	銅版転写。口錆。内面に菱文。見込みに七宝文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ020
416	沖縄産無釉陶器	鉢	－	37.1	10.5	18.5	内外面ともに赤褐色、口縁部付近のみ暗褐色。	C	10	ＳＫ020
417	沖縄産無釉陶器	壺	Ａ類	13.5	67.2	22.8	外面暗褐色、一部鈍赤褐色。内面暗褐色。外面肩部ヘラ記号か？「十」。外面摩耗のため不明瞭。	C	10	ＳＫ020
418	金属製品（合金）	不明	－	6.8	0.2	5.0＋	蝶番が付いており、楕円形容器か。重量35.3g。	C	10	ＳＫ020
419	金属製品（鉄）	缶	－	13.7	0.1	9.5	丸缶。全体が錆に覆われている。重量420g。	C	10	ＳＫ020
420	石製品	石臼	－	31.6	10.35	31.2	**石材：**細粒砂岩（ニービ）。**加工痕：**側・背面研磨、正面中心部に穿孔具による凹み、正面に断面山形の臼目作出による刻み。**使用痕：**正面損耗。**その他：**臼目こぼれ目型５区画。粉挽臼の下臼。	C	10	ＳＫ020
421	軍靴		－	7.5+	2.5	5.5	皮製。踵（２点）と後皮、紐孔のリングが確認。法量は踵のもの。踵には鉄鋲が打たれる。	C	10	ＳＫ020
422	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.6	6.05	4.7	外面に五弁文、唐草文。砥部産。	C	10	ＳＫ026
423	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.3	6.0	4.5	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	ＳＫ026
424	本土産近代磁器	碗	Ａ類	14.1	6.3	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	ＳＫ026
425	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.7	6.6	4.8	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	ＳＫ026
426	本土産近代磁器	碗	Ａ類	14.0	6.8	4.8	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	ＳＫ026
427	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.9	6.6	4.9	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	ＳＫ026
428	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.7	6.7	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	ＳＫ026
429	本土産近代磁器	碗	Ａ類	13.6	6.2	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	ＳＫ026
430	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.3	4.6	3.0	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
431	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.4	4.7	3.0	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
432	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.4	4.8	3.0	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
433	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.3	4.7	2.9	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
434	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.3	4.7	3.0	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
435	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.4	4.7	3.0	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
436	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.5	4.8	3.0	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
437	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.4	4.9	3.0	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
438	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	8.0	4.6	3.1	口縁部下部に二重の圏線。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
439	本土産近代磁器	小碗	Ｇ類	7.8	4.4	3.0	口縁部下部に二重の圏線。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
440	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	14.5	2.95	7.8	銅版転写（青色）。口錆。内面に菊花文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
441	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	14.6	3.1	7.8	銅版転写（青色）。口錆。内面に菊花文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
442	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	14.3	3.0	7.9	銅版転写（青色）。口錆。内面及び見込みに菊花文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
443	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	14.2	3.0	8.0	銅版転写（青色）。口錆。内面及び見込みに菊花文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
444	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	14.7	2.85	8.0	銅板転写（緑色）。口錆。内面に菱形文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
445	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	14.8	2.9	8.0	銅板転写（緑色）。口錆。内面に菱形文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
446	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	13.8	2.7	8.0	銅板転写（緑色）。口錆。内面に菱形文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
447	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	12.8	2.6	7.2	銅版転写（青色）。口錆。内面に蝶文。見込みに桜文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
448	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	13.4	2.8	6.9	銅版転写（青色）。内面に亀甲文、鶴文。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
449	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.2	2.4	6.4	銅版転写（青色）内面に花文。見込みに吉祥文字。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
450	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.25	2.3	5.95	銅版転写（緑色）銅板転写。口錆。内面に青海波、壺尽くし。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026
451	本土産近代磁器	皿	Ｂ類	11.0	2.3	6.0	銅版転写（緑色）銅板転写。口錆。内面に青海波、壺尽くし。瀬戸・美濃系。	C	10	ＳＫ026

第 34 表　遺物観察表（12）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
452	本土産 近代磁器	小皿	B類	9.9	2.0	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
453	本土産 近代磁器	小皿	B類	10.0	1.9	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
454	本土産 近代磁器	小皿	B類	9.9	2.0	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
455	本土産 近代磁器	小皿	B類	10.0	2.0	5.5	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
456	本土産 近代磁器	小皿	B類	9.9	2.0	5.5	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
457	本土産 近代磁器	小皿	B類	9.9	2.0	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
458	本土産 近代磁器	小皿	B類	10.1	2.0	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
459	本土産 近代磁器	小皿	B類	10.0	2.0	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
460	本土産 近代磁器	小皿	B類	9.9	2.0	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
461	本土産 近代磁器	小皿	B類	10.0	2.1	5.4	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
462	本土産 近代磁器	小皿	B類	10.0	1.9	5.5	銅板転写（緑色）。内面に菱形文に花文。瀬戸・美濃系。	C	10	SK026
463	本土産 近代磁器	火入	B類	10.8	8.6	9.8	銅版転写による。外面の高台まで施釉。口縁部に四方襷文。外面胴部に梅文、鳥文、腰部にラマ式蓮弁。瀬戸・美濃系か。	C	10	SK026
464	本土産 近代磁器	小皿	G類	7.55	2.0	4.5	型造り成形角型小皿。内面に花弁文、格子文、木葉文。全面に黄色の釉を施釉。畳付釉剥ぎ。いわゆる珉平焼。	C	10	SK026
465	沖縄産 無釉陶器	壺	B類	12.6	－	－	外面暗赤褐色、内面灰黄色。肩部凹線８条。	C	10	SK026
466	沖縄産 無釉陶器	壺	－	－	－	18.0	外面灰黄色、内面赤褐色。肩部凹線２条。外面一部に鉄溶着。	C	10	SK026
467	本土産 近代磁器	小皿	G類	7.4	2.1	4.2	型造り成形角型小皿。内面に花弁文、格子文、木葉文。全面に黄色の釉を施釉。畳付釉剥ぎ。いわゆる珉平焼。	C	10	SK023かSK028
468	沖縄産 施釉陶器	瓶	－	12.4	26.4	10.9	褐釉。胎土灰白色。胴部に葉状の粘土貼付。内底一部に釉薬と粘土付着。サイズから使用時には469とセットの可能性。	C	10	SK028
469	沖縄産 施釉陶器	蓋	－	8.6	－	－	鉄釉、内面無釉。胎土浅黄橙色。内面３箇所に重ね焼き痕あり。庇径が12.0cmで、使用時には468とセットの可能性。	C	10	SK028
470	ガラス製品	瓶 （黄）	薬瓶	3.1	22.5	7.7	胴部にシワがみられる。いかり肩で底形は隅丸長方形。胴部下端に「POLYTAMIN」、底部に○に△を重ねたマークのエンボス。	C	10	SK028
471	ガラス製品	瓶 （無）	染料瓶	1.5	7.2	2.3	口唇部に2ヶ所の溝、溝下に2mm大の孔。胴部に縦書きで「るり羽」、横書きで「定容」に下線の入ったエンボス。	C	10	SK023かSK028
472	銭貨	一銭	－	外径 2.3	0.12	－	桐一銭青銅貨。紀年銘不明。3.6g。	C	10	SK023かSK028
473	骨製品	歯ブラシ	－	7.7	0.65	1.1	柄のみでブラシ部は欠損。表面は丁寧に研磨され光沢を帯びる。断面がかまぼこ形。柄尻に釘状のものがはめ込まれている。	C	10	SK023かSK028
474	沖縄産 施釉陶器	小杯	－	4.8	2.4	2.4	高台以下無釉。灰釉。	C	10	SK040
475	中国産 瑠璃釉	小杯	徳化	4.5	2.4	2.2	畳付釉剥ぎ。	C	10	SK040北
476	中国産 褐釉陶器	壺	－	13.8	30.4	14.5	外面暗赤褐色、一部灰色。内面灰黒色。肩部が大きく張り、横耳貼付４箇所。あまり見られない。	C	10	SK040
477	本土産 近代磁器	碗	A類	14.9	6.8	5.1	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	SK040
478	本土産 近代磁器	碗	A類	14.2	6.2	4.8	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	10	SK040
479	本土産 近代磁器	碗	A類	－	－	－	外面に鶴文、竹笹文。砥部産。	C	10	SK040
480	本土産 近代磁器	碗	G類	11.6	5.5	4.0	全面に茶色の釉が施釉。畳付釉剥ぎ。	C	10	SK040北
481	沖縄産 施釉陶器	壺	－	12.0	22.4	10.6	内外ともに黒釉に一部褐釉掛け。胎土浅橙色。内底釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外底に砂多量付着。サイズから使用時には483とセットの可能性。	C	10	SK040+ SK040北
482	沖縄産 施釉陶器	壺	－	13.7	24.2	13.0	内外褐釉。胎土浅橙色。口唇部に釉剥ぎ後、白化粧塗布。縦耳貼付４箇所。サイズから使用時には484とセットの可能性。	C	10	SK040
483	沖縄産 施釉陶器	蓋	－	7.2	3.8	撮み 3.7	褐釉、内面無釉。胎土浅黄色。つまみ高台形。つまみ周辺釉剥ぎ。庇径13.2cmで、使用時には481とセットの可能性。	C	10	SK040
484	沖縄産 施釉陶器	蓋	－	7.0	3.5	撮み 3.5	褐釉、内面無釉。胎土灰黄色。つまみ高台形。つまみ周辺釉剥ぎ。庇径11.2cmで、使用時には４８２とセットの可能性。	C	10	SK040
485	沖縄産 無釉陶器	瓶	－	5.8	19.6	8.4	外面灰黄褐色。内面赤褐色。外面轆轤痕明瞭。外底ヘラ記号「三」状。	C	10	SK040北
486	沖縄産 無釉陶器	瓶	－	6.4	23.2	12.2	内外ともに暗赤褐色。肩部凹線４条、外底凹線１条。	C	10	SK040北
487	沖縄産 無釉陶器	蓋	－	14.35	5.6	7.7	橙色。外面に「上■」の墨書。内面は雑な成形。壺などの大型品の蓋か。	C	10	SK040
488	沖縄産 無釉陶器	壺	A類	15.8	51.8	21.9	外面灰黄褐色、一部赤褐色。内面赤褐色。外面焼成により一部歪み。	C	10	SK040
489	沖縄産 無釉陶器	壺	A類	18.1	55.1	20.2	外面灰黄色、一部暗赤褐色。内面明赤褐色。肩部ヘラ記号あり(横位１条の上に十)。	C	10	SK040
490	沖縄産 無釉陶器	壺	A類	15.1	67.4	19.1	外面暗赤褐色、内面赤褐色。肩部ヘラ記号「大」。一部筆痕？あり。	C	10	SK040
491	沖縄産 無釉陶器	壺	A類	16.1	67.4	23.0	外面灰黄色、一部暗赤褐色。内面明赤褐色。肩部ヘラ記号「十」。	C	10	SK040+ SK040北
492	沖縄産 無釉陶器	壺	A類	17.4	68.7	24.8	外面暗褐色、一部灰黄色。内面赤褐色、胴上部暗褐色。外面肩部は気泡多。横耳上下に凹線１条ずつ巡る。肩部にヘラ記号(欠損のため詳細不明)。	C	10	SK040+ SK040北

第 35 表　遺物観察表（13）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
493	沖縄産無釉陶器	壺	A類	15.0	43.0	17.6	マンガン釉により外面暗褐色。内面明赤褐色。外底丁寧に成形。	C	10	S K040+S K040北
494	沖縄産無釉陶器	壺	B類	12.5	42.9	18.4	内外ともに橙色、一部暗赤褐色。肩部に凹線施文後、横耳貼付。	C	10	S K040+S K040北
495	沖縄産無釉陶器	壺	B類	12.8	45.9	18.5	外面暗灰黄褐色。内面鈍赤褐色。内面轆轤痕明瞭。	C	10	S K040+北+南
496	沖縄産無釉陶器	壺	B類	13.2	47.3	18.9	内外ともに橙色。口縁～肩部泥釉塗布。横耳貼付２箇所。	C	10	S K040+S K040北
497	沖縄産無釉陶器	壺	－	－	－	21.2	外面暗赤褐色、内面赤褐色。内底轆轤痕明瞭。	C	10	S K040+S K040北
498	沖縄産無釉陶器	壺	B類	12.5	39.3	15.4	外面灰黄褐色、一部赤褐色。内面暗褐色。頚部下に凹線７条、肩部凹線１条。	C	10	S K040+S K040北
499	沖縄産無釉陶器	壺	B類	18.0	36.6	14.8	外面赤褐色、一部灰黄色。内面灰黄褐色。外底丁寧な成形。	C	10	S K040
500	沖縄産無釉陶器	壺	B類	12.8	29.8	12.1	外面灰黄色、一部暗赤褐色。内面鈍赤褐色。ヘラ記号あり(斜位１条の左側に点２つ)。外底糸切り痕。	C	10	S K040
501	沖縄産無釉陶器	壺	B類	13.9	31.8	16.6	外面黄褐色。内面暗褐色。肩部凹線１条。	C	10	S K040+北+南
502	沖縄産無釉陶器	甕	A類	45.7	67.4	27.4	外面赤褐色、一部灰黄色。内面暗褐色、内底付近は黒色。肩部凹線や波状文で施文。丸文貼付。頚部ヘラ記号あり。「へ」の字状下に「七」。	C	10	S K040+S K040北
503	ガラス製品	瓶(茶)	薬瓶か	1.7	4.4	2.3	底部に「F4 157 3」のエンボス。ネジ栓。	C	10	S K040
504	ガラス製品	瓶(茶)	薬瓶か	2.1	3.9	2.3	底部に「（Hに小さいロを組み合わせたようなマーク）18」のエンボス。ネジ栓。	C	10	S K040
505	ガラス製品	瓶(茶)	薬瓶か化粧瓶	3.6	5.9	3.4	化粧瓶もしくは薬瓶。1mm大の気泡を多く含む。ネジ栓。色調は茶色系。	C	10	S K040北
506	ガラス製品	瓶(青)	インク瓶	2.4	5.35	4.3	肩に段があり、底部は円形で「エムテー　(○の中にMDと記されたマーク）」のエンボス	C	10	S K040南
507	ガラス製品	瓶(青)	調味料瓶	2.9	－	9.6	醤油瓶（一升瓶）。なで肩で、口部に「3（Λの下にトが付いたマーク）」胴部下端に「NODASHOYU CO LTD TRADE(6角形に萬のマーク）MARK」、底部に「7　(Λの下にトが付いたマーク）28」のエンボス。	C	10	S K040北
508	ガラス製品	蓋(緑)	－	2.7	6.2	7.7	直径2.7cmの撮みが付く。下部中央に1.6cmの孔。色調は緑色系。	C	10	S K040
509	金属製品(アルミ)	スプーン	－	18.0	0.3	0.5	柄部背面に文字。重量35.7g。	C	10	S K040
510	金属製品(青銅)	煙管	－	20.4	0.6	0.8	青銅製の延べ煙管。重量24.5g。	C	10	S K040
511	金属製品(青銅)	角金	－	6.3	0.3	5.3	重量14.8g。	C	10	S K040南
512	金属製品(鉄)	蓋	－	23.0	0.2	22.6	内外面は青色。持ち手欠損。重量163.0g。	C	10	S K040北
513	金属製品(鉄)	釜	－	18.0	－	－	釜で胴部に羽が付く。底部欠損。重量2000g。	C	10	S K040
514	石材	－	－	11.7	1.8	10.9	**石材：**サンゴ岩。**加工痕：**確認されず。**使用痕：**確認されず。**その他：**クサビライシ科のサンゴ化石。	C	10	S K040
515	石製品	蓋？	－	－	5.6	－	**石材：**石灰質砂岩。**加工痕：**全面弱研磨。**使用痕：**確認されず。**その他：**無し。	C	10	S K040
516	プラスチック製品	クシ	－	8.7	0.3	4.7	持ち手の部分の片面に花？や葉といった植物柄の線刻と、ダイヤ状の透明な装飾パーツが3つ付く。べっ甲のような柄で色調は赤褐色と琥珀色。	C	10	S K040
517	プラスチック製品	クシ	－	15.2	0.6	3.5	持ち手の部分が緩やかな弧状。持ち手の中央に「心女（？）」の線刻がみられるが不明瞭。木目のような模様で色調は赤色、褐色、黄色で構成。	C	10	S K040
518	プラスチック製品	クシ	－	17.0	0.6	3.7	持ち手の部分が弧状。持ち手の中央に○に二のマークの刻印。色調は黒色。	C	10	S K040
519	ガラス製品	瓶(緑)	清涼飲料瓶	2.5	19.6＋	5.1	コーラ瓶。コカコーラのロゴを直接印刷。胴部下に「67　(楕円形にKを重ねたようなマーク）165」のエンボスと四角の小さな窪み。底部に円周状にギザギザの加工が施されている。	C	10	S K054
520	本土産近代磁器	碗	B類	11.0	5.8	3.9	直口碗。外面に福字、寿字、花文。内面に雷文、見込みに円文、松枝を表現か。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
521	本土産近代磁器	碗	B類	10.9	6.0	3.8	直口碗。外面に福字、寿字、花文。内面に雷文、見込みに円文、松枝を表現か。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
522	本土産近代磁器	碗	B類	11.1	5.8	3.5	直口碗。外面に福字、寿字、花文。内面に雷文、見込みに円文、松枝を表現か。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
523	本土産近代磁器	碗	B類	10.8	5.8	3.7	直口碗。外面に福字、寿字、花文。内面に雷文、見込みに円文、松枝を表現か。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
524	本土産近代磁器	碗	B類	11.0	6.0	3.6	直口碗。外面に福字、寿字、花文。内面に雷文、見込みに円文、松枝を表現か。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
525	本土産近代磁器	碗	B類	11.2	6.0	3.7	直口碗。外面に花文、格子文。高台外に圏線２条。526～528と比べると文様の描き方が異なる。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
526	本土産近代磁器	碗	B類	11.4	6.05	3.8	直口碗。外面に花文、格子文。高台外に圏線２条。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
527	本土産近代磁器	碗	B類	11.2	6.1	3.8	直口碗。外面に花文、格子文。高台外に圏線２条。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
528	本土産近代磁器	碗	B類	11.2	6.2	3.8	直口碗。外面に花文、格子文。高台外に圏線２条。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
529	本土産近代磁器	碗	G類	11.5	5.2	3.9	口縁部下部に二重の圏線。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
530	本土産近代磁器	小碗	G類	8.4	4.7	2.9	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
531	本土産近代磁器	小碗	G類	8.4	4.6	2.9	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
532	本土産近代磁器	小碗	G類	8.4	4.7	2.9	口縁部下部に二重の圏線。高台内に「岐464」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003
533	本土産近代磁器	皿	B類	13.1	2.7	7.3	銅版転写。内面に亀甲文、鶴文。高台内外に呉須による圏線。瀬戸・美濃系。	C	10	S D003

第 36 表　遺物観察表（14）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
534	本土産近代磁器	皿	B類	13.4	2.9	6.6	銅版転写。内面に亀甲文、鶴文。高台内外に呉須による圏線。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
535	本土産近代磁器	皿	B類	13.4	2.85	6.4	銅版転写。内面に亀甲文、鶴文。高台内外に呉須による圏線。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
536	本土産近代磁器	皿	B類	13.2	2.6	7.3	銅版転写。内面に亀甲文、鶴文。高台内外に呉須による圏線。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
537	本土産近代磁器	皿	F類	12.9	2.6	7.3	色は抜けているが、転写による内面に鶴文、松文。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
538	本土産近代磁器	小皿	B類	11.2	2.1	5.75	銅板転写（緑色）。口錆。内面に青海波、壺尽くし。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
539	本土産近代磁器	小皿	B類	11.1	2.2	5.8	銅板転写（緑色）。口錆。内面に青海波、壺尽くし。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
540	本土産近代磁器	小皿	B類	11.4	2.3	5.9	銅板転写（緑色）。口錆。内面に青海波、壺尽くし。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
541	本土産近代磁器	小皿	B類	11.4	2.3	5.9	銅板転写（緑色）。口錆。内面に青海波、壺尽くし。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
542	本土産近代磁器	小皿	B類	11.3	2.2	5.8	銅板転写（緑色）。口錆。内面に青海波、壺尽くし。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
543	本土産近代磁器	小杯	E類	6.2	3.1	2.3	無文。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
544	本土産近代磁器	小杯	D類	8.3	4.3	3.2	クロム青磁。外面に飛び鉋有り。素地は白色で緻密。外底無釉。瀬戸・美濃系。	C	10	SD003
545	沖縄産施釉陶器	香炉	－	9.8	8.8	7.2	白化粧後、外面腰部まで呉須、内面無釉。胎土灰黄色。高台内面にスス痕。	C	10	SD003
546	本土産近代磁器	碗	A類	14.0	6.4	4.8	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
547	本土産近代磁器	碗	A類	13.7	6.5	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
548	本土産近代磁器	碗	A類	14.0	6.7	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
549	本土産近代磁器	碗	A類	13.6	6.6	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
550	本土産近代磁器	碗	A類	13.4	6.7	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
551	本土産近代磁器	碗	A類	13.6	6.6	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
552	本土産近代磁器	碗	A類	13.7	6.9	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。被熱。砥部産。	C	11	SK004
553	本土産近代磁器	碗	A類	14.0	7.0	5.1	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。被熱。砥部産。	C	11	SK004
554	本土産近代磁器	碗	A類	13.8	6.7	4.4	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
555	本土産近代磁器	碗	A類	13.7	6.6	4.3	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
556	本土産近代磁器	碗	A類	13.7	6.6	4.8	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
557	本土産近代磁器	碗	A類	13.9	6.6	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
558	本土産近代磁器	碗	A類	13.8	6.4	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
559	本土産近代磁器	碗	A類	13.7	6.2	4.7	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK004
560	本土産近代磁器	碗	A類	12.9	6.6	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。高台内に「Ⓚ11」の統制番号。砥部産。	C	11	SK004
561	本土産近代磁器	碗	A類	13.0	6.5	4.6	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。高台内に「Ⓚ11」の統制番号。砥部産。	C	11	SK004
562	本土産近代磁器	碗	A類	13.1	6.6	4.5	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。高台内に「Ⓚ11」の統制番号。砥部産。	C	11	SK004
563	本土産近代磁器	碗	A類	12.7	6.35	4.7	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。高台内に「Ⓚ11」の統制番号。砥部産。	C	11	SK004
564	本土産近代磁器	碗	B類	12.0	5.5	4.2	銅版転写。外面に花草文。汚れが激しい破片あり。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004
565	本土産近代磁器	碗	G類	11.6	5.6	3.9	全面に茶色の釉が施釉。畳付け釉剥ぎ。	C	11	SK004
566	本土産近代磁器	碗	G類	11.6	5.4	3.8	全面に茶色の釉が施釉。畳付け釉剥ぎ。	C	11	SK004
567	本土産近代磁器	小碗	B類	8.1	4.9	3.5	銅版転写。外面に竹笹文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004
568	本土産近代磁器	小碗	G類	8.0	4.5	3.0	口縁部下部に二重の圏線。国民食器。外面一部汚れ目立つ。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004
569	本土産近代磁器	小碗	G類	8.3	4.8	3.1	口縁部下部に二重の圏線。高台内に刻印による「岐280」の統制番号。国民食器。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004
570	本土産近代磁器	皿	A類	21.05	3.35	9.7	波状口縁を呈する。外面に鳥文。内面に花文。見込みに松竹梅文。畳付釉剥ぎ。砥部産。	C	11	SK004
571	本土産近代磁器	皿	B類	14.3	2.5	8.1	銅版転写（青色）。口錆。内面に碁盤目状に区画した日章旗文。外面下半に同心円状の擦痕。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004
572	本土産近代磁器	皿	B類	14.5	3.2	7.9	銅版転写（青色）。口錆。内面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004
573	本土産近代磁器	皿	B類	14.4	3.2	7.8	銅版転写（青色）。口錆。内面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004
574	本土産近代磁器	皿	B類	14.5	3.2	7.8	銅版転写（青色）。口錆。内面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK004

第 37 表　遺物観察表（15）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
575	本土産近代磁器	皿	B類	14.7	3.2	7.9	銅版転写（青色）。口錆。内面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
576	本土産近代磁器	皿	B類	14.2	3.1	8.1	銅版転写（青色）。口錆。内面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
577	本土産近代磁器	皿	B類	14.5	3.1	7.8	銅版転写（青色）。口錆。内面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
578	本土産近代磁器	皿	B類	14.5	3.1	7.9	銅版転写（青色）。口錆。内面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
579	本土産近代磁器	皿	B類	13.0	2.6	7.3	銅版転写（青色）。内面に銭文。外面高台周りの内外に呉須による圏線。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
580	本土産近代磁器	皿	B類	12.8	2.65	7.7	銅版転写（青色）。内面に銭文。外面高台周りの内外に呉須による圏線。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
581	本土産近代磁器	皿	B類	13.1	2.6	7.5	銅版転写。内面に青色で松ぼくっりを三菱状に配し、水色で葉を放射線で表現した松枝文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
582	本土産近代磁器	皿	B類	13.1	2.7	7.4	銅版転写（青色）。内面に亀甲文、鶴文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
583	本土産近代磁器	皿	B類	13.0	3.0	6.6	銅版転写（青色）。内面に亀甲文、鶴文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
584	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
585	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	2.0	4.6	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
586	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
587	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	2.0	4.9	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
588	本土産近代磁器	小皿	F類	8.3	1.9	4.9	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
589	本土産近代磁器	小杯	D類	8.1	4.3	3.4	クロム青磁。腰折れ。下半に輪花状の刻み。底部は無釉。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
590	本土産近代磁器	小碗	G類	－	－	2.8	無文。全体が緑色で、クロム青磁とは異なる。畳付釉剥ぎで黒色を呈する、鉄銹塗布か。	C	11	S K004
591	本土産近代磁器	小杯	D類	5.6	2.2	2.2	クロム青磁。無文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
592	本土産近代磁器	小杯	F類	6.8	2.8	2.4	内面に鶴文・松文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
593	本土産近代磁器	小杯	F類	5.0	2.8	1.8	内面体部に鶴文、見込みに流水に葉または柳文か。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
594	本土産近代磁器	小杯	F類	5.65	3.0	2.3	口縁部に桃色の吹付。内面に日章旗文。見込みに桜と鍋が盛られる。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
595	本土産近代磁器	小杯	B類	6.7	3.0	2.2	底部は桜状。口縁部2ヵ所に緑色と桃色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
596	本土産近代磁器	小杯	B類	5.7	2.8	2.2	底部は桜状。口縁部2ヵ所に緑色と桃色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
597	本土産近代磁器	小杯	B類	5.8	2.8	2.3	底部は桜状。口縁部2ヵ所に緑色と桃色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
598	本土産近代磁器	小杯	B類	5.7	3.0	2.2	底部は桜状。口縁部2ヵ所に緑色と桃色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
599	本土産近代磁器	小杯	B類	5.7	2.8	2.3	底部は桜状。口縁部2ヵ所に緑色と桃色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
600	本土産近代磁器	小杯	B類	5.8	2.8	2.2	底部は桜状。口縁部2ヵ所に緑色と青色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
601	本土産近代磁器	急須・蓋	C類	6.8	2.6	－	602の蓋。外面に梅文。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
602	本土産近代磁器	急須	C類	7.4	9.2	7.7	601の身。外面に梅文。口縁内面と高台は釉剥ぎ。瀬戸・美濃系。	C	11	S K004
603	本土産近代磁器	水差	E類	6.5	5.9	6.5	平面形がイチジク状で、小形の水飲み用の水差し。畳付釉剥ぎ。注口部ざらつき被熱痕か。	C	11	S K004
604	本土産近代陶器	鉢・蓋	－	12.7	4.1	10.5	605の蓋。胎土は軟質、釉は褐色。内面は無釉。外面に花文。庇部は釉剥ぎ。	C	11	S K004
605	本土産近代陶器	鉢	－	12.0	5.8	7.9	604の身。胎土は軟質、釉は外面が褐色、内面が白色。外面に連弁文。口唇部と畳付釉剥ぎ。	C	11	S K004
606	沖縄産施釉陶器	碗	C－1類	14.6	6.8	6.3	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。一部口縁にスス付着。	C	11	S K004
607	沖縄産施釉陶器	碗	C－1類	14.4	6.9	6.3	白化粧後、透明釉。内底蛇の目状釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。焼成により畳付一部黒色。	C	11	S K004
608	沖縄産施釉陶器	碗	C－1類	14.0	6.99	6.2	白化粧後、透明釉。胎土黄白色。内底蛇の目状に釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。焼成により高台一部黒色。	C	11	S K004
609	沖縄産施釉陶器	碗	C－2類	14.1	7.1	6.1	白化粧後、透明釉。胎土浅黄色。内底蛇の目状に釉剥ぎ、重ね焼き痕あり。外面印花文。	C	11	S K004
610	沖縄産無釉陶器	壺	B類	11.8	38.3	14.1	外面灰黄色、一部赤褐色。内面赤褐色。外面一部スス付着。頸部・肩部に凹線。肩部にヘラ記号あり。「へ」の字状下に「一」。	C	11	S K004
611	沖縄産無釉陶器	壺	A類	16.0	51.3	20.3	外面暗褐色、内面黒色。肩部大きく張る。ヘラ記号あり（欠損のため詳細不明）。	C	11	S K004
612	沖縄産無釉陶器	壺	A類	15.1	－	－	外面暗赤褐色、煤付着により一部黒色。内面鈍赤褐色。外面肩部にヘラ記号「○」。	C	11	S K004
613	沖縄産無釉陶器	壺	B類	15.6	60.7	19.0	外面暗褐色、内面赤褐色。頸部ヘラ記号「三」状。	C	11	S K004
614	沖縄産無釉陶器	壺	A類	16.7	65.6	19.7	外面暗褐色、内面赤褐色。外面胴部凹み、肩部ヘラ記号「ホ」。	C	11	S K004
615	沖縄産無釉陶器	壺	A類	17.1	69.2	19.6	外面暗褐色、部分的に暗赤褐色。内面赤褐色。肩部大きく張り、自然釉によるテカリ。ヘラ記号あり。「へ」の字状下に「七」状。	C	11	S K004

第 38 表　遺物観察表（16）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
616	沖縄産無釉陶器	壺	A類	16.3	70.7	21.7	外面暗赤褐色、一部暗褐色。内面赤褐色。肩部ヘラ記号「土」状。	C	11	SK004
617	沖縄産無釉陶器	壺	A類	15.8	69.4	18.5	外面灰黄色、部分的黒色。内面赤褐色。肩部ヘラ記号「二」状。	C	11	SK004
618	沖縄産無釉陶器	壺	A類	17.2	68.7	22.6	外面暗褐色、一部灰黄色。内面赤褐色、輪積み痕明瞭。外面肩部にヘラ記号あり。「へ」の字状下に「ホ」。	C	11	SK004
619	沖縄産無釉陶器	壺	A類	17.4	75.9	22.7	外面暗褐色、内面赤褐色。外面気泡多。肩部ヘラ記号あり。「へ」の字状下に「之」状。	C	11	SK004
620	沖縄産無釉陶器	壺	－	－	－	21.4	外面灰黄色、内面明赤褐色。外底周辺泥釉？塗布。底部縁を斜位に削る。	C	11	SK004
621	金属製品（青銅）	簪	－	17.7	0.25	0.5	カブは耳掻き状。断面は六角形。重量8.0g。	C	11	SK004
622	金属製品（青銅）	不明	－	1.8	－	0.7	蓋状。軍用のガラス製筒状容器には入ったヨードチンキの栓か。重量2.0g。	C	11	SK004
623	金属製品（合金）	手榴弾	－	5.3＋	1.6＋	0.8	手榴弾の信管部分。重量35.3g。	C	11	SK004
624	金属製品（青銅）	不明	－	0.7	0.5	0.7	小孔が４つみられる。スナップボタンか。重量0.3g。	C	11	SK004
625	金属製品（鉄）	黄燐弾	－	11.2＋	3.9	0.5	黄燐弾の弾頭部。重量238.7g。	C	11	SK004
626	石器	敲石類	－	10.9	4.3	3.9	**石材：**輝緑岩。**加工痕：**確認されず。**使用痕：**正面に磨面、端部に敲打痕。**その他：**端部・背面に自然面残。	C	11	SK004
627	プラスチック製品	ボタン	－	1.4	0.3	1.4	4つ孔タイプで表は孔のある中央部が窪み、裏面は孔のある中央部が僅かにフラットになる。白色半透明。	C	11	SK004
628	プラスチック製品	ボタン	－	1.5	0.2	1.4	2つ孔タイプで表の2つ孔のある中央部が段を有して窪み、その孔の間に1mm台の円形の凹みがある。裏面は孔のある中央部が膨らむ。縁辺はフラット。色調は黒色。	C	11	SK004
629	布	－	－	－	－	－	炭化した布片で、縫い合わせの部分や糸の玉どめが見られる。	C	11	SK004
630	金属製品（アルミ）	缶	－	12.8	0.2	8.1	潰れているが、口縁が開くカップ状のもの。外底に「８」などの文字。本来は蓋が付いていたものと思われる。重量17.9ｇ。	C	11	SK006
631	本土産近代磁器	碗	A類	13.2	6.2	4.8	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK025
632	本土産近代磁器	碗	A類	14.2	6.5	4.8	外面に花文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK025
633	本土産近代磁器	碗	A類	13.0	6.0	4.4	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK025
634	本土産近代磁器	碗	A類	12.6	6.0	4.5	外面に花文。見込みに五弁文。内面に目痕あり。高台内に「⑮2」の統制番号。砥部産。	C	11	SK025
635	本土産近代磁器	碗	A類	13.8	5.7	2.7	外面に鶴文、松竹文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK025
636	本土産近代磁器	碗	A類	13.8	5.6	4.6	外面に鶴文、松竹文。見込みに松竹梅文。内面に目痕あり。砥部産。	C	11	SK025
637	本土産近代磁器	碗	B類	11.3	6.15	3.6	直口碗。転写による外面に松枝文。釉は外面のみ灰黄色。外底内に呉須で圏線１条。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
638	本土産近代磁器	小碗	B類	8.1	4.7	2.8	ゴム判。外面に亀甲文地、松梅文。高台内に「岐303？」の統制番号。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
639	本土産近代磁器	小碗	B類	8.4	4.6	3.0	ゴム判。外面に四方襷文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
640	本土産近代磁器	小碗	B類	8.2	4.7	2.8	ゴム判。外面に鶴文、ラマ式連弁。口縁部内面に青色の圏線。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
641	本土産近代磁器	小碗	B類	8.2	4.45	3.0	ゴム判。外面に桃色の花文、青色の草文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
642	本土産近代磁器	皿	F類	15.7	2.8	12.0	角皿。色絵は残存が不良だが赤・金・緑・黄、内面に扇文、花文。外面に呉須による菱文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
643	本土産近代磁器	皿	F類	15.8	2.9	11.8	角皿。色絵は残存が不良だが赤・金・緑・黄、内面に扇文、花文。外面に呉須による菱文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
644	本土産近代磁器	皿	F類	15.5	3.1	11.7	角皿。色絵は残存が不良だが赤・金・緑・黄、内面に扇文、花文。外面に呉須による菱文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
645	本土産近代磁器	皿	F類	15.7	3.3	12.0	角皿。色絵は残存が不良だが赤・金・緑・黄、内面に扇文、花文。外面に呉須による菱文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
646	本土産近代磁器	小鉢	B類	9.9	5.1	4.1	平面は隅丸形、口縁は波形。内面はゴム判で立涌状文と花文、銅版転写で山水文。外面の不明文は染付か。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
647	本土産近代磁器	小鉢	F類	9.25	4.2	4.45	平面は十字形。青・赤・金の色が残る。内面に草文。見込みに昆虫文？。ガラスが溶着。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
648	本土産近代磁器	小碗	B類	7.5	5.2	3.1	外面に転写による花文、一部彩色あり。高台内に「岐450」の統制番号。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
649	本土産近代磁器	小碗	B類	7.5	5.1	3.0	外面に転写による花文、一部彩色あり。高台内に「岐450」の統制番号。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
650	本土産近代磁器	小碗	B類	7.4	5.2	3.1	外面に転写による花文、一部彩色あり。高台内に「岐450」の統制番号。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
651	本土産近代磁器	小碗	F類	7.6	5.2	3.2	外面に花文。高台内に「岐608」の統制番号。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
652	本土産近代磁器	小碗	B類	7.4	5.29	3.2	転写による外面口縁に連続した環珞状もしくは矢羽状文、下半に1条の圏線。高台内に「新興陶器」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
653	本土産近代磁器	小碗	B類	7.4	5.2	3.3	転写による外面口縁に連続した環珞状もしくは矢羽状文、下半に1条の圏線。高台内に「新興陶器」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
654	本土産近代磁器	小碗	B類	7.3	5.2	3.3	転写による外面口縁に連続した環珞状もしくは矢羽状文、下半に1条の圏線。高台内に「新興陶器」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
655	本土産近代磁器	小碗	B類	7.2	5.2	3.2	転写による外面口縁に連続した環珞状もしくは矢羽状文、下半に1条の圏線。高台内に「新興陶器」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
656	本土産近代磁器	小碗	E類	7.4	5.2	3.3	高台内に「岩」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025

第 39 表　遺物観察表（17）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
657	本土産近代磁器	小碗	E類	7.3	5.2	3.3	高台内に「岩」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
658	本土産近代磁器	小碗	E類	7.4	5.2	3.2	高台内に「岩」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
659	本土産近代磁器	小碗	E類	7.5	5.2	3.2	高台内に「岩」の銘。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
660	本土産近代磁器	蓋	B類	6.4	2.45	撮み径1.0	銅版転写（桃色）端部は釉剥ぎ。外面に花文。瀬戸・美濃系。庇径8.0cm。	C	11	SK025
661	本土産近代磁器	蓋	B類	6.5	2.2	撮み径1.0	端部は釉剥ぎ。外面に花文。瀬戸・美濃系。庇径8.2cm。	C	11	SK025
662	本土産近代磁器	蓋	B類	6.6	2.2	撮み径1.1	端部は釉剥ぎ。失色しているが、おそらく外面に花文。瀬戸・美濃系。庇径8.0cm。	C	11	SK025
663	本土産近代磁器	蓋	B類	6.6	2.2	撮み径1.1	端部は釉剥ぎ。失色しているが、おそらく外面に花文。瀬戸・美濃系。庇径8.2cm。	C	11	SK025
664	本土産近代磁器	蓋	B類	6.6	2.2	撮み径1.1	端部は釉剥ぎ。失色しているが、おそらく外面に花文。瀬戸・美濃系。庇径8.0cm。	C	11	SK025
665	本土産近代磁器	蓋	C類	6.0	2.2	撮み径1.1	急須の蓋。裾部釉剥ぎ。外面に流水文。胴部に孔あり。瀬戸･美濃系？庇径7.0cm。	C	11	SK025
666	本土産近代磁器	小杯	G類	6.8	4.85	2.7	釉・素地とも緑色。畳付に鉄銹塗布か。	C	11	SK025
667	本土産近代磁器	小杯	F類	5.7	3.1	2.0	軍杯。見込みは緑色をバックに桜文を型抜き、中央に色絵による扇形の日章旗。底部に砂が付着。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
668	本土産近代磁器	小杯	F類	5.2	2.8	1.6	見込みに色絵による鶴文。外面に呉須による網目文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
669	本土産近代磁器	小杯	F類	4.9	2.5	2.4	高台外面に青色の波線が横位する。内面に松文。見込みに鶴文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
670	本土産近代磁器	小杯	F類	5.0	2.5	2.0	高台外面に青色の波線が横位する。内面に松文。見込みに鶴文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
671	本土産近代磁器	瓶	B類	2.5	14.5	5.0	銅版転写。外面に鳥文、松文。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
672	本土産近代磁器	瓶	C類	2.2	14.45	4.6	胴部に青色の圏線。底部に「常山」の文字。瀬戸・美濃系。	C	11	SK025
673	本土産近代磁器	香炉	C類	10.7	7.9	10.1	外底・内面上半は露胎。外面の３区画の横帯、中は無文、上は７条・下は６条の凹線。三脚は三角形で唐草状の刻みに青色の呉須。瀬戸･美濃系？	C	11	SK025
674	沖縄産無釉陶器	壺	A類	14.9	55.9	21.2	外面灰黄色、内面赤褐色。肩部～内面頚部に泥釉塗布。	C	11	SK025
675	沖縄産無釉陶器	壺か甕	－	－	－	22.0	内外面ともに鈍赤褐色、一部灰色。ベタ底から開くように立ち上がる。	C	11	SK025
676	ガラス製品	瓶（白）	薬瓶か化粧瓶	2.8	2.4	2.2	底形は円形で、◇形のエンボス。ネジ栓。	C	11	SK025
677	ガラス製品	瓶（青）	調味料瓶か	3.0	39.4	9.6	なで肩で底部円形。底部に「14」のエンボス。一升瓶。	C	11	SK025
678	ガラス製品	瓶（青）	不明	－	－	15.2	用途不明の大型瓶。首部下に耳が2つ付き、金属が付着している。底部に「11」のエンボス。ネジ栓か。	C	11	SK025
679	金属製品（アルミ）	スプーン	－	11.5	0.2	0.3	柄部背面に文字。重量8.2g。	C	11	SK025
680	金属製品（鉄）	不明	－	13.9	4.7	12.3	円盤状の製品。中央に把手？付く。全体が錆に覆われている。重量640ｇ。	C	11	SK025
681	金属製品（鉄）	不明	－	5.5＋	2.5	5.2＋	角金状か。全体が錆に覆われている。重量38.9g。	C	11	SK025
682	金属製品（鉄）	黄燐弾	－	9.2＋	5.4＋	8.0	黄燐弾の弾頭部。重量221.8g。	C	11	SK025
683	金属製品（鉄）	不明	－	15.7＋	3.0	2.5	棒状のものが２つ重なっている。鉗子か。全体に錆に覆われている。重量140.4g。	C	11	SK025
684	金属製品（青銅・鉄）	不明	－	12.3＋	3.2	4.0	鉄部分に青銅製箱状製品が付着。全体が錆に覆われている。重量169.8g。	C	11	SK025
685	金属製品（青銅・鉄）	不明	－	8.2＋	2.3	2.9	鉄部分に青銅製楕円形ドーム形箱状製品（長3.5、高0.7．幅1.3）が付着。全体が錆に覆われている。重量74.5g。	C	11	SK025
686	金属製品（青銅・鉄）	不明	－	10.5＋	3.0	3.2	鉄部分に青銅製楕円形ドーム形箱状製品（長3.5、高0.7．幅1.3）が付着。全体が錆に覆われている。重量111.0g。	C	11	SK025
687	銭貨	一銭	－	外径1.6	0.15	－	銭文の剥離がひどく不鮮明だが、アルミ製富士一銭か。0.6ｇ。	C	11	SK025
688	プラスチック製品	歯ブラシ	－	14.85	0.45	1.05	長軸に沿って3条31穴の植毛穴。ブラシ部は僅かに八の字に開く直線的な形状。柄に「（完全消毒）」「大……500」の一部不明瞭な線刻。柄尻には円い孔。色調はやわらかい黄色。	C	11	SK025
689	プラスチック製品	ボタン	－	1.0	0.6	1.0	裏に横位に1つ孔があるタイプ。表の円周にギザギザの造形。中央部は膨らむ。白色半透明。	C	11	SK025
690	プラスチック製品	ボタン	－	1.1	0.3	1.1	2つ孔タイプで表は丸みを帯びた縁辺が厚みをもち、裏面は孔のある中央部が僅かにフラットになる。白色半透明。	C	11	SK025
691	プラスチック製品	ボタン	－	1.4	0.2	1.4	2つ孔タイプで表は丸みを帯びた縁辺が厚みをもち、裏面は孔のある中央部が僅かにフラットになる。白色半透明。	C	11	SK025
692	本土産近代磁器	皿	B類	22.7	2.15	14.0	洋食器。口縁内面端に赤色の半円文と点文を展開。外底に「ヤマカ陶器會社」銘。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001№8
693	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.8	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001№37
694	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	2.0	4.4	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001№15
695	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001№21
696	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
697	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.8	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001№41

第 40 表　遺物観察表（18）

遺物No.	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
698	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.23
699	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.25
700	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	1.9	4.8	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.27
701	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.10
702	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.36
703	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.8	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.26
704	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
705	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
706	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
707	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.46
708	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.8	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.48
709	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.47
710	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
711	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.35
712	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.16
713	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	2.1	4.4	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.9
714	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.5
715	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	2.0	4.4	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.6
716	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
717	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
718	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
719	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	1.9	4.8	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.28
720	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.20
721	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
722	本土産近代磁器	小皿	F類	8.5	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
723	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.19
724	本土産近代磁器	小皿	F類	8.8	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
725	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.50
726	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.9	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.43
727	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.79	4.6	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.42
728	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	1.8	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001
729	本土産近代磁器	小皿	F類	8.6	2.0	4.7	色抜けがあるが内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001No.18
730	本土産近代磁器	小皿	B類	8.5	1.8	4.9	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.14
731	本土産近代磁器	小皿	B類	8.4	1.9	4.8	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.17
732	本土産近代磁器	小皿	B類	8.4	1.9	4.7	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.30
733	本土産近代磁器	小皿	B類	8.5	1.8	4.8	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.11
734	本土産近代磁器	小皿	B類	8.4	1.9	4.7	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.2
735	本土産近代磁器	小皿	B類	8.5	1.9	4.8	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.4
736	本土産近代磁器	小皿	B類	8.8	1.8	5.0	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.32
737	本土産近代磁器	小皿	B類	8.7	1.9	4.7	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.22
738	本土産近代磁器	小皿	B類	8.6	1.9	4.9	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001No.7

第 41 表　遺物観察表（19）

遺物№	種類	器形	分類	口径／長軸	器高／厚さ	底径／短軸	観察事項	地区	区画	出土遺構
739	本土産近代磁器	小皿	B類	8.7	1.9	4.7	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№12
740	本土産近代磁器	小皿	B類	8.7	1.9	4.7	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№3
741	本土産近代磁器	小皿	B類	8.7	1.9	4.7	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№29
742	本土産近代磁器	小皿	B類	8.65	2.0	4.4	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№49
743	本土産近代磁器	小皿	B類	8.6	2.0	5.1	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001
744	本土産近代磁器	小皿	B類	8.4	2.0	4.4	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№38
745	本土産近代磁器	小皿	B類	8.4	1.8	4.5	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№44
746	本土産近代磁器	小皿	B類	8.4	1.9	4.4	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№13
747	本土産近代磁器	小皿	B類	8.6	1.9	5.1	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№33
748	本土産近代磁器	小皿	B類	8.65	1.7	4.5	銅版転写（緑色）。内面に外周に魚文を４匹配し、その中に流水を描く。瀬戸･美濃系。	C	12	SK001№45
749	本土産近代磁器	小杯	B類	5.7	2.75	2.15	底部は桜形に成形。口縁部2ヵ所に緑色と桃色の吹き付け。瀬戸・美濃系。	C	12	SK001№24
750	本土産近代陶器	蓋	－	11.5	3.1	8.6	外面に茶色による竹笹文。胎土淡黄色、釉は灰白色で端部釉剥ぎ。	C	12	SK001№34
751	ガラス製品	瓶（茶）	薬瓶か	1.6	5.4	2.6	中に綿が入っている。垂直な胴部で底部円形。底部に「81-04 6 10 8 （錨マークにHを重ねたようなマーク）」のエンボス。ネジ栓。	C	12	SK001
752	金属製品（青銅）	煙管	－	12.9＋	－	0.7	青銅製の延べ煙管か。火皿部破損。重量9.0g。	C	12	SK001№1
753	金属製品（合金）	電灯	－	5.6	2.3	1.3	電灯のフード部分。本体は青銅製で、ライト部分はガラス。豆電球付属。重量43.4g。	C	12	SK001№1
754	金属製品（鉄）	鍋	－	25.3	6.2	－	鍋の破片。鉄身に外面は青色、内面は白色の塗装。重量113.3g。	C	12	SK001№1
755	金属製品（鉄）	釜	－	－	－	－	釜で胴部に羽が付く。底部欠損。重量480g。	C	12	SK001№10
756	金属製品（鉄）	鍋	－	66.9	24.7	－	口縁から底部まで残存。重量12200g。	C	12	SK001№10
757	石製品	砥石？	－	20.6	6.3	11.5	**石材：**凝灰岩。**加工痕：**確認されず。**使用痕：**側面に砥面。**その他：**砥面以外は自然面残。	C	12	SK001
758	漆膜	－	－	－	－	－	赤漆膜が土に張り付いた形で残る。	C	12	SK001№10
759	ガラス製品	瓶（茶）	不明	－	－	5.4	胴部下端に「…OS…RN」、底部に「NOT TO BE REFILLED HH-B(8?) 15410-68 21 ①70」と円周状にエンボスとギザギザの加工がされている。	C	12	SK005
760	沖縄産施釉陶器	瓶	－	－	－	5.4	褐釉。胎土浅黄橙色。口縁内面まで施釉。外面底部のみ無釉。	C	12	SK013
761	本土産近代磁器	小皿	F類	8.7	1.7	5.1	内面に赤・緑・金・茶・白による木苺、葉文。色絵の残存が良好。	C	12	SK047
762	本土産近世染付	蓋	肥前	11.4	－	－	呉須の発色濃い。菊花文。	C	12	SP001
763	中国産白磁	鉢	福建	－	－	－	大形鉢の口縁。外面上位は凹線、その下に櫛描き文。	C	12	SD006
764	沖縄産施釉陶器	碗	A類	14.2	5.45	7.4	灰釉。胎土灰黄色。見込みに釉を塗り、蛇の目状模倣。外面鉄絵。フィガキー。	C	12	SD006
765	沖縄産無釉陶器	瓶	－	4.6	21.7	7.5	鈍赤褐色。外体面を花弁状に面取り。	C	不明	表採
766	石器	磨製石斧	－	8.2	3.15	6.9	**石材：**輝緑石。**加工痕：**正・背面ともに敲打痕・研磨。**使用痕：**刃縁損耗・線条痕、右側面着柄により凹み。**その他：**縦斧。	C	不明	表採

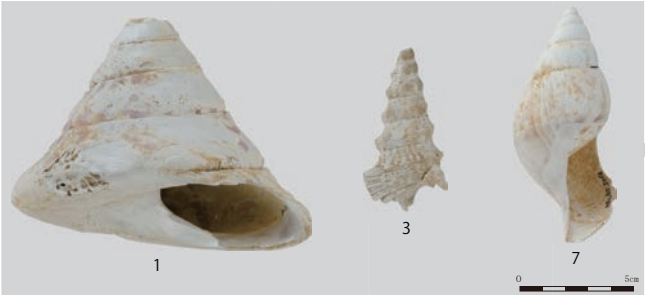
第 42 表　貝類遺体出土点数

区画	遺構名	
1	SK1	ｲﾀﾔｶﾞｲ1(f1)
	SK10	ｱﾌﾘｶﾏｲﾏｲ1(f1)、ｷﾝﾁｬｸｶﾞｲの一種1(aR1)、ｶﾜﾗｶﾞｲ1(uL1)
	SK36	ｶﾝｷﾞｸ2(a2)、ﾒﾝｶﾞｲ類1(aR1)、ｻﾒｻﾞﾗ1(f1)、ﾘｭｳｷｭｳｼﾗﾄﾘ1(uL1)、ﾇﾉﾒｶﾞｲ1(aR1)
2	SK41･SF1	ﾋﾒｼﾞｬｺ1(aR1)
3	SK26	ﾊﾏｸﾞﾘ類似種1(uR1)
	SK45	不明1(f1)
	SD12	ｻﾗｻﾊﾟﾃｲﾗ1(u1)、ﾘｭｳｷｭｳｻﾙﾎﾞｳ1(aR1)
	SF1	不明1(uR1)、ﾒﾝｶﾞｲ類1(aR1)
4	SK67	不明1(f1)、ﾒﾝｶﾞｲ類1(aR1)
	SK80	ﾊﾏｸﾞﾘ類似種1(aL1)
5	SK61	ｼﾗﾅﾐ類1(aR1)
6	SK12	ｱﾌﾘｶﾏｲﾏｲ2(u2,f4)
	SK13	ｱﾌﾘｶﾏｲﾏｲ1(f1)
	SK17	ﾒﾝｶﾞｲ類1(aL1)
8	SK45カメ1	ｲﾜｶﾆﾓﾘ1(u1)、ｵﾆﾉﾂﾉｶﾞｲ1(u1)、ﾘｭｳｷｭｳｻﾙﾎﾞｳ1(aL1)
	SS2下層	ﾘｭｳｷｭｳｻﾙﾎﾞｳ1(f1)
	SK74	ｻﾗｻﾊﾟﾃｲﾗ1(f1)
	SK89	ｸﾜﾉﾐｶﾆﾓﾘ1(f1)、ﾊﾅﾋﾟﾗﾀﾞｶﾗ1(u1)
10	SK40	ｻﾗｻﾊﾟﾃｲﾗ1(a1)、ｷﾝﾁｬｸｶﾞｲの一種2(aL2)、不明7(f7)
11	SK4	不明8(f8)

※a完形　u殻頂　f破片 二枚貝はR(右)･L(左)

第 43 表　脊椎動物遺体出土点数

区画	遺構名	
1	SK6	ｳｼ(中間手根L1、大腿R1、踵R1、第4足根L1、未節1)、ｳﾏ(中手Lcs1、基節R1)
	SK10	ﾈｽﾞﾐｻﾞﾒ科(椎2)、ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(胸椎1、肩甲R2、上腕Rs1、尺L1、)、ﾔｷﾞ(橈L1)、ｳｼ(上顎遊離歯dm^4R1)
	SK36	ﾆﾜﾄﾘ(大腿R1)
2	SK41	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(尺L1)、ﾔｷﾞ(下顎遊離歯M^2R1、肋L1)
	SK41・SF1	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(肋L1)、ﾔｷﾞ(下顎骨 P^2,P^3,P^4,M^1,M^2L1・R1)
3	SK26	ﾔｷﾞ(肋L1)
	SK30	ｳｼ/ｳﾏ(上顎遊離歯/下顎遊離歯LR不明6)
	SD11	ｳｼ(上顎遊離歯dm^3R1)
	SF1	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(中手/中足LR不明1)、ｳｼ(上顎遊離歯M^3LR不明1、中手/中足LR不明1)、ｳｼ/ｳﾏ(上顎遊離歯/下顎遊離歯LR不明2、肋LR不明1)
4	SK67	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(下顎遊離歯I^1L1)、ﾔｷﾞ(肩甲R1)、ｳﾏ(中手/中足LR不明cs1)
	SK80	ｳｼ(大腿R2)
	SD15	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上腕LR不明1)、ﾔｷﾞ(上顎遊離歯M^1R2、下顎切歯R1)、ｳｼ(上顎遊離歯M^1L1)
5	SK64	ｳﾏ(尺R1)
6	SK5	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(肩甲R1、第3中手Lc1)、ﾔｷﾞ(上顎遊離歯M^1R1)
	SK7	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(頭蓋(涙)R1、肋R1)
	SK12	ﾔｷﾞ(肋L2)
	SK13	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上腕LR不明1)、ﾔｷﾞ(肋L1)
	SK20	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上顎遊離歯CL1、第3中手L1・LR不明1、肋L1)
	SK23	ｳｼ/ｳﾏ(胸椎1)
	SK25	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上顎遊離歯M^2R2、腰椎1、椎1)、ﾔｷﾞ(下顎遊離歯LR不明2)
	SD1	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上顎遊離歯CL1・R1、下顎dm^2L1、下顎M^1L1、下顎M^2R1、下顎遊離歯I^1LR不明1、下顎遊離歯I^2L1・R1、下顎遊離歯P^2R1、下顎遊離歯P^3L1・R1、上腕Ls1・L1・LR不明s1・LR不明3、橈骨L3・R2・LR不明s2、尺Lc1・L1、第3中手LR不明s2、寛L1・LR不明1、大腿LR不明3、膝蓋LR不明3、脛Ls1・L1・R1、脛LR不明1、距L1・R1、踵Lc1・L3・R1、手根LR不明2、中手/中足L1・R1・LR不明1、未節LR不明1)、ﾔｷﾞ(上顎遊離歯/下顎遊離歯LR不明1、上腕Lc3・L1・R1、大腿L1・Rs1、基節LR不明1)、ｳｼ(肩甲L1、中手Lc1、中手L1)、ｳﾏ(下顎遊離歯M^3L1)、ｳｼ/ｳﾏ(上腕L1・Rcs1、橈LR不明1、大腿Rcs1・LR不明1、中手/中足LR不明cs1・LR不明1、肋LR不明c1・LR不明10)
7	SK8	ﾔｷﾞ(上顎遊離歯P^3R1、上顎遊離歯M^1R1、上顎遊離歯M^2R1)
	NR2	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(下顎M^2R2)
8	SK45	ﾈｺ(上腕R1)、ﾔｷﾞ(腰椎1)
	SK45カメ1	魚骨不明(3)、ｶﾓ科(鳥口R1)、ﾆﾜﾄﾘ(肩甲L1、上腕R1、中手L1、大腿Lc1・Rc1)、鳥類(橈R1、寛R1)、ｲﾇ(基節R1、肋Rc1)、ﾈｺ(中手R1)、ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(胸椎2、腰椎3、上腕L1・Rc1・LR不明1、橈L1・R2・LR不明s1・LR不明1、中間手根L3、第3中手Rc1、大腿LR不明1、膝蓋L1、脛Lc1・L1、脛LR不明2、距L2・LR不明1、中心足根L1・R1、第4足根R1、第4中足L2、第5中足L1、中手/中足L3、基節R2、中節L1・R1、未節L1、椎2、四肢LR不明9、肋L3・R2・LR不明25)、ﾔｷﾞ(上顎/下顎LR不明1、下顎遊離歯LR不明1、軸椎1、頸椎1、腰椎2、上腕Ls2、R1、中手R1、大腿Rs1・R1、基節L1、肋L1・Rc1)、不明(歯LR不明1)
	SK45カメ2	ｱﾏﾐﾌｴﾌｷ型(椎2)、魚骨不明(1)、ﾆﾜﾄﾘ(大腿R1・LR不明1)、鳥類(橈LR不明1、肋L1・肋LR不明1)、ｼﾞﾈｽﾞﾐ類(上顎LR2、下顎L1・R1・LR不明1、頸椎2、寛1)、ﾈｺ(胸椎1、腰椎4、中節1)、ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(頚椎1、腰椎1、肩甲L1、橈LR不明2、尺L1、第3中手Lc1、距LR不明1、第5中足L1、中手/中足R1・LR不明1、基節L4・R2、中節R1、肋L3・R2・LR不明1)、ﾔｷﾞ(肋L1・R1)、不明(歯LR不明4)
	SK54	ﾈｺ(下顎M^1,P^4R1)、ﾔｷﾞ(下顎P^3,P^4L1、下顎遊離歯M^1R1)
	SK74	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(第5中足L1)、ﾔｷﾞ(脛骨L1)、ｳｼ/ｳﾏ(肋LR不明1)
	SK89	ﾆﾜﾄﾘ(大腿L2)、ﾈｺ(寛L1)、ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(下顎dm^3L1、下顎M^1,M^2L1、下顎遊離歯M^2R1、下顎遊離歯I^2R1、下顎遊離歯P^3L1、上腕R1・LR不明1、橈LR不明1、第3中手LR不明1、肋R1)、ﾔｷﾞ(上腕Rs1、下顎遊離歯LR不明1)
	SK101	ﾔｷﾞ(下顎切歯L1)
	SD7	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上顎遊離歯M^2R1、下顎dm^3,dm^4,M^1L1、下顎遊離歯I^1L1、LR不明3)、不明(歯LR不明1)
	SD15	ｶﾓ科(中足L1)、ﾆﾜﾄﾘ(肩甲R1、大腿LR不明1、中足R1)、ﾈｺ(仙椎1)、ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(頭蓋(後頭)R1、上顎遊離歯CR1、上顎遊離歯M^2L1、下顎遊離歯I^2R1、下顎遊離歯P^3L1、頚椎1、胸椎1、上腕LR不明cs1、橈Rc1・Rs1・LR不明s1、第3中手R1、寛L1・R1・LR不明1、大腿LR不明2、第5中足L1、中手/中足LR不明1、基節R1、中節R1、肋R1・LR不明3)、ﾔｷﾞ(上顎/下顎LR不明1、上顎遊離歯M^1R1、下顎遊離歯M^1R1、腰椎2、上腕Rc1)、ｳｼ/ｳﾏ(上腕LR不明c1、寛LR不明1)、不明(歯LR不明1)
	NR1	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(踵R1)、ｳｼ(下顎遊離歯M^1R1、中足LR不明1)
9	SK27	ﾔｷﾞ(上腕LR不明c1)
	SK36	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上顎遊離歯dm^2R1、下顎LR1・R1、下顎C,P^1,P^2L1、下顎遊離歯L1・LR不明1、下顎遊離歯I^1R1、下顎遊離歯I^2R1、下顎遊離歯CR1、肩甲R1、尺Rc1、踵L1)、ﾔｷﾞ(上顎LR不明3、上顎遊離歯M^1L1、上顎遊離歯M^2L1、下顎LR不明2、下顎P^2,P^3,P^4R1、下顎遊離歯M^1L1、下顎遊離歯M^2R1)、不明(歯LR不明1)
	SD9	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(肩甲LR不明c2、上腕Rs1, 橈Ls1、尺L1、第3中手L1、脛L1)、ﾔｷﾞ(下顎M^3L1、下顎遊離歯M^3L1)
10	SK23	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(頭蓋(後頭)R1、下顎(dm^2,dm^3,dm^4,M^1R1、下顎dm^3,dm^4,M^1L1)、ﾔｷﾞ(上顎遊離歯M^2R1、下顎遊離歯M^2R1、下顎遊離歯L3・R2)
	SK26	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(上腕L1、橈L1)
	SK40	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(下顎LR1、腰椎1、肩甲L1・R1・LR不明1、上腕LR不明1、寛LR不明1、脛LR不明1)、ﾔｷﾞ(胸椎1、腰椎2、肋R2、上顎/下顎LR不明1)、ｳｼ/ｳﾏ(中手/中足LR不明1)
	SD3	ｲﾉｼｼ/ﾌﾞﾀ(下顎遊離歯CL1)、ﾔｷﾞ(下顎遊離歯M^3L1)
11	SK4	ｳｼ(踵LR不明1)



図版 133　巻貝

図版 134　二枚貝

図版 135　脊椎動物遺体（１）

ネズミザメ科　1.椎骨　**アマミフエフキ型**　2.椎骨

図版 136　脊椎動物遺体（２）

カモ科　1.左　中足骨　2.右　鳥口骨　**ニワトリ**　3.右　肩甲骨　4.右　上腕骨　5.左　中手骨　6.左　大腿骨
7.右　中足骨　**鳥類**　8.右　橈骨　9.右　寛骨　10.左　肋骨　**ジネズミ類**　11.左右　上顎骨　12.左　下顎骨　13.頸椎
イヌ　14.右　基節骨　15.右　肋骨(カットマークあり)　**ネコ**　16.右　下顎骨(M^1,P^4)　17.胸椎　18.腰椎
19.右　上腕骨　20.右　中手骨　21.中節骨　**イノシシ/ブタ**　22.右　頭蓋骨(後頭骨)　23.右　頭蓋骨(涙骨)
24.右　上顎遊離歯(dm^2)　25.左　上顎遊離歯(C)　26.左　上顎遊離歯(M^2)　27.左右　下顎骨
28.右　下顎骨(dm^2,dm^3,dm^4,M^1)　29.左　下顎骨(dm^3,dm^4,M^1)　30.左　下顎骨(dm^2)　31.左　下顎骨(dm^2)
32.左　下顎骨(M^1)

図版 137　脊椎動物遺体（３）

イノシシ/ブタ　33.右　下顎骨(M^2)　34.左　下顎骨(M^1,M^2)　35.左　下顎遊離歯(I^2)　36.左　下顎遊離歯(I^2)
37.右　下顎遊離歯(C)　38.右　下顎遊離歯(P^2)　39.左　下顎遊離歯(P^3)　40.右　下顎遊離歯(M^2)　41.頚椎
42.胸椎　43.腰椎　44.左　肩甲骨　45.左　上腕骨　46.左　橈骨　47.左　尺骨　48.左　中間手根骨
49.左　第3中手骨　50.左　寛骨　51.左右不明　大腿骨　52.左　膝蓋骨　53.左　脛骨　54.左　距骨　55.左　踵骨
56.左　中心足根骨　57.右　第4足根骨　58.左　第4中足骨　59.左　第5中足骨　60.左　中手骨/中足骨
61.左　基節骨　62.右　中節骨　63.左　末節骨　64.椎骨　65.左右不明　四肢骨　66.右　肋骨　**ヤギ**
67.左右不明　上顎骨　68.右　上顎遊離歯(P^3)　69.左　上顎遊離歯(M^1)　70.左　上顎遊離歯(M^2)
71.左　下顎骨(P^2,P^3,P^4,M^1,M^2)　72.右　下顎骨(P^2,P^3,P^4)　73.左　下顎骨(P^3,P^4)　74.左　下顎骨(M^3)

図版 138　脊椎動物遺体（４）

ヤギ　75.左　下顎遊離歯(M^1)　76.右　下顎遊離歯(M^2)　77.左　下顎遊離歯(M^3)　78.右　下顎切歯　79.軸椎
80.頚椎　81.胸椎　82.腰椎　83.右　肩甲骨　84.右　上腕骨　85.左　橈骨　86.右　中手骨　87.左　大腿骨
88.左　脛骨　89.左　基節骨　90.右　肋骨(カットマークあり)　**ウシ**　91.右　上顎遊離歯(dm^3)
92.右　上顎遊離歯(dm^4)　93.左　上顎遊離歯(M^1)　94.左右不明　上顎遊離歯(M^3)　95.右　下顎遊離歯(M^1)
96.左　肩甲骨　97.左　中間手根骨　98.左　中手骨(カットマークあり)　99.右　大腿骨　100.左　第4足根骨
101.左右不明　中足骨　102.未節骨　**ウマ**　103.左　下顎遊離歯(M^3)　104.右　尺骨
105.左　中手骨(カットマークあり・スパイラルフラクチャー)
106.左右不明　中手骨/中足骨(カットマークあり・スパイラルフラクチャー)　107.右　基節骨　**ウシ/ウマ**　108.胸椎
109.右　上腕骨(カットマークあり・スパイラルフラクチャー)　110.左右不明　寛骨
111.右　大腿骨(カットマークあり・スパイラルフラクチャー)　112.左右不明　中手骨/中足骨(カットマークあり・
スパイラルフラクチャー)　113.左右不明　肋骨(カットマークあり)

第４章　自然科学分析・保存処理の成果

第１節　神山古集落の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

神山古集落は、沖縄県宜野湾市に所在し、米国海兵隊所属の普天間飛行場内に立地する。普天間飛行場は、琉球層群からなる更新世の段丘面上に位置する。宜野湾市域では、更新世の段丘面が中位段丘上位面 (標高 90m 以上)、下位面 (50 ～ 90m)、低位段丘上位面 (30 ～ 40m)、下位面 (10 ～ 30m) の 4 面に区分されており (上原 ,2000)、神山古集落は中位段丘上位～下位面に位置する。旧集落の形成は、18 世紀頃と考えられている。調査区からは、戦前頃と推測される井戸、柱穴群、屋敷の区溝、石敷き遺構、石囲いレンガ積み遺構、沖縄戦時頃と推測されるタコツボ、陣地壕、防空壕、グスク時代と推測される小穴群などが確認されている。

本報告では、３つの調査区のうちＣ地区のＮＲ 001 のトレンチ断面より採取した土壌試料を対象に、堆積層の年代観、植物資源利用、古植生、土地利用などに関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析・微粒炭分析、微細物分析、土壌理化学分析を実施する。

１　試料

Ｃ地区ＮＲ 001 における調査トレンチは北東側から便宜的に、北東側トレンチ、中央トレンチ、植栽痕トレンチと名付けている。試料は、北東側トレンチより 8 点 (上位より試料番号 1 ～ 8)、中央トレンチより 7 点 (上位より試料番号 1 ～ 7)、植栽痕トレンチより 7 点 (試料番号 1 ～ 7)、SK025 炭集中より 1 点採取をしている。

このうち、北東側トレンチの試料番号 3,7、中央トレンチの試料番号 4,6、植栽痕トレンチの試料番号 5 の 5 点について、花粉分析・微粒炭分析、微細物分析、土壌理化学分析を実施する。放射性炭素年代測定の用いる試料は、上記 5 点の各試料より炭化材を抽出したが、中央トレンチの試料番号 6 からは炭化材が回収できなかったため、同層準の試料番号 5 より抽出した炭化材を対象とした。

なお、Ｃ地区のＳＫ 25 炭集中については、参考データとして微細物分析を実施し、併せて報告する。

２　分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

炭化材は形状を観察し、小さなものは全量、大きなものは最外年輪付近から約 50mg の年代測定用試料を切り出す。切り出した植物片から、メス・ピンセットなどにより、根や土壌など後代の付着物を、物理的に除去する。塩酸 (HCl) により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム (NaOH) により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する (酸・アルカリ・酸処理：AAA)。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。一方、試料が脆弱で 1mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化 (鉄を触媒とし水素で還元する) は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファ

イト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-Ⅱ)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

δ13Cは試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウエアはOxcal4.3(Bronk,2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al.,2013)を用いる。暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5,730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪(年輪は細胞壁のみなので、形成当時の14C年代を反映している)等を用いて作られており、最新のものは2013年に発表されたIntcal13(Reimer et al.,2013)である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが(Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値(1年単位)を記す。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

試料10ccを正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛，比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9，濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に200個体以上同定・計数する(化石の少ない試料ではこの限りではない)。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等を参考にする。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭(微細な炭化植物片)の含量が、自然植生に対する人類干渉の指標として有効であるとされていることから(安田,1987など)、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井(1996)、井上ほか(2002)等を参考にする。計数は、山野井(1996)などを参考にし、長径が約20μm以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、山野井(1996)などを参考とし、分析土壌量(cc)、分析残渣量(ml)、プレパラート作成量(μl)を測定し、堆積物1ccあたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10の位を四捨五入して100単位に丸める。

(3) 微細物分析

土壌試料から種実や葉などの大型植物遺体を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な大型植物遺体や炭化材(主に径2mm以上)を抽出する。

大型植物遺体の同定は、現生標本や石川(1994)、中山ほか(2000)、鈴木ほか(2012)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。

次に、保存状態が良好な栽培種等を対象として、デジタルノギスを用いて種実遺体の大きさを計測し、結果を一覧表に併記する。

炭化材は、一覧表の下部に常温乾燥後の重量と最大径を記し、分析残渣は量比を定性的にプラス「+」で示す。分析後は、大型植物遺体を分類群別に容器に入れ、一部は約 70% のエタノール溶液で液浸保存する。分析残渣は常温乾燥後、容器に入れて保管する。

(4) 土壌理化学分析

pH（H2O）はガラス電極法、有機炭素はチューリン法、全窒素は硫酸分解－水蒸気蒸留法、MI は腐植簡易分析法 (本名・山本 ,1992)、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、全カルシウムは硝酸・過塩素酸分解－原子吸光法、全鉄・全マンガンはフッ化水素酸分解－原子吸光法 (土壌標準分析・測定法委員会 ,1986) に従う。また、酸性シュウ酸塩可溶鉄、ジチオナイト可溶鉄およびマンガンについて Acid-oxalate 法、Holmgren 法 (Reeuwijk,1986) に従い抽出し、原子吸光法により定量した後、永塚 (1973) の方法により遊離酸化鉄の活性度・結晶化指数を算出する。以下に各項目の操作工程を示す。

分析試料の調製は、試料を風乾後、土塊を軽く崩して 2mm の篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で 4 時間乾燥し、分析試料水分を求める。

pH(H2O) は、風乾細土 10.0 g を秤りとり、25ml の純水を加えてガラス棒で撹拌する。30 分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pH メーター（ガラス電極法）で pH(H2O) を測定する。

有機炭素は、粉砕土試料 0.100 ～ 2.000g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4 N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C 乾土 %）を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量（%）を算出する。

全窒素は、粉砕土試料 1.00 ～ 2.00g をケルダール分解フラスコに秤り、分解剤約 3.0g と硫酸 10ml を加え加熱分解した。分解後、蒸留水約 30ml を加え放冷した後、分解液全量を供試し水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量（T-N%）を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N（炭素率）を算出する。

MI(Melanic Index) による腐植簡易分析は、炭素 50mg に相当する微粉砕試料 (但し、5.0g を上限とする) を 50ml 容遠心管に入れ、分注器で 0.5%NaOH 溶液約 25ml を加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で 1 時間振とうした後、0.1% 高分子凝集剤溶液 1 ～ 2 滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15min の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。吸光度の測定は、得られた抽出腐植溶液約 1ml を試験管にとり、0.1%NaOH 溶液 20ml を分注器で加え (NaOH の濃度は約 0.1% となる)、分光光度計により 450、520nm の吸光度を測定する (450nm の吸光度が 1 を越えた試料は、さらに 0.1%NaOH 溶液で希釈して測定)。測定は抽出後、3 時間以内に行い、結果の表示を MI(=K450/K520) で示す。

全リン酸、全カルシウムは、粉砕土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO３）約 10ml を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO ４）約 10ml を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で 100ml に定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（Ｐ２Ｏ５）濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム（CaO）濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（Ｐ２Ｏ５mg/g）とカルシウム含量（CaOmg/g）を求める。

全鉄、全マンガンは、微粉砕試料約 0.50g をテフロンビーカーに精秤し、硝酸 5ml および過塩素酸

5ml を加え、時計皿で覆い、サンドバス上で有機物を分解する。過塩素酸の白煙が激しく出てきた後、過塩素酸 5ml とフッ化水素酸 10ml を加え、内容物を蒸発乾固させる。放冷後、6N-HCl5ml、硝酸 1ml を加え加熱し、内容物を軽く溶解させた後、蒸留水 30ml を加え、内容物を完全に溶解させる。放冷後、100ml に定容する。この定容液を適宜希釈し、原子吸光光度計により鉄 (Fe) およびマンガン (Mn) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) およびマンガン (Mn%) の含量を求める。

ジチオナイト可溶鉄 (Holmgren 法) は、微粉砕試料 500mg に DCB 抽出液 30ml を添加して 16 時間振とうする。振とう後、0.4% 高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄 (Fe) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) の含量を求める。

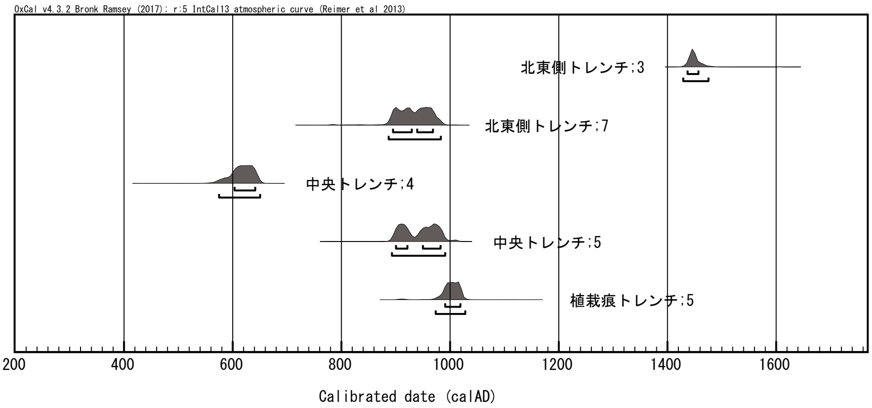
酸性シュウ酸塩可溶鉄 (Acid-oxalate 法) は、微粉砕試料 300mg に 0.2M 酸性シュウ酸塩溶液 (pH3) を 30ml 加え、暗所で 4 時間振とうする。振とう後、0.4% 高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計により鉄 (Fe) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) の含量を求める。

3　結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第 44 表、第 118 図に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、北東側トレンチの試料番号 3 は 435 ± 20yrBP、試料番号 7 は 1,120 ± 20yrBP、中央トレンチの試料番号 4 は 1,445 ± 25yrBP、試料番号 5 は 1,100 ± 20yrBP、植栽痕トレンチの試料番号 5 は 1,035 ± 25yrBP の値を示す。

暦年較正年代は、測定誤差を 2 σとして計算させた結果、北



第 118 図　暦年較正

第 44 表　放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	δ 13 C (‰)	暦年較正用	暦年較正年代 年代値										確率	Code	No.
北東側トレンチ 3	炭化材	AaA	435±20	-12.29±0.60	434±21	σ	cal AD	1437	-	cal AD	1457	513	-	493	calBP	0.682	pal-10832	YU-6972
						2σ	cal AD	1429	-	cal AD	1475	521	-	475	calBP	0.954		
北東側トレンチ 7	炭化材	AaA	1,120±20	-31.39±0.29	1,119±21	σ	cal AD	895	-	cal AD	929	1055	-	1021	calBP	0.339	pal-10833	YU-6973
							cal AD	939	-	cal AD	968	1011	-	982	calBP	0.343		
						2σ	cal AD	887	-	cal AD	983	1063	-	967	calBP	0.954		
中央トレンチ 4	炭化材	AaA	1,445±25	-24.95±0.43	1,443±23	σ	cal AD	603	-	cal AD	641	1347	-	1309	calBP	0.682	pal-10831	YU-6971
						2σ	cal AD	575	-	cal AD	650	1375	-	1300	calBP	0.954		
中央トレンチ 5	炭化材	AaA	1,100±20	-27.91±0.35	1,098±21	σ	cal AD	900	-	cal AD	921	1050	-	1029	calBP	0.276	pal-10834	YU-6974
							cal AD	950	-	cal AD	982	1000	-	968	calBP	0.406		
						2σ	cal AD	893	-	cal AD	991	1057	-	959	calBP	0.954		
植栽痕トレンチ 5	炭化材	AaA	1,035±25	-25.28±0.40	1,037±23	σ	cal AD	991	-	cal AD	1019	959	-	931	calBP	0.682	pal-10830	YU-6970
						2σ	cal AD	973	-	cal AD	1028	977	-	922	calBP	0.954		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
4)AAAは酸ーアルカリー酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
5)暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。
6)暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
7)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

東側トレンチの試料番号3がcalAD 1,429～1,475、試料番号7がcalAD 887～983、中央トレンチの試料番号4がcalAD 575～650、試料番号5がcalAD 893～991、植栽痕トレンチの試料番号5がcalAD 973～1,028である。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

結果を第45表に示す。花粉化石はほとんど検出されず、わずかに中央トレンチの試料番号6より、壊れたマツ属が1個体検出されるにとどまる。シダ類胞子の含量も少なく、いずれの試料においても花粉・胞子数は1ccあたり100個体未満であった。

第45表　花粉分析・微粒炭分析結果

種　類	北東側トレンチ 3	北東側トレンチ 7	中央トレンチ 4	中央トレンチ 6	植栽痕トレンチ 5
木本花粉					
マツ属	−	−	−	1	−
シダ類胞子					
シダ類胞子	2	19	5	6	6
合　計					
木本花粉	0	0	0	1	0
草本花粉	0	0	0	0	0
シダ類胞子	2	19	5	6	6
合計	2	19	5	7	6
微粒炭数(個/cc)	<100	<100	<100	<100	<100
花粉・胞子数(個/cc)	<100	<100	<100	<100	<100

1)微粒炭数、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。
2)<100：100個未満。

また、残渣中に含まれる微粒炭数も少なく、いずれの試料においても1ccあたり100個体未満であった。わずかに検出される微粒炭は、全て母材推定が困難な不明型であり、木材組織や草本由来の組織をもつ個体は確認できなかった。

(3) 微細物分析

結果を第46表に示す。また、大型植物遺体各分類群の写真を図版1に、主な分類群の計測値を表3に示して同定根拠とする。

分析に供された6試料4,600cc(9,369g)を通じて、裸子植物1分類群(マツ属複維管束亜属)の葉が23個、被子植物6分類群(アカメガシワ属、イネ、スゲ属、ヤナギイチゴ近似種、タデ属、ナス属)の種実が86個の、計109個の大型植物遺体が同定された。炭化材は計0.80gが検出され、植栽痕トレンチ№5で最も多く(0.36g)、最大8.3mmを量る。分析残渣は、植物片、砂礫類などが確認された。

大型植物遺体群には、炭化していない保存状態が極めて良好な種実遺体が含まれる。SK25炭集中より確認されたヤナギイチゴ近似種、ナス属と、中央トレンチの試料番号4より確認されたタデ属は、後代の混入と判断されることから、考察より除外している。

第46表　微細物分析結果

分類群	部位・状態		北東側トレンチ 3	北東側トレンチ 7	中央トレンチ 4	中央トレンチ 6	植栽痕トレンチ 5	SK25 炭集中	備考
炭化葉・種実									
マツ属複維管束亜属	葉(頂部)	破片	−	−	−	−	−	1	長さ2.71mm
	葉	破片	−	−	−	−	−	22	最長3.54mm
アカメガシワ属	種子	破片	−	−	−	−	1	−	残存径2.56mm
イネ	穎(基部)	破片	1	−	−	−	−	−	
スゲ属	果実	完形	−	−	−	−	1	−	3面体,表面網目,長さ2.10mm,径1.56mm
合計			1	−	−	−	2	23	
その他									
炭化材			3.24	6.33	7.01	5.19	8.26	8.01	最大径(mm)
	>4mm		−	0.03	0.07	0.02	0.15	0.09	乾燥重量(g)
	4-2mm		0.00	0.01	0.05	0.01	0.21	0.15	乾燥重量(g)
炭化材主体	2-1mm		0.00	0.02	0.09	0.02	0.17	0.16	乾燥重量(g)
	1-0.5mm		0.01	0.02	0.27	0.02	0.15	0.15	乾燥重量(g)
砂礫主体	>4mm		−	0.27	0.86	0.47	−	−	乾燥重量(g)
	4-2mm		0.52	0.31	1.50	2.06	0.11	0.36	乾燥重量(g)
	2-1mm		1.22	0.74	4.58	5.07	0.15	1.56	乾燥重量(g)
	1-0.5mm		3.02	2.23	3.94	5.85	2.64	2.62	乾燥重量(g)
植物片主体			0.00	−	−	−	0.00	0.02	乾燥重量(g)
ヤナギイチゴ近似種	果実	完形	−	−	−	−	−	60	
		破片	−	−	−	−	−	20	
タデ属	果実	完形	−	−	1	−	−	−	2面体,表面平滑,長さ1.72mm,幅1.25mm
ナス属	種子	完形	−	−	−	−	−	1	長さ1.21mm,幅1.42mm
		破片	−	−	−	−	−	1	
分析量			600	1000	1000	600	1000	400	容積(cc)
			1263	2013	2009	1234	1966	884	湿重(g)

第 47 表　土壌理化学分析結果

試料名		土性	土色	pH (H_2O)	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	腐植形態(簡易法) Melanic Index [MI]	腐植酸の型型	全リン酸 P_2O_5 (mg/g)	全カルシウム CaO (mg/g)	鉄の形態 Fe_t (%)	Fe_d (%)	Fe_o (%)	活性度 Fe_o/Fe_d	結晶化指数 (Fed-Feo)/Fet	Mn_t (%)
北東側トレンチ	3	CL	10YR3/4　暗褐	7.4	0.49	0.84	0.07	7	1.80	B	3.86	2.86	3.71	0.82	0.20	0.24	0.17	0.09
	7	LiC	10YR3/4　暗褐	7.0	0.41	0.71	0.07	6	1.86	B	4.43	2.66	3.67	0.98	0.28	0.29	0.19	0.15
中央トレンチ	4	LiC	10YR3/4　暗褐	7.0	0.46	0.79	0.07	7	1.80	B	4.41	2.51	3.73	1.17	0.27	0.23	0.24	0.15
	6	LiC	7.5YR3/4　暗褐	7.1	0.39	0.67	0.09	4	－	－	5.48	2.93	4.92	1.13	0.27	0.24	0.17	0.13
植栽痕トレンチ	5	CL	10YR3/3　暗褐	7.3	0.54	0.93	0.08	7	1.73	B	4.76	3.44	3.97	0.96	0.27	0.28	0.17	0.14

1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)による。
2) 土性：土壌調査ハンドブック改訂版(ペドロジー学会編, 1997)の野外土性による。
CL･･･埴壌土(粘土15～25%、シルト20～45%、砂30～65%)
LiC･･･軽埴土(粘土25～45%、シルト0～45%、砂10～55%)
3) 腐植：有機炭素×1.724。
4) C/N：有機炭素/全窒素。
5) Fet：全鉄(フッ化水素酸分解による)。
6) Fed：ジチオナイトクエン酸可溶鉄。
7) Feo：酸性シュウ酸塩可溶鉄。
8) 活性度：Feo/Fed。
9) 結晶化指数：(Fed-Feo)/Fet。
10)Mnt：全マンガン(フッ化水素酸分解による)。

炭化大型植物遺体群は、木本 2 分類群 (マツ属複維管束亜属、アカメガシワ属)24 個、草本 2 分類群 (イネ、スゲ属)2 個から成る。栽培種は、北東側トレンチの試料番号 3 よりイネの穎が 1 個確認された。栽培種を除いた分類群は、SK 0 25 炭集中より針葉樹で常緑高木のマツ属複維管束亜属の葉が 23 個と、植栽痕トレンチの試料番号 5 より広葉樹で常緑または落葉小高木のアカメガシワ属の種子が 1 個、中生草本のスゲ属の果実が 1 個の、計 25 個が確認された。なお、北東側トレンチの試料番号 7、中央トレンチの試料番号 4、6 の 3 試料からは、炭化大型植物遺体が確認されなかった。

(4) 土壌理化学分析

結果を第 47 表に示す。土色は各試料共に暗褐色を呈するやや黒色味がかった土色である。野外土性(ペドロジー学会編 ,1997）は CL（埴壌土）から LiC（軽埴土）である。pH（H2O）は 7.0-7.4 で中性から微アルカリ性である。

腐植含量は 0.67%-0.93% であり、最も少ない試料は中央トレンチの試料番号 6 であるが大きな差異はない。全窒素量は 0.07%-0.09% である。C/N 比は 4-7 であり、腐植含量の少ない中央トレンチの試料番号 6 で最も低い。MI は中央トレンチの試料番号 6 では抽出される腐植が少なく、P 型か Rp 型のいずれかの判別に至らなかった他の試料は、B 型腐植酸と判定される。検出された試料の中で、植栽痕トレンチの試料番号 5 では、A 型腐植酸（1.70 以下）に限りなく近い値であった。

全リン酸は、中央トレンチの試料番号 6 で 5.48mg/g と最も多く、北東側トレンチの試料番号 3 で 3.86mg/g と最も少ない。他の試料は 4.41-4.76mg/g である。全カルシウムは植栽痕トレンチの試料番号 5 で 3.44mg/g と最も多く、他の試料は 3.0mg/g 以下と少ない含有量である。

鉄の形態分析からは、全試料で活性度が低く、結晶化指数も低いことが示された。全鉄量は中央トレンチの試料番号 6 試料で 4.92% と最も多く、他の試料は 3.67-3.97% と一定である。マンガンは北東側トレンチの試料番号 3 で 0.09% と最も少なく、他の試料では 0.13-0.15% と同様である。

4　考察

(1) 堆積層の年代

放射性炭素年代測定の結果をみると、北東側トレンチの試料番号 7 は、補正年代で 1,120 ± 20yrBP、暦年代で calAD 887 ～ 983、試料番号 3 は、補正年代で 435 ± 20yrBP、暦年代で calAD 1,429 ～ 1,475 の値を示した。このことから、これらの堆積層は 9 世紀後半～ 10 世紀後半、および 15 世紀頃の堆積物と考えられる。

一方、中央トレンチをみると、試料番号 5 は補正年代で 1,100 ± 20yrBP、暦年代で calAD 893 ～ 991、試料番号 4 は補正年代で 1,445 ± 25yrBP、暦年代で calAD 575 ～ 650、の値を示し、堆積層序と

年代値が逆転する。試料番号 4 採取層準は、北東側トレンチの試料番号 6、7 採取層準に対応するとされることから、本層準に古い時代の炭化材が混入していた可能性が想定される。よって、中央トレンチは概ね 9 世紀末～ 10 世紀末以降の堆積物の可能性が高い。

植栽痕トレンチの試料番号 5 は、補正年代で 1,035 ± 25yrBP、暦年代で calAD 973 ～ 1,028 の値を示すことから、10 世紀後半～ 11 世紀前半頃の堆積物と推測される。このことは、パリノ・サーヴェイ株式会社 (2005) の中で示された、普天間飛行場の中位段丘下位面に点在する谷埋め堆積物最下部の年代測定結果と調和し、この中で指摘された耕作・造成が活発化した時期の土砂流出による谷埋めの時期を示すものと推測される。

(2) 植物資源利用と周辺植生

北東側トレンチ、中央トレンチ、および植栽痕トレンチのいずれの試料においても、花粉化石はほとんどあるいはまったく検出されなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている (中村 ,1967; 徳永・山内 ,1971; 三宅・中越 ,1998 など)。唯一検出されたマツ属は、花粉外膜が破損し、破片として確認された。これらのことを考慮すると、堆積後の経年変化により、花粉化石やシダ類胞子が分解・消失したことが窺える。

また、土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる (例えば安田 ,1987; 山野井 ,1996; 井上ほか ,2002)。今回も、層位ごとの変化が期待されたが、いずれの試料の微粒炭も 1ccあたり 100 個体未満と少なく、層位ごとの変化を確認することができなかった。

一方、微細物分析の結果では、北東側トレンチの試料番号 3 より栽培種のイネの炭化穎が確認された。当時利用された植物質食料と示唆され、火を受けたとみなされる。

栽培種を除いた分類群は、SK025 炭集中より常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属 (おそらくリュウキュウマツ) と、植栽痕トレンチの試料番号 5 より常緑または落葉広葉樹のアカメガシワ属、中生草本のスゲ属が確認された。当時の調査区周辺の二次林や明るく開けた草地環境に生育していたと考えられる。

(3) 土壌の理化学性

遊離鉄の存在形態は、自然環境条件の違いにより種々さまざまな化合物を形成する。土壌中で二次的に生成した非ケイ酸塩態の鉄化合物を遊離鉄という。遊離鉄化合物は、非晶質・結晶質の 2 つの異なった形態で存在し、酸性シュウ酸塩可溶鉄は主に非晶質を、ジチオナイト可溶鉄は非晶質の鉄に加えて、ゲータイト・ヘマタイトを溶解するため、差し引きにより結晶質鉄の尺度とみなすことができる。また、鉄の活性度は、酸性シュウ酸塩可溶鉄とジチオナイト可溶鉄の比から表し、主要な土壌生成過程の一つである遊離酸化鉄の結晶化の尺度として用いる。結晶化指数とは、ジチオナイト可溶鉄から酸性シュウ酸塩可溶鉄を差し引き、全鉄との比により表す。遊離鉄の結晶化を伴った風化あるいは土壌生成の発達程度を表す尺度として用いる。遊離鉄の活性度と結晶化指数を用いて、褐色森林土と黄褐色森林土、赤色土を判別することができる。

今回の分析試料は、鉄の形態分析により全試料が黄褐色森林土に分類され、遊離酸化鉄のうちの結晶質鉄の占める部分が、非晶質鉄に比べ多いことが示された。全鉄から占める遊離鉄の割合が少なく、さらに、結晶化指数が低いことから、理化学性からみると風化や土壌生成が進んでいるとは捉え難い。MI が中央トレンチの試料番号 6 を除いて検出されたことから、腐植化度が高く、有機物の分解が進行していることが示された。中央トレンチの試料番号 6 に関しては、炭素率やリン酸量や鉄全量に他の試料と違いがあることから、他の 4 試料とやや生成環境が異なると考えられる。これは現地での確認において島尻マー

ジが母材となる堆積層と観察されたので、所見と調和するものと言ってよい。

以上のことから、北東側トレンチの試料番号 3、7、中央トレンチの試料番号 4、植栽痕トレンチの試料番号 5 の生成時期は、腐植化度の高さから、耕作や火入れ等の人為的な影響が存在する可能性が考えられる。ただし、今回の結果からは結果にばらつきがみられ、これ以上の具体的な言及はできなかった。一方、中央トレンチの試料番号 6 の島尻マージを母材とする堆積層と想定されるので、生成環境は他の試料と異質であると考えられる。

今後は、今回の分析結果を踏まえた詳細な土層観察により、想定できる環境の推定に基づく分析を実施し、比較検討が望まれる。

引用文献

Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

土壌標準分析・測定法委員会編 ,1986, 土壌標準分析・測定法 . 博友社 ,354p.

藤木利之・小澤智生 ,2007, 琉球列島産植物花粉図鑑 . アクアコーラル企画 ,155p.

パリノ・サーヴェイ株式会社 ,2005, 基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　基地内遺跡ほか発掘調査事業－普天間飛行場基地内－遺跡発掘事前総合調査 . 宜野湾市教育委員会 , 第 36 集 ,81-100.

本名俊正・山本定博 ,1992, 腐植の簡易分析法 . 土壌構成成分解析法 . 博友社 ,7-35.

井上　淳・吉川周作・千々和一豊 ,2002, 琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について . 日本第四紀学会講演要旨集 ,32,74-75.

石川茂雄 ,1994, 原色日本植物種子写真図鑑 . 石川茂雄図鑑刊行委員会 ,328p.

三宅　尚・中越信和 ,1998, 森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態 . 植生史研究 ,6,15-30.

永塚鎮男 ,1973, 褐色森林土・黄褐色森林土・赤色土における遊離酸化鉄の存在形態について . ペドロジスト ,17,70-83.

中村　純 ,1967, 花粉分析 . 古今書院 ,232p.

中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2000, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版). 東北大学出版会 ,678p.

農林省農林水産技術会議事務局監修 ,1967, 新版標準土色帖 .

ペドロジー学会編 ,1997, 土壌調査ハンドブック改訂版 , 博友社 .

Reeuwijk, L. P. van,1986,PROCEDERES FOR SOIL ANALYSIS.International Soil Reference and Information Centre.106p.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J.,2013,IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon,55,1869–1887.

島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.

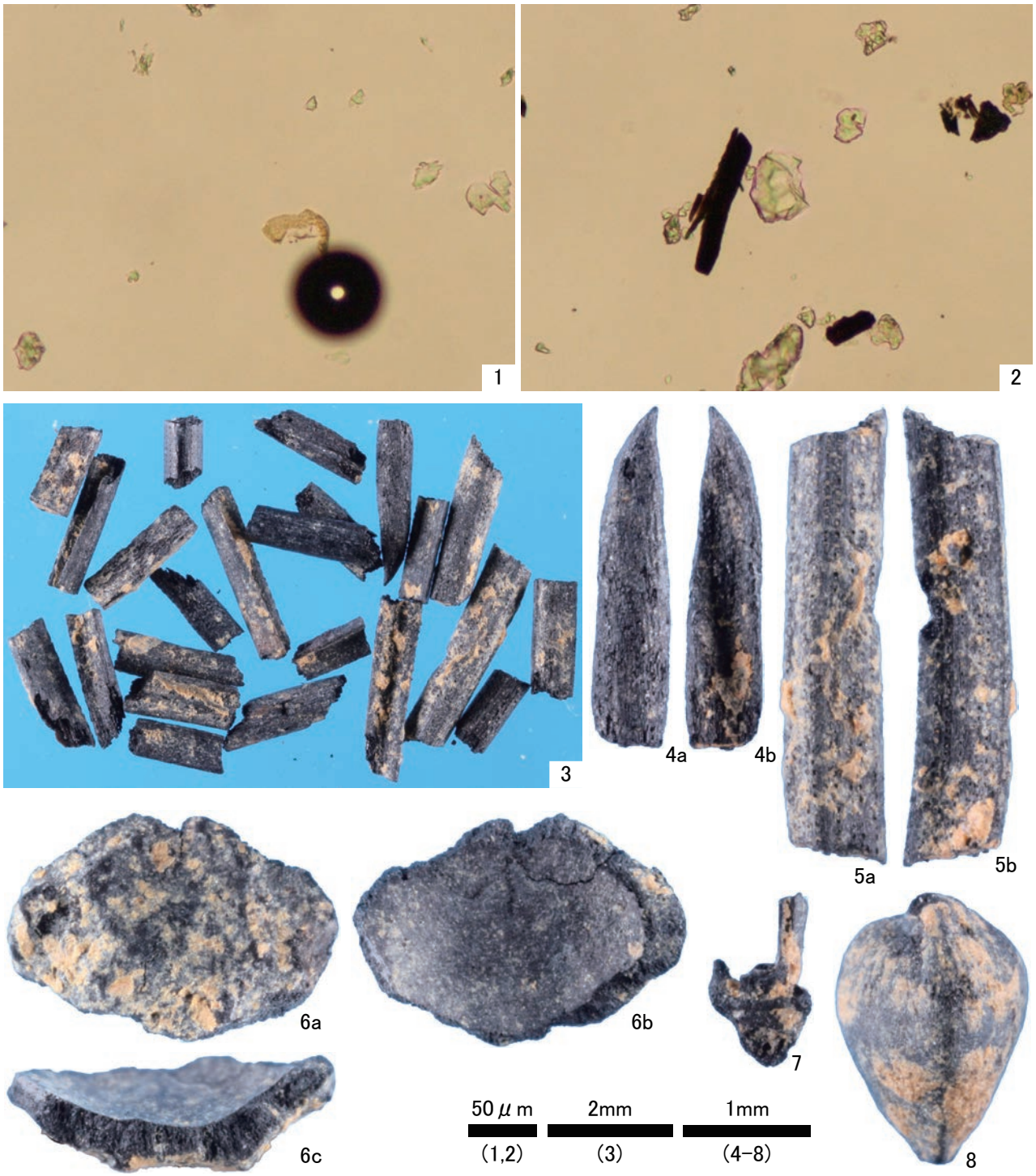
Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文 ,2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実 632 種－ . 誠文堂新光社 ,272p.

徳永重元・山内輝子 ,1971, 花粉・胞子 . 化石の研究法 , 共立出版株式会社 ,50-73.

上原冨士男 ,2000, 宜野湾市の地形・地質・水 . 宜野湾市史　第 9 巻　資料編 8　自然 .55-124.

山野井　徹 ,1996, 黒土の成因に関する地質学的検討 . 地質学雑誌 ,102,526-544.
安田喜憲 ,1987, 文明は緑を食べる , 読売新聞社 ,227p.



1 . 花粉分析・微粒炭分析プレパラート内の状況(中央トレンチ;6)
2 . 花粉分析・微粒炭分析プレパラート内の状況(植栽痕トレンチ;5)
3 . マツ属複維管束亜属 葉(SK25 防空壕;炭集中)
4 . マツ属複維管束亜属 葉(頂部)(SK25 防空壕;炭集中)
5 . マツ属複維管束亜属 葉(SK25 防空壕;炭集中)
6 . アカメガシワ属 種子(植栽痕トレンチ;5)
7 . イネ 穎(基部)(北東側トレンチ;3)
8 . スゲ属 果実(植栽痕トレンチ;5)

図版 139　花粉分析・微粒炭分析・大型植物遺体

第２節　神山古集落出土の植物遺体分析（概報）

千田 寛之

遺跡名：神山古集落
所在地：普天間飛行場内
調査機関：沖縄県立埋蔵文化財センター
調査担当者：瀬戸 哲也
遺跡の年代：グスク時代、近世、近代、第二次世界大戦
分析担当者：千田 寛之

１　バックグラウンド

神山古集落は宜野湾市普天間飛行場内に所在する集落跡で、沖縄県立埋蔵文化財センターにより 2017 年３月 17 日～８月 17 日まで発掘調査が実施されている。調査ではピットや土坑、石組み、石敷き、井戸、道跡などの遺構が検出されているほか、第二次世界大戦に関連する遺構も確認されている。

分析を行ったのはＣ地区ＳＫ 004（防空壕）より回収された炭化物である。調査担当者の瀬戸によると、炭化物は陶磁器などの人工遺物や木炭・炭化した布と共に検出されており、出土状況から沖縄戦時代の炭化物と考えられるという。

なお、今回の分析は時間的な制約から種子の出土傾向を把握することを目的としたため、概報という形で報告を行う。

２　分析方法

植物遺体の分析にあたっては双眼実体顕微鏡（Nikon SMZ745）を用いて試料の観察を行い、適宜、現生標本や文献（中山ほか 2004、吉崎・椿坂 2001、小畑 2011）との比較検討を行った。今回は種子の出土傾向を把握することを目的としているため、分析に際しては胚やヘソといった種の同定に必要な部分が残存していて、尚且つ変形や破損が少なく、種子全体のプロポーションを観察することが可能な保存状態の良い個体のみを選別し分析対象とした。

図版１掲載の写真は双眼実体顕微鏡に顕微鏡撮影用デジタルカメラ（CU-2500LS ／ 500 万画素）を接眼し撮影を行っている。

３　検出された植物遺体

回収された炭化物は計 226.79g であった。炭化物は全体的に熱による影響を受けており、写真１のように炭化物同士が癒着している状況も確認された。癒着しているものも含めて炭化物の殆どは植物遺体で、そのほか炭化した竹・木や炭化した布の破片も検出されている。なお、植物遺体は破損や膨張による変形をしている個体が多く見られた。次に同定された植物遺体について所見を述べる。

図版 140　炭化物の癒着状況

写真２　アワ　　写真３　ダイズ　　写真４　ソラマメ属

背面　腹面　　腹面　側面　　腹面　側面

図版 141　神山古集落ＳＫ 004 出土の植物遺体

アワ　Setaria italica (L.) Beauv.

アワ（写真２）の種子が完形７点確認されている。種子はいずれも有ふ果の状態で出土している。全体的なサイズやプロポーションに加え、表面にアワ特有の「乳頭突起」細胞（椿坂 1993）が存在することからアワと同定した。写真２のサイズ（mm）は長さ 1.8 ×幅 1.3 ×厚さ 1.1 である。

ダイズ　Glycine maX（L.）Merr.

ダイズの果実を完形 52 粒検出した。果実は楕円形を成しており、へその形態は露出タイプで幼根・胚軸を確認できる個体が多く存在している。全体的なプロポーションやへその形態からダイズと同定したが、現生ダイズと比較したところサイズが小さい個体が殆どであった。これが品種の違いによるものなのか、生育状況の差によるものなのかは今後の検討課題である。写真３のサイズ（mm）は長さ 7.3 ×幅 5.8 ×厚さ 4.3 である。

ソラマメ属　Vicia L.

ソラマメ属の果実を 69 粒検出した。果実は長楕円形を成し、へその形態は露出タイプである。全体的なプロポーションやへその形態からソラマメ属と判断した。種皮に覆われている個体も存在する。写真４のサイズ（mm）は長さ 8.9 ×幅 5.5 ×厚さ 6.5 である。

4　まとめ

今回行った分析は、時間的な制約から種子の出土傾向を把握することを目的とした。分析に際しては胚やへソといった種の同定に必要な部分が残存しており、変形や破損の少ない保存状態の良い個体のみを選別し同定を行った。以上の条件で分析を行った結果、アワ（有ふ果）７点、ダイズ 52 点、ソラマメ属 69 点を同定した。次に、今回の分析対象から除外した植物遺体について簡単な所見を述べる。これらは熱による影響を受けているものが多く、発泡による変形や破損・癒着などが見られた。種の同定が不可能なほど変形・破損している個体も存在するが、同定が可能な個体の殆どはマメ科の種子と思われる。また、癒着した状態になっているものは保存状態が悪く同定が難しいが、マメ科の範疇に入る個体が多いように思えた。

第 48 表　Ｃ地区ＳＫ 004 出土植物遺体の集計（暫定）

試料No	地区	遺構	層	炭化物量（g）	アワ	ダイズ	ソラマメ属	合計
					粒	粒	粒	粒
1	C地区	SK004	覆土	4.51		8		8
2	C地区	SK004	覆土	123.8	4	15	2	21
3	C地区	SK004	覆土	98.48	3	29	67	99
合計				226.79	7	52	69	128

以上のことから、植物遺体の多くはマメ科のダイズもしくはソラマメ属の種子で、僅かにアワが含まれる傾向が見られた。しかしながら、今回の分析は簡易的なものであることから、今後詳細な分析を行うことが必要であろう。

参考文献

沖縄県立埋蔵文化財センター（編）2018 「神山古集落」『発掘調査速報 2018』pp.4-7.

小畑 弘己 2011「マメ科種子同定法」『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社 pp.79-107.

椿坂 恭代 1993 「アワ・キビ・ヒエの同定」『吉崎昌一先生還暦記念論集　先史学と関連科学』吉崎昌一先生還暦記念論集刊行会（編），pp.261-281.

中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志 2004「日本植物種子図鑑 改訂版」東北大学出版会

吉崎 昌一・椿坂 恭代 2001「先史時代の豆類について - 考古学の立場から -」『豆類時報』№ 24, 財団法人 日本特産農産物協会（編）, pp.20-28.

図版 142　ＳＫ 004 出土木材

第３節　神山古集落出土金属製品保存処理

出土した金属製品の中で、特徴的な２点について保存処理業務を株式会社イビソクに委託した。その状況について提出された記録書に基づき記載する。

1　保存処理対象遺物の所見

遺物は２点とも鉄製品である。いずれも比較的新しい遺物のため残存は良好である。業務上の処理番号を記載し、所見を記す。 法量は第 49 表、処理前後の状況は図版 143。

１（遺物番号 393）は、鉄製鍬である。内部にメタルが残存し、表面には黄褐色の分厚い錆が固着する。刃先や湾曲部の芯鉄が一部露出する。X 線透過写真から刃元に目視では見えない銘が刻まれているのが観察できる。

２（遺物番号 256）は、鉄製滑車である。索輪、軸、軸受け、外帯、鉤を別造りにして組み合わせている。滑車部は鋳鉄製と考えられる。また、軸を中心とした同心円状の稜線が確認できる。軸受け部分も鋳鉄製で、花形の意匠である。内部にメタルが残存し、表面には黄褐色の分厚い錆が固着する。軸付近に 18 ㎝にわたってひび割れがあり、滑車の縁は一部欠損する。

図版 143　保存処理対象遺物（左：鍬 393　右：滑車 256　上：処理前　下：処理後）

第 49 表　保存処理対象遺物

Ｎｏ	遺物番号	種類	材質	法量（cm・ｇ）				
				処理	現存長	最大幅	最大厚	重量
1	393	鍬	鉄	前	28.8	13.8	6.9	1775.0
				後	29.3	14.5	6.8	1620.8
2	256	滑車	鉄	前	35	27.2	10.5	3575.0
				後	35	27.5	10.5	2956.6

２　処理工程

保存処理対象の遺物は鉄製品２点である。 工程は以下の順で行った。

（１）処理前調査・記録→（２）クリーニング→（３）脱塩処理→（４）安定化処理→

（５）樹脂含浸・塗布→（６）仕上げ→（７）処理後調査・記録→（８）保存処理報告書作成

２－１　処理前の調査・記録

処理前後の遺物の状態を記録するため、遺物 1 点ごとに表裏 1 カットずつ、フルサイズ一眼レフデジタルカメラを使用して写真撮影を行った。

X 線透過検査装置（リガク製ラジオフレックス 200EGM2）を使用して遺物の透過写真を撮影し、肉眼では判別できない遺物の輪郭やひび割れの有無、密度状態を調査した。撮影条件は管電圧：140 ～ 200kV、管電流：5mA、照射時間：30 秒間、照射距離：0.75 mである。撮影媒体にはイメージングプレート（富士フイルム製 ST-VI）を使用し、IP スキャナー（リガク製 CR-1012）で 25 μ m ピッチで読み取った。

２－２　クリーニング

サンドブラストで表面の泥土を除去した。その後、デザインナイフ、精密グラインダー（リューター）などを併用し、固着した泥土と不要な錆の除去を行った。またエタノール･キシレン･酢酸エチルを２：２：１の割合で混合した洗浄液で錆や汚れを洗浄した。

亀裂部分は不織布をアクリル樹脂パラロイド B-72 10% アセトン溶液で表打ちして養生した。

２－３　脱塩処理・安定化処理

脱塩処理は高温高圧脱酸素水法（オートクレーブ法）で行った。純水にホウ酸・ホウ砂・BTA を溶かしたインヒビター溶液を使用し、オートクレーブ DSM-140（平山製作所製）で処理を行った。真空脱気後 121℃２時間の加熱加圧処理を行い、自然冷却した。これを５回繰り返した。

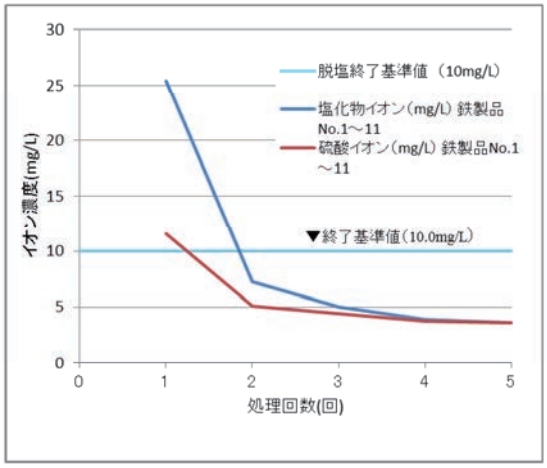
塩化物イオンおよび硫酸イオンの測定には、イオンクロマトグラフィー Dionex Aquion（サーモフィッ

第 50 表　測定条件

陰イオン（アニオン）測定			
分離カラム	IonPacAS12A-SC 4mm	試料注入量	5mL（オートサンプラー、5mL バイアル使用、1.5mL/1 回注入）
ガードカラム	IonPacAG12A-SC 4mm		
溶離液	炭酸ナトリウム　2.7mmol/L 炭酸水素ナトリウム　0.3mmol/L	サプレッサ	Dionex ERS 500 サプレッサ アニオンオートサプレッサ リサイクルモード
溶離液流量	1.5mL/min		
試料導入量	25μL		

第 51 表　脱塩溶液の陰イオン溶出濃度の経過

測定回数	塩化物イオン (mg/L) 鉄製品 No. 1～11	硫酸イオン (mg/L) 鉄製品 No. 1～11
開始	－	－
1	25.43	11.56
2	7.28	5.10
3	5.00	4.39
4	3.88	3.75
5	3.59	3.58



シャーサイエンティフィック社製）を使用した（PL. 1）。脱塩処理の終了点は、溶出した陰イオンの測定値が1リットルあたり10mg(濃度換算10ppm)以下を目安とした。最終的な塩化物イオン濃度は1リットルあたり3.59mg/L、硫酸イオン濃度は1リットルあたり3.58mg/Lである（PL. 2，3）。脱塩後は脱水処理としてエタノールに24時間浸漬した。処理後は105℃ 24時間の加熱乾燥を行った。

乾燥後、金属露出面の腐食防止、安定化のため、水・エタノール等量混合溶液に溶かしたタンニン酸2.5％溶液を2度塗布した。1回塗布ごとに105℃ 1週間の加熱乾燥を行った。

２－４　脂含浸・塗布

鉄製品にはアクリル樹脂パラロイドNAD-10 30%ソルベントナフサ溶液を使用し、0.1mPa以下で2時間減圧して溶液注入後2時間静置し、取り出し後24時間加熱乾燥を行った。これを2回繰り返した。その後表面保護を強固にするため、減圧含浸に使用した溶液を2～3倍希釈して2度塗布含浸した。

２－５　仕上げ

光沢を抑えるため、仕上げに表面処理としてつや消しのアクリル樹脂スプレーを1～2度噴霧した。その後60℃ 24時間の加熱乾燥を行った。

参考文献

*1 松井敏也 2009『出土鉄製品の保存と対応』同成社

第52表　各工程に検出した薬剤と検出条件

使用工程	種類	品名	使用条件
クリーニング	溶剤	エタノール IP (和光純薬工業)	エタノール・キシレン・酢酸エチルを２：２：１の割合で混合した洗浄液で錆や汚れを洗浄した。
	溶剤	キシレン (和光純薬工業)	
	溶剤	酢酸エチル (和光純薬工業)	
	アクリル樹脂	パラロイド B-72 (Rohm&Haas)	アセトンに10%濃度で溶かしたものを、ひび割れの保護のために塗布。
	溶剤	アセトン (和光純薬工業)	
脱塩処理	防錆剤	ベンゾトリアゾール (和光純薬工業)	オートクレーブ法でのインヒビターとして使用。ホウ砂0.2%, BTA0.1%濃度。
	防錆剤	ホウ砂 （和光純薬工業）	
	防錆剤	ホウ酸 （和光純薬工業）	
安定化処理	防錆剤	タンニン酸 （米山薬品工業）	金属露出面の保護・錆の安定化のため使用。2.5%濃度。
樹脂含浸・塗布	アクリル樹脂	パラロイド NAD-10 (Rohm&Haas)	ソルベントナフサに30%濃度で溶かしたものを含浸に使用。減圧0.1MPa以下２時間、常圧２時間静置。含浸回数２回。
	溶剤	ソルベントナフサ SN-1 (和光純薬工業)	
仕上げ	つや消し塗料	アスペン　ラッカースプレー　つや消しクリヤ （アサヒペン）	アクリル樹脂の透明・つや消しスプレー。表面処理として２度噴霧した。

1　Ｘ線撮影

2　処理前記録作業

3　処理前記録撮影

4　クリーニング

5　脱塩処理

6　安定化処理

7　樹脂含浸

8　樹脂塗布

図版 144　作業工程

第５章　総括

これまで、神山古集落の発掘調査成果を遺構・遺物ごとに述べてきたが、ここでは両者を総括してその特徴と変遷を述べることにしたい。

本遺跡では、集落・生業に関連する建物や井戸、石やレンガ囲いなどと、壕やタコツボなどの沖縄戦に関連する遺構が確認された。現地調査において軍事遺構を研究している伊藤厚史氏、県内米軍基地内遺跡の調査や近世・近代の遺跡全般に精通する坂井秀弥氏の調査指導を戴いた。伊藤氏からは交通壕の周辺や中間・終点にはいわゆるタコツボ（小銃・機銃用などの掩体）などが見られること、坂井氏は軍事遺構だけでなく屋敷地の区画を表す地形や遺物の特徴などを意識する必要性などを指摘された。

以上の点を踏まえて、まず本遺跡の特徴の一つである沖縄戦に関連する遺構について、その歴史的背景や他事例なども踏まえてその性格・内容をより明確にすることから述べていきたい。なお、各地区で 001 から遺構番号を付しているため、本章では例えばＡ地区のＳＫ 001 ならＡ－ＳＫ 001 と表記する。

１．沖縄戦関連遺構について

神山古集落の歴史的背景については、第２章第２節で記述したように、1944 年８月頃に第 62 師団の野戦倉庫が配備され日本兵が民家に駐屯し、陣地の構築などが行われたとされる。その陣地の具体的な様子を窺える資料として、1945 年１月の米軍撮影の空中写真がある（第 119 図）。これを見ると、神山集落の北西に蛇行する狭い溝とその先端が少し広くなった空間が確認される。

これらは塹壕と呼ばれることが多いが、当時の日本陸軍の陣地構築マニュアルである『野戦築城教範』では、交通壕と掩体と記載されるものに相当する（陸軍省 1943、第 121 図）。前者の交通壕は幅が底面で 0.4 ～ 0.6 m、深さが 1.7 mで立つことが可能な一列用、1.0 mの屈伸用などがあり、地形に沿って作られまた分岐点も見られる。後者の掩体とはいわゆる掩体壕のように飛行機を格納するものをイメージするが、軍用語としては戦車や大砲等の武器、兵士が隠れるいわゆるタコツボも含めたものである。それを踏まえて神山北側の空中写真を見ると、交通壕の先端に見られる空間は小型と大型があり、前者は小銃、機関銃や擲弾筒用掩体、後者は戦車用掩体か小・中隊長指揮所、作業所などと考えられる。

今回の調査では、道１・２、Ｃ－ＳＤ 003 で見られた側溝は直線的ではあるが幅は共通しており、また底面には凹凸も見られ通常の側溝とは明らかに異なる。さらにＡ－ＳＦ 001 のように部分的に若干幅が広くなった空間があり、それは待避所と考えられる。つまり、空中写真で見られた集落外側だけでなく、集落内での戦闘を想定した陣地構築がなされたことが窺える。そうなると、今回確認された集落内の交通壕などの構築は住民が周辺の洞穴などに避難した３月以降の可能性が高いと考えられる。他府県においても、交通壕は丘陵上に確認されることが多かったが（第 120 図）、平地部は戦後の開発で消失してしまうからであり、米軍基地内では大規模な削平を受ける一方、一気に埋め立てられることもあり、今回のように接収された戦前の集落跡で検出されることも想定する必要がある。

タコツボであるが、Ａ－ＳＫ 041・078、Ｃ－ＳＫ 020 では『野戦築城教範』にあるように、小銃用掩体に見られる穴から昇る際の足掛かりが見られた。今後の沖縄における近代集落の調査では、土坑の壁面の窪みにも留意していく必要があろう。なお、Ｃ－ＳＫ 020 では軍靴や空缶などが出土しており（図版 122）、直接この場所での日本兵の行動を示すかは分からないが、当時の戦場をイメージさせるものと言えよう。また、道１側溝にはＡ－ＳＫ 045、Ｃ－ＳＤ 003 にはＣ－ＳＫ 028 など交通壕に取り付くものや、Ａ－ＳＫ 052･53・81 などの長大な土坑については明確な用途は限定できないが、戦車掩体や作業所など日本軍に関連する遺構であったことも想定すべきと思われる。

次に壕について検討したい。壕は天井部を有するものとして、Ａ地区ではＳＫ 066・068 の他、ＳＫ 010 の東と北側、Ｂ地区ではＳＫ 043・051、Ｃ地区ではＳＫ 004・027・040 で確認されている。これらの立地は推定される屋敷地内の端に位置しており、戦前の空中写真を踏まえると建物の周囲を囲う屋敷林付近に構築されたことが考えられる。その形態の多くは長さ３～５ｍで直進して奥側に部屋があるタイプであるが、壕口を２つもつ平面コ字形のＢ－ＳＫ 051、Ｈ字形のＣ－ＳＫ 004、他の遺構と連結するものは２つの部屋をもつＡ－ＳＫ 010、階段を下り３つの部屋をもつＣ－ＳＫ 027、交通壕Ｃ－ＳＤ 003 からＣ－ＳＫ 028 に接する形で始まり分岐する全長 16 ｍのＣ－ＳＫ 040 がある。この他、Ｃ－ＳＫ 025 は深さ 60cm と浅いが、平面Ｈ字形でＣ－ＳＫ 004 と類似している。壕には建物内の土間や畳下に構築される場合もあるので、これも壕の可能性が高い。

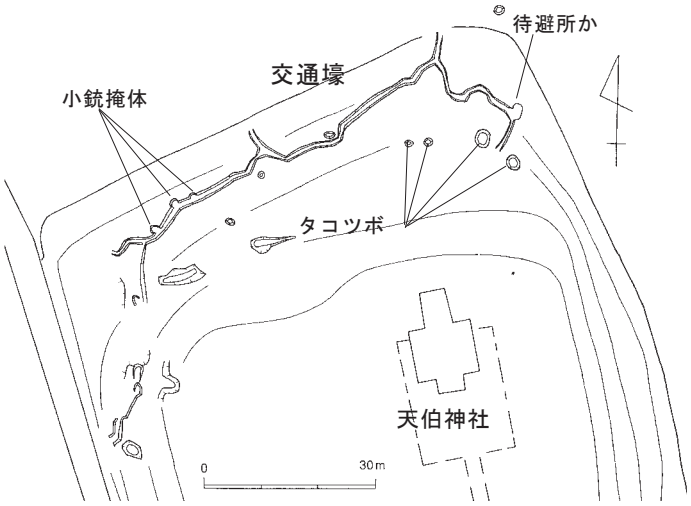
このような本遺跡の壕であるが、先述したように交通壕と連結するものもあることから多くは日本軍の構築・利用などの関与があったものと考えたい。ただ、沖縄でも民間人が屋敷地の隅や家屋内に防空壕を構築しているので（沖埋文 2015）、単純なタイプも見られることから元々住人が構築した壕を日本軍が利用されたなども考えられるかもしれない。また、壕からは米軍のものと考えられる黄燐弾（318 ほか）や手榴弾（188 ほか）の破片が出土しており、この場所で使用されたかは分からないが、少なくとも周辺で利用されたことは確かであろう。

また壕の用途を考えるために、遺物組成の検討も試みた（第 53・54 表）。これにより壕からは全般的に沖縄産無釉陶器壺が多く出土しており、その用途は水・酒・調味料などを貯蔵していたことが推測されよう。また、Ｃ－ＳＫ 004 では、アワ、ダイズ、ソラマメ属、Ｃ－ＳＫ 025 ではヤナギイチゴ属、タデ属、ナス属の種子が出土している。ただ、これらは民間・軍のどちらも使用・消費するものであるため、

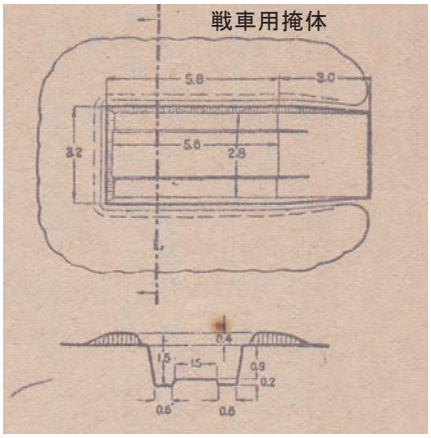
第 119 図　神山集落周辺交通壕等陣地（1945 年１月）

その遺構の用途を必ずしも限定できない。ただ、Ｃ－ＳＫ 004 は砥部産・瀬戸美濃系などの同類の碗・皿類がかなり大量に出土しているが、埋納というよりも一気に廃棄したような状況である。またＣ－ＳＫ 025 では、あまり沖縄に見られない角皿（642 ～ 645）のほか、小杯や徳利瓶、香炉、スプーンなど酒や嗜好に関する食器が出土しており、壕内における避難生活の一般的なイメージからは若干異なる印象を受ける（図版 126・129）。つまり、遺物の出土状況からも日本軍の関与を考えたくなるのである。

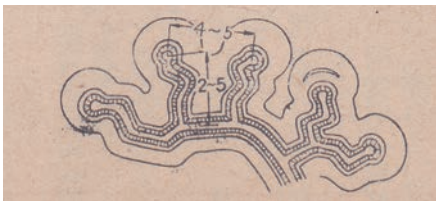
なお、日本軍に関連する可能性がある遺物として、星が線刻される銅板（323）、測量機器用かと思わ

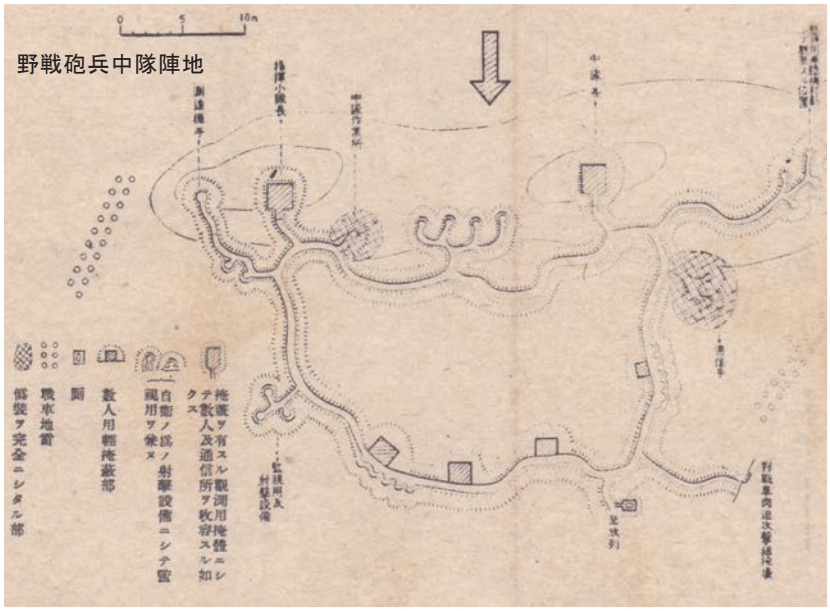


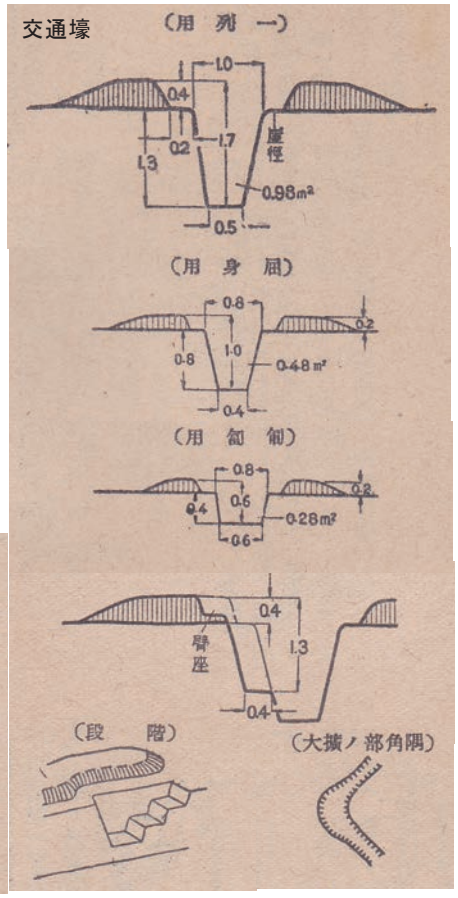
第 120 図　愛知県豊橋市天伯町豊受地点陣地跡
（伊藤 2004 より所収第 76 図の一部を引用し加筆）

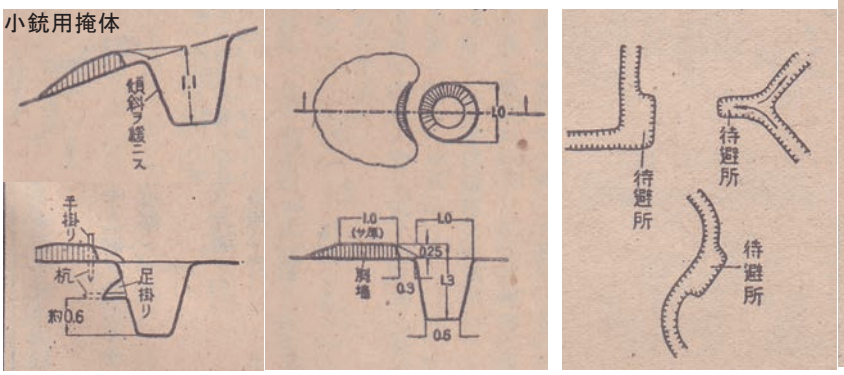


交通壕と小銃用掩体の連結









第 121 図　『野戦築城教範』における各種掩体・交通壕の形態（陸軍省 1943）

れる三脚（330）、軍用ヨードチンキのものと考えられる青銅製栓（622）などがある。また、瀬戸・美濃系の湯たんぽ（319）も沖縄では類例は探せておらず、日本兵などが持ちこんだものかと思われる。

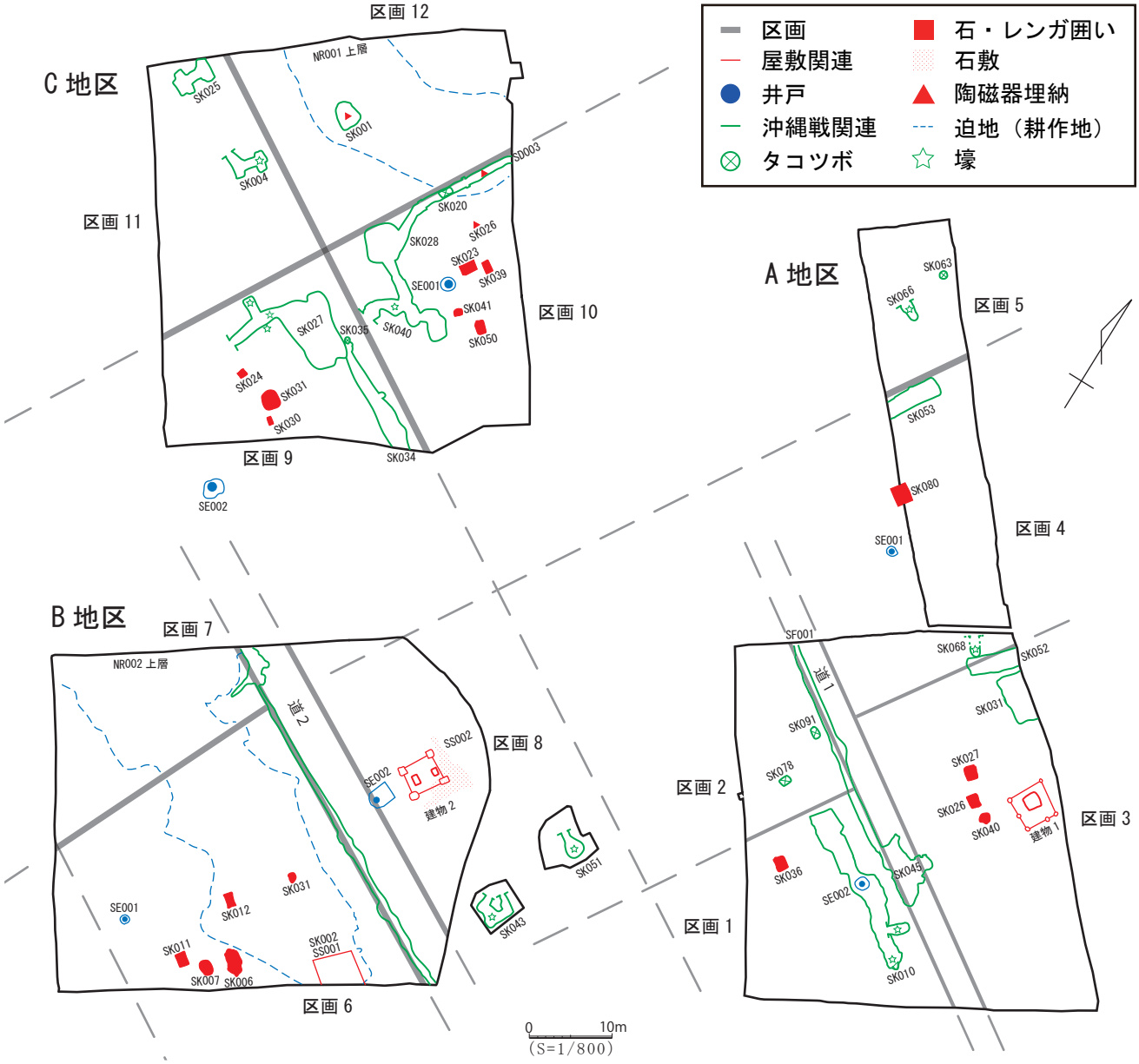
先述した神山集落における歴史的背景から考えると、本遺跡で確認された壕などに日本兵が潜みながら上陸戦に備えていた姿が想像される。だが、このような解釈はあくまでも状況証拠からの想像であり、沖縄における戦前の集落跡の調査時例を検証していくことで、より豊かで確かな地域の歴史が追究されていくものであろう。

2．神山古集落の変遷

最後に、今回の調査で判明した神山古集落における変遷について時代順にまとめる。

グスク時代　B－NR 002、C－NR 001 という迫地内で植栽痕とされるピット群を確認しており、第4章第1節での放射性炭素年代測定結果や従来の類似遺構から、概ねグスク時代と考えられる。ただ、この遺構の下にも炭や焼土もしくは土器片を含む堆積層があるので、さらに古い時代の遺構が周辺にある可能性は考えられる。遺物では、石器や 15 ～ 16 世紀の陶磁器が出土していることも補強材料であろう。

近世　遺物では本土産近世陶磁器や清代青花などがあり、グスク時代のものより多い。しかしながら、明



第 122 図　神山古集落近代遺構概念図

第 53 表　主要遺構出土遺物組成（１）

Ａ－ＳＫ 010
（屋敷関連・一部壕含む）

種類	器形	合計	総計
中国産青磁	碗	2	2
中国産白磁	杯	1	1
中国産青花	碗	15	17
	小杯	1	
	瓶	1	
中国産その他の陶磁器	小杯	1	2
	急須	1	
本土産近世陶磁器	碗	1	4
	皿	1	
	小皿	1	
	不明	1	
沖縄産施釉陶器	碗	101	160
	小碗	8	
	皿	10	
	瓶	4	
	壷	1	
	鉢	8	
	鍋	2	
	香炉	2	
	火炉	3	
	火入	5	
	蓋	2	
	急須	1	
	酒器	2	
	袋物	6	
	不明	5	
沖縄産無釉陶器	瓶	16	630
	壷	53	
	鉢	7	
	擂鉢	20	
	植木鉢	1	
	壷・甕	524	
	甕	5	
	火入	1	
	不明	3	
陶質土器	鉢	3	17
	鍋	9	
	火炉	1	
	急須	4	
本土産近代陶磁器	碗	3	27
	小碗	11	
	皿	5	
	小杯	1	
	小皿	2	
	湯呑	2	
	蓋	1	
	不明	2	
金属製品	釘	2	16
	クサビ	1	
	金槌	2	
	ヘラ	1	
	ピンセット	1	
	不明	9	
石製品	砥石	4	6
	硯	1	
	石盤	1	
石造物	面をもつ不明石造物片	1	1
石材	－	2	2
木製品	柱	1	1
ガラス製品	瓶	11	16
	ランプの油壷	1	
	ランプ笠	2	
	蓋	1	
	不明	1	
円盤状製品	－	4	4
明朝系瓦	丸瓦	7	32
	平瓦	12	
明朝系不明	不明	13	
レンガ	－	1	1
ゴム製品	－	3	3
プラスチック製品	不明	2	2
産地不明陶器	不明	1	1
総計		945	945

Ｂ－ＳＤ 001
（屋敷関連）

種類	器形	合計	総計
中国産白磁	杯	1	1
中国産青花	碗	16	17
	小杯	1	
中国産褐釉陶器	壷	1	1
中国産その他の陶磁器	杯	1	1
本土産近世陶磁器	碗	2	6
	皿	4	
沖縄産施釉陶器	碗	64	95
	小碗	6	
	皿	1	
	杯	1	
	瓶	4	
	火入	5	
	蓋	1	
	急須	6	
	酒器	3	
	袋物	1	
	不明	3	
沖縄産無釉陶器	瓶	5	96
	鉢	9	
	火入	3	
	壷	43	
	壷・甕	11	
	擂鉢	12	
	－	1	
	不明	12	
陶質土器	鉢	1	13
	火炉	1	
	火入	3	
	急須	2	
	鍋	2	
	不明	4	
本土産近代陶磁器	碗	3	24
	小碗	12	
	皿	1	
	小杯	4	
	瓶	1	
	急須	1	
	湯呑	1	
	不明	1	
金属製品	鎌	1	15
	蓋	3	
	薬莢	2	
	砲弾	2	
	不明	7	
石製品	硯	1	1
石材	－	4	4
木製品	不明	1	1
ガラス製品	瓶	4	4
円盤状製品	－	19	19
明朝系瓦	丸瓦	117	174
	平瓦	55	
明朝系不明	不明	2	
プラスチック製品	クシ	1	2
	蓋	1	
合計		474	474

Ｃ－ＳＫ 026
（埋納遺構）

種類	器形	合計	総計
沖縄産無釉陶器	壷	8	8
陶質土器	鉢	1	1
本土産近代陶磁器	碗	8	46
	小碗	10	
	皿	12	
	小皿	12	
	小杯	1	
	火入	1	
	急須	2	
金属製品	不明	2	2
ガラス製品	瓶	1	1
総計		58	58

Ａ地区建物１（ＳＫ 022、ＳＰ 040・041・043・046 で構成）
（近世に遡る可能性がある建物）

種類	器形/遺構	ＳＫ22	ＳＰ40	ＳＰ41	ＳＰ43	ＳＰ46	合計	総計
中国産青花	碗	2					2	2
本土産近世陶磁器	皿	1					1	1
沖縄産施釉陶器	碗	7		1			8	18
	小碗	1					1	
	袋物	2					2	
	不明	6			1		7	
沖縄産無釉陶器	擂鉢	1					1	7
	壷					1	1	
	不明	4	1				5	
陶質土器	鍋	6					6	7
	火炉	1					1	
本土産近代陶磁器	小碗	1					1	2
	瓶				1		1	
金属製品	不明	1					1	1
総計		33	1	1	2	1	38	38

Ａ－ＳＫ 002
（屋敷関連）

種類	器形	合計	総計
中国産青花	碗	2	2
本土産近世陶磁器	不明	1	1
沖縄産施釉陶器	小碗	4	14
	瓶	2	
	酒器	2	
	袋物	2	
	不明	4	
沖縄産無釉陶器	擂鉢	4	13
	壷	2	
	－	1	
	不明	6	
陶質土器	鍋	3	9
	火入	3	
	急須	1	
	不明	2	
本土産近代陶磁器	不明	1	1
総計		40	40

Ａ－ＳＫ 036
（屋敷関連・石囲い遺構）

種類	器形	合計	総計
中国産白磁	小杯	1	1
本土産近世陶磁器	皿	1	1
沖縄産施釉陶器	碗	6	8
	小碗	1	
	火入	1	
沖縄産無釉陶器	甕	17	22
	不明	5	
本土産近代陶磁器	小碗	3	5
	皿	2	
金属製品	釘	1	4
	チューブ	1	
	不明	2	
石製品	印部石	1	1
ガラス製品	玩具	1	1
円盤状製品	－	1	1
明朝系不明	不明	2	2
総計		46	46

Ｃ－ＳＫ 001
（埋納遺構）

種類	器形	合計	総計
本土産近代陶磁器	皿	1	59
	小皿	56	
	小杯	1	
	蓋	1	
金属製品	煙管	1	14
	釜	1	
	鍋	4	
	缶	2	
	電灯	2	
	不明	4	
石製品	砥石	1	1
ガラス製品	瓶	1	1
漆膜	－	1	1
明朝系瓦	丸瓦	1	1
総計		77	77

Ｃ－ＳＫ 034
（壕関連？）

種類	器形	合計	総計
中国産青花	杯	1	1
沖縄産施釉陶器	碗	2	8
	小碗	2	
	鍋	1	
	酒器	2	
	不明	1	
沖縄産無釉陶器	壷	13	16
	甕	1	
	擂鉢	2	
本土産近代陶磁器	碗	2	4
	火入	1	
	急須	1	
金属製品	不明	1	1
ガラス製品	瓶	3	3
明朝系瓦	丸瓦	7	7
総計		40	40

※点数は破片数

確に近世と確定できる遺構はないが、その可能性があるものについて挙げる。まず、今回調査区内で設定した 12 の区画は戦前の空中写真でも分かるように近代のものと考えられる。その中で、先述したＢ－ＮＲ 002、Ｃ－ＮＲ 001 の迫地はその堆積土から耕作地であったと考えられ、近世と限定できるわけではないが遺構の軸方向と切り合いとから区画より古いことは確かである。また、Ａ地区の区画３で検出された建物１も遺物自体が少ないが近世陶器が大半であることから（第 53 表）、周辺の柱穴群も含めて近世に遡る可能性が考えられる。この一帯は第２章第２節で述べたように、集落発祥地とされる屋号比嘉の範

第 54 表　主要遺構出土遺物組成（２）

Ａ－壕ＳＫ 066
（壕関連）

種類	器形	合計	総計
中国産青花	碗	3	4
	不明	1	
本土産近世陶磁器	擂鉢	1	1
沖縄産施釉陶器	碗	4	11
	瓶	1	
	鍋	1	
	急須	1	
	不明	4	
沖縄産無釉陶器	壺	30	97
	擂鉢	5	
	不明	62	
陶質土器	急須	1	5
	不明	4	
本土産近代陶磁器	碗	4	8
	小碗	2	
	不明	2	
金属製品	簪	1	4
	把手	1	
	手榴弾	1	
	不明	1	
石材	－	1	1
ガラス製品	瓶	4	5
	蓋	1	
明朝系瓦	丸瓦	8	22
	平瓦	5	
明朝系不明	不明	9	
総計		158	158

Ｂ－壕ＳＫ 043
（壕関連）

種類	器形	合計	総計
中国産青花	碗	1	1
沖縄産施釉陶器	碗	2	10
	瓶	3	
	香炉	1	
	急須	2	
	酒器	1	
	不明	1	
沖縄産無釉陶器	壺	1	3
	壺・甕	1	
	鉢	1	
陶質土器	不明	1	1
本土産近代陶磁器	碗	4	6
	小皿	1	
	湯呑	1	
金属製品	鍬	2	5
	缶	1	
	黄燐弾	1	
	不明	1	
ガラス製品	瓶	3	7
	蓋	4	
円盤状製品	－	1	1
総計		34	34

Ｃ－壕ＳＫ 027
（壕関連）

種類	器形	合計	総計
中国産青花	碗	1	1
沖縄産施釉陶器	碗	3	7
	小碗	1	
	瓶	1	
	急須	1	
	不明	1	
沖縄産無釉陶器	壺	4	7
	擂鉢	2	
	不明	1	
本土産近代陶磁器	碗	1	9
	小碗	2	
	皿	4	
	小皿	2	
金属製品	鎌	1	6
	鍬	2	
	鍋	1	
	不明	2	
石製品	石臼	1	1
ガラス製品	瓶	1	1
明朝系瓦	丸瓦	4	10
	平瓦	6	
総計		42	42

Ｃ－ＳＫ 025
（壕関連）

種類	器形	合計	総計
沖縄産施釉陶器	碗	5	6
	小碗	1	
沖縄産無釉陶器	壺	1	2
	壺・甕	1	
本土産近代陶磁器	碗	7	50
	小碗	16	
	皿	4	
	小杯	6	
	瓶	2	
	小鉢	2	
	香炉	1	
	蓋	12	
金属製品	スプーン	1	15
	黄燐弾	1	
	不明	13	
銭貨	一銭	1	1
ガラス製品	瓶	5	5
明朝系平瓦	平瓦	2	2
炭	－	1	1
プラスチック製品	歯ブラシ	1	4
	ボタン	3	
軍靴	－	1	1
総計		87	87

Ｂ－壕ＳＫ 051
（壕関連）

種類	器形	合計	総計
本土産近世陶磁器	壺	1	2
	蓋	1	
沖縄産施釉陶器	碗	5	11
	瓶	3	
	壺	1	
	鉢	1	
	袋物	1	
沖縄産無釉陶器	瓶	2	124
	壺	4	
	甕	1	
	壺・甕	114	
	擂鉢	2	
	不明	1	
本土産近代陶磁器	小碗	2	4
	瓶	1	
	湯たんぽ	1	
金属製品	釘	1	20
	軍刀	1	
	三脚	1	
	手榴弾	1	
	不明	16	
ガラス製品	瓶	4	5
	ランプ笠	1	
円盤状製品	－	2	2
土製品	不明	1	1
レンガ	－	3	3
総計		172	172

Ｃ－ＳＫ 004
（壕関連）

種類	器形	合計	総計
中国産青花	碗	1	2
	不明	1	
沖縄産施釉陶器	碗	7	13
	小碗	2	
	瓶	1	
	酒器	1	
	急須	1	
	不明	1	
沖縄産無釉陶器	壺	104	114
	不明	10	
本土産近代陶磁器	碗	28	76
	小碗	4	
	皿	15	
	小皿	7	
	小杯	12	
	鉢	1	
	鉢・蓋	1	
	小鉢	1	
	急須	3	
	急須・蓋	1	
	湯呑	2	
	水差	1	
金属製品	簪	1	29
	釘	1	
	カスガイ	3	
	鎌	1	
	鍋	1	
	手榴弾	1	
	黄燐弾	1	
	不明	20	
ガラス製品	蓋	1	1
石器	敲石	1	1
石材	－	1	1
木材	竹	1	4
	松葉	1	
	不明	2	
漆喰	－	3	3
明朝系瓦	丸瓦	31	110
	平瓦	79	
プラスチック製品	ボタン	2	2
布	－	1	1
総計		357	357

Ｃ－壕ＳＫ 040
（壕関連）

種類	器形	合計	総計
中国産青花	碗	4	4
中国産褐釉陶器	壺	1	1
中国産その他の陶磁器	小杯	1	1
沖縄産施釉陶器	碗	8	23
	小碗	1	
	皿	2	
	小杯	1	
	壺	2	
	火入	2	
	蓋	3	
	酒器	1	
	不明	3	
沖縄産無釉陶器	瓶	2	104
	壺	73	
	甕	4	
	壺・甕	16	
	鉢	2	
	擂鉢	3	
	火入	1	
	蓋	1	
	不明	2	
陶質土器	壺	1	2
	火炉	1	
本土産近代陶磁器	碗	7	9
	小碗	1	
	蓋	1	
金属製品	煙管	1	12
	釜	1	
	鍋	1	
	スプーン	1	
	角金	1	
	砲弾	1	
	不明	5	
	蓋	1	
ガラス製品	瓶	6	7
	蓋	1	
石製品	石臼	1	2
	蓋	1	
石材	－	1	1
明朝系瓦	軒丸瓦	3	130
	軒平瓦	3	
	丸瓦	51	
	平瓦	73	
プラスチック製品	クシ	3	3
紙	銀紙	1	1
総計		300	300

Ｃ－ＳＫ 020
（タコツボ）

種類	器形	合計	総計
中国産白磁	杯	1	1
沖縄産施釉陶器	碗	1	1
沖縄産無釉陶器	瓶	3	11
	壺	2	
	鉢	1	
	擂鉢	1	
	不明	4	
本土産近代陶磁器	皿	1	1
陶質土器	急須	1	2
	不明	1	
金属製品	缶	9	12
	不明	3	
石製品	石臼	1	1
石材	－	1	1
明朝系不明	不明	1	1
軍靴	－	1	1
総計		32	32

※点数は破片数

囲に近接しており、今回の調査により本集落が近世には形成が始まった可能性は高くなったと言える。

近代　今回設定した12の区画については、沖縄戦まで継続されたものと思われるが、その起源は先述のようにそれより古い可能性がある迫地はあるが、近代のどの時期と確定することはできなかった。ただB地区で見たように、石敷ＳＳ002の下層にピットなどの遺構があることや井戸ＳＥ001が区画溝を埋め立てて構築されるなど、近代においてもその利用に幾つかの変遷があったことは確かである。

屋敷地の特徴としては、その区画は溝として検出されることが多く、その付近には遺構が少ない空間または先述のように壕が構築されることから、屋敷林があったことを裏付けている。建物については、区画３と区画６で確認され、前者は先述のように近世に遡る可能性を指摘した。後者は、石柱を基礎とする建物で内部はフール（豚便所）と考えられる穴２基、その周辺に石敷ＳＳ002が確認されるなど、母屋以外の付属的な可能性が考えられる。

他に屋敷地内の遺構としては、石・レンガ囲い土坑があり集中して分布する傾向が窺える。これらの遺構の性格としては、地床のままや床をモルタル・セメントで貼るなどの違いが見られ、後者は水などを貯める必要性があるなど用途が異なっていたものと思われる。また、レンガ囲いのものは現在の喜界島などで見られる製糖用炉と類似しているが、明確な被熱痕などは確認できていない。他に、Ｃ地区ではＳＫ001・026、ＳＤ003で近代陶磁器碗・皿を埋納したと思われる遺構がある。この遺物組成をみると、壕とは異なり沖縄産陶器壺など大型品は少なく（第53表）、住民が上陸前に避難する家財道具を埋納したという解釈は可能であり、宜野湾市普天間古集落などのように類例は多く見られる（沖埋文2016）。

沖縄戦関連遺構については先述したとおりであるが、本遺跡の特徴として交通壕やタコツボに窺えるように屋敷地の区画を十分に意識し利用して構築されている。このことは、日本軍が沖縄戦をはじめ太平洋戦争において、その土地のありとあらゆるものを活用して戦術を練り陣地を構築する方針をとったことをまさに窺い知ることができる。また、各地区でロケット弾（114）等の砲弾・銃弾片が出土しており、その大半は米軍のものであるのは、神山での応戦が１日だけであったことと関連するのかもしれない。

屋敷地に関連する遺構であるＡ－ＳＫ002・036、Ｂ－ＳＤ001の遺物組成を見てみると、沖縄産陶器壺だけでなく、多様な種類が見られる。Ａ－ＳＫ010も一部壕部分のものも含まれるが、他の壕とは異なり多種類の遺物が出土している（第53表）。あまり例がない遺物としては、沖縄産施釉陶器の蝶形水滴（201）、ガラス製拳銃形金平糖瓶（388）、ランプ笠（151 ～ 153）、不明銘入りの鍬（393）、井戸滑車（256）などが挙げられる。

戦後　Ｂ地区の区画６で確認されたＳＫ002瓦だまりと石敷ＳＳ001の範囲から瓦葺き建物があった可能性を指摘したが、時期的には砲弾片を含むＳＫ034より新しく戦後のものと想定される。1962年の空中写真で見るように、この時期にいわゆる黙認耕作地が営まれ、その作業小屋などと考えられる（図版４）。

以上、本遺跡の調査成果については今後も多角的な検討が必要であるが、当時使われていた井戸の一部が地元に移築復元できたことと合わせて、本報告書が宜野湾市をはじめ沖縄本島中部における近代の生活や沖縄戦時の在りようを窺い考えるための資料となれば幸いである。

参考文献（第４章を除く）

新垣　力2003「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要沖縄埋文研究』第１号　沖縄県立埋蔵文化財センター

新垣　力2011「無釉陶器の成立と展開」『琉球陶器の成立と展開』沖縄県立博物館・美術館、那覇市壺屋焼物博物館

伊藤厚史2004「豊橋市内に残る戦争遺構－本土決戦陣地跡を中心に－」『市内遺跡詳細分布調査報告書』豊橋市埋蔵文化財調査報告書第78集　豊橋市教育委員会

上原　静 2013『琉球古瓦の研究』榕樹書林
浦添市教育委員会編 2004『内間遺跡・内間カンジャーヤーガマ遺跡・内間西原近世墓群Ⅲ －浦添市都市計画街路勢理客線道路改良事業に伴う緊急発掘調査－』浦添市教育委員会
沖縄県教育委員会・宜野湾市教育委員会 2010『普天間飛行場内遺跡地図』
沖縄県教育庁文化課編 1988『首里城跡 歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査』緑林堂出版
沖縄県立埋蔵文化財センター編 2007『与那国島 潮原古墓群 －与那国空港拡張工事に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 43 集
沖縄県立埋蔵文化財センター沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『沖縄県の戦争遺跡』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 75 集
沖縄県立埋蔵文化財センター 2016『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 3 －普天間古集落遺跡－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 83 集
宜野湾市教育委員会 1989『土に埋もれた宜野湾』宜野湾市文化財調査報告書第 10 集
宜野湾市教育委員会 1998『ぎのわん市の戦跡』
宜野湾市教育委員会 2005『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』宜野湾市文化財調査報告書第 36 集
宜野湾市教育委員会 2006『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』宜野湾市文化財調査報告書第 38 集
宜野湾市教育委員会 2007『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』宜野湾市文化財調査報告書第 39 集
宜野湾市教育委員会 2008『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』宜野湾市文化財調査報告書第 41 集
宜野湾市教育委員会 2012『ぎのわんの地名－内陸部編－』市内民俗芸能調査報告書
宜野湾市教育委員会 2017『普天間飛行場地区埋蔵文化財発掘調査報告書』宜野湾市文化財調査報告書第 55 集
倉成多郎 2007「第 4 集 焼き物」日本アート・センター編『すぐわかる沖縄の美術』pp69-94
桜井準也 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房
（財）東京都生涯学習文化財団編 2000『汐留遺跡Ⅱ（第 5 分冊）－旧汐留貨物駅跡地内の調査－』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会 10 周年記念』
瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007「沖縄における貿易陶磁研究－ 14 ～ 16 世紀を中心に－」『紀要沖縄埋文研究』第 5 号　沖縄県立埋蔵文化財センター
第 32 軍残務整理部 1947「第 62 師団司令部戦闘経過概要」アジア歴史資料センター　Ref. C11110333700, C11110055100
北谷町教育委員会 2016『平安山原Ａ遺跡 ―桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業 (平成 19・21・22・23 年度)―』
那覇市教育委員会 2009『垣花村跡』那覇市文化財調査報告書第 78 集
南風原町教育委員会 2000『南風原陸軍病院壕群Ⅰ』
南風原町教育委員会 2008a『南風原陸軍病院壕群Ⅱ』
南風原町教育委員会 2008b『第三二軍司令部津嘉山壕群 津嘉山北地区旧日本軍壕群』
南風原町教育委員会 2010『津嘉山北地区旧日本軍壕群Ⅱ』
兵庫県教育委員会 2005『珉平焼窯跡－広域営農地農道整備事業南淡路地区に伴う発掘調査報告書Ⅰ－』兵庫県文化財調査報告第 284 冊
平成ボトル倶楽部 2017『日本のレトロびん』グラフィック社
平凡社 2002『沖縄県の地名』
防衛庁防衛研修所戦史室 1968『戦史叢書　沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社
陸軍省 1943『野戦築城教範』

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	かみやまこしゅうらく
書　　名	神山古集落
副　書　名	普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書
シリーズ 名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ 番号	99
編 著 者 名	瀬戸哲也
編 集 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所　在　地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町上原193-7　　TEL　098-835-8752　　FAX　098-835-8754
発行年月日	2019年3月1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
神山古集落（かみやま こしゅうらく）	沖縄県（おきなわけん） 宜野湾市（ぎのわんし） 神山（かみやま）	472501	281	26° 16′ 24.7″	127° 45′ 49.5″	20170316 ～ 20170817	6,800 ㎡	沖縄防衛局による普天間飛行場雨水排水施設整備工事

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神山古集落	集落・ 戦争遺跡	グスク 近世 近代	植栽痕・建物・井戸・土坑・壕	本土産陶磁器、沖縄産陶器、中国産陶磁器、ガラス製品、プラスチック製品、瓦、銭貨、金属製品、砲弾・銃弾片、石器・石製品	在沖米軍基地普天間飛行場内の戦前以前の集落跡、沖縄戦時の陣地・防空壕も確認

要　　約

沖縄防衛局による普天間飛行場雨水排水施設整備工事に伴う神山古集落の記録保存発掘調査を実施した。神山古集落は米軍により接収された集落跡で、沖縄戦時には日本軍が駐屯し物資を補給する野戦倉庫が設置されており、上陸してきた米軍と応戦したとされる。今回の発掘調査では屋敷地の区画を12ヶ所確認し、空中写真や聞き取りで伝わっていた戦前の神山集落と概ね一致する。その区画は溝として検出できたが、その周囲全体に石積み囲いがあるような形跡は窺えなかった。その区画内には、井戸や石積みやレンガで囲われた土坑が確認できた一方、明確に建物跡として認識できたのは２基に留まった。なお、その建物は掘立柱によるものだが、１基は石柱を基礎にもつものであった。

一方、沖縄戦に伴う遺構も多く見られ、その性格が分かるものとして交通壕・いわゆるタコツボ、防空壕がある。交通壕は集落の旧道の端に掘られた側溝であるがその形態日本軍が構築したものと考えられる。タコツボは交通壕の周囲に配置され、壁面に足掛かりをもった深さ１m近い土坑であった。他にも数mに及ぶ長大な土坑が随所に見られ、日本軍の陣地に関する可能性もある。また、防空壕については幾つかの形態が見られ、多くは沖縄産陶器壺などの日用的な陶磁器や爆弾片が出土している。その中には酒器と考えられる陶磁器や多量の豆類が出土することなどから、その構築・使用には住民だけでなく日本軍が関与した可能性も想定される。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 99 集

神山古集落

－普天間飛行場雨水排水施設整備に伴う発掘調査報告書－

発　行　日　　平成 31(2019)年3月1日

発行・編集　　沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7

TEL:098-835-8751・8752

印　　刷　　新栄印刷

〒900-0024　沖縄県那覇市古波蔵 1-32-8